楽 前 遺 跡（1）

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2009

東 日 本 高 速 道 路 株 式 会 社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

楽 前 遺 跡（1）

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2 0 0 9

東 日 本 高 速 道 路 株 式 会 社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

太田市北西部に位置する北関東自動車道の太田桐生インターチェンジは、太田市街地及び桐生市広沢地区や栃木県足利市街地の最寄りのインターチェンジとして平成20年３月に供用が開始され、東毛地区から県境一帯における自動車交通の要衝として、地域の物流・交通の活性化の拠点としての役割が大きく期待されています。

このインターチェンジの建設に先立って、埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることになり、インターチェンジに取り付く高速道路の本線部分と、インターチェンジ本体のほぼ北半分側の発掘調査が平成16・17年度に当事業団に委託され、飛鳥時代から平安時代に至る200棟に及ぶ竪穴建物跡などの遺構が調査されました。また、平成20年度からは、それらの調査成果をとりまとめる整理事業が当事業団に委託され、今年度は、平成16年度に調査を行いました、インターチェンジ本体のほぼ北半分にあたる部分において発掘調査された遺構・遺物についての発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

本遺跡のすぐ南側に隣接して、都から東日本内陸部を経て東北地方に至る古代の第一級幹線道路である東山道駅路の遺構が発見され、1300年の時を隔てて、古代と現代の幹線道路が、奇しくもほぼ同じ位置にあることが判明しました。本遺跡についても、古代の幹線道路に隣接する集落としての遺跡の特質の解明が期待されたところです。

発掘調査から本報告書刊行に至るまでには、東日本高速道路株式会社、群馬県県土整備部、県教育委員会、太田市教育委員会をはじめ関係諸機関並びに関係各位に、多大なご高配とご協力を賜りました。ここに銘記して心より感謝申し上げますとともに、本報告書が、地域の歴史を知り、豊かな地域社会を創造していくための資料として、広く活用されますことを願いまして、序といたします。

平成21年３月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長　高 橋 勇 夫

例　言

1．報告書名　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第454集、北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 楽前遺跡（1）

2．遺跡所在地　群馬県太田市東今泉町

3．事業主体　東日本高速道路株式会社関東支社

4．調査対象地　北関東自動車道（仮称）太田インターチェンジ（現・太田桐生インターチェンジ）の北側約半分とその西側に取り付く本線部分の計15,652㎡。そのうち、本報告書において報告の対象とするのは、インターチェンジの約北半分10,865㎡分。

5．発掘調査・整理期間及び調査整理担当者、事務局体制

（1）発掘：第一次調査　平成16年4月1日～平成17年3月31日

調査担当：高井佳弘（東毛調査事務所調査研究部調査研究第3課専門員、平成16年4月1日～12月31日）・矢村哲（同専門員）、高島英之（同専門員、平成16年4月1日～9月30日、同12月1日～平成17年3月31日）、平方篤行（同専門員、平成17年3月7日～3月31日）、小室綾子（同専門員）、井上昌美（同主任調査研究員）、森田真一（同調査研究員、平成17年3月7日～3月31日）

第二次調査　平成17年4月1日～9月30日

調査担当：高島英之（東毛調査事務所調査研究部調査研究課専門員）、山田精一（同主任調査研究員）

*ただし、本報告書で報告するのは、平成16年度調査分のうちの10,865㎡分。

（2）整理：平成20年4月1日～平成21年3月31日

整理担当：高島英之（事務局資料整理部資料整理第1グループ専門員（主幹））

（3）調査整理機関組織事務体制

役　員　理事長 小野宇三郎（16・17年度）・高橋勇夫

常務理事 住谷永市（16年度）・木村裕紀・津金澤吉茂

事務局　事業局長 神保侑史（16年度）・津金澤吉茂（17年度）、事務局長兼総務部長事務取扱 木村裕紀、資料整理部長兼資料整理第一グループリーダー事務取扱 相京建史、総務グループリーダー 笠原秀樹・経理グループリーダー 佐嶋義明、総務グループ係長（総括） 須田朋子、総務部主幹 （総括） 斉藤恵利子、主幹 柳岡良宏、副主幹 矢島一美、主任 齋藤陽子、補助員 今井もと子・若田誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・武藤秀典

東毛調査事務所　所長 平野進一（16・17年度）、調査研究部長 真下高幸（16・17年度）

調査研究第3課長 中沢悟（16年度）・庶務課長 笠原秀樹（16・17年度）、副主幹 柳岡良宏（16・17年度）・今泉大作（16・17年度）、主任 清水秀紀（16・17年度）、補助員 中沢恵子（16・17年度）・金子三枝子（16・17年度）

6．報告書作成

（1）本文執筆　高島英之

（2）編集　高島英之

（3）整理作業　本多琴恵・島村玲子・鈴木春美・佐藤知子（資料整理第1グループ補助員）
（4）機械遺物実測　田所順子・岸弘子・小池益美（資料整理第1グループ補助員）
（5）写真版組（デジタル専業班）牧野裕美・市田武子・安藤美奈子・酒井史恵・廣津真希子・荒木絵美・高梨由美子・矢端真観・横塚由香・下川陽子（資料整理第2グループ補助員）
（6）遺構写真撮影　高井佳弘・矢村哲・高島英之・平方篤行・小室綾子・井上昌美・森田真一
（7）遺物写真撮影　佐藤元彦（資料整理第1グループ係長（総括））
（8）遺物保存処理　関邦一（資料整理第1グループ係長（総括））・小材浩一・津久井桂一・多田ひさ子（資料整理第1グループ補助員）
（9）整理指導助言　①遺構図・遺構写真：高井佳弘（資料整理第1グループ主任調査研究員）・山田精一（資料整理第1グループ主任調査研究員）
②土器・特殊遺物：神谷佳明（資料整理第2グループ主席専門員）・桜岡正信（調査研究部調査研究グループ主任専門員（総括））

7．出土遺物・調査記録類保管先　群馬県埋蔵文化財調査センター（群馬県渋川市北橘町下箱田784-2）

8．調査・整理指導

発掘調査及び報告書作成に際しては、下記の関係各機関並びに各位にご高配・ご指導・ご教示を賜った。記して深甚なる謝意を表する（順不同、敬称略）。
群馬県教育委員会、太田市教育委員会、群馬県県土整備部、合田芳正、渡辺一

凡　例

1．本報告書に掲載する遺構平面図の方位記号は、国家座標の北を表す。座標系は国家座標Ⅸ系である。調査区は、X=36320～36530、Y=-39580～-39760の範囲に収まる。両軸とも上2桁の表記を省略する。
2．遺構平面・断面実測図に示した標高値の単位はmである。
3．遺構・遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。
4．遺構の土層及び土器の色調の表現は、農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年版に準拠した。
5．遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・写真図版ともすべて共通している。
6．本報告書で使用した地形図は、「桐生」・「上野境」1/25000である。
7．遺構の面積はデジタルプラニメーターを使用して3回の計測値を平均したものである。
8．本遺跡で検出された竪穴建物跡の中には、後述するように、竈は有するもののあきらかに住居跡とは見なしがたい建物跡も存在するため、本報告書では「掘立柱建物」・「平地建物」等に対偶する建物遺構の概念として学界にも膾炙している「竪穴建物跡」の用語を使用する。
9．遺構・遺物図に使用しているスクリーントーンの表示する意味は下記の通りである。

粘土・焼土炭化物　灰
朱　三彩

目　次

序
例言
凡例
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 ……1
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査の経過 ……3
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 ……9
　第１節　遺跡の位置と立地 ……9
　第２節　遺跡の歴史的環境 ……11
第３章　発見された遺構と遺物 ……29
　第１節　２区１面の遺構と遺物 ……30
　第２節　２区２面の遺構と遺物 ……49
　第３節　３区の遺構と遺物 ……77
　第４節　４区の遺構と遺物 ……116
第４章　調査成果の整理とまとめ ……191
　第１節　出土した文字資料について ……191
　第２節　まとめ ……199
写真図版 ……209

図版目次（1）

図1　楽前遺跡調査区模式図 ……8
図2　楽前遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/25,000）……27
図3　楽前遺跡周辺地形分類図（1/50,000）……28
図4　2区1・6号溝跡平面図・土層断面図 ……31
図5　2区1・5号溝跡平面図・土層断面図（1）……32
図6　2区1・5号溝跡平面図・土層断面図（2）・5号溝跡出土遺物 ……33
図7　2区2・3号溝跡平面図・土層断面図 ……34
図8　2区4号溝跡平面図・土層断面図 ……34
図9　2区7・10号溝跡平面図・土層断面図 ……36
図10　2区8号溝跡平面図・土層断面図 ……38
図11　2区9号溝跡平面図・土層断面図 ……38
図12　2区11・12号溝跡平面図・土層断面図 ……39
図13　2区13・14号溝跡平面図・土層断面図 ……40
図14　2区15号溝跡平面図・土層断面図・遺物出土状況図 ……42
図15　2区15号溝跡出土遺物（1）……43
図16　2区15号溝跡出土遺物（2）……44
図17　2区15号溝跡出土遺物（3）……45
図18　2区15号溝跡出土遺物（4）……46
図19　2区表土出土遺物（1）……47
図20　2区表土出土遺物（2）……48
図21　2区1号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……50
図22　2区2号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……51
図23　2区3号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……52
図24　2区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……53
図25　2区1号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図 ……54
図26　2区1号竪穴建物跡出土遺物 ……54
図27　2区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図 ……55
図28　2区2号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……55
図29　2区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……56
図30　2区3号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図 ……57
図31　2区3号竪穴建物跡出土遺物 ……57
図32　2区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物 ……58
図33　2区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……59
図34　2区5号竪穴建物跡出土遺物 ……59
図35　2区7号竪穴建物跡平面図・掘り方平面図・土層断面図・出土遺物 ……60
図36　2区7号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……61
図37　2区8号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・電跡平面図・土層断面図 ……62
図38　2区8号竪穴建物跡出土遺物 ……63
図39　2区17号溝跡平面図・土層断面図 ……64
図40　2区2～4号土坑跡平面図・土層断面図 ……65
図41　2区5～8号土坑跡、1号ピット跡平面図・土層断面図 ……66
図42　2区1号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図 ……67
図43　2区1号粘土採掘坑跡出土遺物 ……68
図44　2区2号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図・出土遺物 ……68
図45　2区3号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図 ……69
図46　2区3号粘土採掘坑跡出土遺物 ……70
図47　2区4号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図・出土遺物 ……71
図48　2区5号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図 ……72
図49　2区5号粘土採掘坑跡出土遺物（1）……74
図50　2区5号粘土採掘坑跡出土遺物（2）……75
図51　2区6号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図 ……75
図52　3区1号掘立柱建物跡・1号柱穴列跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……78
図53　3区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……79
図54　3区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図、電跡平面図・土層断面図 ……80
図55　3区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図、電跡平面図・土層断面図 ……81
図56　3区3号竪穴建物跡掘り方平面図 ……82
図57　3区3号竪穴建物跡出土遺物 ……82
図58　3区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……83
図59　3区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……83

図版目次（2）

図960　3区5号竪穴建物跡掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図 ……84
図961　3区5号竪穴建物跡出土遺物 ……85
図962　3区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……86
図963　3区6号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図 ……87
図964　3区6号竪穴建物跡出土遺物（1） ……87
図965　3区6号竪穴建物跡出土遺物（2） ……88
図966　3区7号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……89
図967　3区8号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……90
図968　3区8号竪穴建物跡出土遺物 ……91
図969　3区9号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物 ……92
図970　3区9号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……93
図971　3区10号竪穴建物跡平面図・土層断面図、10・14号竪穴建物跡掘り方平面図 ……94
図972　3区10号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図 ……95
図973　3区10号竪穴建物跡出土遺物（1） ……96
図974　3区10号竪穴建物跡出土遺物（2） ……97
図975　3区11号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物 ……98
図976　3区11号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……99
図977　3区12号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物 ……100
図978　3区13号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……102
図979　3区13号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図 ……103
図980　3区13号竪穴建物跡出土遺物 ……103
図981　3区15・16号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……104
図982　3区15・16号竪穴建物跡掘り方平面図 ……105
図983　3区15号竪穴建物跡出土遺物 ……105
図984　3区1号溝跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……107
図985　3区1号溝跡東南隅部付近平面図・土層断面図・出土遺物、3区6号溝跡平面図 ……108
図986　3区2・3・4号溝跡平面図・土層断面図 ……109
図987　3区5号溝跡平面図・土層断面図 ……110
図988　3区内4区1・6号溝跡平面図・土層断面図 ……111
図989　3区3・4・5・6号土坑跡平面図・土層断面図 ……112
図990　3区ピット跡平面図・エレベーション図 ……114
図991　3区表土出土遺物 ……115
図992　4区1号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……117
図993　4区2号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……119
図994　4区3号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……120
図995　4区4号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……121
図996　4区5号掘立柱建物跡平面図・エレベーション図 ……122
図997　4区6号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図 ……123
図998　4区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物 ……125
図999　4区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……126
図100　4区2号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図 ……127
図101　4区2号竪穴建物跡出土遺物 ……127
図102　4区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……128
図103　4区3号竪穴建物跡出土遺物 ……129
図104　4区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図 ……129
図105　4区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……130
図106　4区5号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……131
図107　4区5号竪穴建物跡出土遺物 ……131
図108　4区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……132
図109　4区6号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……133
図110　4区7号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……133
図111　4区7号竪穴建物跡掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……134
図112　4区8号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図、出土遺物 ……135
図113　4区9号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……136
図114　4区10号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……137
図115　4区10号竪穴建物跡出土遺物 ……138
図116　4区11号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……138
図117　4区11号竪穴建物跡掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……139
図118　4区11号竪穴建物跡出土遺物 ……140

図版目次（3）

図119　4区12号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……141
図120　4区12号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物 ……142
図121　4区13号竪穴建物跡出土遺物 ……143
図122　4区13号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……144
図123　4区13号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……145
図124　4区14号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……146
図125　4区14号竪穴建物跡掘り方平面図・電跡平面図・土層断面図 ……147
図126　4区14号竪穴建物跡電跡掘り方平面図、出土遺物 ……148
図127　4区15号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図、出土遺物 ……149
図128　4区15号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……150
図129　4区16号竪穴建物跡平面図・土層断面図 ……151
図130　4区16号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図 ……152
図131　4区16号竪穴建物跡掘り方平面図・エレベーション図 ……153
図132　4区16号竪穴建物跡出土遺物（1） ……154
図133　4区16号竪穴建物跡出土遺物（2） ……155
図134　4区17号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物 ……156
図135　4区18号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・電跡平面図・土層断面図 ……157
図136　4区18号竪穴建物跡電跡掘り方平面図、出土遺物 ……158
図137　4区19号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物 ……159
図138　4区20号竪穴建物跡平面図・土層断面図・電跡平面図・土層断面図、出土遺物 ……160
図139　4区21号竪穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物 ……161
図140　4区22号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……162
図141　4区22号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図 ……163
図142　4区22号竪穴建物跡出土遺物（1） ……164
図143　4区22号竪穴建物跡出土遺物（2） ……165
図144　4区1号溝跡平面図・土層断面図 ……166
図145　4区1号溝跡出土遺物（1） ……169
図146　4区1号溝跡出土遺物（2） ……170
図147　4区1号溝跡出土遺物（3） ……171
図148　4区1号溝跡出土遺物（4） ……172
図149　4区1号溝跡出土遺物（5） ……173
図150　4区2号溝跡平面図・土層断面図 ……174
図151　4区3・9号溝跡平面図・土層断面図、出土遺物 ……175
図152　4区4・8号溝跡平面図・土層断面図 ……176
図153　4区5・6号溝跡平面図・土層断面図 ……177
図154　4区7・10・11・14号溝跡平面図・土層断面図 ……179
図155　4区12・13号溝跡、1号井戸跡平面図・土層断面図 ……180
図156　4区1～6・8・9号土坑跡、123号ピット跡平面図・土層断面図 ……183
図157　4区10～15号土坑跡平面図・土層断面図 ……185
図158　4区ピット跡平面図・土層断面図 ……188
図159　4区畠跡平面図 ……189
図160　4区表土出土遺物 ……190
図161　楽前遺跡出土文字資料 ……192

付図1　楽前遺跡2区1面検出遺構全体図
付図2　楽前遺跡2区2面検出遺構全体図
付図3　楽前遺跡3区検出遺構全体図
付図4　楽前遺跡4区検出遺構全体図

写真図版目次（1）

PL.1　2区全景
2　2-2区全景
3　2-1区・2-2区全景、2区1号掘立柱建物跡
4　2区1～3号掘立柱建物跡
5　2区3号掘立柱建物跡、1・6号溝跡
6　2区15号溝跡
7　2区15号溝跡、2・4号粘土採掘坑跡、1号竪穴建物跡
8　2区1・2号竪穴建物跡
9　2区2～4号竪穴建物跡
10　2区4・7・8号竪穴建物跡
11　2区8号竪穴建物跡、2区1～5・10号溝跡
12　2区2・3・7～13号溝跡
13　2区11～15号溝跡、1・5号粘土採掘坑跡、4号土坑跡
14　2区4～6号土坑跡、2-3区全景、3区全景
15　3区1号掘立柱建物跡
16　3区1号柱穴列跡、1・2号竪穴建物跡
17　3区2～4号竪穴建物跡
18　3区5・6号竪穴建物跡
19　3区6～8号竪穴建物跡
20　3区9・10号竪穴建物跡
21　3区10～13号竪穴建物跡
22　3区13・15・16号竪穴建物跡、1号溝跡
23　3区1～3・5号溝跡
24　3区4-1・6号溝跡、3～6号土坑跡、ピット群、4区全景
25　4区全景
26　4区全景、1号掘立柱建物跡全景、1・2号柱穴跡
27　4区1号掘立柱建物跡
28　4区2号掘立柱建物跡
29　4区2・3号掘立柱建物跡
30　4区3・4号掘立柱建物跡
31　4区4・5号掘立柱建物跡
32　4区4・6号掘立柱建物跡
33　4区6号掘立柱建物跡、1号竪穴建物跡
34　4区2・3号竪穴建物跡
35　4区4・5号竪穴建物跡
36　4区5・6号竪穴建物跡
37　4区7・8号竪穴建物跡
38　4区9～11号竪穴建物跡
39　4区11・12号竪穴建物跡
40　4区12・13号竪穴建物跡
41　4区13・14・20号竪穴建物跡
42　4区14・20・16号竪穴建物跡
43　4区16～18号竪穴建物跡
44　4区18・19・21・22号竪穴建物跡
45　4区22号竪穴建物跡、1号溝跡
46　4区1・2号溝跡
47　4区3～5号溝跡
48　4区6・7号溝跡
49　4区7～10号溝跡
50　4区11・13・14号溝跡、1号井戸跡
51　4区1～6・8号土坑跡
52　4区9～12号土坑跡
53　4区13・15号土坑跡、畠跡
54　4区畠跡
55　2区溝跡出土遺物
56　2区溝跡・表土出土遺物
57　2区表土・竪穴建物跡出土遺物
58　2区竪穴建物跡・粘土採掘坑跡出土遺物
59　2区粘土採掘坑跡・3区竪穴建物跡出土遺物

写真図版目次（2）

60　3区竪穴建物跡出土遺物
61　3区竪穴建物跡・溝跡出土遺物
62　4区竪穴建物跡出土遺物（1）
63　4区竪穴建物跡出土遺物（2）
64　4区竪穴建物跡出土遺物（3）
65　4区1号溝跡出土遺物（1）
66　4区1号溝跡出土遺物（2）
67　4区1号溝跡出土遺物（3）
68　4区1号溝跡出土遺物（4）
69　4区1・3・9号溝跡、表土出土遺物

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

本事業　本事業は、建設省（当時、現・国土交通省）と日本道路公団（当時、現・東日本高速道路株式会社）によって計画された、群馬・栃木・茨城の北関東三県の主要都市間を東西に横断的に結ぶ自動車専用高速交通網である北関東自動車道の建設用地内に包蔵される埋蔵文化財について、発掘調査による記録保存の措置が、日本道路公団（当時）東京建設局より当事業団に委託されたものである。

本遺跡において調査の対象となったのは、北関東自動車道の太田桐生インターチェンジに西側から接続する本線部分とインター本体の北側約半分、料金所と本線とを繋ぐ北に張り出した周回路の部分に当たる。

北関東自動車道は、群馬県では、県内を南北に縦貫している関越自動車道の高崎インターチェンジの手前から東に分岐して、前橋市南部・伊勢崎市北部・太田市北部を経て県境の渡良瀬川を越えて栃木県足利市北部の山間部に向かう路線である。県境を越えた後は、さらに、栃木県内を南北に縦貫する東北自動車道に取り付いて経由し、茨城県内を南北に縦貫する常磐自動車道を経て、那珂湊市へと通じる北関東の自動車高速交通の大動脈となることが予定されている。

関越自動車道の藤岡ジャンクションから西へ分岐する上信越自動車道方面からは、長野県北信地域から関東平野北部を東西に横断して太平洋側に至るルートとなり、また、首都圏から放射状に東北・上越地方に三方向にむかってそれぞれ伸びている常磐自動車道、東北自動車道、関越自動車道を横断的に東西に連絡する道路としての性格を有している。

群馬県内の、関越自動車道との分岐点に当たる高崎ジャンクションから伊勢崎インターチェンジまでの間については、建設工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査が平成７年から平成12年７月まで行われ、平成13年３月に供用が開始された。また、伊勢崎インターチェンジから本遺跡と本遺跡の東南に隣接する鹿島浦遺跡に当たる太田桐生インターチェンジまでの区間については、平成12年８月から平成17年９月まで、建設工事に伴う事前の発掘調査が行われ、平成20年３月に供用開始されている。

調査着手に至る調整過程　伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7km区間については、平成12年６月12日、当時の日本道路公団東京建設局高崎事務所において前記道路公団（当時）高崎工事事務所、群馬県土木部（現・県土整備部）高速道路対策室、群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課、当事業団の４者によるはじめての協議が持たれ、高速道路本線部分の埋蔵文化財発掘調査及び整理については当事業団による対応、側道部分の調査及び整理については当該各市町村教育委員会による対応であることがまず確認され、道路公団側からは、用地の取得状況や文化財調査とカルバートボックスや橋梁下部工等の先行発注工程との調整等について協議が諮られた。席上、公団側からは、伊勢崎市三和町の書上遺跡及び天ヶ堤遺跡の発掘調査を急遽、同年８月からの着手要請があり、県高速道路対策室からも側道部分に係るカルバートボックスについての対応を考慮するよう要請があった。

具体的に調査を担当する立場の当事業団としては、用地取得状況の進捗がはかばかしくないことや、残土処理場所の確保の問題、本線部分と側道部分の用地の明瞭な区分等の案件を提示して関係各機関の調整を仰ぐとともに、調査開始に向けての準備に着手した。

その後、関係各機関相互及び各内部での協議が進み、県教育委員会文化財保護課による調整を経て、平成12年８月１日付、日本道路公団東京建設局長、群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の３者によって、「北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、この協定に基づいて、道路公団東京建設局長と当事業団理事長との間で同日付「平成12年度北関東自動車道（伊勢崎～県境）埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を結び、同年８月１日より書上遺跡の調査に、また10月１日より天ヶ堤遺跡の調査に着手された。

平成15年度段階における日本道路公団（当時）東京建設局高崎工事事務所と県教育委員会事務局文化課（当時、現・文化財保護課）及び当事業団との調整会議において、道路公団高崎工事事務所から、太田市東今泉町地区の北関東自動車道建設地内における工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査が要請され、工事範囲における埋蔵文化財発掘調査に要する具体的な期間及び経費等についての照会がなされた。

すでに平成14年度の段階で、北関東自動車道建設に伴って本遺跡の西に近接する東今泉町の大道西遺跡を当事業団が発掘調査して、中世の掘立柱建物跡群や東山道駅路跡とみられる古代の道路跡、古代の粘土採掘坑跡などが発見されていることや、その東に隣接する大道東遺跡とさらにその東に隣接する本遺跡についても建設対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲にかかっており、濃密な埋蔵文化財の包蔵が予め確実に想定されていたため、当該箇所については工事に先立っての埋蔵文化財発掘調査による記録保存の措置の必要と、その結果、発掘調査の進捗によって明らかにされた遺構・遺物の内容によっては、工事計画の変更等の可能性まで視野に入れておく必要がある旨、答申され、具体的な調査経費や調査計画の協議に入った。

先に、県教育委員会文化課と日本道路公団高崎工事事務所との協議において、県教育委員会側からは、埋蔵文化財保護の観点から言えば埋蔵文化財包蔵地における開発行為は出来得るならば避けるべきであることが示されたが、道路公団側は、すでに確定している路線予定地上の当該箇所における工事は動かしがたくやむを得ぬところであるということで、記録保存の措置のための本調査に向けての本格的な調整協議が続けられていたところであった。

実際、大道東遺跡は、昭和41（1966）年、九学会連合利根川流域調査委員会の歴史部会の事業として、駒澤大学文学部考古学研究室が発掘調査しており、９世紀代の竪穴建物跡が４棟検出されている。また、本遺跡は、昭和42（1967）年にやはり同じく駒澤大学が只上遺跡として竪穴建物跡を１棟調査し、さらに昭和61（1986）年から翌62年にかけては、群馬県営渡良瀬川流域地区公害防除特別土地改良事業に伴い、太田市教育委員会が、28,000㎡に及ぶやや大規模な発掘調査を実施し、古墳時代後期の竪穴建物跡約100棟、奈良時代の竪穴建物跡約５棟、掘立柱建物跡13棟、平安時代の竪穴建物跡90棟、溝跡約20条、井戸跡６基などの遺構が検出されていたのであった。ただし、本遺跡において、過去に調査が行われたこれらの場所は、北関東自動車道の建設工事対象地とは重複してはいない。

平成15年度末までに、道路公団高崎工事事務所、県教委文化課、当事業団の三者の間で、記録保存のための発掘調査にむけての協議が継続的に進められた。

とくに、本遺跡に関しては、インターチェンジ特有の半円形の周回道路内側の緑地帯に当たる部分について、工事による掘削・破壊が及ばないために遺構・遺物が保存されるということで、記録保存の措置の対象からは除外すべく道路公団側から強い申し入れがあり、県教育委員会側もこれを承認した。そのため、本県ではじめて、高速道路のインターチェンジ建設に伴う調査で、インターチェンジ中央の緑地帯部分を調査対象から除外した事例となった。よって、発掘調査は、インターチェンジの周回道路と料金所に接する工事対象部分にのみ調査の範囲が限定されたため、調査対象地のほぼ中央に、調査の対象から除外された空白箇

所が大きく残ることになり、遺構分布の傾向等を総体的に把握することが困難になった。

確かにその部分には工事による破壊が及んでいないため、遺構・遺物が保存されていることには違いないが、インターチェンジの周回道路と料金所に挟まれた箇所においては、今後、学術的な意味における発掘調査など、文化財の積極的な活用が難しい環境に置かれることになったこともまた事実である。

翌、平成16年４月付、日本道路公団東京建設局と当事業団との間で、本遺跡発掘調査の委託契約が締結され、４月１日から調査班２班が投入され、発掘調査が実施されることになった。

第２節　調査の経過

調査の経過　発掘調査は、日本道路公団東京建設局の委託を受けた当事業団によって、主に佐波郡東村（当時）から藪塚本町（当時）南部を経て太田市北郊にかけて北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に対応するために伊勢崎市三和町に開設された東毛調査事務所が事業を管掌し、平成16年度と17年度の調査を所管した。

調査対象箇所は、太田市北郊にあたる東今泉町の水田地帯のただ中にあたり、西側を主要地方道太田桐生線、東側を国道122号線に挟まれた総延長で東西に約400mの範囲で、総面積は15,652㎡である。

平成16年度当初からの調査着手にあたって、調査を円滑に進めるために、調査対象地内を東西南北双方向に貫通している太田市道によって、７箇所に分割された調査区を、それぞれ、1区、2-1区、2-2区、2-3区、3-1区、3-2区、4区と便宜的に名付け、調査対象地の呼称とした（図１）。

また、調査区の各グリッドは５m四方を一単位とし、グリッドは国家座標X軸とY軸との交点の数値をそのまま呼称した。1区はX=36310～36380・Y=-39835～-39760、2区はX=36305～36410・Y=-39755～-39710、3区はX=36495～36530・Y=-39725～-39620、4区はX=36410～36495・Y=-39725～-39585の範囲である。

平成16年度の調査（第一次調査）　平成16年度の調査は、平成16年４月１日から平成17年３月31日までの１年間、大道東遺跡の東側に隣接する本線部分1区から南北方向に走る太田市道を隔てた2区のうちの北側の調査区である2-1区の調査に着手し、その後、1区（4,787㎡）に１班を投入、年度末まで1区の南側を中心に調査を続行し、年度内に4,787㎡のうちの2,200㎡分の調査を終了した。縄文時代の竪穴建物跡と土坑、古墳時代後期から平安時代前期に至る竪穴建物跡132棟、土坑134基、溝跡５条などの遺構が検出され、調査は翌年度に継続された。

2区（4,538㎡）の北側調査区2-1区を継続して調査していたもう１班は、2-1区の調査を終了させた後、2-2区の調査に着手し、2-1・2-2区では奈良時代の小規模な２×２間の総柱掘立柱建物跡２棟と障壁状のＬ字型に巡る柵列、奈良・平安時代の竪穴建物跡７棟、土坑跡７基、溝跡16条、奈良時代の大規模な粘土採掘坑跡６箇所などの遺構を検出、調査した。2区は、西側の1区から続く台地の縁辺にあたり2区の東側約半分には大きな谷が入っている。3区と4区及びその南側に隣接する鹿島浦遺跡は、大道東遺跡と、その東側に隣接する本遺跡1区と2区西半分とは、南北方向に伸びる谷を一本隔てた位置に存在していることが判明した。

2-1・2-2区の調査を終え、4区（4,090㎡）に着手したのち、4区の調査と並行して2-3区も行ったが、2-3区からはAs-B軽石によって覆われた平坦面が検出されたが、顕著な水田らしい遺構は発見されなかった。

4区は、インターチェンジ特有の、半円形の周回道路にあたる部分であるが、周回道路内側の工事が及ば

ない緑地帯の部分については、工事に伴う掘削による破壊が及ばないということで、調査対象からは除外された。これによって、発掘調査は、インターチェンジの周回道路と料金所に接する工事対象部分にのみ調査の範囲が限定されたため、調査対象地のほぼ中央に、調査の対象から除外された空白箇所が大きく残ることになり、遺構分布の傾向等を総体的に把握することが困難になった。

中央の調査対象外の空白部分の西側では、掘立柱建物群が集中し、多数のピット群も見られた。
また、竪穴建物は、中央の調査対象外地区の西側と南側のブロックに比較的多く集中しており、東側のブロックでは、北側は3区に、南側は隣接する鹿島浦遺跡に続く北西－南東方向に向かって流れる人工の用水路と思われる遺構が検出されている。

4区では古墳時代後期から平安時代前期にかけての竪穴建物跡22棟、溝跡14条、土坑跡14基などの遺構が検出されている。

4区の調査と並行して3区（2,237㎡）の最東端の、道路によって隔てられた小区画の調査にまず着手したが、この最東端の小区画では表土を剥いだところ遺構・遺物は全くなかったため、すぐに3区本体の調査に移行した。年内にほぼ4区の主な遺構の調査を終えた後、１～３月は3区の調査に集中した。

この間、2区東側の台地上、及び4区・3区において、遺構面の調査終了と同時に漸次、旧石器の確認調査を実施したが、旧石器は発見されていない。

2～4区の調査を年度内に終了した。

平成17年度の調査（第二次調査）　平成17年度の調査は、平成17年４月１日から９月30日まで、前年度から調査に着手していた最も西寄りの調査区の北側の部分を中心に調査した。

1区の西南側に接して、同じく北関東自動車道の建設に伴って、同時期に調査が行われていた大道東遺跡では、古代の一級幹線道路である東山道駅路の遺構が検出されている。その東側に接する本遺跡1区では、古墳時代後期（飛鳥時代）から平安時代初期にかけての集落遺跡が検出された。今年度調査された集落に関する遺構は、掘立柱建物跡９棟、竪穴建物跡33棟、溝跡４条、井戸跡３基、土坑跡17基などである。

竪穴建物跡の重複は甚だしく、西南側に隣接する大道東遺跡から続く、当該期の大集落の様相を呈していたことがわかる。

調査区の西北端部で検出された352号竪穴建物跡の床面直上からは鉄製のクルル鉤が出土した。伴出遺物から７世紀末頃のものと考えられ、これまでの出土事例では、最古の部類に属する。出土した竪穴建物跡に隣接して掘立柱建物跡が数棟検出されているので、それらの鍵であった可能性が高い。

掘立柱建物跡は、いずれも総柱建物であるが、規模はいずれも２間四方あるいは２×３間程度と小さく、柱穴の掘り方も小さい。また、整然と計画的に建物が配置された様子は読み取れず、雁行型のランダムな配置である。以上の点からは、官衙施設的な様相は全く見られず、集落内に設置された倉庫群とみられる。

なお、これらの他に縄文時代の埋設土器が７基検出された。いずれも中期・加曽利E式土器で、口縁部を伏せて倒置されている。

古墳時代後期～平安時代初期の遺構と縄文時代の遺構の調査が終了した後、旧石器の確認調査を実施したが、旧石器は確認されなかった。

平成16・17年度にわたって調査された1区の遺構・遺物については、本報告書の対象からは除外し、次年度以降刊行の報告書にて採り上げる予定である。

・発掘調査日誌抄ー平成16年度

平成16年４月１日（木）調査担当者着任。発掘調査準備。

12日（月）現場事務所等未整備ながらも予備調査に着手。2-2区壁面土層断面及び遺構確認。

16日（金）現場事務所整備、発掘機材一部搬入。

19日（月）本格的に作業員を投入し、調査開始。2-1・2-2区遺構精査、平安時代溝跡等調査着手。

20日（火）2-1・2-2区遺構精査、平安時代溝跡調査継続。1区調査着手。

22日（木）2-1・2-2区遺構精査、2-2区As-B軽石下精査着手。

５月13日（木）2-1・2-2区平安時代面溝群空撮、空測。1区遺構精査着手。

17日（月）2-2区1～4号竪穴建物跡精査。

25日（火）2-2区1～5号竪穴建物跡精査。

６月２日（水）2-1区北西部台地上調査、溝跡・2号粘土採掘坑跡調査。2-2区粘土採掘坑跡調査。周辺水田への給水がはじまり、地下水位上昇のため2区調査区自体がこの後渇水期に至るまでしばしば水没し、調査は困難を極めることになる。

８日（火）2-2区水没により終日排水作業。2-1区竪穴建物跡調査。1区南側竪穴建物跡群調査。

10日（木）2区地下水位の上昇に伴い水没し池状化して危険も予想されるため安全フェンスを調査区の周囲に巡らす工事に着手。フェンス工事完了までしばらく2区の調査を中断。1区竪穴建物跡・土坑跡・ピット等精査。

23日（水）2区排水開始。1区竪穴建物跡・土坑跡・ピット等調査継続。

24日（木）暗渠工事着手。1区竪穴建物跡・土坑跡・ピット等調査継続。

29日（火）2-1区粘土採掘坑跡群調査。2-2区排水作業継続。1区竪穴建物跡・土坑跡・ピット等調査継続。

７月１日（木）2-1区2・3号粘土採掘坑跡調査、2-2区排水作業継続。1区竪穴建物跡・土坑跡・ピット等調査継続。

５日（月）2-1区1号掘立柱建物跡・4号粘土採掘坑跡・15号溝跡・ピット等調査。1区竪穴建物跡・土坑跡・ピット等調査継続。

８日（水）2-1区2・3号掘立柱建物跡、4号粘土採掘坑跡、17号溝跡等調査終了。15号溝跡調査継続。2-2区3号竪穴建物跡、1号粘土採掘坑跡調査。1区竪穴建物跡群調査継続。

13日（火）2-1区埋め戻し。2-2区7・8号竪穴建物跡、5号粘土採掘坑跡、調査継続。1区竪穴建物跡群調査継続。

15日（木）2-1区埋め戻し完了。2-2区7・8号竪穴建物跡、5号粘土採掘坑跡調査継続、1区竪穴建物跡群調査継続。

26日（月）2-2区5・6号粘土採掘坑跡調査継続。1区竪穴建物跡群調査継続。

８月２日（月）2-2区5号粘土採掘坑・8号土坑跡調査継続、1区竪穴建物跡群調査継続。

５日（木）2-2区全景写真撮影。1区竪穴建物跡群調査継続。

９日（月）2-2区平面図実測終了。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
11日（水）2-2区排水作業。4区表土除去着手。1区竪穴建物跡群調査継続。
17日（火）2-2区埋め戻し着手。4区表土除去、壁面精査。1区竪穴建物跡群調査継続。
25日（水）2-2区埋め戻し継続。4区表土除去、遺構確認。1区竪穴建物跡群調査継続。
９月６日（月）2-2区埋め戻し完了。4区表土除去、遺構確認。北東部よりピット・溝跡等調査着手。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
10日（金）4区南西隅As-B軽石下水田全景写真、7号溝跡調査。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
17日（金）4区1・2号竪穴建物跡・1号溝跡調査継続。1区竪穴建物跡群調査継続。
10月１日（金）調査担当者１名他調査現場に転出。
4区2～8号竪穴建物跡・1号井戸跡・1～3号土坑跡・南部ピット群調査継続。
1区竪穴建物跡群調査継続。
14日（木）4区5～8号竪穴建物跡・1号溝跡調査継続。1区竪穴建物跡群調査継続。
22日（金）4区3～8号竪穴建物跡・1号溝跡調査継続。1区竪穴建物跡群調査継続。
29日（金）4区3～10号竪穴建物跡・1～8号溝跡調査継続。1区竪穴建物跡群調査継続。
11月４日（木）4区6～12号竪穴建物跡、1・8号溝跡調査継続。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
16日（火）4区6～15号竪穴建物跡、9・10号土坑跡・南部ピット群調査継続。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
24日（水）3区調査区安全柵設置・調査着手準備、4区15・16号竪穴建物跡・11号溝跡・10号土坑跡等調査継続。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
12月１日（水）10月１日付で他発掘現場に転出していた担当者が調査担当に復帰。3区最東端区画遺構確認・精査・遺構遺物無し。旧石器確認調査準備。
4区11～15号竪穴建物跡・ピット群調査継続。
1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
６日（月）3区最東端区画旧石器確認調査継続。4区13～18号竪穴建物跡調査継続。
1区竪穴建物跡群調査継続。
13日（月）3区最東端区画旧石器確認調査終了、3区最東端区画に関わる全ての調査を終了し、埋め戻し。3区主要部遺構確認。
4区・1区竪穴建物跡群調査継続。
15日（水）4区空撮。14～19号竪穴建物跡・1号掘立柱建物跡・14号土坑跡掘り方等精査。
3区1号竪穴建物跡・1～3号溝跡調査継続。
1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
20日（月）3区1～4号溝跡調査継続。
4区14～20号竪穴建物跡・1～4号掘立柱建物跡調査継続。
1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。
平成17年１月４日（火）調査担当者１名、事務局管理部資料整理課に転出。
６日（木）3区1号溝跡調査継続、4区14・20号竪穴建物跡掘り方調査継続、旧石器確認調

査トレンチ設定。

1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

17日（月）3区3～8号竪穴建物跡・1～5号溝跡調査継続。

4区22号竪穴建物跡調査継続。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

25日（火）3区3～9号竪穴建物跡・4区1号溝跡・6号溝跡調査継続、一部旧石器確認調査。

4区22号竪穴建物跡調査。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

31日（月）3区9号竪穴建物跡調査継続、旧石器確認調査。4区旧石器確認調査。

1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

２月１日（火）3区東半分旧石器確認調査終了、旧石器は検出されず。4区旧石器確認調査。

1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

７日（月）3区東半分埋め戻し。4区旧石器確認調査。1区竪穴建物跡群調査継続。

15日（火）3区西半分表土掘削、遺構確認、1号溝跡調査。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。日本道路公団への会計検査により検査官が発掘調査現場を視察。4区旧石器確認調査終了、旧石器検出されず。

24日（木）3区西半分遺構確認、10号竪穴建物跡・1号溝跡等調査、遺構が検出されない場所にて旧石器確認調査着手。

３月７日（月）調査担当者２名新たに着任。

3区10～13号竪穴建物跡・旧石器確認調査継続。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

10日（木）3区10～14号竪穴建物跡、3・4号土坑跡・旧石器確認調査継続。

1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

14日（月）3区11～15号竪穴建物跡、3・4号土坑跡・旧石器確認調査継続。

4区埋め戻し着手。1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

17日（木）3区15・16号竪穴建物跡・1号柱穴列跡調査終了。旧石器確認調査終了、旧石器は検出されず。全景写真撮影。3区調査終了。

4区埋め戻し継続。

1区竪穴建物跡群・土坑跡群調査継続。

23日（水）3区埋め戻し着手。

4区埋め戻し終了。

1区調査を中断、次年度に継続。

25日（金）3区埋め戻し終了。次年度に調査を継続する1区以外のすべての調査を終える。

整理作業は当事業団資料整理部（担当：資料整理第１グループ）が担当し、当事業団本部において平成20年４月１日から平成21年３月31日まで１年間実施し、同年３月に発掘調査報告書を刊行した。

・基本土層

表土	表土：地表から約15～35cm
Ⅰ	Ⅰ層：厚さ約8cm、黒褐色土
Ⅱ	Ⅱ層：厚さ約5cm、黒褐色土
Ⅲ	Ⅲ層：厚さ約10cm、暗褐色土
Ⅳ	Ⅳ層：厚さ約19cm、若干黄色がかった褐色土
Ⅴ	Ⅴ層：厚さ約22cm、砂混じり褐色土
Ⅵ	Ⅵ層：厚さ約18cm、灰色砂層

＊全調査対象地中、最も基本土層の検出に適した4区での調査結果による。土層中には、軽石粒子、顕著なテフラ粒子の濃集層準は検出されなかった。

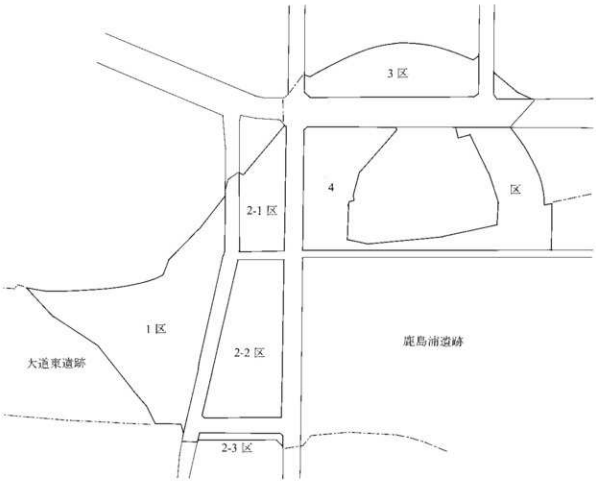


図１　楽前遺跡調査区模式図

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　遺跡の位置と立地

位置　楽前遺跡は、太田市のほぼ中央の北寄りの東今泉町の水田地帯に位置している。太田市の玄関口とも言える東武鉄道伊勢崎線太田駅の北北東約３km、太田市のシンボルである金山丘陵の北東約２kmの位置に当たっている。

調査区は、一般道太田・桐生線のすぐ東側に位置する大道東遺跡のさらに東側、北西から南東方向に斜めに走る農道を境にした東側である。現在の北関東自動車道の太田桐生インターチェンジに取り付く本線部分と、インターチェンジ本体の、北側に張り出した円形周回道路の北側約半分にあたる場所である。

太田桐生インターチェンジは、一般国道122号線に接して造成されているが、本遺跡の北約800mの位置で国道122号線は、北関東を横断する道路交通の大動脈である一般国道50号線と合流しており、太田市北部地区における交通の要衝となっている。

インターチェンジの南側半分については、当事業団によって鹿島浦遺跡として平成15年８月１日から平成17年３月31日まで調査が実施され、平成21年３月末現在、整理作業が進行中である。

また、インターチェンジに隣接する一般国道122号線の拡幅改良工事とインターへの進入路及び料金所部分については、国道122号線を東西に挟んだ北側にあたる向矢部遺跡、南側に当たる東今泉鹿島遺跡として、平成15年４月１日から平成17年５月31日まで発掘調査が当事業団によって実施された。

南側の東今泉鹿島遺跡の整理作業は、平成17年４月１日から平成18年３月31日まで当事業団によって実施され、『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第403集　東今泉鹿島遺跡 国道122号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』として平成19年３月末に発掘調査報告書が刊行されている。また、北側の向矢部遺跡の整理作業は、平成17年４月１日から、東今泉鹿島遺跡の整理作業と並行して行われ、平成19年９月30日まで実施され、『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第417集 向矢部遺跡 国道122号道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第２集』として、平成19年11月末に刊行されている。

本遺跡に関しては、インターチェンジ特有の半円形の周回道路内側の緑地帯に当たる部分について、工事による掘削・破壊が及ばないために遺構・遺物が保存されるということで、記録保存の措置の対象からは除外すべく道路公団側から強い申し入れがあり、県教育委員会側もこれを承認した。そのため、本県でははじめて、高速道路のインターチェンジ建設に伴う調査で、インターチェンジ中央の緑地帯部分を調査対象から除外した事例となった。よって、発掘調査は、インターチェンジの周回道路と料金所に接する工事対象部分にのみ調査の範囲が限定されたため、調査対象地のほぼ中央に、調査の対象から除外された空白箇所が大きく残ることになり、遺構分布の傾向等を総体的に把握することが困難になった。

地形　遺跡が立地する太田市の東今泉町一帯を含む毛里田地区の地形は、北東に足尾山地が連なり、北西には八王子丘陵が、南西には金山丘陵が位置し、その間の平地を足尾山地を源とする渡良瀬川が北西から南東方向に向かって流れている。遺跡が所在する場所は、東側の足尾山地と西側の八王子丘陵・金山丘陵に挟まれた現在の渡良瀬川の右岸の標高約50mの平地にあたっている。

渡良瀬川は、何度も氾濫し、流路を替えながら扇状地や後背湿地を形成し、平地を形作っている。

立地　本遺跡は、この渡良瀬川が更新世後期に形成した、桐生市付近を扇頂とする扇状地に形成された平地上にある。この渡良瀬川扇状地は、渡良瀬川の東遷によって形成された時期の異なる４つの扇状地面で構成されている。各扇状地面は幅が狭く、南北に長く分布する。さらに扇状地面上には旧河道地形や沖積低地が発達するため、複雑な形態を呈している。

毛里田地区の扇状地面は、八王子丘陵・金山丘陵から扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ面で、現流域方向に推移する。丸山地区の東部から矢田堀地区へと続く地形面が扇状地Ⅰ面、只上地区の集落を中心に発達する扇状地Ⅱ面、そして現流域に沿って分布する扇状地Ⅲ面があり、扇状地Ⅱ面の南側に沖積低地が広がっている。集落はこれら扇状地面上や八王子丘陵・金山丘陵の丘麓部に分布している。

遺跡の土層からも、基盤層である扇状地の砂礫層の上に、数多くの洪水層が確認出来、渡良瀬川の氾濫は、遺構の埋土からも確認出来る。

本遺跡は、茶臼山丘陵から丸山～矢田堀～東今泉へと北西から南東へ細長く伸びた渡良瀬川扇状地Ⅰ面の北東端部の標高約52m前後の場所に立地している。遺跡はおよそ９万㎡の範囲に及んでいるものと推定されている。

第２節　遺跡の歴史的環境

第１項　周辺の旧石器時代遺跡の動向

『太田市史 通史編　原始・古代』(1995) には、本遺跡の北西約４kmに位置する成塚向山遺跡でも早期の土器が散布すると記すが、当事業団が北関東自動車道太田パーキングエリアの建設に先立って平成15年度から発掘調査を実施した範囲では、古墳時代前期の古墳である成塚向山1号墳の墳丘盛土中からナイフ型石器、エンドスクレイパー、削器など、石核を含め11点が出土している。これらの石器は、墳丘増築時に周辺の土を掘削した際に混入したものと考えられる。なお、この遺跡では古墳の調査が終了した後に、旧石器の確認調査を実施しているが、確認調査自体では旧石器は出土していない（『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第426集　北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 成塚向山古墳群』2008)。

本遺跡の北西約６kmの場所に位置し、八王子丘陵西麓の平地に立地する西長岡宿遺跡は、北関東自動車道の建設に伴って当事業団が平成13年度より16年度まで調査を実施しているが、包含層中から黒色安山岩製のサイドスクレイパーが出土している（平成20年度整理中)。同じく北関東自動車道の建設に伴って平成14・15年度に当事業団が発掘調査した北西に隣接する西長岡横塚古墳群では、北側台地の斜面部分で石核やチップが出土している（平成20年度中発掘調査報告書刊行予定)。

本遺跡の西北西約2.3kmのところに位置し、八王子丘陵と金山丘陵の接点の谷地に近い金山丘陵最北端の平尾根上に立地する強戸町～緑町～吉沢町にかけて所在する峯山遺跡では、かってナイフ型石器、削器、扶入石器、楡先型尖頭器などが出土し（『太田市史 通史編　原始・古代』 1995)、平成14年度から17年度にかけては北関東自動車道の建設に伴って当事業団が発掘調査を実施したが、浅間板鼻褐色軽石層から暗色帯上面にかけて角錐状石器やナイフ形石器など多量の旧石器が出土している（平成20年度末報告書刊行予定)。また、その南側に接する強戸口峯山遺跡では後期終末の�屋型彫刻刀が出土している（『太田市史 通史編 原始・古代』1995)。

峯山遺跡の東側に隣接する緑町の萩原遺跡でも、北関東自動車道の建設に伴って当事業団が平成16年度から18年度にかけて調査を実施し、後世の遺構埋土中からではあるがナイフ型石器が出土している（報告書未刊)。萩原遺跡は早くから旧石器時代遺物の散布地として知られた雷電山遺跡のすぐ北側に当たっており、萩原遺跡と同じ遺跡と考えられる。雷電山遺跡は大字太田字強戸口の、金山丘陵から北東に張り出した雷電山の痩せ尾根上から先端部にかけての場所に立地し、楡先形尖頭器やナイフ型石器などが出土している（『太田市史 通史編　原始・古代』1995)。

本遺跡の西北西約1.5km、主要地方道足利・伊勢崎線と一般県道桐生・太田線が交差する丸山交差点の西約0.5km、金山丘陵の北東に分離した場所に位置する周囲約200m・高さ約５mほどの独立小丘陵上に所在する大字矢田堀字小丸山の小丸山西遺跡からも楡先形尖頭器やナイフ型石器が出土している（『太田市史 通史編　原始・古代』1995)。

この他、北関東自動車道の建設に伴って、平成15年７月から平成17年３月末にかけて、当事業団によって調査が行われた、本遺跡から西北西へ約900mのところに位置する東今泉町の八ヶ入遺跡からは、細石刃約370点を含む、約2000点以上の旧石器が発見されている（整理作業進行中)。さらに東金井町の金井口遺跡、

東長岡町の焼山遺跡からも旧石器が出土している。

第２項　周辺の縄文時代遺跡の動向

草創期の遺跡　旧石器が出土した峯山遺跡は、縄文時代草創期の土器が散布していると『太田市史 通史編 原始・古代』(1995) にあるが、当事業団が平成14年度から着手した調査では、縄文時代草創期の土器は全く発見されていない（平成20年度整理作業中）。丘陵部頂上付近で早期及び前期の土器を伴う土坑跡や黒曜石製の石鏃、スクレイパー、剥片などが出土している。

成塚町成塚住宅団地遺跡では草創期の遺構は検出されていないが、草創期の柳葉形尖頭器が採集されている。

早期の遺跡　同じく『太田市史 通史編 原始・古代』(1995) には本遺跡の北西約４kmに位置する成塚向山遺跡でも早期の土器が散布すると記す。当事業団が北関東自動車道太田パーキングエリアの建設に先立って平成15年度から発掘調査を実施した範囲では、縄文時代の遺構は検出されていない。ただし、同遺跡から出土した旧石器同様、成塚向山１号墳墳丘盛土中に混入したとみられる早期中葉～早期後半の縄文土器片が46片出土している（『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第426集　北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 成塚向山古墳群』2008）。

本遺跡の南南東に近接する東今泉鹿島遺跡は、国道122号線から北関東自動車道太田桐生インターチェンジへのアクセスルートの建設とそれに伴う国道の拡幅工事に先立つ調査であるが、早期の押型文土器と鵜ヶ島台式土器が出土しているが、縄文時代の遺構は検出されていない（『財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第403集 東今泉鹿島遺跡 国道122号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2007、『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第417集 向矢部遺跡 国道122号線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２集』2007）。

本遺跡の東に隣接して、同じく北関東自動車道の建設に伴って平成16年７月から平成17年３月末まで調査された只上町の向矢部遺跡でも遺物包含層中から縄文時代早期～後期の土器が出土しているが、縄文時代の遺構は検出されていない。

このほか、旧石器が出土している西長岡町の西長岡宿遺跡からも包含層中から早期の撚糸文土器や押型文土器が多数出土しており、早期の屋外炉らしき遺構が検出されており、北西に隣接する西長岡横塚古墳群からも早期の土器片が包含層中から出土している（平成20年度末報告書刊行予定）。さらに本遺跡の北西約２kmに位置し、八王子丘陵南麓の低地に位置する菅塩町菅塩遺跡でも早期から後期にかけての包含層中より土器・石器が多数出土している（平成20年度中報告書刊行予定）。

前期の遺跡　遺跡と同様、北関東自動車道の建設に伴って、平成15年２月から平成17年３月末までの間、発掘調査された、本遺跡の西北西約1.5kmに位置する緑町の二の宮遺跡からは縄文時代前期の竪穴建物跡１棟と土坑跡４基、ピット跡３基が検出されている。また、遺物包含層からも前期の土器が検出されている。

本遺跡の南南東に近接する東今泉鹿島遺跡では、この時期の土坑跡４基が検出されており、黒浜式・諸磯式・浮島式の土器片が出土している。

また、成塚向山古墳群では、当事業団が北関東自動車道太田パーキングエリアの建設に先立って発掘調査を実施した範囲では縄文時代の遺構は検出されていない。ただし、同遺跡から出土した旧石器や縄文時代早

期の土器片と同様、成塚向山１号墳墳丘盛土中に混入したとみられる前期前半の資料が90片、前期後半の縄文土器片が６片出土している（『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第426集　北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 成塚向山古墳群』2008）。

中期の遺跡　本遺跡周辺でこの時期の集落が顕著に検出されたのは、本遺跡の西に隣接する大道東遺跡で、縄文時代中期後半から後半の竪穴建物跡が５棟検出されている（平成20年度整理作業中）。また、本遺跡の南側に隣接する鹿島浦遺跡では、縄文時代中期の埋設土器が１基、及び遺物包含層中から縄文時代中期の土器片が多数出土している（平成20年度整理作業中）。

南南東に近接する東今泉鹿島遺跡では、中期末葉加曽利E3～E4式の土器片が包含層中から出土している。本遺跡の東側に隣接する向矢部遺跡からも、遺物包含層中から縄文時代中期の土器が出土しているが、縄文時代の遺構は検出されていない。向矢部遺跡のさらに東側に接して、同じく北関東自動車道の建設に先だって平成16年５月から平成18年３月末まで発掘調査された矢部遺跡では、縄文時代中期の土坑跡が約800基検出されている。

本遺跡１区でも縄文時代中期加曽利E式期の竪穴建物跡２棟と埋設土器が８基検出されている。

後・晩期の遺跡　西長岡宿遺跡では縄文時代後期の竪穴建物跡７棟、配石遺構約200基が検出されており、本遺跡周辺では縄文時代後期の遺構としてまとまった量である。配石遺構は方形のものが多いが、列石、集石等、多様な形態を呈している。『太田市史 通史編　原始・古代』（1995）では、同遺跡に隣接する西長岡横塚古墳群で晩期の土器が採集されていると記すが、当事業団が北関東自動車道の建設に先立って実施した調査範囲では晩期の遺構・遺物は発見されていない。

南南東に近接する東今泉鹿島遺跡では、あまり多量ではないが、後期前半の称名寺式、堀之内式の土器が遺物包含層中より出土しているが、遺構に伴うものではない。

旧藪塚本町域北部の八王子丘陵西麓に位置する石之塔遺跡では、後・晩期の遺構が発見されている（『藪塚本町誌』1991）。石囲炉跡、敷石状遺構、配石状遺構、埋設土器などが検出されている。縄文時代の堀之内Ⅱ式や加曽利B式期の土器が出土しているが、主体となるのは安行Ⅲa式期の土器であり、この遺跡から出土した縄文土器の大部分を占める。さらに土偶・土板・岩板・耳飾りなど特殊な遺物の出土が多い。群馬県内において数少ない縄文晩期を主体とする遺跡として著名になった。

第３項　周辺の弥生時代遺跡の動向

周辺部に展開する弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比べて非常に少なく、旧藪塚本町域５箇所を数えるのみであり、いずれも旧町域東部の八王子丘陵西麓一帯である。八王子丘陵西麓の現在水田地帯になっている平地に立地する藪塚町藪塚の元屋敷遺跡からは、弥生時代中期後半の竜見町式の壺型土器が出土しており、再葬墓の可能性が指摘されている。

八王子丘陵西麓すぐのところの緩傾斜地に立地する藪塚町中原の中原遺跡からも、中期後半ながら竜見町式よりは若干後代の壺型土器が出土し、壺棺として使用された土器である可能性がある。

八王子丘陵西麓に接する緩傾斜地に立地する滝之入遺跡では、後期前半の樽式の壺型土器が埋土中から出土しており、町域北部の、同じく八王子丘陵西麓に接する緩傾斜地に立地する石之塔遺跡からは後期後半の土器片が出土している。

平成16年度から当事業団によって北関東自動車道及び県道国定藪塚線並びに石田川流域調節池等の建設工事に伴って発掘調査が実施され、八王子丘陵西麓の平地の水田地帯の中に立地する藪塚町藪塚西野原遺跡では、県道国定藪塚線にかかる部分の調査と調節池にかかる部分の調査において弥生時代中期後半～後期の竪穴建物跡が計７棟検出されている（県道国定藪塚線にかかる部分のみ報告書刊行。（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『西野原遺跡（１）（２）』2006）。

成塚町成塚石橋遺跡では、弥生時代後期樽式土器が出土した竪穴建物跡が７棟検出され、同型式土器出土の最東端を示している。このほか、八王子丘陵南西の支丘斜面上に立地する西長岡東山古墳群では中期後半の土器が出土しており、また西長岡横塚古墳群でも後期の土器が採集されているが、両遺跡ではこの時代の遺構は検出されていない。弥生時代における本地域の全般的な動向には未だ不明な点が少なくない。

本遺跡の東北東約700mに位置する、北関東自動車道建設に伴って平成16年５月から平成18年３月末まで発掘調査された矢部遺跡から弥生時代中期の須和田式土器が出土しているが、弥生時代の遺構は検出されていない。

第４項　周辺の古墳時代遺跡の動向

本遺跡周辺は東毛地域においても屈指の古墳密集地帯であり、古墳時代集落と併せ、枚挙に暇がないほどである。

集落　古墳時代の集落跡は、本遺跡と同様、北関東自動車道の建設に関連して当事業団が発掘調査した緑町の二の宮遺跡、八ヶ入遺跡、東今泉町の大道西遺跡、大道東遺跡、本遺跡、鹿島浦遺跡、東今泉鹿島遺跡、只上町の矢部遺跡、只上深町遺跡、などから古墳時代中期から後期の集落跡が発見されている。とくに本遺跡の南南東に近接する東今泉鹿島遺跡からは古墳時代前期末から中期初頭の竪穴建物跡が11棟検出されている。同様に北関東自動車道の建設に伴って当事業団が平成15年11月から平成17年３月末まで発掘調査が行われた緑町の古氷条里水田遺跡では、西小丸山の小丘陵の南に接する微高地上で発見された二条の溝跡から古墳時代前期の土師器片が出土している。それ以外では、古墳時代の集落が発見されているところは、すべて古墳時代後期の集落である。

本遺跡は、昭和42（1967）年にやはり同じく駒澤大学が只上遺跡として竪穴建物跡を１棟調査し、さらに昭和61（1986）年から翌62年にかけては、群馬県営渡良瀬川流域地区公害防除特別土地改良事業に伴い、太田市教育委員会が、28,000㎡に及ぶやや大規模な発掘調査を実施し、古墳時代後期の竪穴建物跡約100棟、奈良時代の竪穴建物跡約５棟・掘立柱建物跡13棟、平安時代の竪穴建物跡90棟、溝跡約20条、井戸跡６基などの遺構が検出されていたのであった（『太田市史 通史編　原始・古代』1996）。ただし、本遺跡において、過去に調査が行われたこれらの場所は、北関東自動車道の建設工事対象地とは重複してはいない。

本遺跡では、この群馬県営渡良瀬川流域地区公害防除特別土地改良事業に伴う太田市教育委員会による発掘調査時にも、また、今回の北関東自動車道建設に伴う当事業団による調査においても、古墳時代後期を遡る竪穴建物跡等の遺構は全く検出されていない。

八王子丘陵が南に向かって舌状に突出した台地上に立地する成塚町～北金井町～大鷲町にわたって所在する成塚町の向山遺跡・成塚向山古墳群では、北関東自動車道太田パーキングエリアの建設に伴って平成15・16年度に当事業団が発掘調査を実施しているが、古墳時代前期４世紀の方墳と共に前期初頭の吉ヶ谷式系土

器を伴う集落跡が検出されている（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『成塚向山古墳群』2008）。

周辺の古墳　金山丘陵西北の突端部丘陵上に立地する中強戸の寺山古墳は、北関東自動車道の建設に伴って発掘調査が行われた峯山遺跡の南約100mに位置する全長55mの前方後方墳で、初期古墳として著名である（『太田市史 通史編 原始・古代』1995）。また、平成15・16年度に当事業団が調査した成塚向山古墳群では、一辺約20mの４世紀古墳時代前期に築造された方墳が検出されている。『上毛古墳総覧』に掲載されていない古墳であり、平成11年度に太田市教育委員会が試掘調査を実施している。当事業団による本調査の結果、竪穴式の埋葬施設が２基検出され、銅製重圏文鏡、銅鏃、鉄鏃、鉄剣、鉄製工具、翡翠製勾玉、蛇紋岩製管玉、ガラス製小玉などが出土した（『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第426集 成塚向山古墳群 太田地域における前期古墳の調査 北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書』2008）。

５世紀後半の大型古墳としては、鳥山町鶴山古墳が特筆できる。大間々扇状地末端の低台地上に立地する全長102mの前方後円墳で、後円部墳頂には竪穴式石室を有し、鉄製甲冑類、石製模造品などが多数出土した（石川正之助・右島和夫『鶴山古墳出土遺物の基礎調査』1～6 『群馬県立歴史博物館調査報告書』2～7 1986～91）。

一方、本遺跡からみて北西方向に当たる八王子丘陵南西から南東に至る尾根上には、ほかに41基の後期古墳から形成される北金井の北金井御嶽山古墳群や、36基の後期古墳からなる同じく北金井の大鷲古墳群、14基の後期古墳からなる上強戸古墳群など、後期古墳が群集している。

八王子丘陵南端に立地する成塚向山２号墳は、径約18mの６世紀の円墳で、古墳時代前期の1号墳や古墳時代前期の集落跡と同様に平成15・16年度に当事業団が発掘調査を実施した。南側に向かって舌状に突出して張り出した丘陵上の突端部分に位置し、同時期の古墳としては群を形成せずに単独で立地している点が特徴的である。前期古墳である1号墳よりもさらに南側の丘陵の端、1号墳よりもやや低い位置にあり、南側に入り口を持つ横穴式石室を有する。石室内からは鉄鏃やガラス小玉、墳丘裾からは樹立状態の形象埴輪約20点・円筒埴輪約40点からなる埴輪列が出土した。

本遺跡周辺の縁町から東今泉町にかけては菅ノ沢古墳群・市場古墳群・内並木古墳群・寺ヶ入古墳群など多くの古墳群が形成されている。

本遺跡の真東約700mに位置する只上町の猿楽遺跡では、国道50号線バイパスの建設工事に先立って昭和49年６月から10月まで群馬県教育委員会によって約8,000㎡の発掘調査が実施され、円墳７基と１基の箱式石棺墓が検出された。６世紀後半頃の古墳とみられ、大型の円筒埴輪列が並んでいた様子が出土遺物からうかがえる。これら発掘調査された古墳群の北側にも、『上毛古墳総覧』に掲載された「毛里田村第1号墳」「毛里田村第17号墳」「毛里田村第18号墳」などが存在していた様子がうかがえるので、周辺一帯に広がる古墳群の一角を占めていた様子が判明する。

本遺跡の西南西約１kmに位置する東今泉町の金山丘陵東北端に延びる支丘陵の南斜面に立地する４基からなる後・終末期古墳群と、それに隣接して古墳時代後期の大規模な須恵器窯跡と製鉄遺跡群からなる生産遺跡である菅ノ沢遺跡がある。金山丘陵には、古墳時代後期から平安時代に至る須恵器窯跡が多数存在しており、この地域における一大窯業生産地帯であったことが知られているが、菅ノ沢須恵器窯跡は、金山丘陵窯跡群の中における現時点で調査された窯跡の中でも中核的な窯跡である。

この菅ノ沢遺跡群の北側に位置する丘陵の先端部には、今泉口八幡山古墳がある。この古墳は『上毛古墳総覧』に掲載された「毛里田村第12号墳」で、前方部を西に向ける全長約50mの６世紀末頃の前方後円墳と

考えられている。後円部に位置すると考えられている横穴式石室は大部分が崩落しているが、長さ約２m・幅約１m・高さ約１mの安山岩製の家型石棺の存在が確認されている。東毛学習文化センター所蔵の江戸時代・元文３（1738）年の「新田金山石棺御尋聞書」に記載された古墳は、この古墳である可能性が高いとされている。さらにこの古墳の南南東約50mのところに近接する菅ノ沢御廟山古墳は、『上毛古墳綜覧』に掲載される「毛里田村第11号墳」で、径約30mの横穴式石室内を有する円墳で、従来、「新田金山石棺御尋聞書」に記載がある古墳と考えられてきたが、現在では、この古墳ではなく近接する今泉口八幡山古墳とみる説が有力である。

本遺跡の西約500m、大道西遺跡のすぐ北側には、一辺約30mの方墳、大型の横穴式石室を主体部とする東毛地域唯一の終末期方墳である嚴穴山古墳が所在している。『上毛古墳綜覧』に掲載された「毛里田村第10号墳」である。二段築成の墳丘の高さは約６m、周囲には上幅約７m・下幅約5.5m・深さ約１mの周溝が巡るが、現状では周溝は埋没している。時期は７世紀中葉とみられる。

本遺跡の北西約1.5kmには、西側を休泊用水、東側を矢場川に挟まれた台地上に丸山古墳群がある。『上毛古墳綜覧』編纂時には全長約50mの前方後円墳・庚申塚古墳とその周辺に位置する円墳８基からなる６世紀末～７世紀初頭の古墳群である。庚申塚古墳から出土した石棺が、江戸時代・文政年間に刊行された滝沢馬琴編『兎園小説』第七集（文政８＝1825年刊）に「上野国山田郡吉澤村掘地見石棺図」「石棺図別録」として報告記事が実測図入りで紹介されている。なお、この石棺については現在所在不明である。

生産遺跡　先述したように古墳群が存在する菅ノ沢遺跡群には、古墳時代の須恵器窯跡群と製鉄遺跡が発見されている。

金山丘陵の北東端部には、緑町の強戸口須恵器窯跡群と諏訪ヶ入須恵器窯跡が、また金山丘陵の東端部には、東今泉町の金井口埴輪窯跡・母衣埴輪窯跡・亀山須恵器窯跡などの遺跡がある。埴輪窯・須恵器窯跡は金山丘陵の北側に対峙する八王子丘陵からも多く発見されており、一帯が古墳時代後期から平安時代にかけての一大窯業地帯であったことが判明している。また、これまでも寺中遺跡、菅ノ沢遺跡群、八ヶ入遺跡、今泉口遺跡などにおいて製鉄遺跡が発見されており、窯業生産と並んで鉄生産も行われていた場所であったことが判明している。さらに近年の北関東自動車道の建設に並行して田嶽塚本町嶽塚の西野原で建設された調整池の工事に先立って当事業団によって調査された西野原遺跡では、東日本最大級と見られる、７世紀後半代の巨大な製鉄遺跡も発見されており（平成20年現在整理作業中）、北関東自動車道の建設に先立って当事業団が調査した上強戸の峯山遺跡でも製鉄遺跡が発見されるなど（平成20年現在整理作業中）、従来より知られてきた埴輪・須恵器窯の集中地域に加えて、八王子・金山丘陵一帯が一大製鉄地域であることも明らかにされつつある。こうした、古墳時代後・終末期から平安時代にかけての生産遺跡の集中は、八王子・金山丘陵と、その間を北西から南東方向に流れるいくつもの渡良瀬川支流の小河川によって形成された地形、それに両丘陵から足尾山地にかけての豊富な木材資源の存在などの要因によるものであろう。

このように本遺跡周辺一帯では、主に古墳時代後・終末期にかけて、古墳が多数造営され、さらに同時代の集落と窯業及び鉄の生産が盛行した地域である。言うなれば古墳群と手工業生産拠点に周囲を囲まれた中に本遺跡などの集落が営まれていたわけである。

第５項　周辺の奈良・平安時代遺跡の動向

古代の地方行政組織　周知の通り、７世紀後半、古代国家が成立し地方支配体制が確立すると、地方は各段階に応じて国・評（のち郡）・五十戸（のち里）という地方行政組織に編成された。

古代山田郡と新田郡　本遺跡の地は、律令制下の山田評、後の山田郡内の南よりに位置している。山田郡は、現在の桐生市・みどり市の山間部を含む渡良瀬川沿いの広大な面積を擁するが、現在の太田市域にかかる郡南部の平野部は、八王子・金山の両丘陵によって、東側の古代の新田郡の領域に近接している。

新田郡の郡名「新田」は、『万葉集』の写本では「爾比多」、平安時代の『延喜式』や『和名抄』では「尓布多」と読みが振られており、「ニヒタ」とか「ニフタ」などと発音されていたと考えられる。周辺では「入田」と記載した墨書土器が多く出土しており、「ニフタ」と発音されていたことを裏付ける。

『和名抄』では、郡内に新田・澤野・石西・祝人・淡甘・駅家の6郷があったとされている。郡名を負う新田郷と駅家郷は郡家や駅家が設置された官衙地区の周辺である郡域中央東部一帯、澤野郷は旧尾島町粕川周辺、石西郷は太田市街地南部の岩瀬川町周辺、祝人郷は八王子丘陵西麓の平坦地一帯などがそれぞれ有力な比定地と考えられており、淡甘郷の位置だけが諸説あって定見をみていない。正倉院に所蔵されている調として都に運ばれた布に、「（表）上野国新田郡淡甘郷戸主矢田部根麻呂調黄壹疋長廿六丈五尺（裏）天平勝寶四年十月主當 [illegible]」とあり、天平勝宝4（752）年段階における郡司の氏名がわかる稀有な史料と言える（松嶋順正編『正倉院宝物銘文集成』 吉川弘文館 1978）。また『東大寺要録』には、天平19（747）年に聖武天皇の勅命によって東大寺に1000戸の食封が施入されたことを示す記事があり、その中に上野国新田郡内の50戸が含まれている。古代の新田郡内には、東大寺の維持管理資金を調達するために指定された封戸が存在していたのである。

なお、『万葉集』の東歌の中の上野国歌には、新田郡の地に関わるものが２首含まれている（土屋文明『萬葉集上野國歌私注』 煥乎堂 1944）。

新田山　ねにはつかなな　吾によそりはしなる児らに　あやにかなしも（3408）

（大意）新田山の嶺のように、寝たいものであるよ！。私の妻とみなが認めてくれている遠くにいるあの女のことが、しきりに愛しく思われて。

しらとほふ　小新田山のもる山の　うら枯れせなな　とこはにもがも（3436）

（大意）小新田山の、あの神様が祀られている山の、梢が枯れることがないように、私たちの仲も常緑の常磐木の葉のように普遍であって欲しいものよ。

前者の歌にみえる「新田山」は金山丘陵、後者の歌にみえる「小新田山」とは本遺跡から東北東約３kmの場所にある独立丘陵、丸山町の丸山のことを指すとする説があるが、確証はない。ただ、「新田山」と称されたのは、新田郡内で独立する大型の丘陵としてランド・マークにもなる金山丘陵を指すと考えることは、まず穏当な見解であり、後者の「小新田山」が丸山を指すかどうかの是非は別としても、これらの歌が、本遺跡周辺の情景を元に作歌されたものであることには違いない。

古代新田郡家　律令制下の新田郡の役所である郡家は、本遺跡から約５km西に位置する太田市天良町で発掘調査された天良七堂遺跡がそれに当たると考えられている。昭和30年に行われた発掘調査で、南北16m・東西７m、６間×３間の南北棟総柱大型礎石建物跡が検出され、付近から炭化米が多数出土した。この大型総柱礎石建物跡は、新田郡家正倉院を形成する倉庫群のうちの一棟と考えられ、この遺跡が新田郡家

の遺跡である可能性が指摘された。平成19年５月の発掘調査によっても正倉院の一角を構成していたと考えられる大規模な総柱建物跡が発見され、さらに19年６月には主要地方道伊勢崎・足利線沿いの北側、本遺跡調査区最西端から西へ約580mの位置から郡庁院の遺構が検出された。天良七堂遺跡が新田郡家の遺跡であることは確実となった（太田市教育委員会『天良七堂遺跡』2008）。

新田郡家である天良七堂遺跡や新田郡家に関連する寺院の遺跡と考えられる寺井廃寺との位置関係からみて、現在の天良町から石橋町付近は古代においては新田郡の新田郷に当たると考えられているが、古代の地方行政組織の末端である里（のち郷）は、元々が「五十戸」と称されたように、五十戸の人間集団の集合体を機械的に編成したものであって,現在の自治体のように領域としての範囲が必ずしも明確なものではない。しかしながら、本遺跡及び周辺で検出された集落が、里（のちに郷）という行政単位に組織されないことはあり得ない。

東山道駅路と新田駅家・駅家郷　『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条によれば、新田郡内には東山道駅路が東西に貫通し、上野・下野両国から武蔵国への分岐点となった陸上交通上の要衝であり、官人の公務通行を支援すべく設けられた施設である新田駅家が置かれてれていた。古代において、官衙はそれぞれが比較的近辺にまとまって配置されていた様子が判明しているので、新田駅家も新田郡家からさほど遠くない場所に設置されていたものと考えるのが自然である。新田駅家の所在地としては、太田市新田村田から寺井にかけての場所に想定する意見が強い（『新田町誌』通史編１ 1990）。

周知のように、宝亀２（771）年、武蔵国が東海道に所管換えとなり、新田駅家から南へと分岐して武蔵国府（現・東京都府中市）に至っていた東山道駅路武蔵路は駅路としての扱いを受けなくなった（『続日本紀』宝亀２年10月己卯条）。これによって、制度的には、新田駅家は駅路分岐点としての重要拠点から駅路路線上の一般的な駅家と同じになるわけで、官衙としての性格に大きな変更が生じたように感じられるが、新田駅家と武蔵国府とを結ぶ道路自体が実際に廃止されたわけではない。東山道駅路武蔵路が、道路そのものの若干の位置の変更はあるにせよ、ルートとして中世の鎌倉街道にほぼ踏襲されていることからみても、そのことは明白である。東山道駅路武蔵路は、あくまでも駅路でなくなったというだけのことで、上野・下野両国間にわたる東山道駅路と武蔵国府・東海道駅路とを結ぶ連絡路的な官道として機能し続けたものと考えられる。それによって、駅路分岐点ではなくなったものの、東山道駅路と東海道駅路とを連絡する官道との分岐点として、古代陸上交通上の要衝としての重要性は、決して変わるものではなかったと見るべきであろう。

新田郡家の正倉院の倉庫群の一角をなすと考えられる大規模な総柱建物跡が検出されている天良町の天良七堂遺跡の西南西約１kmの地点、新田村田から新田小金井にかけて所在する入谷遺跡では、方約180mの範囲を溝によって区画した中に、５×３間の南北棟瓦葺礎石建物跡が２棟並列した施設の跡が発見されている。７世紀後半頃に造営され、８世紀中葉頃まで存続していたと考えられる。東北東約１kmの場所に所在する天良七堂遺跡が新田郡家と考えられるため、この入谷遺跡で検出された瓦葺の官衙風の施設を新田駅家とみる考え方が強い（『新田町誌』通史編１ 1990、『太田市史』通史編 原始・古代 1996）。ただ、現在までのところ、方約180mの区画の中に、５×３間の南北棟瓦葺総柱礎石建物跡が２棟しか検出されていないので、兵庫県などで検出されている山陽道駅路上の駅家遺跡の様相とはだいぶ異なっており、その確証に欠ける。

旧新田町内では、牛堀・矢ノ原ルートと称される高崎市南部の平地から玉村町を経て旧境町にかけて東西に貫く幅約12mの古代道路遺構に続く道路遺構と、その南側数百メートルの位置を、牛堀・矢ノ原ルートに並行して東西に貫く幅約10mの下新田ルートの二系統の駅路遺構が検出されている。また、北関東自動車道

の建設に関わる調査では、さらに東に寄った金山丘陵の東麓地域である太田市東今泉町の地域で、約１km にわたって幅約12mの古代道路遺構が検出され、これは牛堀・矢ノ原ルートにつながる道路遺構であると考えられている。

本遺跡は古代官道に非常に近い場所に所在したわけであり、本遺跡における古代集落の形成に際して、付近を通過する古代官道はそれなりの影響があったものと考えられる。

古代新田郡を構成した６郷のうち、駅家郷は、東山道駅路沿線に設けられた官人公務通行支援施設である新田駅家の業務に関わる労働徴発や経済基盤として設定された戸によって形成された郷である。新田郡家や新田駅家が設置された周辺は、概ね郡名を負う新田郷に当たると考えるのが自然であるが、その中から駅の管理・運営に関わる戸が指定されて駅家郷が設定されたものと考えられる。新田郷と駅家郷とは明確な範囲や領域が相互に独立していたわけではなく、新田郡家・駅家周辺の多数の戸の中から、それぞれが指定され、存在したとみるのが妥当であろう。

高崎市南部から玉村町、旧境町、旧新田町南部にかけて検出されている牛堀・矢ノ原ルートと、その延長上の道路と考えられる太田市東今泉町付近で検出された幅12mの古代道路遺構は、いずれも８世紀中葉から後半にかけて廃絶していることが調査の結果明らかになっており、牛堀・矢ノ原ルート、下新田ルートいずれも『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条に記載のある段階の東山道駅路とは異なる段階の駅路の跡とみられ、むしろ『延喜式』段階における東山道駅路は、牛堀・矢ノ原ルートや下新田ルートよりはかなり北側に位置する榛名山東麓から赤城山南麓の台地上を通っていたものと考えられる。平安時代の東山道駅路は、本遺跡の北方、旧藪塚本町域内を通っていたと想定できるが、旧藪塚本町域や太田市北部地域では、現在までのところ、古代の道路遺構が検出された遺跡はない。

寺井廃寺　本遺跡の西約4.7kmの位置にあたる寺井廃寺は、石橋町から天良町にかけて太田市立強戸小学校と同中学校を中心とする一帯に所在したものと考えられ、７世紀後半から10世紀に及ぶ瓦が多数出土している。しかしながら建物基壇や礎石が地表に露出しているわけではなく、また昭和60年代に市立強戸小学校と同中学校との中間において太田市教育委員会が発掘調査を実施しているが、寺院に関わる遺構は全く検出されなかった。伽藍配置等は現段階では全く不明である。

創建年代が７世紀後半に遡ることや、８世紀段階には上野国分寺と同じ瓦が使用されていたとみられること、あるいは郡家と考えられる天良七堂遺跡との位置関係などからみて、新田郡領となった在地豪族による造営であり、新田郡家と密接な関係を有していた寺院と考えられる。

なお、蛇川の河川改修に伴って当事業団が平成４・５年度に発掘調査を実施した菅塩町の菅塩西両台遺跡においても、N-35°-Eの方向に一直線に延びる上幅約7m・深さ約1.8mの大溝の跡が検出されており、土層断面に流水の痕跡が確認できないことから、寺井廃寺の寺地を画する溝跡という見方が調査担当者によって示されている（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編『西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ』1996）。

古代の山田郡　『日本後紀』延暦15（796）年８月16日条に、「上野国山田郡賀茂神・美和神」とあるのが初見、この両社は『延喜式』神名帳にも掲載されている。『和名抄』古活字本には、郡名の山田には「夜末太」の訓が付されている。『和名抄』古活字本によれば、管下の郷は、山田・大野（於保乃）・園田（曽乃）・真張（万波利）の４郷である。高山寺本では、これに小山・三島の２郷が加わり６郷と記載されているが、これら２郷は下野国都賀郡の２郷が書写の過程で錯簡し紛れ込んだのであろう。『続日本後紀』承和２（835）年７月21日条には上野国山田郡の空閑地80町を道康親王（後の文徳天皇）に与えた記事がみえる。

山田郡各郷のうち、山田・大野の２郷については桐生市・みどり市に比定されており、園田・真張の２郷が太田市域に比定されている。吉田東伍『大日本地名辞書』で園田郷を「今相生村、広沢村、毛里田村にあたる」、また真張郷を「今韮川村、休泊村、矢場村等にあたるか」と、また村岡良弼『日本地理志料』では、これらの二郷の比定に若干異動はあるものの、毛里田村、すなわち本遺跡の地である毛里田地区については律令制下の園田郷の故地の一部とみることで一致している。

近年の『太田市史 通史編 原始・古代』では、現在の桐生市域にあたる広沢・相生を大野郷に比定し、園田郷の故地を太田市北部の吉沢町から矢田堀・緑町を経て東今泉町、さらにその南東の東金井町・東長岡町・安良岡町・台之郷・石原町・下小林町に至る北西～南東に及ぶ細長い地域に比定している。

いずれにしても、本遺跡周辺一帯が律令制下の園田郷の故地に当たっていることは、従来の研究史からみても、諸説一致しているところであり、ほぼ確実と言えよう。

東山道駅路　なお、以前から、山田郡南部には東山道駅路が東西に通ると予測されていたが、北関東自動車道の建設に先立つ当事業団による調査によって、緑町の八ヶ入遺跡（平成20年度末発掘調査報告書刊行予定）、東今泉町の大道西遺跡（報告書未刊）から大道東遺跡（平成20年度整理作業中）を経て鹿島浦遺跡（平成20年度整理作業中）に至る総計約１kmに及ぶ範囲で幅約12mに及ぶ東山道駅路の遺構が検出されている。特に今回、大道東遺跡の調査において、７世紀代の竪穴建物跡と道路遺構との重複関係を検出でき、重複する遺構の新旧関係から、ある程度明確な道路の造営と廃絶の時期を特定できる成果が得られたことは、今後の全国的な意味における古代駅路研究に重要な資料を提供するものであった。

緑町から東今泉町にかけて約１kmにわたって検出された東山道駅路跡は、金山丘陵の西側で検出されていた東山道駅路の二つのルートのうち、牛堀・矢ノ原ルートに接続するものと考えられる。並行して複数のルートが想定できる上野国平野部における東山道駅路の展開については、その要因が各ルートの時期差か否かという問題を含めて、その解明は今後の課題であろう。

園田郷　本遺跡が含まれる園田郷の地域には、前橋市の総社古墳群以外で唯一の７世紀代の方墳である巌穴山古墳が造営されている。この古墳の終末の時期に、唯一、造営されたこの古墳から、７世紀代にこの地域を支配した豪族が、周辺の豪族達を圧して卓越した地位にあったことを伺うことができよう。園田郷の地は、律令制成立以前からの埴輪生産と須恵器生産の専業的な生産地として発達し、律令制下に至ってからはそれまでの須恵器生産に加え、北側の八王子丘陵よりで瓦生産が盛んになってくる。金山丘陵東・北麓では、引き続き須恵器生産が行われている。

本遺跡から約1.5km西に位置する緑町の古氷地区に「ふるごおり」の地名が残り、古くから山田郡の郡家の比定地と考えられてきている。まだ、郡家の存在を立証する具体的な遺構・遺物は発見されてはいないものの、地名を根拠とする仮説が正しいとすれば、山田郡の郡家は園田郷に所在したことになる。

山田郡家　「古氷」の地名が遺るのは、金山丘陵の北東麓の台地上で、すぐ東側に展開する水田地帯は「古氷条里水田遺跡」とされ、古くから条里遺構が遺る地として知られていた。また、遺跡内を北関東自動車道が東西に横断することになり、建設に先立って当事業団が平成15年11月から同17年３月末まで断続的に調査し、水田遺跡が検出されている（平成20年度末報告書刊行予定）。古代郡家の故地に「古氷」の文字で表記される地名が遺る例は全国的にはあまり聞かないが、県内では邑楽郡大泉町の北西端に同じ文字を書く「古氷」の地名が遺っており、同様に、古くから邑楽郡家の故地と考えられている。

山田郡家の故地と考えられる太田市緑町の古氷地区には、「堂上」「堂下」「石倉」などの小字名が遺っており、郡家施設との関連が想定されているが、現在に至るまで郡家に関わる遺構は全く検出されていない。

周辺の巨大製鉄遺跡と窯業遺跡　旧藪塚本町域で、当事業団が調査した西野原遺跡の石田川調整池部分において、これまでに発見された中では東日本最大級とも言える７世紀後半から操業されたとみられる巨大な製鉄遺構が検出されており（平成20年度整理作業中）、また、同じく当事業団が北関東自動車道の建設に伴って発掘調査した強戸町から緑町にかけて所在する峯山遺跡でも、８世紀前半頃の製鉄炉１基と新旧二時期の鍛冶遺構・竪穴建物跡５棟・土坑跡などからなる製鉄遺構が検出されており、炉体や多数の流動滓、鉄滓などが出土している（平成20年度整理作業中）。また、独立丘陵丸山の、主要地方道足利・伊勢崎線を挟んだすぐ南東側、本遺跡の北西約１kmの位置には、昭和44年に駒澤大学考古学研究室の調査によって平安時代の楕円形ないし長方形状の石組炉跡が検出された寺中遺跡がある（『太田市史』通史編 原始・古代）。

先述した古墳時代６世紀後半頃から操業される菅ノ沢窯跡群とほぼ重なる形で、昭和44年の駒澤大学考古学研究室の調査によって半地下式の煙突状炉体を有する３基の製鉄炉跡が検出されている。金山丘陵北東部の東今泉町菅ノ沢から金山丘陵北西部の長手地区にかけては、原料とする砂鉄を含む地層があり、また丘陵には燃料として好適な植林も豊富で製鉄には適した自然環境であった。とくに菅ノ沢は、古墳時代後期から須恵器生産が専業的形態を取って発達しており、鉄生産が発展するための下地は存在していた。専業的な須恵器生産が行われた地域社会こそ、製鉄工人を進出させるのに好適な場所であった。

現在までに明らかになっている、須恵器生産が行われた窯跡は金山丘陵南東麓から東麓、八王子丘陵南東麓地域に分布し、瓦窯は八王子丘陵南東麓に集中する傾向がある。奈良時代から平安時代にかけての瓦窯は、石橋町の寺井廃寺や新田田村の入谷遺跡から出土している瓦を生産した萩原窯跡や国分寺瓦を生産する落内窯跡などが存在する。本遺跡周辺では、古墳時代後期を中心とする菅ノ沢窯跡が所在していることは先述したが、７世紀末から８世紀代を操業の主体とする窯跡には、金山丘陵の北東部に張り出した支丘の突端に近い南斜面上に立地する東今泉・八幡窯跡がある。

いずれにしても、古墳時代後期以来、八王子丘陵南西麓から金山丘陵北麓一帯にかけて、広く須恵器・瓦生産の窯業と製鉄・鍛冶の作業が行われていた、地域社会における重要な生産地域であることが伺える。そうした生産をになっていたのは、古墳時代には地元の豪族層で、おそらくは７世紀末には大道西遺跡の北側に隣接する当該地域唯一の終末期古墳である巌穴山古墳を造営したような豪族の管理下に操業されたものだろう。律令制の成立によって、国評制、のちに国郡制が施行され、この地も評、後に郡に編成されると在地の有力豪族の中から評督、後の郡司が選任され、郡の主導の元に窯業・製鉄生産が行われたものと考えられる。７世紀後半からの中国・朝鮮半島諸国とわが国のヤマト王権との間での軍事的緊張の高まりに加えて、８世紀になると律令国家の東北進出に伴う蝦夷征討事業などの影響を受けて、武器武具生産の必要性が高まり、それらを供給するための鉄生産は一際重要視されたであろう。山田郡の領域が不自然なほどに南北に細長く、現・桐生市・みどり市の山間部をその領域に取り込んでいるのは、郡南部の金山丘陵北部及び八王子丘陵東部で展開した鉄及び須恵器・瓦生産のための燃料を確保するためであったと考えることが出来る。

奈良・平安時代の集落遺跡　本遺跡の周辺では、同じく北関東自動車道の建設に伴って当事業団が発掘調査を実施した緑町の二の宮遺跡・八ヶ入遺跡、東今泉町の大道西遺跡・大道東遺跡・鹿島浦遺跡、北関東自動車道へのアクセス道の建設に伴って同様に当事業団によって発掘調査された東今泉町の東今泉鹿島遺跡および向矢部遺跡において奈良・平安時代を主体とする集落遺跡が検出されている。先述したように、集落の間を東山道駅路が貫いており、八ヶ入遺跡から大道西遺跡・大道東遺跡を経て鹿島浦遺跡にかけての総延長約１kmにわたって道路跡が検出されている。

周辺で検出された奈良・平安時代の集落は、いずれも竪穴建物を主体とするものである。当該期の竪穴建

物跡は、北関東自動車道及びそのアクセス道の建設に伴って当事業団が調査した範囲の中だけでも、二の宮遺跡で51棟、八ヶ入遺跡で115棟、大道西遺跡で17棟、大道東遺跡で305棟、鹿島浦遺跡で129棟、東今泉鹿島遺跡で92棟と、膨大な量が検出されている。また、先述したように、本遺跡でも昭和62・63年度に県営渡良瀬川流域地区公害防除特別土地改良事業に伴って太田市教育委員会が発掘調査した際にも、今回の北関東自動車道建設予定地範囲の約500m北側で、奈良・平安時代の竪穴建物跡だけで95棟、古墳時代後期の竪穴建物跡を含めると合計で195棟が検出されている。このように、本遺跡周辺は渡良瀬川支流によって形作られた西北－南東方向に樹枝状の低地を縫って、台地上に大集落が連綿と形成されていたことが判明する。

小丸山遺跡　本遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡でもう一つ忘れてはならないのが、本遺跡の西北西約1.5km、古氷条里水田遺跡のすぐ北側に位置する分離独立丘・小丸山である。この小丸山からは、ほぼ完全な形に復元することが可能な瓦塔が、破片総数にして126片に割れて出土している。丘陵上には縄文土器や奈良・平安時代の土器が散布するが、昭和33年、考古学者の石村喜英氏が発見者から聞き取り調査を行い、その成果を公表している。出土した瓦塔は、軸部の枠と斗栱を一体とし、屋蓋部・相輪部とは別に焼成した積み重ね式の五重塔であり、復元された総高は14.4mになる。共伴して出土した火葬骨が入った骨蔵器との関係が想定できるところであるが、当時の記録に遺る骨蔵器そのものの年代観との齟齬も指摘されており、瓦塔の用途・機能は明確ではない。

第６項　中世以降における歴史的環境

新田荘と中世豪族新田氏の成立と展開　12世紀、上野国の平野部には天仁元（1108）年の浅間山大噴火による降灰によって壊滅した耕地を復興する過程で、各地で荘園や御厨が成立していった。仁安３（1168）年の「新田義重譲状」に示されている新田荘もそれらの一つとして形成された荘園である。

周知のように、新田荘は、源義家（長暦３（1039）年～嘉承元（1106）年）の三男（異説あり）とされる従五位下前加賀介 源義国（寛治５（1091）年?～久寿２（1155）年）が、久安６（1150）年に右近衛大将藤原実能と京の路上でトラブルを起こし、恨んだ義国勢が実能邸を焼き払ったことによって勅勘を被り、坂東の下野国足利荘の別業に引退を余儀なくされた。義国は坂東に土着し、その長男である従五位下大炊助 源義重（?～建仁２（1202）年）は渡良瀬川を越えて上野国新田郡に入部して開発、久寿元（1154）年頃には新田郡南西部の「こかんの郷々」とよばれた19郷からなる荘園を成立させ、これを権門貴族である左衛門督（後に太政大臣）藤原忠雅（大治４（1129）年～建久４（1193）年）（領家）と金剛心院（本所）とに寄進した。義重は、保元２（1157）年、下司職に任命され、新田荘を立荘、新田庄司を称した。

新田義重の嫡男・義兼は、元久２（1205）年８月、鎌倉幕府３代将軍源実朝から新田荘12ヵ郷の地頭職に任じられた。これが鎌倉幕府による新田荘地頭職の初任である。新田義兼は従兄弟の子に当たる畠山（足利）義純を女婿に迎え、その間に生まれた畠山（足利）時兼は、建保３（1215）年３月、外祖父に当たる新田義兼の後室である新田尼から新田本宗家の所領であった新田荘田島郷など12ヵ郷を譲られ、将軍源実朝から地頭職に任じられ（「正本文書」）、さらに嘉禄２（1226）年には岩松郷（現：太田市岩松町一帯）の地頭職をも併せ、岩松郷に居住。以後、「岩松」を苗字に名乗った。岩松時兼は、新田尼から新田本宗家領の一部を相続したことによって、父系から見れば足利家一門でありながらも、新田家一門の有力庶子家として新田荘内に勢力を振るうことになった。

岩松氏と由良氏による支配　南北朝動乱の鎮定後、この地域を支配したのは島山氏と岩松氏であることが、15世紀中葉の享徳の乱の最中に岩松家当主持国によって作成されたと考えられる所領注文「新田荘内岩松方庶子方寺領等相分注文」（正木文書）に見える。同史料によれば、藪塚郷の半分を岩松家惣領の岩松持国が、半分を金山丘陵南西部に本拠を有する岩松庶子家の島山式部大輔が領有していたことが判明するが、この島山氏については不明な点が多い。

応永23（1416）年、前関東管領上杉禅秀氏憲が鎌倉公方足利持氏に対して起こした上杉禅秀の乱に際して新田党を糾合して上杉禅秀方に与した岩松家当主の満純は、岩松直国女を母に、新田義貞三男義宗を父として生まれた人物であり、新田本宗家の嫡宗である満純が岩松家を嗣いだことによって、岩松家は滅亡した新田本宗家に代わる新田家一門の惣領格として勢力を振るうことになった。

岩松満純の子・長純は、永享の乱（永享９、1437）が勃発すると将軍足利義教に召し出されて鎌倉公方討伐軍の将に任じられ、その戦功により岩松家の家督を回復して岩松家純と名乗り、享徳の乱（享徳３、1454）が起きると対立する一門の岩松持国・成純父子を誅殺して岩松家の内紛を平定し、文明元年（1469）には五十余年振りに本領である上野国新田郡を回復し、家臣の横瀬国繁（岩松満純の弟・新田貞氏末裔）をして金山丘陵に金山城築城させ居城となしたが、岩松家中では家臣である横瀬氏が次第に力を振るうようになっていった。

享禄年間（1528～32）、家臣横瀬氏の専横を排除しようとした岩松家当主の尚純・昌純父子は逆に家臣横瀬氏に攻められて自害。岩松昌純に代わって岩松家の家督を嗣いだ昌純の弟・氏純も実権を横瀬氏に握られたままで、ついには自害させられるに至った。氏純の子の守純は、金山城を追われて山田郡菱（現：桐生市菱）に隠棲し、岩松家は家臣横瀬氏の下克上によって没落した。

金山城から主君・岩松守純を追放して、自ら金山城主となった横瀬成繁は、苗字として由良の姓を名乗り、戦国大名由良氏による当地支配がその後、しばらく続く。八王子丘陵には由良氏により、広沢茶臼山の南約400mに位置する標高270mの山頂付近に八王子城が、また、湯之入の集落から籾山峠に向かう道の鞍部北側の丘頂を削平して雷電山砦がそれぞれ築城されている。

由良氏衰退　天正２（1574）年３月下旬には上杉謙信が小田原北条氏方に属した由良氏領の桐生・新田を攻め、由良氏当主の国繁がこれを防戦するも、天正13（1585）年、小田原北条氏は臣従していた由良国繁を攻めて屈服させ、金山城は小田原北条氏に接収され、当地一帯も北条氏が直接支配するところとなった。その北条氏も天正18（1590）年には豊臣秀吉に攻め滅ぼされ、当地一帯は江戸に移封された徳川家康の支配地に入った。江戸幕府成立後、由良家も岩松家もともに、新田氏支流の世良田得川氏の末裔を公称した徳川将軍家の本家筋に連なる名家の血筋と言う理由で、少禄ながらも旗本として召し抱えられるが、かっての新田荘の故地に影響力を及ぼすほどの存在ではなかった。

上野国内の御厨　上野国内における伊勢神宮の御厨は、神宮の建久年間（1190～1199）以降の古文書を収めた『神宮雑書』及び鎌倉時代の伊勢神宮領を国別に記した『神鳳鈔』によれば、園田・須永・青柳・玉村・高山・邑楽の６箇所、及びこの６箇所とともに併記されている細井・大蔵・広沢・蓑米の４箇所、合計10箇所の御厨があった。この10箇所の御厨は、山田郡内が多い。伊勢神宮の御厨が山田郡内に多いことの理由は、現時点では判明しがたい。ただ、古代の坂東地域で伊勢神宮の神戸が設置されていたことが明らかなのは上野国だけであり、その後に成立した御厨が山田郡に集中していることから考えると、古代の神宮神戸は山田郡内に設定されていた可能性も考えられる。

園田御厨　先述したように、本遺跡は律令制下の上野国山田郡園田郷の故地に当たると考えられている。

園田御厨は、現・太田市の吉沢周辺を中心とする地に比定されているが、御厨の四至を明示した史料は無いので、正確な範囲は不明である。ただ、園田御厨が園田郷の故地に所在したには相違なく、その規模は200余丁とあるので、本遺跡の地もその範囲に入っていた可能性は高く、いずれにしてもその影響下にあったことには相違あるまい。

園田御厨は久寿３（1156）年に給主内宮一禰宜荒木田成長によって立荘され（『神宮雑書』）、同年たる保元元（1156）年に公認された立荘年次の明らかな内宮・外宮の御厨で、両宮の神料として布30反、勅願御封物等を弁済していた。先述した通り、時あたかも新田荘の立荘とほぼ同時のことであり、上野国東部の平野部では金山丘陵の西側で新田荘が、東で園田御厨がほぼ同時に成立したことになる。

『神鳳抄』によれば広さ200丁余りの御厨は、上野国内の御厨としては、現・藤岡市内に所在したと考えられている281丁の広さの高山御厨に次ぐ広さである。

園田御厨のことは種々の史料にみえるが、『玉葉』には承安２（1172）年11月条から閏12月にかけて６箇所に見える。これによると園田御厨と西に隣接する新田荘との間に度々相論が起きており、源氏の新田荘司義重の勢力拡大に伴って、園田御厨への押妨が度々行われ、神宮祭主大中臣親隆が新田荘司義重を朝廷に訴え出ていたことがわかる。

御厨司園田氏　園田御厨司の全貌について語る史料は無い。しかしながら御厨内に、御厨名を名字とする在地領主で、鎌倉幕府御家人の園田氏が存在していたことが史料から伺え、御厨司と考えられる。園田氏は、『法然上人絵伝』に、「上野国御家人園田太郎成家は秀郷将軍九代孫園田次郎成基の嫡男なり」と見えるように秀郷流藤原氏の出自とされている（野口実『伝説の将軍 藤原秀郷』吉川弘文館）。太田市吉沢・矢田堀には同氏館跡との伝承を有する館跡がある。また、太田市東金井町周辺から桐生市にかけての園田御厨の故地と考えられる範囲には、鎌倉時代中期以降に造立されたとみられる名号角塔婆が30基以上確認されている。

その後の園田御厨　久寿３（1156）年立荘後、隣接する新田荘と相論しながらも、神宮御厨としての機能を果たしていた園田御厨は、京都山科随心院文書によれば、延応２（1240）年に神宮との相論が生じ、御厨の半分が給主荒木田成康より随心院門跡に譲与されたが、荒木田成康の死後、その後家と随心院権僧正厳海との間に相論がおこり、随心院から朝廷に対して訴えが出され、結果的に給主荒木田氏は神領の半分を失うことになった。鎌倉末期には随心院領は「上薗田御厨」と称されている。

室町時代には「薗田荘」と呼ばれて岩松家純の支配下に入り（「松陰私語」）、後には古河公方より金山城を掌握した横瀬氏が「薗田上下」の知行を任されている（明応年間年未詳足利成氏書状写「由良文書」）。

本遺跡周辺において中世以降の遺構を検出した遺跡　本遺跡周辺では、北関東自動車道の建設に先立って当事業団が調査した範囲では、東今泉町の大道西遺跡において、中世の掘立柱建物跡の柱穴が多数検出されている以外に、中近世の明確な遺構はいずれの遺跡においても検出されてはいない。本報告書刊行の時点では、大道西遺跡の整理に未だ着手されていないため、検出された中世の建物跡群の詳細は不明である。

本遺跡の北西約100ｍの矢田堀の集落の中に矢田堀城跡が、また本遺跡の北西約1.5kmに位置する独立丘陵丸山には丸山砦が位置している。矢田堀城は、築城年代や築城者については定かでないが、戦国時代には金山城の出城として由良氏一門の泉基国・基繁が居した。泉氏の詳細は不明であるが、由良氏と共に行動していたと考えられる。一方、丸山砦は、天正12年の金山城籠城戦には、吉沢・古郡（古氷）の地衆がここを守ったとされる。いずれも金山城と関連する城館である。

表１　周辺の主な遺跡

番号	遺　跡　名	所在地	概　　要
1	楽前	東今泉町	縄文時代埋設土器、古墳時代後期～飛鳥・奈良・平安時代集落跡
2	峯山	強戸町	旧石器、縄文時代・古墳時代後期～飛鳥・奈良時代集落・工房跡
3	萩原	緑町	古墳時代後期～中世溝跡・古墳時代後期～平安時代井戸跡・土坑跡・掘立柱建物跡
4	古氷条里水田	緑町	奈良・平安時代集落、水田跡
5	二の宮	緑町	古墳時代後期～飛鳥・奈良・平安時代集落跡
6	八ヶ入	緑町	旧石器、飛鳥・奈良・平安時代集落跡、飛鳥・奈良時代官道跡
7	大道西	東今泉町	飛鳥・奈良・平安時代集落跡、飛鳥・奈良時代官道跡、飛鳥・奈良・平安時代粘土採掘坑、中世掘立柱建物跡
8	大道東	東今泉町	縄文時代・古墳時代後期・飛鳥・奈良・平安時代集落跡、飛鳥・奈良時代官道跡
9	向矢部	只上町	奈良・平安時代集落跡
10	矢部	只上町	縄文時代土坑群、奈良・平安時代集落跡
11	只上深町	只上町	縄文時代土坑跡、古墳時代後期～奈良・平安時代集落跡、平安時代畠跡・水田跡
12	新島	只上町	平安時代畠跡
13	道原	只上町	縄文時代土坑群、古墳時代後期水田跡、平安時代畠跡・道路跡
14	丸山北窯跡	丸山町	奈良・平安時代須恵器窯跡
15	丸山砦	丸山町	中世城郭跡
16	猿楽	只上町	古墳時代後期古墳群、奈良・平安時代集落跡
17	小丸山	緑町	縄文時代土器及び奈良・平安時代須恵器散布地、平安時代瓦塔出土地
18	矢田堀城	矢田堀町	中世城館跡
19	矢田堀古墳群	矢田堀町	古墳時代後期古墳群
20	強戸口須恵器窯	緑町	飛鳥・奈良時代須恵器窯跡
21	諏訪ヶ入須恵器窯	緑町	飛鳥・奈良時代須恵器窯跡
22	菅ノ沢古墳群	緑町	古墳時代後期古墳群
23	菅ノ沢	緑町	古墳時代後期須恵器窯跡、平安時代製鉄炉跡
24	巌穴山古墳	東今泉町	古墳時代終末期方墳
25	鹿島浦	東今泉町	古墳時代後期～平安時代集落跡、飛鳥・奈良時代官道跡
26	東今泉鹿島	東今泉町	古墳時代後期～平安時代集落跡
27	矢部城	只上町	中世城館跡
28	曹源寺	東今泉町	近世寺院
29	狸ヶ入館	東金井町	中世城館跡
30	金山城	金山町	中世城郭跡
31	下宿	東金井町	古墳時代後期～平安時代集落跡
32	富田館	富若町	中世城館跡
33	金井口	東金井町	古墳時代後期～平安時代集落跡
34	金井口埴輪窯	東金井町	古墳時代後期埴輪窯跡
35	母衣埴輪窯	東金井町	古墳時代後期埴輪窯跡

36	亀山窯	東金井町	古墳時代後期須恵器窯跡
37	丸屋敷砦	東金井町	中世城郭跡
38	寺ヶ入古墳群	東金井町	古墳時代後期古墳群
39	内並木古墳群	東金井町	古墳時代後期古墳群
40	焼山窯	東長岡町	古墳時代後期須恵器窯跡
41	細田	東長岡町	古墳時代後期集落跡
42	天神山古墳	内ヶ島町	古墳時代中期前方後円墳
43	女体山古墳	内ヶ島町	古墳時代中期帆立貝式古墳

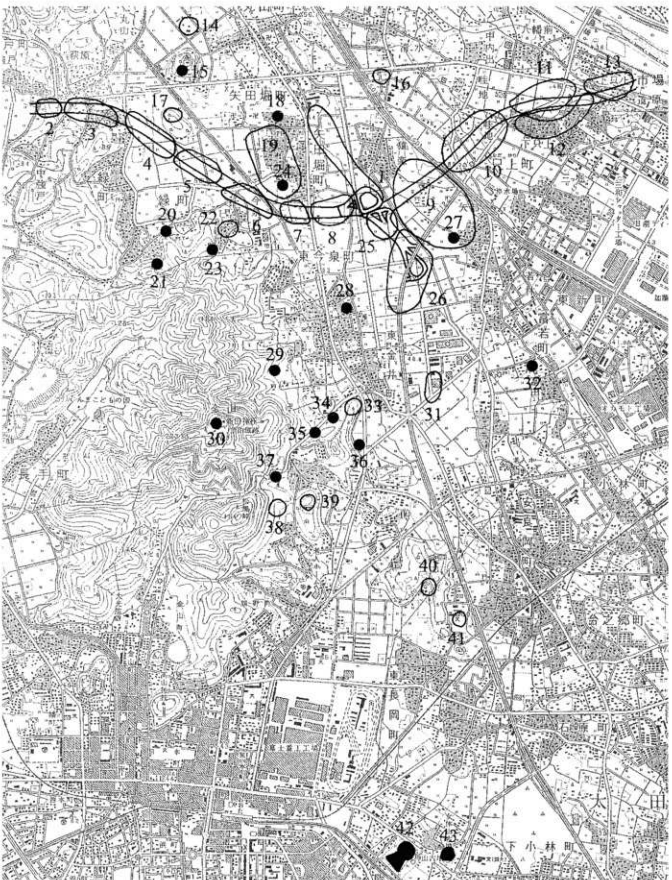


図2　楽前遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/25,000）
国土地理院1/25,000地形図「足利南部」・「足利北部」・「上野境」・「桐生」使用

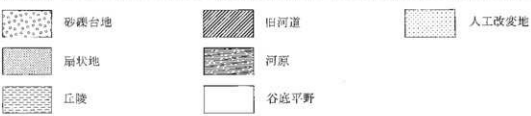


図3　楽前遺跡周辺地形分類図（1/50,000）

群馬県『土地分類基本調査・藤岡』（1981）、同『土地分類基本調査・郷土及び足利』（1997）、
国土地理院1/50,000地形図「深谷」・「熊谷及び足利」使用

第３章　発見された遺構と遺物

今回報告する楽前遺跡2～4区では、古墳時代後期～平安時代後期にかけての掘立柱建物跡10棟、柱穴列跡１条、竪穴建物跡45棟、溝跡36条、井戸跡１基、粘土採掘坑６基などの遺構が検出された。古代に形成された集落としての様相を呈している。

2区と3・4区との間に南北方向の谷が入るが、西に隣接する大道東・大道西遺跡、南東に隣接する鹿島浦遺跡などからも同時代の集落を構成する遺構が多数検出されており、これらの遺跡と一体的に連関する集落と考えられる。

調査区毎に検出された遺構の内訳は、

2区－１面－溝跡15、

２面－掘立柱建物跡３、竪穴建物跡７、溝跡１、土坑跡７、ピット跡１、粘土採掘坑跡６

3区－掘立柱建物跡１、柱穴列跡１、竪穴建物跡16、溝跡７、土坑跡４、ピット跡22

4区－掘立柱建物跡６、竪穴建物跡22、溝跡14、井戸跡１、土坑跡14、ピット跡13

である。

掘立柱建物跡はいずれも桁行３間×梁間２間程度の小規模な側柱建物か、２間四方ないし桁行２間×梁間１間程度の総柱建物跡であり、配置も整然としたものではない。掘立柱建物跡の検出状況からは、計画的な建物配置がなされた形跡は看取しがたいところで、官衙やその関連施設あるいは在地首長居宅などの一部を構成した建物とは考えにくい。建物跡の規模や検出状況から見ても、集落的な様相と言えるだろう。

特筆すべき遺構としては、3区の南端付近から東西両端をコの字型に区画するかのような形で検出された大溝（3区1号溝跡）がある。溝そのものの規模も大きく、また囲っている範囲も広大に見えるが、その溝で区画された範囲の内側からは、少なくとも調査対象範囲ではさしたる遺構は検出されておらず、大溝で区画されたことの意味は調査では明らかに出来なかった。

また、4区で検出された1号溝跡はその北側に隣接する3区の北東端から4区北東端から東端にかけて北西-南東～北北西-南南東方向に走向する大規模な溝跡で、法面の成形の状態からみて、人工の用水路跡と考えられる。南側は調査区外に出るが、さらに南側に隣接する鹿島浦遺跡調査区に続き、北関東自動車道太田・桐生インターチェンジの調査対象範囲での総延長は約300mに及び、鹿島浦遺跡の南調査区外にさらに続いている。流路の向きが南流するに従って若干変化がみられるのは、地形に左右されてのことと考えられるが、元来は自然の流路であったものに人が手を加えて水路として利用していた可能性もある。調査対象地周辺は、現在でも湧水量の豊富な土地であり、北西から南東方向に流れる渡良瀬川の旧河道を踏襲した支流の小河川がいくつも流れ、伏流水が豊富な場所であり、早くから利水の必要性が高く、また、容易な場所であったと想像できる。本遺跡で検出された、このような大規模な溝跡は、そのような地域の特質をよく示しているように思われる。

第１節　2区1面の遺構と遺物

2区は、大道東遺跡に隣接する1区と南北方向に走向する生活道路によって画されたすぐ東側の調査区に当たる。南北に細長い台形状を呈した調査区で、面積は4,538㎡である。北端から約2/5のところと南端部に近い位置を東西に走る生活道路によって南北両区画に分断されており、調査中は、北側の調査区を仮に2-1区、南側の調査区を仮に2-2区、最南端の調査区を仮に2-3区と称していたが、2-1・2-2区とも同時に、一連のものとして調査した。2-3区は表土を掘削し、残存状態の極めて悪いAs-B軽石層に覆われた平坦な面を確認したが、水田跡らしき兆候を確認するには至らなかったので、土層の堆積状況及びAs-B軽石下の平坦面の検出状況を記録に取るだけで調査を終了した。

本調査区のみ、確認面が上下二面あり、1面はほぼ平坦な面で、南北及び東西方向に走向する溝跡が15条検出されている。

これらの遺構の調査を終了した後に、ローム層が検出されている箇所において旧石器の確認調査を実施したが、いずれのトレンチに於いても旧石器は検出されなかった。

第１項　溝跡

2区1面では溝跡のみが検出された。検出された溝跡のうち14条は平安時代後期の遺構と考えられる。15号溝跡１条のみ古墳時代後期のほぼ完形に近い状態の杯・鉢類が多量に出土しており、古墳時代後期の溝跡と考えられる。

本面で検出された15条の溝跡のうち、８条がほぼ南北方向の走向、７条が東西方向の走向である。南北方向の溝は、台地の縁辺に沿うか、あるいは並行して形成されたものが多い。本調査区で検出された溝跡は、いずれも溝幅も狭く、浅いものばかりである。

（１）2区1号溝跡

位置：2区のほぼ中央から西端、X325～450・Y-735～-745Gr.　**主軸方位：**N-20°-W～N-17°-E　**重複：**2区5・15号溝跡を破壊する。2区2・6号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2区の南北端を越えて南北に延びる。調査対象範囲での確認全長は133m・最大上幅2.7m・最大下幅2m・深さ0.24m。緩く蛇行しながらほぼ南北方向に流れ、断面は緩やかな逆台形状を呈している。2区2面では、西から続く台地から谷に落ちる、谷頭の傾斜変換点にほぼ沿っており、原地形の変化が、谷が埋没した後にも何らかの形で確認できていたことを伺わせる。　**埋土：**灰黄色シルト質土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（２）2区2号溝跡

位置：2-2区の北寄り、X380～390・Y-720～-735Gr.　**主軸方位：**N-53°-W　**重複：**2区5号溝跡を破壊する。2区1号溝跡及び3号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**2区のほぼ中央を西北西～東南東方向に蛇行して流れ、西端は1号溝跡を破壊して止まる。東端は調査区を越えて東に延びるが隣接する南北に走る太田市道を隔てて隣接する鹿島浦遺跡では、本溝の続きの部分は確認されていない。すぐ南側に隣接して、並行するかのよ

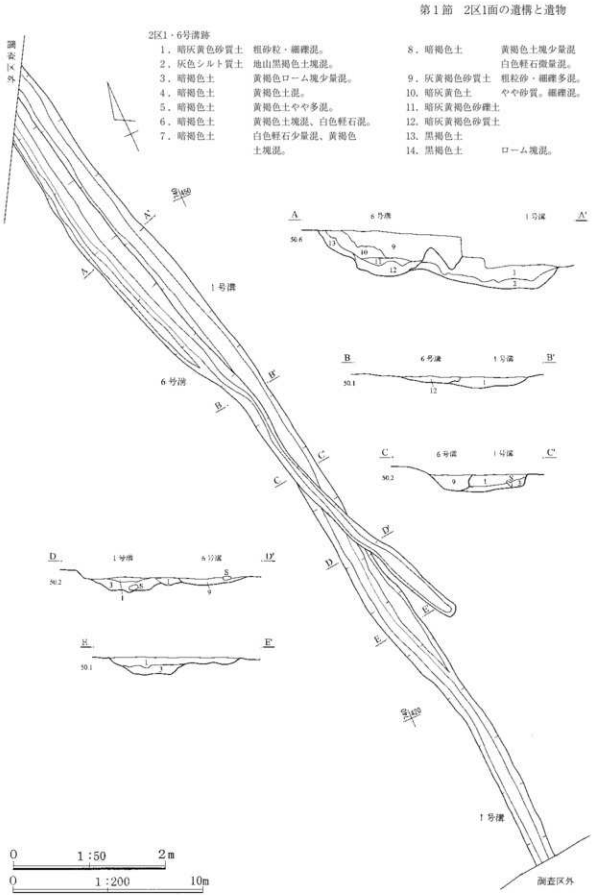


図４　2区1・6号溝跡平面図・土層断面図

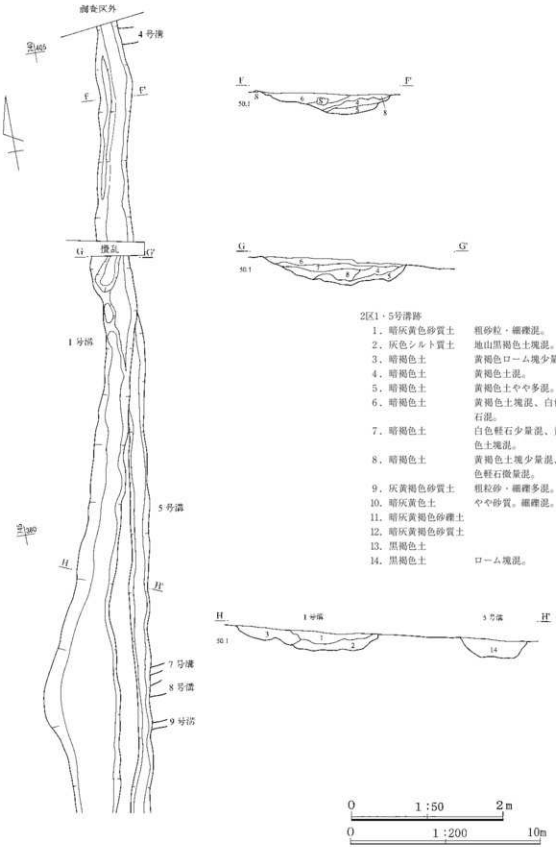
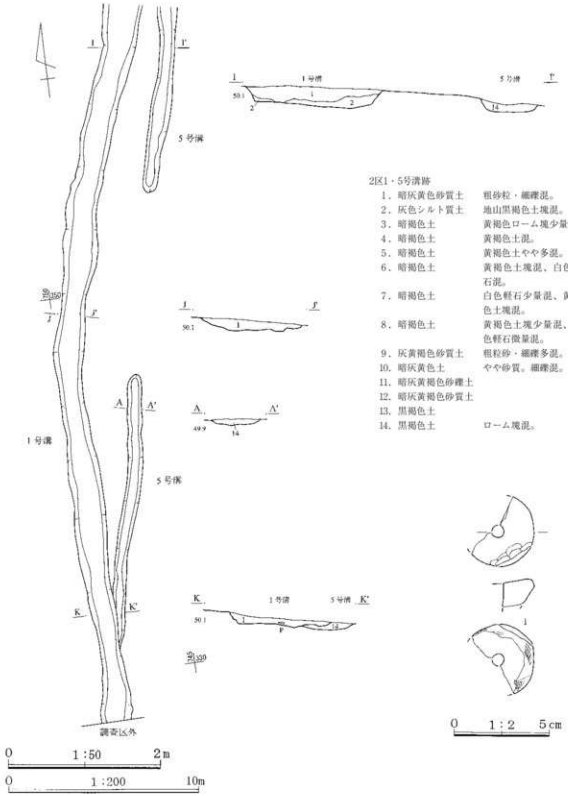


図5　2区1・5号溝跡平面図・土層断面図（1）



２区５号溝跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調	器形・整形の特徴、備考
2区5溝-1	石製　紡錘車	埋土、1/2	径 (4.1)、器厚 (1.4)	①緑灰色	

図６　2区1・5号溝跡平面図・土層断面図（2）・5号溝跡出土遺物

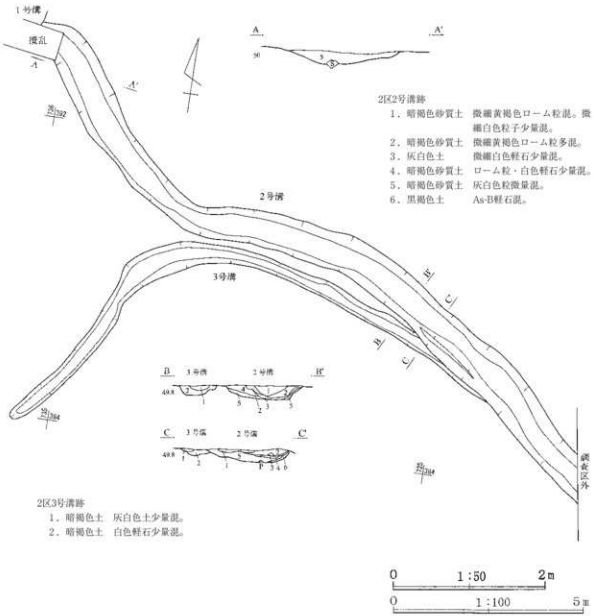


図7　2区2・3号溝跡平面図・土層断面図

図8　2区4号溝跡平面図・土層断面図

うに2区3号溝跡はほ同じ向きに流れている。調査対象範囲での確認全長は18.4m・最大上幅1.4m・最大下幅0.4m・深さ0.18m。断面は非常に緩やかな逆台形状を呈している。　**埋土：**暗褐色砂質土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（３）2区3号溝跡

位置：2-2区の北寄り、X380～385・Y-720～-735Gr.　**主軸方位：**N-53°-W　**重複：**2区2号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2区のほぼ中央を西北西～東南東方向に流れ、途中で約80°屈曲して、西端は南西に向かったところで止まる。東端はすぐ北側に新たに掘り込まれている2区2号溝跡に破壊されており、不明。調査対象範囲での確認全長は14.5m・最大上幅0.8m・最大下幅0.4m・深さ0.14m。断面は緩やかな逆台形状を呈している。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（４）2区4号溝跡

位置：2-2区の北側中央、X400・Y-730Gr.　**主軸方位：**N-86°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**2区のほぼ中央から北寄りの位置、2-2区の最北端付近を東西方向に流れ、2区1号溝跡に注ぎ込む短い溝。全長は4.5m・最大上幅0.75m・最大下幅0.3m・深さ0.15m。断面は緩やかな逆台形状を呈している。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（５）2区5号溝跡

位置：2-2区の西端寄り、X325～390・Y-740～-745Gr.　**主軸方位：**N-12°-E　**重複：**2区1号溝跡に破壊される。7・8・9号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**2-2区の西端寄りを北北東～南南西方向に、2区1号溝跡のすぐ東側に隣接し、南端は調査区外に延びる。北端は2-2区の北寄りで止まる。確認全長は63.7m・最大上幅0.8m・最大下幅0.6m・深さ0.11m。　**埋土：**黒褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（６）2区6号溝跡

位置：2-1区の中央からやや西寄り、X420～450・Y-735～-740Gr.　**主軸方位：**N-19°-W　**重複：**2区1号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**2-１区の中央からやや西寄りを北北西～南南東方向に、2区1号溝跡のすぐ西側に隣接して流れる。北端は調査区外に延び、南端は2区1号溝跡の東側に屈曲して止まる。北端は調査区外に延びる。南端は2-1区の南寄りで止まり、2-2区までは延びない。調査対象範囲での確認全長は35.3m・最大上幅1.94m・最大下幅0.74m・深さ0.49m。断面は緩やかな逆台形状を呈している。　**埋土：**暗灰黄色砂質土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（７）2区7号溝跡

位置：2-2区の中央、X370～375・Y-720～-735Gr.　**主軸方位：**N-75°-E　**重複：**2区10号溝跡を破壊する。2区5号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2-2区の中央寄りを東北東～西南西方向に、2区8・9号溝跡のすぐ北側を並行して流れる。東端は調査区外に延び、西端は2区5号溝跡と交差したところで止まる。調査対象範囲での確認全長は21.5m・最大上幅0.36m・最大下幅0.25m・深さ0.1m。断面は緩やかな逆台形状を呈している。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

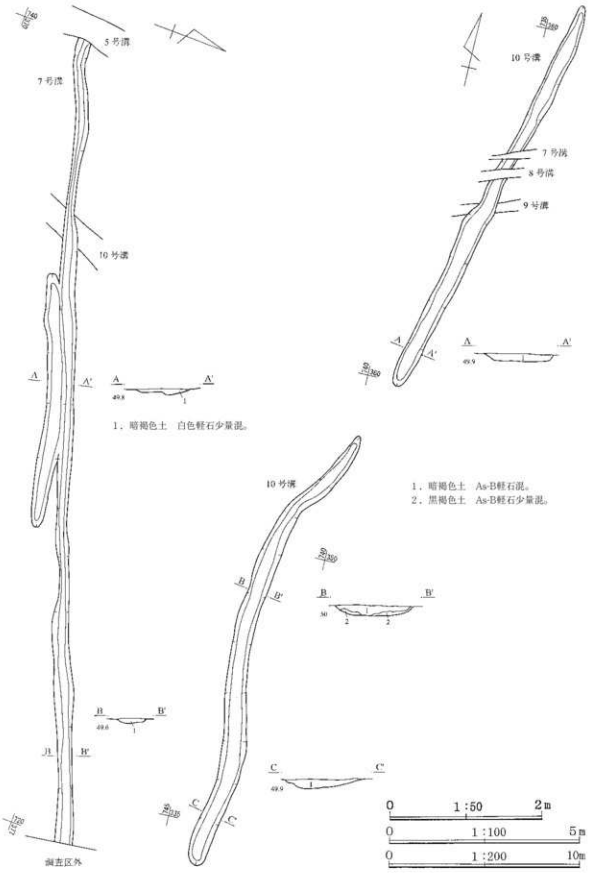


図9　2区7・10号溝跡平面図・土層断面図

（８）2区8号溝跡

位置：2-2区の中央、X370・Y-725～-735Gr.　**主軸方位：**N-75°-E　**重複：**2区10号溝跡を破壊する。2区5号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2-2区の中央を東北東～西南西方向に、2区9号溝跡のすぐ北側、2区7号溝跡のすぐ南側を並行して流れる。東端は2-2区の中央やや東寄りの位置で止まり、西端は2区5号溝跡と交差したところで止まる。全長は13m・最大上幅0.8m・最大下幅0.5m・深さ0.05m。断面は緩やかな逆台形状を呈している。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（９）2区9号溝跡

位置：2-2区の中央、X365～370・Y-725～-740Gr.　**主軸方位：**N-75°-E　**重複：**2区5・10号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2-2区の中央を東北東～西南西方向に、2区７・8号溝跡の南側を並行して流れる。東端は2-2区の東寄りの位置で止まり、西端は2区5号溝跡と交差したところで止まる。全長は17.4m・最大上幅0.9m・最大下幅0.5m・深さ0.1m。断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（10）2区10号溝跡

位置：2-2区の中央から南端寄り、やや西寄りの位置、X330～380・Y-730～-740Gr.　**主軸方位：**N-12°-E　**重複：**2区7・8号溝跡に破壊される。9号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**2-2区の中央やや西寄りの位置を北東～南西方向に流れる。北端は2-2区の中央やや北寄りの位置で止まり、溝のほぼ中央で中断、南端は2-2区の南から約10mの位置で止まる。全長は50m・最大上幅1.3m・最大下幅0.77m・深さ0.14m。断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（11）2区11号溝跡

位置：2-2区の南東端寄りの位置、X325～360・Y-720～-725Gr.　**主軸方位：**N-7°-E　**重複：**2区12・13号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**2-2区の南西端寄りの位置を12・13号溝跡とほぼ並行して北北東～南南西方向に流れる。北端は2-2区の中央やや南寄りの位置で止まり、南端は調査区外に延びる。11～13号溝はいずれもよく似た細く小規模な溝で、13号溝跡が最も古い溝で、次いで12号溝跡。３本の溝跡の中では、本11号溝跡が最も新しい溝である。調査区内での確認全長は39m・最大上幅0.74m・最大下幅0.5m・深さ0.23m。断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

（12）2区12号溝跡

位置：2-2区の南東端寄りの位置、X325～350・Y-720～-725Gr.　**主軸方位：**N-7°-E　**重複：**2区11号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2-2区の南西端寄りの位置を11・13号溝跡とほぼ並行して北北東～南南西方向に流れる。北端は2-2区の南寄りの位置で止まり、南端は調査区外に延びる。11～13号溝はいずれもよく似た細く小規模な溝で、13号溝跡が最も古い溝で、次いで12号溝跡。３本の溝跡の中では、本12号溝跡が二番目に新しい溝である。調査区内での確認全長は28m・最大上幅0.62m・最大下幅0.27m・深さ0.18m。断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

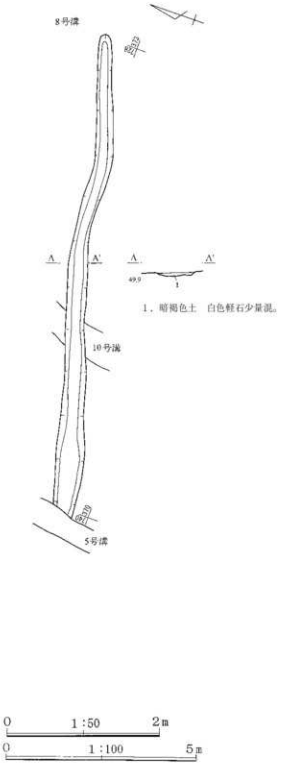


図10　2区8号溝跡平面図・土層断面図

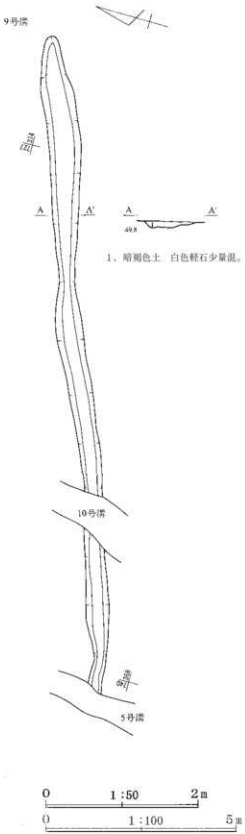


図11　2区9号溝跡平面図・土層断面図

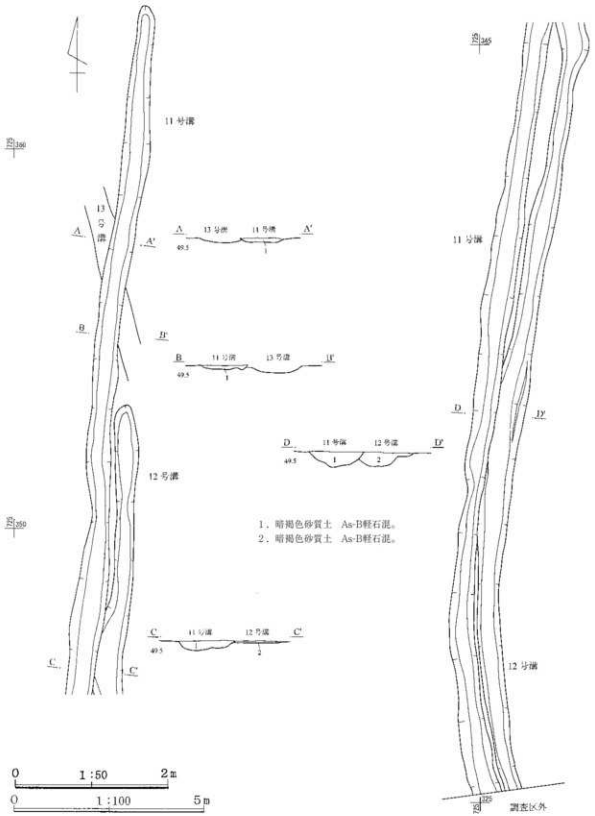


図12　2区11・12号溝跡平面図・土層断面図

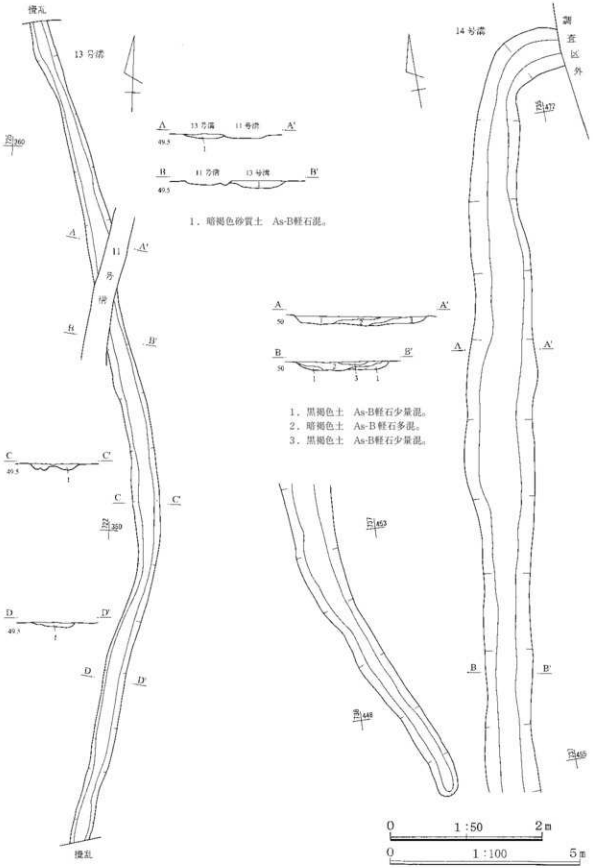


図13　2区13・14号溝跡平面図・土層断面図

(13) 2区13号溝跡

位置：2-2区の南東端寄りの位置、X340～360・Y-720Gr.　**主軸方位：**南2/5はN-7°-E・北3/5はN-13°-W　**重複：**2区11号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2-2区の南西端寄りの位置を11・12号溝跡とほぼ並行し、南側は北北東～南南西方向に、溝の北端から約3/5の位置で屈曲して11号溝跡の西側に出て北北西～南南東方向に流れる。北端は2-2区の中央やや南寄りの位置で止まり、南端も2-2区内で止まる。11～13号溝はいずれもよく似た細く小規模な溝で、本13号溝跡が最も古い溝である。全長は20.2m・最大上幅0.6m・最大下幅0.44m・深さ0.09m。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

(14) 2区14号溝跡

位置：2-1区の北端寄りの位置、X445～470・Y-730～-735Gr.　**主軸方位：**南端約1/6はN-34°-W・中央部はN-10°-E、北端部はN-90°E　**重複：**なし。　**規模と形状：**2-1区の北端寄りの位置、2区1・6号溝跡の東側をほぼ南北方向に流れる。南端部付近約1/6は北北西～南南東方向に流れるが、南端から約1/6位のところで屈曲し、中央部は北北東～南南西に向きを変え、北端付近で東に約90°向きを変え、北東端は調査区外に延びる。南端は2-1区の中央からやや北寄りの位置で止まる。調査区内での確認全長30m・最大上幅1.65m・最大下幅1.1m・深さ0.12m。断面は扁平な逆台形状を呈する。　**埋土：**黒褐色土ベース。　**時期：**10世紀後半。

(15) 2区15号溝跡

位置：2-1区のほぼ中央、東端から東半分の位置。X435～440・Y-725～-740Gr.　**主軸方位：**N-84°-E　**重複：**西端を2区1号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2-1区のほぼ中央を、調査区の東端から中央にかけて東西方向に流れる。東端は調査区外に延びる。西端は2区1号溝跡に破壊されて止まる。調査区内での確認全長11.2m・最大上幅1.2m・最大下幅0.35m・深さ0.15m。断面は扁平な逆台形状を呈しており、溝埋土の上面から40点以上の土器片が口縁部を上に向けた状態で、ほぼ一直線状に出土している。甕類も含まれるが、概ね杯・鉢類で、杯19点、椀１点、鉢６点、壷１点、甕１点。いずれも古墳時代後期、６世紀後半頃の土師器が主体である。須恵器は鉢が１点のみ出土している。現状では土器類の内部には何も検出されていない。いずれにしても、本溝にかかる部分にのみ、あたかも置かれたかのように集中的に土器類が出土しており、なんらかの祭祀等の用途で使用された可能性が想定できる。この溝の確認面は、本溝の西側にある平安時代後期の溝跡群と同じ面であるが、出土した土器の年代観から見れば、他の溝と同時代の遺構とは考えにくい。本溝が位置する2-1区東半分は、第２面の古墳時代後期～平安時代前期遺構面では大きな谷に当たり、第２面では遺構は検出されていない。調査の過程で、たまたま第１面と同レベルで本溝を検出したが、第２面の遺構群が形成された時期には谷は本溝の確認レベルまで埋まっていた可能性も考えられる。ただし、第２面で検出された谷全体が埋まっていたのか、あるいは本溝の周囲だけ先に埋まっていたのかは、土層の堆積状況からは不明である。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**６世紀後半。

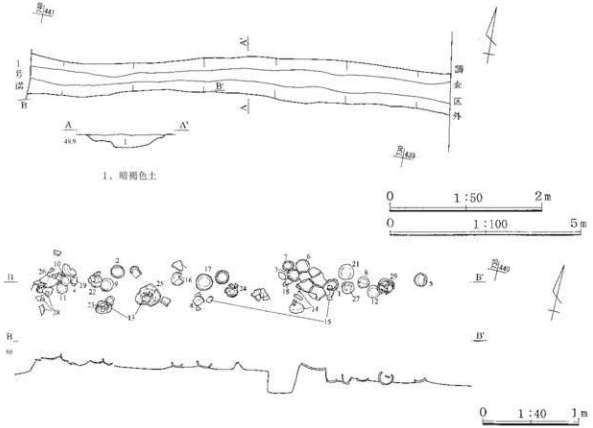


図14　2区15号溝跡平面図・土層断面図・遺物出土状況図

2区15号溝跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量(cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区15溝-1	土師器 杯	埋土完形	口径11.8、器高4、器厚0.3	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密、径1mm前後白色・黄褐色粒子混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-2	土師器 杯	埋土完形	口径11.2、器高4.5、器厚0.5	①橙色 ②良好 ③緻密、径1mm白色・黄褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-3	土師器 杯	埋土完形	口径11.9、器高4.5、器厚0.6	①橙色 ②良好 ③緻密、径1mm以下黄褐色・茶褐色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-4	土師器 杯	埋土完形	口径11.6、器高4、器厚0.5	①橙色 ②良好 ③緻密、径1mm黒褐色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-5	土師器 杯	埋土完形	口径11.4、器高4.2、器厚0.7	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密、径1mm白色粒子ごく微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-6	土師器 杯	埋土完形	口径12.4、器高4.5、器厚0.7	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密、径1mm以下灰白色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-7	土師器 杯	埋土完形	口径12.3、器高4.6、器厚0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③緻密、径1mm白色・赤褐色粒子混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-8	土師器 杯	埋土完形	口径13、器高4.4、器厚0.7	①鈍い橙色 ②良好 ③緻密、径1mm白色・黄褐色・茶褐色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-9	土師器 杯	埋土完形	口径12.6、器高4.1、器厚0.7	①鈍い褐色 ②良好 ③緻密、径1mm白色・黄褐色・茶褐色・雲母粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-10	土師器 杯	埋土完形	口径13.5、器高4.9、器厚0.6	①にぶい黄褐色 ②良好 ③緻密、径1mm黒褐色粒子ごく微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-11	土師器 杯	埋土完形	口径13.3、器高4.6、器厚0.8	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密、径1mm白色粒子・砂粒少量混。	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-12	土師器 杯	埋土完形	口径13.5、器高4.5、器厚0.7	①鈍い赤褐色 ②良好 ③緻密、径1mm以下灰白色・茶褐色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-13	土師器 杯	埋土完形	口径13.2、器高5.2、器厚0.5	①明赤褐色 ②良好 ③緻密、径1mm前後白色・黄褐色・赤褐色粒子混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫

2区15溝-14	土師器　杯	埋土 完形	口径14.3、器高4.8、器厚0.9	①橙色　②良好　③緻密、径1～5mm白色・黄褐色粒子少量混、砂粒やや多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-15	土師器　杯	埋土 完形	口径14.8、器高6.3、器厚0.9	①にぶい橙色　②良好　③緻密、径1mm以下黄褐色・茶褐色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-16	土師器　杯	埋土 3/4	口径13.6、器高5.2、器厚0.5	①鈍い赤褐色　②良好　③緻密、径1mm黒褐色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-17	土師器　杯	埋土 完形	口径15.5、器高5.5、器厚1	①浅黄橙色　②良好　③緻密、径1mm白色粒子混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-18	土師器　杯	埋土 2/3	口径(15.4)、器高5.5、器厚0.9	①鈍い黄褐色　②良好　③緻密、径1～10mm白色粒子・砂礫少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-19	土師器　杯	埋土 2/5	口径(15)、器高5.3、器厚0.6	①鈍い黄橙色　②良好　③緻密、白色・赤褐色粒子・砂粒混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-21	土師器　椀	埋土 完形	口径13.6、器高9.1、器厚0.9	①橙色　②良好　③緻密、径1mm白色・黄褐色・茶褐色粒子混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-22	土師器　鉢	埋土 完形	口径11.6、器高5、器厚1	①鈍い黄橙色　②良好　③緻密、径1mm白色・黄褐色・茶褐色粒子混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫、底部本葉痕撫調刷
2区15溝-23	土師器　鉢	埋土 完形	口径14.6、器高8.5、器厚1	①灰黄色　②良好　③緻密、径1mm茶・赤褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-24	土師器　鉢	埋土 完形	口径15.6、器高9、器厚1	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径1mm白色・赤褐色・黒粒子混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-25	土師器　鉢	埋土 一部欠損	口径21.4、器高10.3、器厚1.3	①橙色　②良好　③やや粗い、径1～5mm白色・褐色粒子・砂礫混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-36	土師器　鉢	埋土 1/3	口径(22)、器高(14.9)、器厚1	①鈍い黄橙色　②良好　③緻密、径1～3mm白色・黄褐色・茶褐色・砂粒少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-27	須恵器　鉢	埋土 4/5	口径13.6、器高9.1、器厚0.6	①灰色　②良好　③緻密、径1～5mm白色・褐色粒子少量混	轆轤成形
2区15溝-28	土師器　甕	埋土 口縁～体部片	口径(24.9)器高(22)器厚1.0	①黄褐色　②良好　③やや粗い、径1～3mm白色・赤褐色・茶褐色粒子・砂礫やや多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区15溝-29	土師器　壺	埋土 3/4	口径(12.8)、底径6.2器高15.1、器厚0.9	①鈍い橙色　②良好　③やや粗い、径1～3mm白色・赤褐色・茶褐色・黒褐色粒子・砂粒多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫

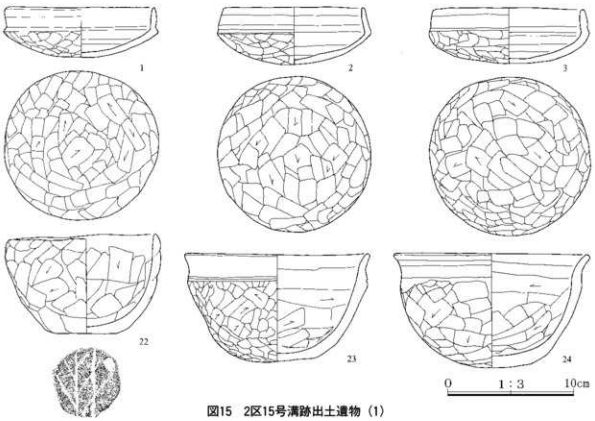


図15　2区15号溝跡出土遺物（1）

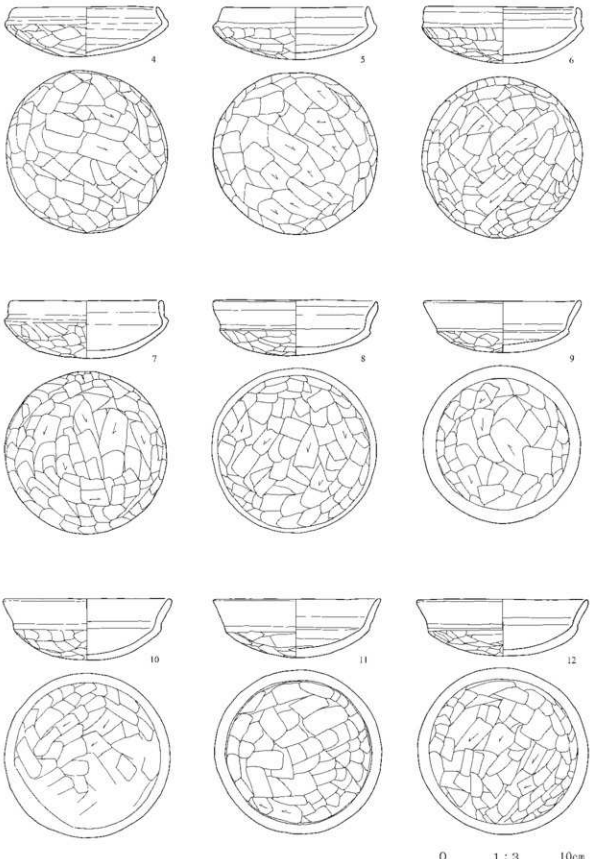


図16　2区15号溝跡出土遺物（2）

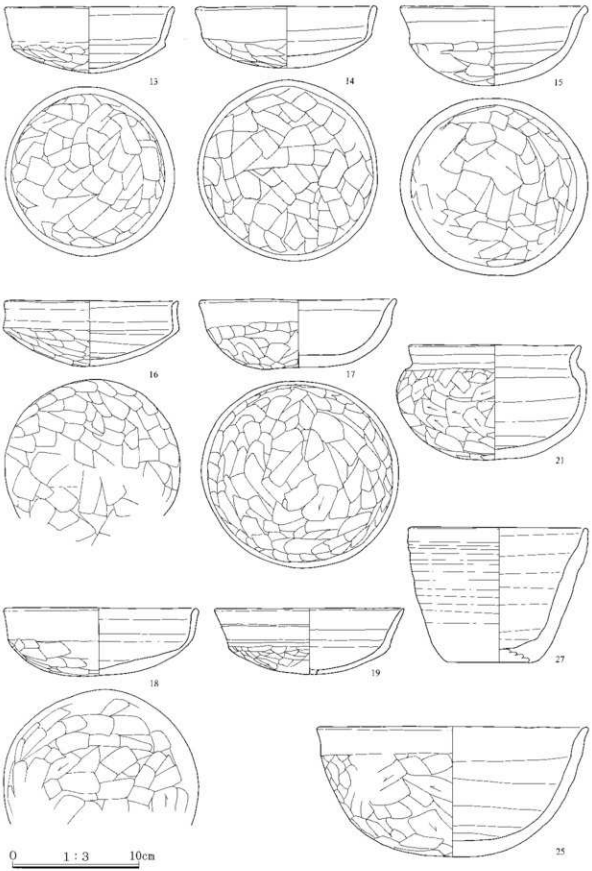


図17　2区15号溝跡出土遺物（3）

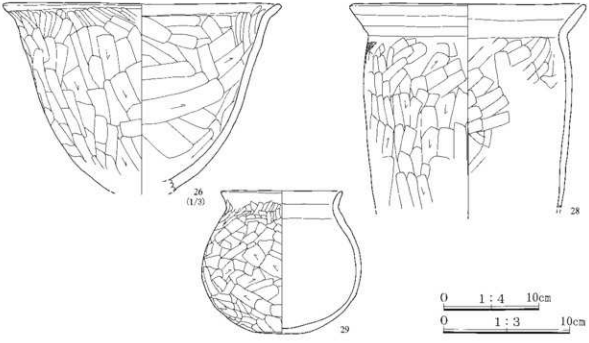


図18　2区15号溝跡出土遺物（4）

第2項　2区表土出土遺物

2区表土

遺物番号	器種	器種	出土状況・残存状態	法量(cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区表-1	土師器	杯	355・-740 1/4	口径(9.6)、器高(3.1)、 器厚0.5	①橙色　②良好　③緻密	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
2区表-2	土師器	杯	450・-730 1/2	口径(13.8)、器高4.4、 器厚0.6	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径1mm以下赤褐色粒・砂粒多混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫、内面黒色処理
2区表-3	須恵器	杯	340・-770 1/2	口径(11.8)、底径7.5、 器高3.6、器厚0.7	①黄灰色　②良好　③やや粗い、径1～5mm砂粒・白色粒子多量混	轆轤成形、底部回転篦削
2区表-4	須恵器	杯	440・-740 一部欠損	口径12.底径6、器高3.4、 器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下白色・黒褐色粒子多混	轆轤成形、底部回転糸切
2区表-5	須恵器	杯	460・-730 1/2	口径(13.6)、底径7.3、 器高3.7、器厚0.8	①灰色　②やや不良　③緻密、径1mm以下白色・黒褐色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転糸切
2区表-6	須恵器	蓋	380・-740 1/2	口径(13)、器高4.4、器厚0.8	①青灰色　②良好　③緻密、径1mm白色粒子・砂粒微量混	轆轤成形、頂部外面篦削
2区表-7	土師器	甕	355・-740 口縁部片	口径(20.1)、器高(8.2)、 器厚1	①鈍い黄橙色　②良好　③緻密、径1mm以下赤・茶褐色・白色粒子微量混	口縁部内外面撫、体部外面篦削・内面撫
2区表-8	土師器	甕	355・-740 口縁～体部片	口径(12.8)、器高(8)、 器厚0.7	①明赤褐色　②良好　③緻密、径1mmの白色粒子・砂粒多量混	口縁部内外面・口縁部内面撫、口縁部～体部外面篦削・内面撫
2区表-9	土師器	甕	400・-730 4/5	口径(18.3)、底径8.5、 器高28.2、器厚1.1	①橙色　②良好　③緻密、径1mm以下～2mm赤褐色・白色粒子、砂粒多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面篦削・内面撫
2区表-10	土師質	土錘	355・-735 完形	全長5.3、幅1.8、厚0.8、 孔径0.3	①にぶい黄褐色　②良好　③緻密	外面撫
2区表-11	土師器	杯	表土 1/2	口径(14.6)、底径18.7、 器高3.5、器厚0.7	①橙色　②良好　③緻密、径1～2mm赤・黒・茶褐色粒子、砂粒多混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
2区表-12	須恵器	杯	表土 2/3	口径129、底径7.4、器高3.8、器厚0.9	①灰色　②やや不良　③やや粗い、径1mm以下～1mmの赤褐色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転篦削・内面撫
2区表-13	須恵器	甕	表土、口縁部片	口径(40.5)、器高(16.8)、 器厚2.7	①暗灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～1mmの白色粒子少量混	轆轤成形、頸部外面波状沈線文
2区表-14	須恵器	杯	430・-730 1/2	口径117、器高4、器厚0.8	①明赤褐色　②不良　③緻密、径1～3mmの白色粒子・砂粒・雲母粒多混	轆轤成形

2区表-15	土師器　甕	表土、口縁～体部破片	口径（27.2）、器高（21.5）、器厚 1.2	①鈍い橙色　②良好　③やや不良、径1mm以下白色・茶褐色・赤褐色粒子多混	口唇部内外面撫、口縁～体部外面箆削り・内面撫
2区表-16	須恵器　大甕	表土、口縁～体部破片	口径（21）、器高（10.5）、器厚 1.2	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm以下～ 5mm 白色粒子・砂粒多混	輪鐘成形、口縁部外面波状沈線文、体部外面撫・内面木口端部同心円文状叩
2区表-17	須恵器　大甕	表土 1/2	口径（27）、器高 44、器厚 1.5	①灰色　②良好　③径 1mm 以下～ 2mm 白色粒子・砂粒やや多混	輪鐘成形、体部内外面叩（内面木口端部同心円文状叩）

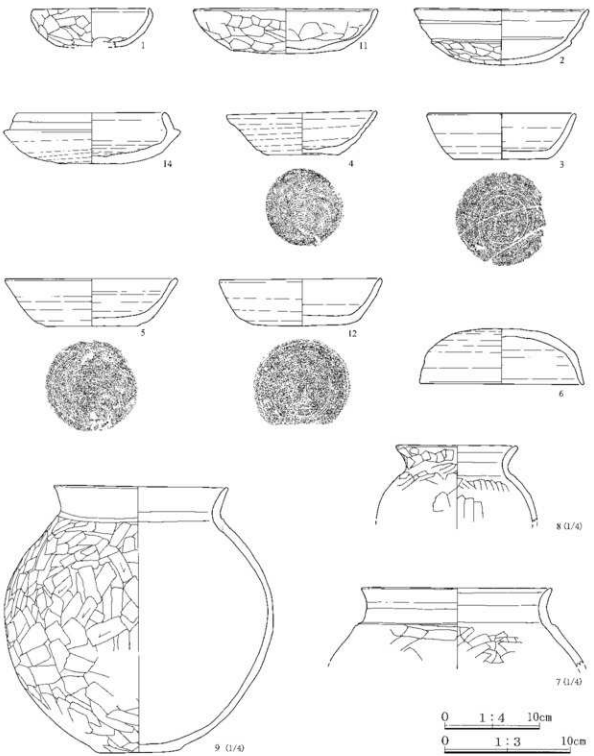


図19　2区表土出土遺物（1）

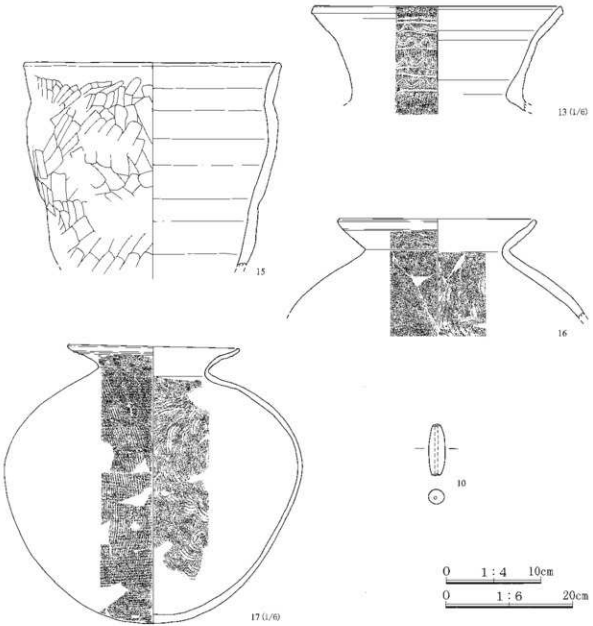


図20　2区表土出土遺物（2）

第２節　2区2面の遺構と遺物

2区2面は、西側約1/3が西に隣接する大道東遺跡から続く縄文時代・古墳時代後期～平安時代前期の集落が形成されている台地の続きである。台地から東に向かって急激に傾斜した谷頭の部分も検出されており、その東側は深い谷になる。なお、この谷の東側の谷頭は、南北に走る太田市道を挟んで東に隣接する4区やあるいはその南側にあたる鹿島浦遺跡の調査範囲では検出されていない。2区2面の東側約2/3を占める、北側から入り込んだ谷は、2区と4区とを隔てる市道の範囲内で立ち上がる幅の狭い谷であるということになろう。

西側の台地からの続きの部分では、奈良・平安時代前期の掘立柱建物や竪穴建物が形成されている。また、谷頭に沿って古墳時代後期と考えられる粘土採掘坑が調査対象範囲だけで６箇所あり、当該地域きっての窯業生産地帯である金山・八王子両丘陵に近接した本遺跡の土地利用のあり方を示す遺構と言うことが出来よう。なお、粘土採掘坑は、本遺跡1区でも、また、大道東遺跡の西側に隣接する大道西遺跡でも検出されているが、相接して調査された北関東自動車道関連の各遺跡でも、本遺跡2区ほど集中して検出された場所はない。谷頭という自然条件が、傾斜がきつく他に有効な土地利用の方法が難しく、また、粘土の採掘に有利な諸条件を兼ね備えていた場所でもあるという、様々な好条件が揃った場所であったのだろうか。

先述したように、2区の2面では2区の東側約2/3弱の範囲が谷となっていて、遺構は、2区の西端寄り約1/3の範囲でのみ検出されている。

第１項　掘立柱建物跡

2区では３棟の掘立柱建物跡が検出されている。いずれも北側の2-1区内である。３棟とはいっても2区2号掘立柱建物跡は北辺と東辺のみが検出された障壁状の構造物であり、厳密な意味において掘立柱建物跡と言えるのは2区1号と2区3号のみである。2区1・3号掘立柱建物跡とも平面図正方形状を呈する２×２間の小規模な総柱建物である。

1区において検出された掘立柱建物跡群よりもさらに小規模な建物であり、台地縁辺という立地条件に起因するところであろう。

（1）2区1号掘立柱建物跡

位置：2-1区のほぼ中央、西端の位置。X430～435・Y-745～-750Gr.　**主軸方位：**N-25°-W　**重複：**3号粘土採掘坑を破壊する。　**規模と形状：**桁行２間×梁間２間の総柱建物で、一辺約3.3mのほぼ正方形状を呈する小規模な掘立柱建物跡である。南側約15m隔てた所に位置する2区3号掘立柱建物跡と規模・構造・主軸方位ともほぼ類似しており、一連の施設として、あるいは建て替えとして建造された可能性も考えられる。**柱穴：**９基検出された。いずれも不整円形状を呈し、柱穴の規模もあまり大きくない。現代の暗渠などによって大きく破壊を受けており、柱穴等の原形については不明な点が多い。東北隅pit1長径0.58m・短径0.56m・深さ0.44m、東辺中央pit2径0.45m・推定深さ0.49m、南東隅pit3長径0.58m・短径0.5m・深さ0.43m、北辺中央pit4長径0.64m・短径0.5m・深さ0.44m、中央pit5長径0.65m・短径0.5m・深さ0.5m、南辺中央pit6

長径0.65m・短径0.59m・推定深さ0.44m、北西隅pit7（攪乱を受け上面が甚だしく破壊されている）長径0.35m・短径0.3m・推定深さ0.46m、西辺中央pit8長径0.6m・短径0.46m・深さ0.45m、南西隅pit9長径0.57m・短径0.48m・深さ0.42m。　**柱穴埋土：**黒褐色土ベース。　**時期：**8世紀。

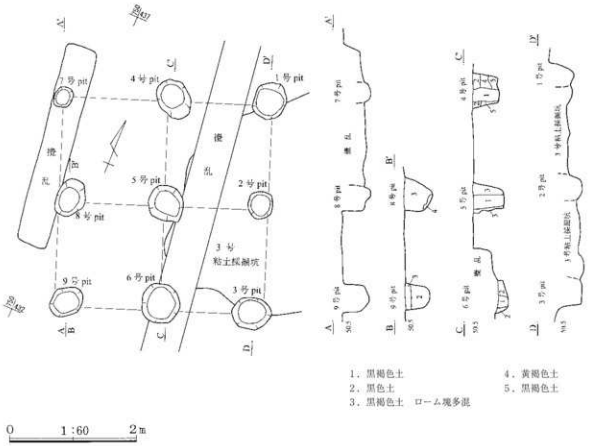


図21　2区1号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

（2）2区2号掘立柱建物跡

位置：2-1区の南西端寄りの位置。3号掘立柱建物跡のすぐ東側に隣接する。X415～420・Y-740～-745Gr.
主軸方位：N-20°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**桁行1間×梁間2間で、北辺1間分2.7mと東辺2間分4.75mのみが検出された。遺構の検出状況から、北辺及び東辺の続きやあるいは西辺・南辺が存在していたとは考えにくく、西南西～東北東方向の1間の北辺とそこから直角に南南東方向に延びる2間の東辺のみの、直角の障壁状の構造物であったと考えられる。2区で検出された小規模な1号及び3号の掘立柱建物跡よりも、柱穴の掘り方はさらに小さいことも、この構造物が1号及び3号と同等の掘立柱建物跡ではなく、2辺からなる障壁状の構造物である可能性を示唆するように思われる。位置関係から見て、西側に隣接する3号掘立柱建物跡の北側及び東側の障壁とも考えられなくもないが、主軸方位がやや異なっており、同一的な規格で建造されたとは考えにくい部分も存在している。ともに切り合い関係はないので、新旧あるいは同時併存の可否も明確にはしがたい。　**柱穴：**4基検出された。いずれも不整円形状を呈し、柱穴の規模は小さい。東北隅pit1径0.4m・深さ0.29m、東辺中央pit2径0.27m・深さ0.28m、南東隅pit3径0.35m・深さ0.32m、北西隅pit4長径0.35m・短径0.28m・深さ0.38m。　**柱穴埋土：**暗黒褐色粘質土ベース。　**時期：**不明。

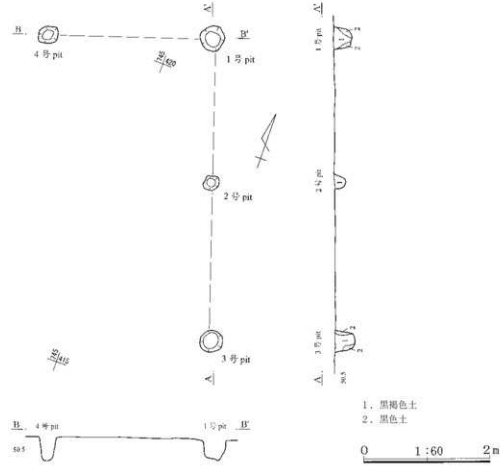


図22　2区2号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

（３）2区3号掘立柱建物跡

位置：2-1区の南西端寄りの位置。2区2号掘立柱建物跡のすぐ西側に隣接する。X410～415・Y-740～-745Gr.　**主軸方位：**N-27°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**桁行２間×梁間２間の総柱建物で、一辺約3.3mのほぼ正方形状を呈する小規模な掘立柱建物跡である。北側約15m隔てた所に位置する2区1号掘立柱建物跡と規模・構造・主軸方位ともほぼ類似しており、一連の施設として、あるいは建て替えとして建造された可能性も考えられる。また、すぐ東側に、本建物の北側と東側を画するかのように、障壁状の2区2号掘立柱建物跡が位置しているが、前項で述べたように、本建物と2区2号掘立柱建物跡との関係は、明確には出来なかった。**柱穴：**９基検出された。いずれも不整円形状を呈し、柱穴の規模もあまり大きくない。柱穴の土層断面からは明確にはしがたかったが、平面形態から、同じ場所で一度建替えられている。北西隅pit1長径0.52m・短径0.42m・深さ0.16m、北辺中央pit2長径0.48m・短径0.44m・深さ0.16m、北東隅pit3長径0.52m・短径0.5m・深さ0.36m、西辺中央pit4長径0.64m・短径0.54m・深さ0.28m、中央pit5長径0.62m・短径0.42m・深さ0.24m、東辺中央pit6長径0.58m・短径0.47m・深さ0.24m、南西隅pit7長径0.82m・短径0.48m・深さ0.32m、南辺中央pit8南側大部分を攪乱により破壊される残存径0.56m・深さ0.24m、南東隅pit9長径0.64m・短径0.36m・深さ0.42m。　**柱穴埋土：**暗黒褐色粘質土ベース。　**時期：**８世紀。

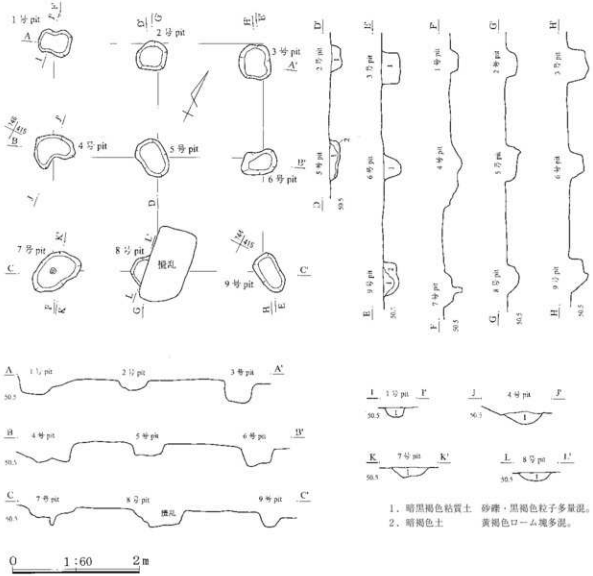


図23　2区3号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

第2項　竪穴建物跡

2区では7棟の竪穴建物跡が検出されている（6号竪穴建物跡は欠番）。いずれも南側の2-2区内である。いずれも奈良・平安時代の竪穴建物跡で、1区から続く台地の上に形成された集落の続きであり、台地縁辺間際に形成された竪穴建物跡である。前述したように、2区では台地から谷に降りる傾斜変換点に位置しており、竪穴建物跡の全容が検出されたものは2棟しかない。

2区で検出された竪穴建物跡は、竈が検出できた5棟ではすべて東壁の中央よりやや南寄りの位置に竈が取り付き、全般的に南北にやや長い長方形状を呈するなど、共通した要素が多い。同じ造営理念のもとに建設された竪穴建物跡である可能性があろう。

（1）2区1号竪穴建物跡

位置：2-2区の南西隅。2区2号竪穴建物跡のすぐ南側。西側約半分強が調査区外に出る。X330～335・Y-750Gr.　**主軸方位：**N-94°-E　**重複：**なし　**規模と形状：**東側約半分弱のみ検出。全容は不明。東辺3.5m・床面までの深さ0.47m・掘り方までの深さは0.67m・面積3.67㎡。東側に竈が取り付く。方形ないし長方形状を呈するものと思われる。南東隅、竈のすぐ南側に小規模な貯蔵穴と、貯蔵穴のすぐ西側と建物跡の北東隅にピットがそれぞれ1基ずつ検出されているが、柱穴とは考えにくい。　**埋土：**暗褐色土ベース。**床面：**地山をほぼ平坦に削り整えた上に、にぶい黄褐色土で硬質な床面を形成している。　**掘り方：**深さ0.18m程度。北東隅を若干深く掘り込んでいるが、床下の土坑といえるほどのものではない。掘り方底面は凹凸が激しい。　**竈：**東辺の中央よりもやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削りだしてつくられ、煙道は顕著には確認できなかった。両袖は建物内にほとんど張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成され、壁燃焼部内部から竈前庭にかけて、やや深く掘り方が掘り込まれており、焼土・炭化物の堆積が顕著である。　**Pit：**調査対象範囲において2基検出されている。pit1は貯蔵穴のすぐ西側、径0.34m・深さ0.12m、不整円形を呈する。pit2は竪穴建物跡の北東隅、径0.36m・深さ0.15m、不整円形状を呈する。両ピット共、位置や規模から見て柱穴とは考えにくい。　**貯蔵穴：**竪穴建物の南東隅、竈のすぐ南側。径0.3m・深さ0.16m、ほぼ円形状を呈する。　**時期：**不明。

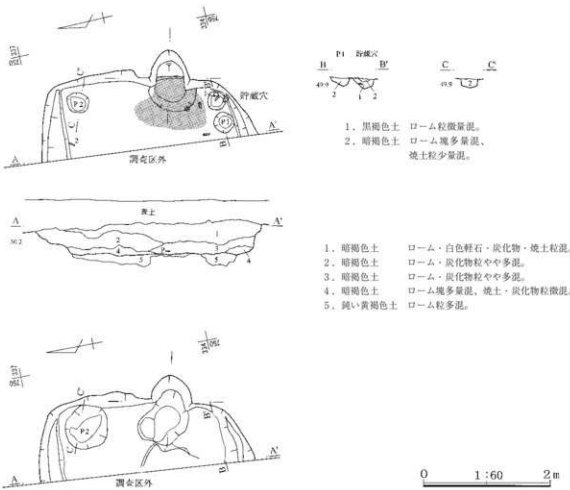


図24　2区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

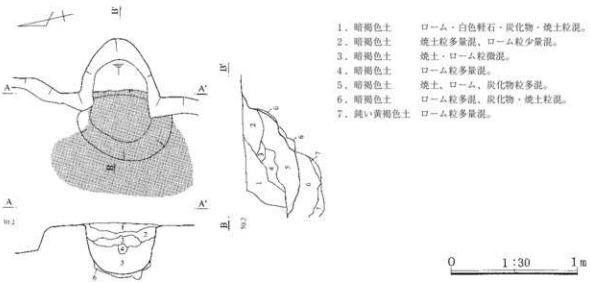


図25　2区1号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図

2区1号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量(cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区1竪-1	土師器　台付甕	埋土 1/3	口径(10.2)、底径(7.2)、器高(14.9)、器厚 0.8	①明赤色 ②良好 ③緻密、径1mm以下白色粒子・赤褐色粒子少量混	口縁部横撫、体部～脚部外面斜・縦方向撫削、内面撫
2区1竪-2	鉄器　刀子	埋土、切先・柄先欠損	全長(10)、刃部長(7.4)、柄部長幅 1.5、厚 0.5		

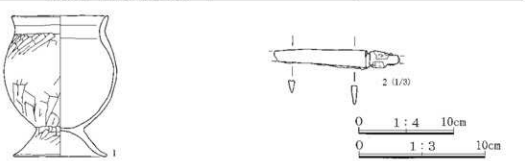


図26　2区1号竪穴建物跡出土遺物

（2）2区2号竪穴建物跡

位置：2-2区の南西隅。2区1号竪穴建物跡の北、2区3号竪穴建物跡の南西に近接する。西側約半分強が調査区外に出る。X340・Y-750Gr.　**主軸方位：**N-92°-E　**重複：**なし　**規模と形状：**東側約1/3のみ検出。全容は不明。東辺3.35m・床面までの深さ0.11m・掘り方までの深さは0.25m・面積3.83㎡。東側に竈が取り付く。方形ないし長方形状を呈するものと思われる。竈のすぐ南側に小規模な貯蔵穴と、南東隅、貯蔵穴のすぐ南側と建物跡の北東隅にピットがそれぞれ1基ずつ検出されているが、柱穴とは考えにくい。竈の位置や貯蔵穴、ピットの位置や掘り方など、東側半分か1/3程度しか検出されていないにもかかわらず、2区1号竪穴建物跡と大変良く類似しており、どちらかが建て替えなどの、前後関係が存在する可能性がある。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り整えた上に、にぶい黄褐色土で硬質な床面を形成している。埋土が堅く締まっているため、特に床面のみが硬化しているという印象はない。床面には特に焼土や炭化物などの広がりは見られない。　**掘り方：**深さ0.09m程度。掘り方底面は比較的平坦である。　**竈：**東辺の中央よりもやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削りだしてつくられ、煙道は顕著には確認で

きなかった。両袖は建物内にほとんど張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成され、壁燃焼部内部から電前庭にかけて、やや深く掘り方が掘り込まれており、焼土・炭化物の堆積が顕著である。**Pit：**調査対象範囲に於いて２基検出されている。pit1は竪穴建物跡北東隅、径0.35m・深さ0.15m、不整円形状を呈する。pit2は竪穴建物跡南東隅、径0.45m・深さ0.13m、ほぼ円形を呈する。両ピット共、位置や規模から見て柱穴とは考えにくい。　**貯蔵穴：**竈のすぐ南側。径0.45m・深さ0.16m、ほぼ円形状を呈する。**時期：**不明。

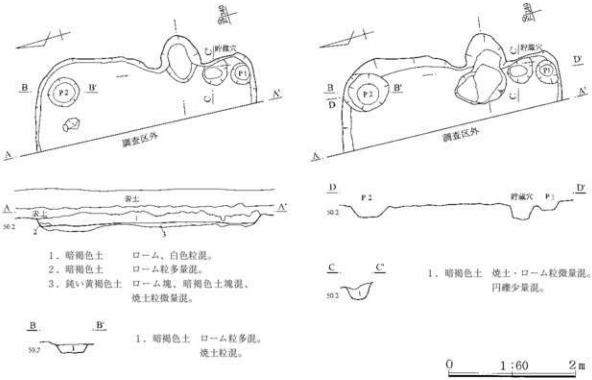


図27　2区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図

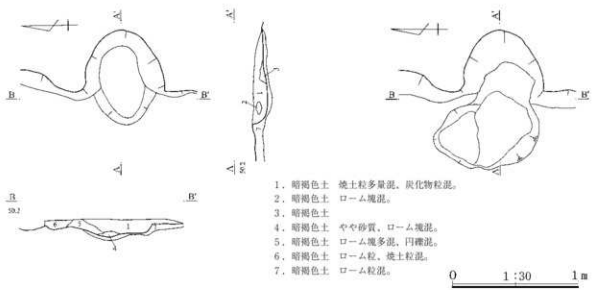


図28　2区2号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

（3）2区3号竪穴建物跡

位置：2-2区の南西隅。2区2号竪穴建物跡の北東、2区4号竪穴建物跡の南に近接する。X340～345・Y-745～-750Gr.　**主軸方位：**N-95°-E　**重複：**1面で確認された2区1号溝跡に西側約2/5を破壊される。　**規模と形状：**西側約2/5を破壊されるが、西辺の一部が検出できているため、全容はある程度推測可能である。南北にやや長い長方形状を呈する。長辺3.91m・短辺3.14m・床面までの深さ0.12m・掘り方までの深さは0.41m・面積11.7㎡。東側に竈が取り付く。竈のすぐ南側に貯蔵穴が検出された。　**埋土：**暗褐色土ベース。**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に、暗褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**北東隅から南西にかけて特に大きく掘り込まれ、凹凸が激しい。深さ0.29m程度。南辺と西辺の間際はコの字型の棚状に平坦な面が形成されている。　**竈：**東辺の中央よりかなり南寄りの位置に取り付く。燃焼部と煙道部は地山を削りだしてつくられ、右袖が建物内に若干張り出す。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成されている。　**貯蔵穴：**竈のすぐ南側。長径0.54m・深さ0.38m、不整円形状を呈する。　**時期：**8世紀後半。

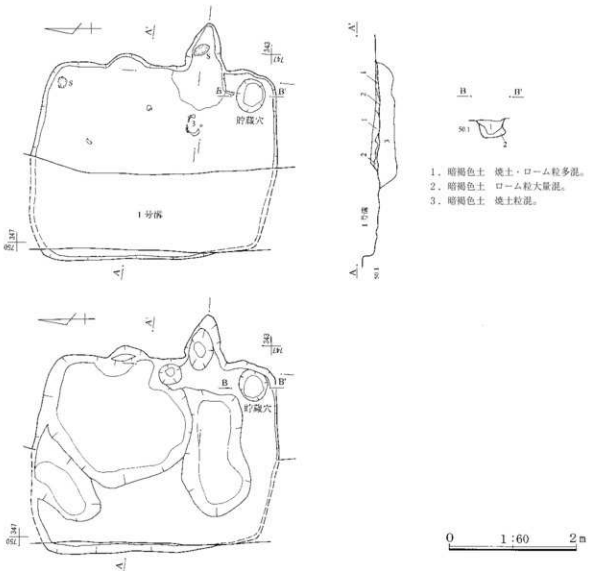


図29　2区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

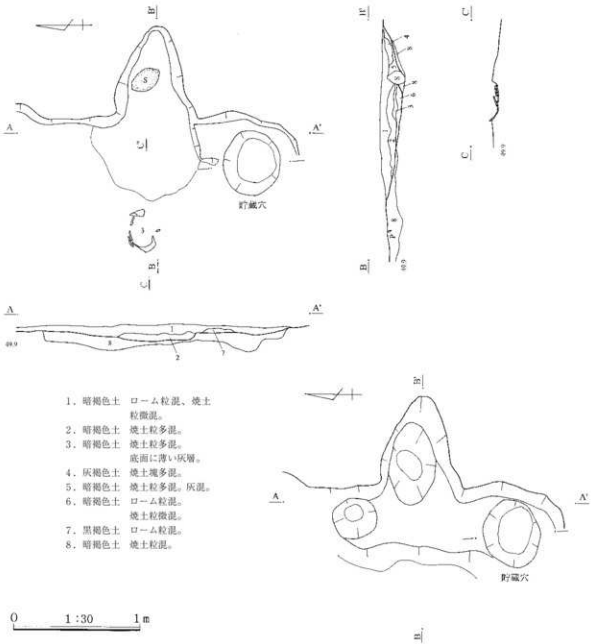


図30　2区3号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図

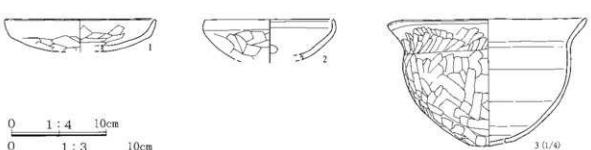


図31　2区3号竪穴建物跡出土遺物

2区3号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区3竪-1	土師器　杯	埋土、口縁～体部片	口径 (12)、器高 (2.6)、器厚 0.5	①橙色　②良好　③緻密、径 1mm 以下の茶・黒褐色粒子多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面箆削・内面撫
2区3竪-2	土師器　杯	埋土、口縁～体部片	口径 (10.2)、器高 (3.1)、器厚 0.4	①橙色　②良好　③緻密、径 1mm 以下の黒褐色粒子・やや多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面箆削・内面撫
2区3竪-3	土師器　甕	埋土、一部欠損	口径 21.1、底径 5、器高 13.5、器厚 0.6	①橙色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～3mm の灰白色粒子・砂粒少量混	口縁内外面横撫、頸部～底部外面箆削・内面撫

（4）2区4号竪穴建物跡

位置：2-2区の南西隅。2区3号竪穴建物跡の北西、2区5号竪穴建物跡の南に近接する。X345～350・Y-745～-750Gr.　**主軸方位：**不明　**重複：**1面で確認された2区1号溝跡に東側約1/2を破壊される。　**規模と形状：**東側約1/2を破壊され、西辺の大部分が調査区外に出るため、全容は不明。本区で検出された他の竪穴建物跡の状況から類推して、南北にやや長い長方形状を呈するものと想定される。南北幅3.04m・床面までの深さ0.04m・掘り方までの深さは0.19m・面積3.3m²。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に、鈍い黄褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**検出された範囲のほぼ中央部が特に大きく掘り込まれ、凹凸が激しい。深さ0.19m程度。　**竈：**検出されない。　**貯蔵穴：**検出されない。　**時期：**8世紀後半。

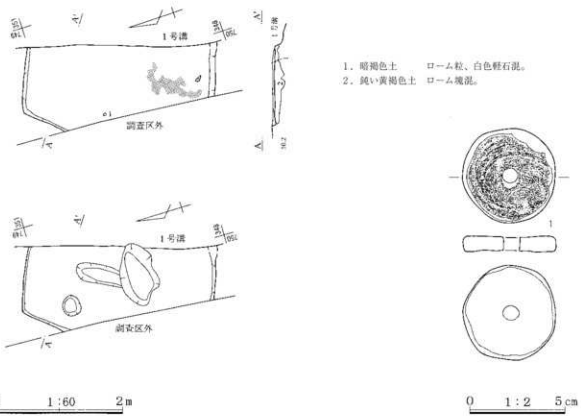


図32　2区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物

2区4号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm/g)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区4竪-1	須恵質　土製紡錘車	埋土　完形	径5、器厚 0.9、孔径 0.8、重 27.53	①黒灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色粒子・赤褐色粒子少量混	杯底部を転用、回転糸切痕有。もう片面は撫

（5）2区5号竪穴建物跡

位置：2-2区の南西隅。2区4号竪穴建物跡のすぐ北側、2区1号粘土採掘坑跡に近接する。X350～355・Y-750Gr.　**主軸方位：**不明　**重複：**東壁の一部を2号土坑跡に、北辺の一部を3号土坑跡に破壊される。　**規模と形状：**西側約2/3が調査区外に出るため、全容は不明。本区で検出された他の竪穴建物跡の状況から類推して、南北にやや長い長方形状を呈するものと想定される。床面までの深さ0.28m・掘り方までの深さは0.57m・面積3.7㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に、暗褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**検出された範囲のほぼ中央部が特に大きく掘り込まれ、凹凸が激しい。深さ0.26m程度。　**竈：**検出されない。　**貯蔵穴：**検出されない。　**時期：**不明。

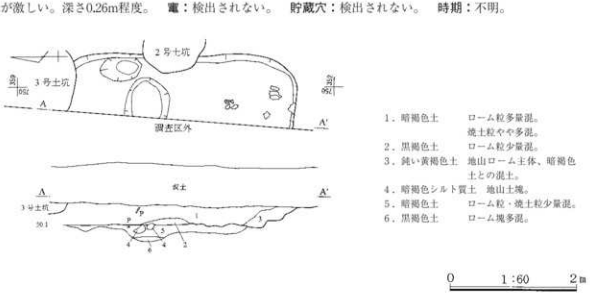


図33　2区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図

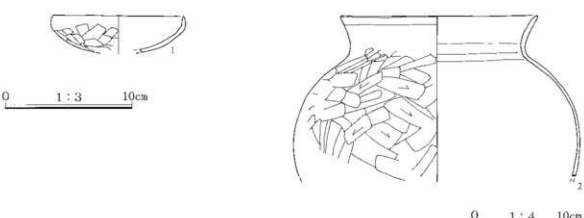


図34　2区5号竪穴建物跡出土遺物

2区5号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・接合関係	法量(cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区5竪-1	土師器 杯	埋土 口縁部片	口径(10.6)、器高(2.9)、器厚0.3	①橙色 ②良好 ③緻密、径1～2mm赤褐色・茶褐色粒子やや多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区5竪-2	土師器 甕	埋土、口縁～体部片	口径(20.8)、器高(17)、器厚0.5	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫

（６）２区７号竪穴建物跡

位置：2-2区の北西隅。2区6号粘土採掘坑跡に重なる。X400～405・Y-740Gr.　**主軸方位：**N-90°-E　**重複：**2区6号粘土採掘坑跡を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。2区6号粘土採掘坑跡が埋没した後にその位置にほぼ重なるように掘り込まれている。南北にやや長い長方形状を呈し、東側に竈が取り付く。長辺3.62m・短辺３m・床面までの深さ0.21m・掘り方までの深さは0.44m・面積10.6㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を掘り込んだ上に、暗黄褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**顕著な凹凸はあまり見られない。検出状況が不良であり、粘土採掘坑が掘り込まれていた上に竪穴建物が形成されているため、不明な部分が多い。　**竈：**東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖とも建物内にほとんど張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成され、壁燃焼部内部の掘り方はやや深く掘り込まれており、焼土・炭化物の堆積が顕著である。　**貯蔵穴：**竈のすぐ南側に位置する。長径0.63m・短径0.56m・深さ0.28m、不整円形状を呈する。　**時期：**８世紀後半。

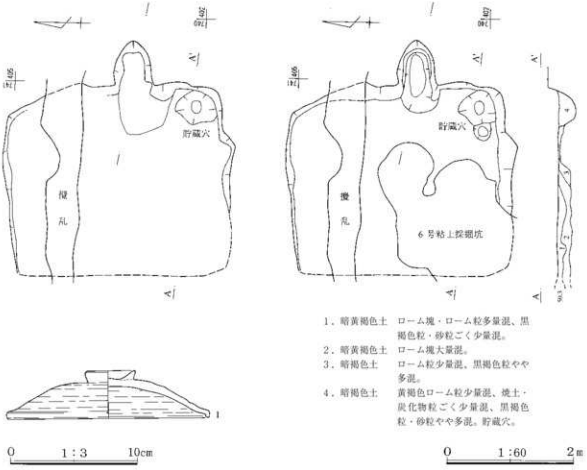


図35　２区7号竪穴建物跡平面図・掘り方平面図・土層断面図・出土遺物

２区７号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・接合関係	法　量(cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
２区７竪-1	須恵器　蓋	埋土、摘み部～縁部1/2	径16.1、摘み径4、器高3.8、器厚0.7	①褐色　②やや不良　③緻密、径1mm以下白色・褐色粒子少量混	轆轤成形、内外面撫

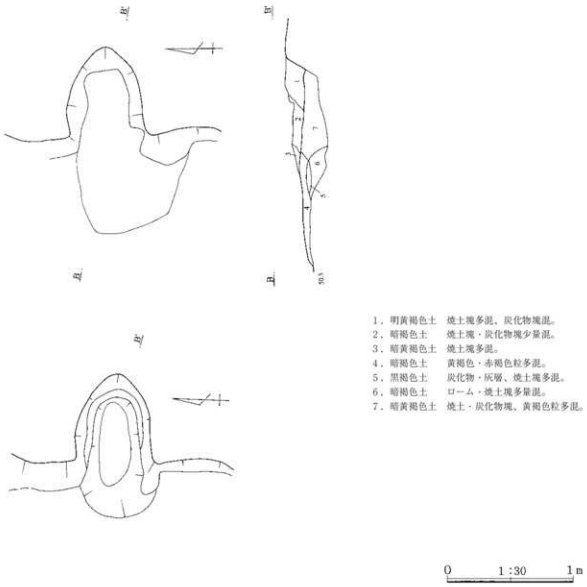
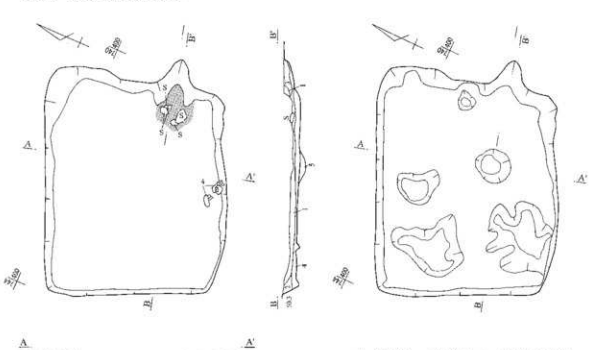


図36　2区7号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

（7）2区8号竪穴建物跡

位置：2-2区の北西隅。2区6号粘土採掘坑跡のすぐ南側に隣接。X395～400・Y-735～-740Gr.　**主軸方位：**N-95°-E　**重複：**なし。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。東西にやや長い長方形状を呈し、東側に竈が取り付く。長辺3.62m・短辺2.86m・床面までの深さ0.25m・掘り方までの深さは0.34m・面積9.7㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に、黒褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**中央部が4箇所にわたって特に大きく掘り込まれ、凹凸が激しい。深さ0.1m程度。　**竈：**東壁の中央から南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖が建物内に若干張り出す。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成され、壁燃焼部内部の掘り方はやや深く掘り込まれており、焼土・炭化物の堆積が顕著である。**貯蔵穴：**なし。　**時期：**6世紀後半。



1．暗褐色土　黄褐色ローム・黒褐色粒やや多混。
2．暗黄褐色土　ローム塊多混。
3．暗褐色土　焼土塊多混、黄褐色ローム粒・炭化物少量混。
4．黒褐色土　ローム塊・ローム粒混。
5．黒褐色土　貼床土。

1．暗褐色土　焼土・ローム粒混。
2．暗褐色土　焼土・ローム小塊多混。
3．黒褐色土　焼土粒混、炭化物微混。
4．暗黄褐色土　ローム粒・ローム塊多混。
5．黄褐色土　暗褐色粒やや多混、赤褐色焼土粒微混。

図37　2区8号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・竈跡平面図・土層断面図

2区8号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区8竪-1	土師器　杯	埋土、口縁～底部3/4	口径13、器高4.5、器厚0.6	①純い橙色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mmの灰白色粒子・砂粒混	口縁内外面横撫、体～底部外面篦削、内面横・斜方向撫
2区8竪-2	須恵器　杯	埋土、口縁～底部1/3	口径(13.8)、底径(7.6)、器高3.5、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1mm灰白色・赤褐色粒子混	轆轤成形、底部回転糸切後撫

2区８竪-3	須恵器　杯	埋土、口縁部片	口径（12.6）、器高（3.3）、器厚0.6	①灰白色　②良好　③緻密、径1～2mm黒褐色・茶褐色粒子やや多混	轆轤成形
2区８竪-4	土師器　甕	埋土、一部欠損	口径15.8、底径6.6、器高20.2、器厚１	①明赤褐色　②良好　③緻密、径1mm灰白色・赤褐色粒子混	口縁部横撫、体～底部外面施削・内面撫
2区８竪-5	土師器　甕	埋土、口縁～体部片	口径（18.8）、器高（8.4）、器厚0.6	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子少量混	口縁部横撫、体部外面施削・内面撫

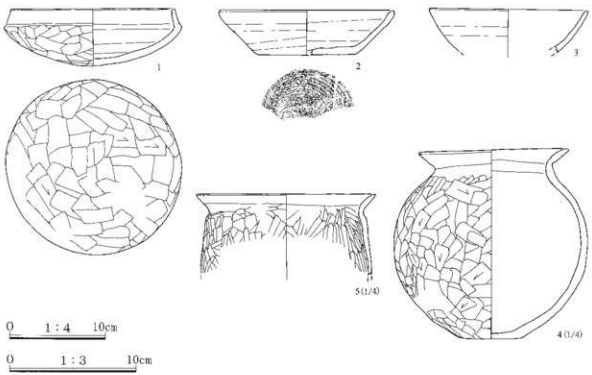


図38　2区8号竪穴建物跡出土遺物

第３項　溝跡

2区2面では溝跡は、小規模な溝跡が１条のみ検出されている。粘土採掘坑が埋没した後に掘り込まれた溝跡であり、平安時代前期の遺構と考えられる。

（１）2区17号溝跡

位置：2-1区ほぼ中央の南端。X410～415・Y-735Gr.　2区2・3号掘立柱建物跡のすぐ東側に隣接。　**主軸方位：**N-13°-E、ただし北端から約1/4の位置でほぼ90°屈曲し、東北東方向に向きを変えN-78°-Eとなる。**重複：**2区4号粘土採掘坑の上面に掘り込む。北東隅は2区1面で検出された2区1号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**2-1区のほぼ中央の南端を北北西～南南東方向に流れ、北端から約1/4のところでほぼ90°向きを変え、東北東～西南西方向に流れる。北東隅は2区の1面で検出された2区1号溝跡に破壊される。南端は2-2調査区外に延びるが、南側に継続する部分は2-2区では検出されていない。調査対象範囲での確認全長は8.7m・最大上幅0.64m・最大下幅0.48m・深さ0.51m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

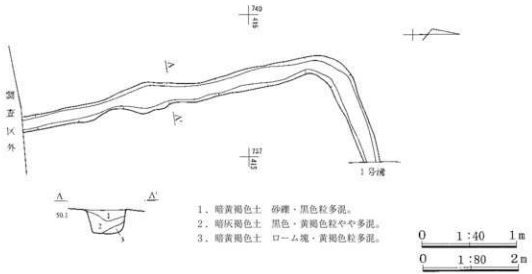


図39　2区17号溝跡平面図・土層断面図

第4項　土坑・ピット跡

2区2面では7基の土坑跡と1基のピット跡が検出されている。いずれも2-2区で検出されており、用途は不明の穴である。出土遺物が少ないので、これらの土坑跡の時期は不明であるが、確認面や他の遺構との新旧関係から奈良・平安時代の遺構と考えられる。

（1）2区2号土坑跡

位置：2-2区の南西隅近く。2区5号竪穴建物跡と重複。X350・Y-745Gr.　**重複：**2区5号竪穴建物跡の東辺を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**長径0.95m・短径0.85m・深さ0.21m・面積0.7㎡、北西～南東方向にやや長い楕円形状を呈する。断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**黒褐色土ベース。　**時期：**8世紀後半。

（2）2区3号土坑跡

位置：2-2区の南西隅近く。2区5号竪穴建物跡と重複。X355・Y-745～-750Gr.　**重複：**2区5号竪穴建物跡の北辺を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**西端が調査区外に出るため全容は不明である。検出最長径0.95m・深さ0.25m・面積1㎡、断面は非常に緩やかな逆三角状を呈する。　**埋土：**黒褐色土ベース。　**時期：**不明。

（3）2区4号土坑跡

位置：2-2区の南西隅近く。2区3号竪穴建物跡の北、2区1号粘土採掘坑跡のすぐ南側に近接する。X345・Y-745Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**長径0.96m・短径0.63m・深さ0.34m・面積0.5㎡、東西方向にやや長い楕円形状を呈する。断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**不明。

（4）2区5号土坑跡

位置：2-2区の南西寄りの位置。2区6号土坑跡の南、2区1号粘土採掘坑跡のすぐ西側に近接する。X355・Y-745Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**長径1.3m・短径1.15m・深さ0.14m・面積1㎡、隅丸の三角形状を呈する浅い土坑。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**不明。

（5）2区6号土坑跡

位置：2-2区の南西寄りの位置。2区5号土坑跡の北、2区1号粘土採掘坑跡のすぐ西側に近接する。X355・Y-745Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**長径1.32m・短径1.02m・深さ0.18m・面積1㎡、東西に長い楕円形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**不明。

（6）2区7号土坑跡

位置：2-2区のほぼ中央。2区5号粘土採掘坑跡の南に近接する。X370・Y-740Gr.　**重複：**2区1面で検出された2区1号溝跡に西側約半分以上を破壊される。　**規模と形状：**長径1.21m・深さ0.2m・面積0.6㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**不明。

（7）2区8号土坑跡

位置：2-2区のほぼ中央。2区5号粘土採掘坑跡の南に近接する。X375・Y-735～-740Gr.　**重複：**西側を2区5号粘土採掘坑跡と接する。　**規模と形状：**長径0.66m・深さ0.52m・面積0.35㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。**時期：**不明。

（8）2区1号ピット跡

位置：2-2区の南西隅寄りの位置。2区3号竪穴建物跡の西側に接し、2区2号竪穴建物跡のすぐ北、2区4号竪穴建物跡のすぐ南側に近接する。X345・Y-750Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**長径0.71m・短径0.54m・深さ0.57m。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**不明。

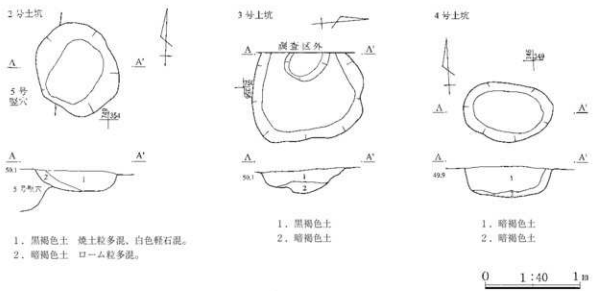


図40　2区2～4号土坑跡平面図・土層断面図

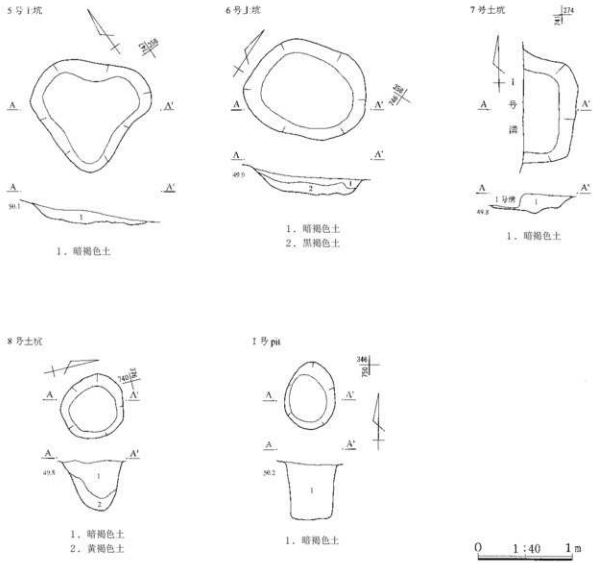


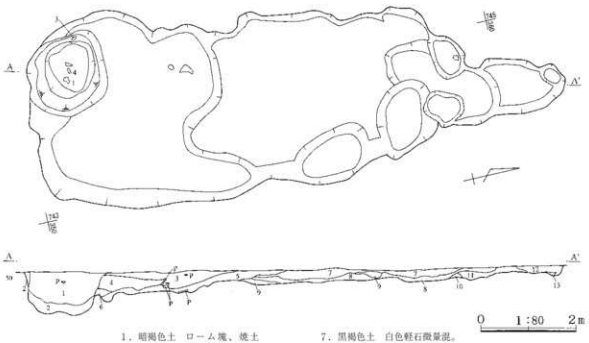
図41　2区5～8号土坑跡、1号ピット跡平面図・土層断面図

第5項　粘土採掘坑跡

2区2面では6基の粘土採掘跡が検出されている。2-1区で3基、2-2区で3基、いずれも西側の台地が、現・太田市道下に位置する谷に落ち込む傾斜変換点に沿って掘り込まれており、不整形状を呈している。粘土の所在層から、深さは大体一定であるが、大きさは不定で巨大なものから比較的小規模なものまである。粘土採掘坑跡は、本遺跡1区や本遺跡の西側に近接する大道西遺跡でも検出されており、近接する金山丘陵における須恵器生産の盛行と関わるところであろう。ただし、本遺跡においても1区と2区2面でのみ検出されており、西側に隣接する大道東遺跡及び南東に隣接する鹿島浦遺跡の調査範囲に於いては粘土採掘坑は検出されていない。2区で検出された竪穴建物跡との新旧関係から飛鳥・奈良時代前期頃のものと考えられる。金山丘陵で検出された須恵器窯跡の操業年代とも矛盾せず、両者の一体的な関係が想定できる。

（1）2区1号粘土採掘坑跡

位置：2-2区の南西隅寄りの位置。2区4号土坑跡のすぐ北側、2区5・6号土坑跡のすぐ東側に隣接。X350～360・Y-740～-745Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**南北に細長い不整楕円形状を呈する。土坑連結状に何カ所も段掘りされているが、粘土採掘坑としては比較的小規模と言える。南北径11.4m・東西径4.18m・深さ0.92m・面積42.2㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。



1．暗褐色土　ローム塊、焼土粒少量混。
2．茶褐色土　ローム粒混。
3．暗褐色土　ローム塊、焼土粒少量混。
4．暗褐色土　ローム塊多量混、茶褐色土塊混。
5．暗褐色土　ローム粒少量混。
6．暗褐色土　ローム塊、茶褐色土塊混。
7．黒褐色土　白色軽石微量混。
8．暗褐色土　ローム塊多量混。
9．暗褐色土　ローム塊少量混、黄白色軽石混。
10．暗褐色土　ローム塊大量混。
11．暗褐色土　ローム塊多量混。
12．暗褐色土　ローム粒少量混。
13．暗褐色土　ローム塊大量混。

図42　2区1号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図

2区１号粘土採掘坑跡

遺物番号	器　種	出土位置・埋土状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区１粘-1	土師器 杯	埋土 1/2	口径 (12.2)、底径 (8.5)、器高 3.1、器厚 0.5	①鈍い赤褐色　②良好③緻密、径1mm 白色・黒褐色・雲母粒子混	口縁部内外面横撫、体部～底部外面篦削・内面撫
2区１粘-2	須恵器 杯	埋土 1/2	口径 (11.4)、底径 (5)、器高 4.8、器厚 0.6	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・黒褐色・雲母粒子混	轆轤成形、底部回転篦削
2区１粘-3	須恵器 杯	埋土 1/2	口径 (13.7)、底径 (6.2)、器高 3.7、器厚 0.9	①灰色　②良好　③やや粗い、径 1mm 以下白色・黒褐色・雲母粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転篦削
2区１粘-4	須恵器 椀	埋土 1/2	底径 6.7、器高 (3.7)、器厚 0.7	①灰色　②良好　③緻密、径１～2mm 白色粒子多混、黒褐色粒子少量混	轆轤成形、底部回転篦削

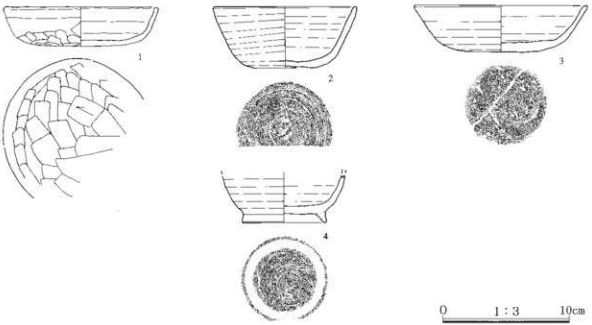


図43　2区1号粘土採掘坑跡出土遺物

（2）2区2号粘土採掘坑跡

位置：2-1区の北西隅。2区3号粘土採掘坑跡及び2区1号掘立柱建物跡のすぐ北側。X440～445・Y-745～-750Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**北西端が調査区外に出るため全容は不明であるが、ほぼ、南北に細長い不整長円形状を呈する。土坑連結状に何カ所も段掘りされているが、2区1号粘土採掘坑跡と同様、粘土採掘坑としては比較的小規模と言える。南北径8.34m・東西径4.28m・深さ0.68m・面積29.4㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**8世紀後半。

図44　2区2号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図・出土遺物

２区２号粘土採掘坑跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区2粘-1	須恵器　甕	埋土、口縁部欠損	底径7、器高（8.8）、器厚1.3	①灰色　②良好　③緻密	輪積成形、底部回転糸切

（３）2区3号粘土採掘坑跡

位置：2-1区の中央やや西寄りの位置。2区2号粘土採掘坑跡の南側、2区1号掘立柱建物跡のすぐ東側。2区4号粘土採掘坑跡の北側に隣接する。X425～435・Y-730～-745Gr.　**重複：**北西端を2区1号掘立柱建物跡に破壊され、東端を2区1面で検出された2区1号溝跡に破壊されている。　**規模と形状：**北西端に突出する緩い逆L字型を呈するものと考えられるが、東端を破壊されているために全容は不明である。他の粘土採掘坑同様、土坑連結状に形成されている。南北径10.2m・東西径4.82m・深さ0.24m・面積32.37㎡。

埋土：暗褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。

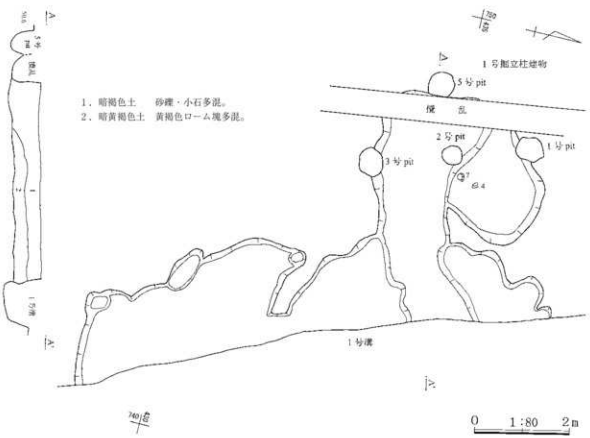


図45　2区3号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図

２区３号粘土採掘坑跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区3粘-1	土師器　杯	埋土 1/2	口径13.1、器高3.2、器厚0.6	①明褐色　②良好　③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面箆削・内面撫
2区3粘-2	土師器　杯	埋土 1/3	口径（11.8）、器高3.4、器厚0.6	①純い赤褐色　②良好　③緻密、径1mm以下白色・茶褐色粒子ごく微量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面箆削・内面撫
2区3粘-3	土師器　杯	埋土 2/5	口径（15.9）、底径12.3、器高3.6、器厚0.5	①純い黄橙色　②良好　③緻密、径1mm以下白色・赤褐色・茶褐色粒混	口縁～体部内外面横撫、底部外面箆削・内面撫
2区3粘-4	土師器　杯	埋土 2/5	口径（14）、器高3.8、器厚0.6	①純い黄橙色　②良好　③緻密、径1～3mm白色・赤褐色粒子・砂粒多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面箆削・内面撫

2区3粘-5	土師器　杯	理土 1/4	口径(13.8)、底径(8.4)、器高(3.5)、器厚0.6	①純い橙色　②良好　③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面篦削・内面撫
2区3粘-6	須恵器　杯	理土 1/2	口径(13.4)、底径(7.1)、器高4.8、器厚0.7	①灰色　②やや良好　③緻密、径1mm以下白色粒子少量混	轆轤成形、底部外面回転糸切
2区3粘-7	須恵器　杯	理土 1/2	口径(15.5)、底径(9.4)、器高4.2、器厚0.7	①灰白色　②良好　③緻密、径1～5mm白色・赤褐色・黒色粒子・雲母多混	轆轤成形、底部外面回転篦削
2区3粘-8	土師質　土錘	理土 ほぼ完形	全長7.8、幅2.2、器厚0.7、孔径0.6	①明黄褐色土　②良好　③緻密	体部撫

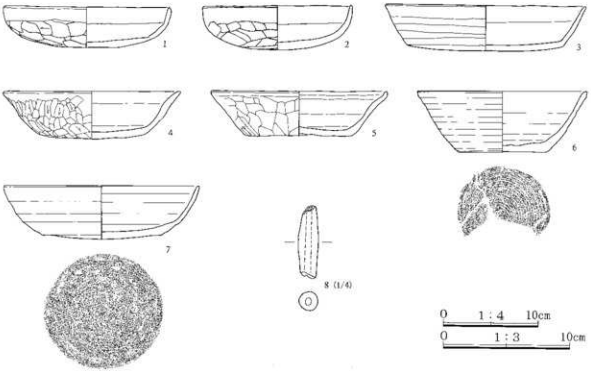


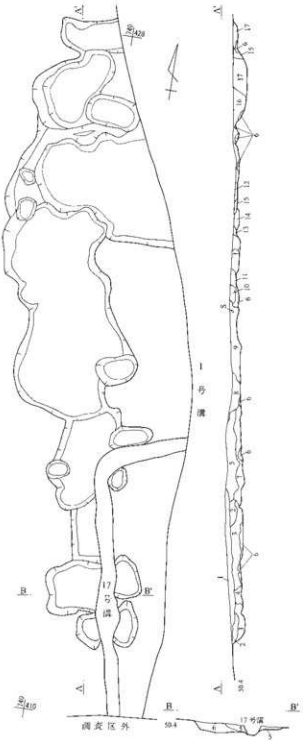
図46　2区3号粘土採掘坑跡出土遺物

（4）2区4号粘土採掘坑跡

位置：2-1区の南端近く西寄りの位置。2区3号粘土採掘坑跡の南側に接し、2区2・3号掘立柱建物跡のすぐ東側に位置する。X410～425・Y-735～-740Gr.　**重複：**東端を、すぐ北側に隣接する2区3号粘土採掘坑同様、2区1面で検出された2区1号溝跡に破壊されている。　**規模と形状：**東側を2区1号溝跡で破壊されているため、全容は不明であるが、北東隅部が突出する緩い逆L字形状を呈するものと考えられる。
他の粘土採掘坑同様、土坑連結状に形成されている。南北径16.8m・東西径4.82m・深さ0.5m・面積38.66㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**8世紀前半。

（5）2区5号粘土採掘坑跡

位置：2-2区の中央より北寄りの位置。2区6号粘土採掘坑跡、2区8号竪穴建物跡の南側、2区1号粘土採掘坑の北側に位置する。X365～395・Y-730～-745Gr.　**重複：**上面を2区1号溝跡に破壊されている。　**規模と形状：**西端の一部が調査区外に出るため全容は不明であるが、不整形状を呈する。本遺跡において検出された他の粘土採掘坑に比べて格段に大きい。他の粘土採掘坑同様、多数の土坑連結状に形成され、それが巨大に連なるスタイルを呈している。南北径32.8m・確認東西径15.56m・深さ0.96m・面積217.95㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**8世紀後半。



1．暗灰褐色土　砂粒混。
2．暗褐色土　焼土塊混。
3．暗褐色土　ローム塊・焼土粒混。
4．黒褐色土
5．暗褐色土　焼土塊混。
6．黄褐色土　ローム塊大量混。
7．暗褐色土　ローム塊やや多混、焼土粒混。
8．暗褐色土　ローム塊混。
9．暗褐色土　ローム粒多混。
10．灰褐色土　ローム塊混。
11．褐色土　ローム塊、黒褐色土混。
12．褐色土　黒色土多混、ローム塊混。
13．暗褐色土　ローム粒混。
14．暗黄褐色土　ローム塊、暗褐色土混。
15．黄褐色土　ローム塊。
16．黒褐色土　ローム塊混。
17．暗褐色土

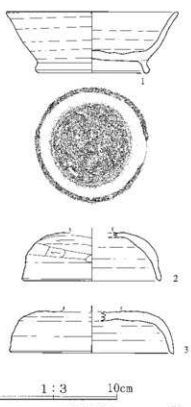


図47　2区4号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図・出土遺物

2区４号粘土採掘坑跡

遺物番号	器　種	出土状況・遺存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区４粘-1	須恵器　杯	埋土 1/3	口径（13.6）、底径 9.1、器高 4.9、器厚 0.7	③灰白色　②やや不良　③緻密、径１～3mm 赤褐色・黒褐色粒子混	轆轤成形、底部外面回転糸切後撫、高台部貼付
2区４粘-2	須恵器　蓋	埋土 口縁部片	口径（11）、器高（3.8）、器厚 0.7	③灰色　②良好　③緻密、径 1mm 白色粒子微量混	轆轤成形、頂部外面施削
2区４粘-3	須恵器　蓋	埋土 1/3	口径（12.9）、器高 3.3、器厚 0.7	①灰色　②良好　③緻密、径１～2mm 白色粒子多混	轆轤成形、頂部外面回転施削

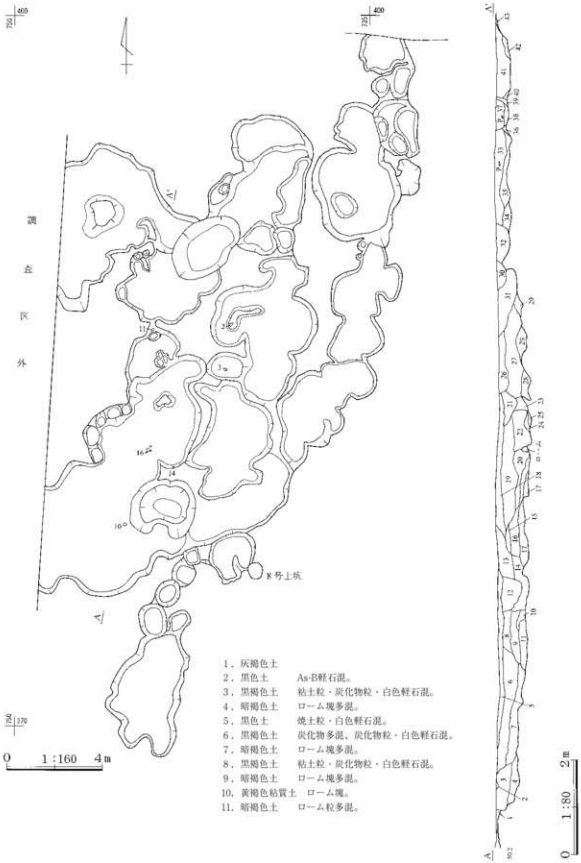


図48　2区5号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図

12. 黒褐色土　粘土粒・炭化物粒・白色軽石混。
13. 黒褐色土　粘土粒・炭化物粒・白色軽石混。
14. 暗褐色土　ローム塊多混。
15. 灰褐色土　ローム塊多混。
16. 暗褐色土　灰褐色土塊・ローム塊混。
17. 黒褐色土　ローム塊少量混。
18. 黒褐色土　白色軽石混。
19. 暗褐色土　ローム塊・焼土粒混、白色軽石少混。
20. 灰褐色土　ローム塊多混。
21. 灰褐色土
22. 黒褐色土　ローム塊混。
23. 褐色土　黒色土・ローム塊混。
24. 黄褐色土　ローム塊。
25. 黒褐色土　ローム塊混。
26. 黒色土　白色軽石多混、焼土粒・炭化物微混。
27. 暗褐色土　ローム粒・ローム塊・灰褐色土塊混。
28. 暗褐色土　ローム塊多混。
29. 暗黄褐色土　ローム塊と暗褐色土塊の混土。
30. 灰褐色土
31. 黒褐色土　白色軽石微混。
32. 黒褐色土　白色軽石・ローム粒微混。
33. 暗褐色土　白色軽石・ローム粒・焼土粒混。
34. 灰褐色土　ローム塊多混。
35. 暗褐色土　ローム塊混。
36. 暗褐色土　ローム粒多混。
37. 暗灰褐色土　砂礫・黒褐色粒多混。
38. 暗灰褐色土　ローム粒多混。
39. 暗褐色土　砂礫・黒褐色粒やや多混。
40. 暗灰褐色土　ローム粒少量混。
41. 暗茶褐色土　砂礫・黒褐色粒多混。
42. 暗黄褐色土　ローム粒多混。
43. 暗茶褐色土　黒褐色粒・砂礫少量混。

２区５号粘土採掘坑跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
２区５粘-1	土師器　杯	埋土 1/2	口径（9.5）、底径6、器高49、器厚0.8	①橙色　②良好　③緻密、径1mm以下白色・赤褐色粒少量混	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内面撫、体～底部内面放射状暗文、底部外面本葉痕撫痕刻
２区５粘-2	土師器　杯	埋土 ほぼ完形	口径11.4、器高4、器厚0.6	①明赤褐色　②良好　③緻密、砂粒・白色粒子多混	口縁部内外面撫、体～底部外面施削・内面撫
２区５粘-3	土師器　杯	埋土 2/5	口径（14.3）、器高5.1、器厚0.9	①橙色　②良好　③緻密、径1mm以下～2mm程度の赤・黒褐色粒子やや多混	口縁部内外面撫、体～底部外面施削・内面撫
２区５粘-4	土師器　杯	埋土 1/5	口径（12.4）、器高（3.8）、器厚0.6	①橙色　②良好　③緻密	口縁部内外面撫、体～底部外面施削・内面撫
２区５粘-5	土師器　杯	埋土 1/4	口径（14）、器高3.6、器厚0.7	①灰黄褐色　②良好　③緻密	口縁部内外面撫、体～底部外面施削・内面撫
２区５粘-6	土師器　杯	埋土 1/4	口径（15）、器高（3.3）、器厚0.8	①褐灰色　②良好　③緻密	口縁部内外面撫、体～底部外面施削・内面施磨
２区５粘-7	須恵器　杯	埋土 3/4	口径12.8、底径3.1、器高3.8、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm の白色・黒褐色粒子混	轆轤成形、底部回転糸切
２区５粘-8	須恵器　杯	埋土 1/2	口径（13.2）、底径6.8、器高3.4、器厚0.7	①黄灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm 砂粒・白色粒子やや多混	轆轤成形、底部回転糸切
２区５粘-9	須恵器　椀	埋土 1/2	口径（14.5）、底径（7.9）、器高6.5、器厚0.7	①灰色　②やや不良　③やや粗い、径1～3mm 砂粒・黒褐色粒子多混	轆轤成形、底部回転糸切後撫、高台部貼付
２区５粘-10	須恵器　皿	埋土 一部欠損	口径126、底径6.2、器高2.8、器厚0.8	①黄白黄褐色　②良好　③やや粗い、径1mm以下～2mm 程度の黒褐色粒子を多混	轆轤成形、底部回転糸切後撫、高台部貼付
２区５粘-11	須恵器　蓋	埋土 完形	口径11.1、器高4.5、器厚1.2	①灰色　②良好　③やや粗い、径1～3mm 白色粒子多混	轆轤成形、頂部施削・内面撫
２区５粘-12	須恵器　蓋	埋土 3/4	口径128、器高3.9、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～2mm 白色粒子混	轆轤成形
２区５粘-13	須恵器　蓋	埋土 1/4	口径（11.2）、器高4.8、器厚0.9	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下砂粒多混	轆轤成形、頂部施削
２区５粘-14	須恵器　蓋	埋土 2/5	口径（11.6）、器高3.6、器厚0.8	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子やや多混	轆轤成形、頂部施削
２区５粘-15	須恵器　盤	埋土、口縁～底部片	口径（25）、底径（18）、器高6.7、器厚1.3	①灰色　②良好　③粗い、径1mm以下～5mm白色粒子・茶褐色粒子・砂粒大量混	轆轤成形、底部施削
２区５粘-16	土師器　鉢	埋土 一部欠損	口径126、底径7、器高124、器厚1.3	①褐い赤褐色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm 白色・茶褐色粒子・砂粒多混	口縁部撫、体～底部外面施削、内面撫
２区５粘-17	土師器　甕	埋土、口縁～体部片	口径（20.4）、器高（27.6）、器厚1.3	①橙色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm 白色・赤褐色・茶褐色粒子混	口縁部内外面撫、体部外面施削・内面撫 底部周辺は18、18と同一個体
２区５粘-18	土師器　甕	埋土 底部片	底径（8）、器高（4）、器厚1.3	①橙色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm 白色・赤褐色・茶褐色粒子多混	体～底部外面施削、内面撫 口縁から体部は17、17と同一個体
２区５粘-19	須恵器　甕	埋土、口縁～体部片	口径（21.7）、器高（14.4）、器厚1.4	①黄灰色　②良好　③緻密	轆轤成形
２区５粘-20	須恵器　甕	埋土、口縁～頸部片	口径（24）、器高（10.3）、器厚1	①暗青灰色　②良好　③緻密	轆轤成形、口縁部波線状刺文
２区５粘-21	須恵器　提瓶	埋土 3/4	口径（7.2）、底径11.8、器高14.5、器厚1	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm 白色粒子多混	轆轤成形、底部施削

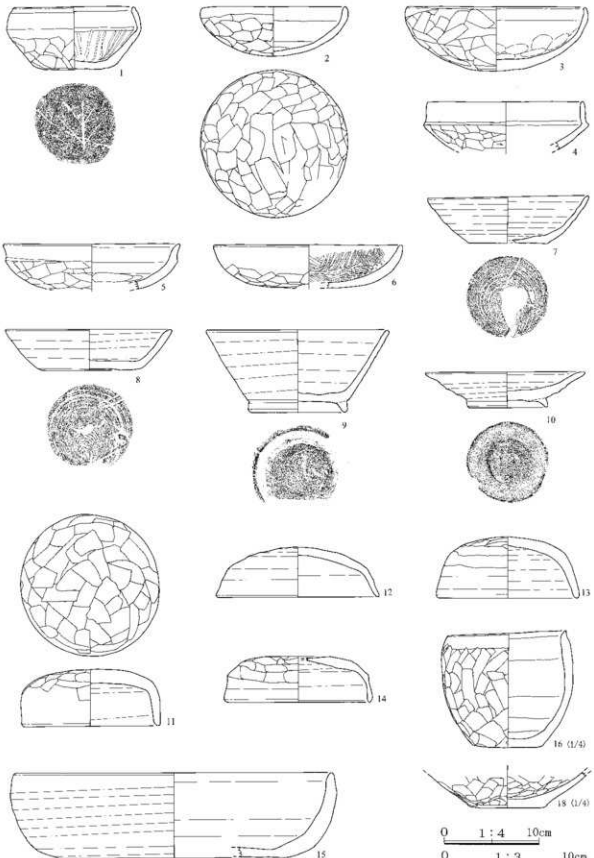


図49　2区5号粘土採掘坑跡出土遺物（1）

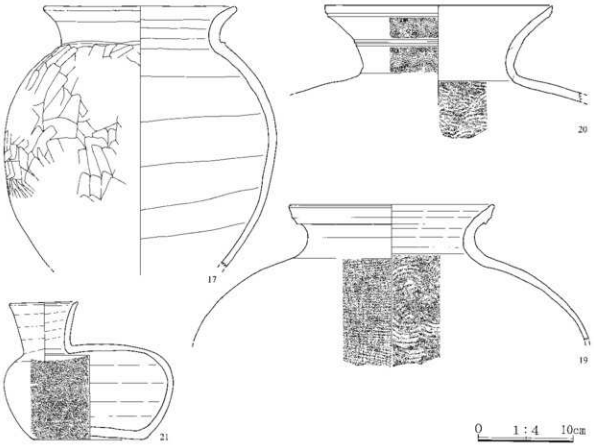


図50　2区5号粘土採掘坑跡出土遺物（2）

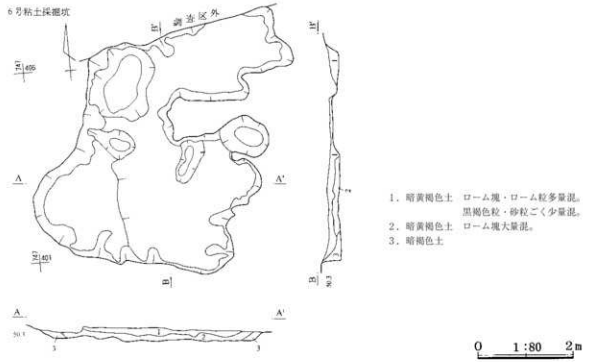


図51　2区6号粘土採掘坑跡平面図・土層断面図

（６）2区6号粘土採掘坑跡

位置：2-2区の西北端。2区7号竪穴建物跡の西側に隣接。2区8号竪穴建物跡の北側に位置する。X 400～405・Y-740～-745Gr.　**重複：**東側を2区7号竪穴建物跡に破壊されている。　**規模と形状：**北端が調査区外に出るため全容は不明であるが、北側の続きの部分が2-1区では検出されていないため、不整方形状を呈していたものと類推できる。他の粘土採掘坑同様、土坑連結状に形成されている。南北確認最大径6.2m・東西径4.88m・深さ0.24m・面積23.19㎡。　**埋土：**暗黄褐色土ベース。　**時期：**不明。

第３節　3区の遺構と遺物

3区は太田・桐生インターチエンジの北側の半円形の周回道路の北端の部分に当たる。南北に走る生活道によって外周の東端が区分されているが、この東端の部分からは旧石器を含めて遺構・遺物は全く検出されなかった。

3区は、南側を東西に走る生活道路とそれに並行する用水路を隔ててインターチェンジ周回道路の中心部分に当たる4区と接している。面積は2,237㎡。確認面は１面のみであり、古墳時代後期～平安時代前期の遺構が同位置のレベルにおいて確認、検出されている。

西に隣接する大道東遺跡、その更に西側に隣接する大道西遺跡の集落が形されている微高地が、2区の東側から4区・鹿島浦遺跡との境に位置する南北方向の太田市道にかけて北側から入ってくる谷の東側の微高地に当たる。

古墳時代後期から平安時代に至る遺構が検出されている。3区全体をコの字型に区画する巨大な溝をはじめとして、掘立柱建物跡１棟、柱穴列跡１条、竪穴建物跡16棟、溝跡７条、土坑跡４基などの遺構が検出されている。なお、遺構の調査を終了したところから、2区と同様、旧石器の確認調査を実施したが、旧石器は確認されなかった。

第１項　掘立柱建物跡・柱穴列跡

3区では掘立柱建物跡と柱穴列跡がそれぞれ１棟ずつ検出されている。掘立柱建物跡のすぐ東側にあたかも障壁のように柱穴列跡が存在している。両者の関係は不明であるが、主軸方位は一致している。掘立柱建物跡は方形状を呈する２×１間の小規模な総柱建物である。

（1）3区1号掘立柱建物跡

位置：3区のほぼ中央よりやや西寄りの位置。3区11号竪穴建物跡及び3区1号柱穴列跡の西、3区12号竪穴建物跡の南、3区13号竪穴建物跡の東に隣接する。X510・Y-680～-685Gr.　**主軸方位：**N-10°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**桁行２間×梁間１間の総柱建物で、一辺約2.65mのほぼ正方形状を呈する小規模な掘立柱建物跡である。南東隅の柱穴がやや南側に張り出すのが異例にみえるが、柱穴はいずれもしっかりとした掘り方を有しており、中心のピットは平面形態も不整形で、深さも他の柱穴群に比べて浅いため、床束とみられる。　**柱穴：**柱穴跡は６基検出され、中央に床束が掘り込まれ総柱建物となる。柱穴はいずれもほぼ円形状を呈し、規模は小さいがしっかりとした掘り方を有する。東北隅pit1長径0.58m・短径0.52m・深さ0.63m、東辺中央pit2長径0.48m・短径0.45・深さ0.5m、南東隅pit3長径0.38m・短径0.3m・深さ0.25m、南西隅pit4径0.41m・深さ0.44m、西辺中央pit5径0.52m・深さ0.4m、北西隅pit6長径0.44m・短径0.38m・深さ0.58m、床束長径0.69m・短径0.59m・深さ0.24m。　**柱穴埋土：**暗灰褐色土ベース。　**時期：**古代（不明）。

（2）3区1号柱穴列跡

位置：3区のほぼ中央よりやや西南寄りの位置。3区1号掘立柱建物跡の東、3区11号竪穴建物跡の南、3区10・15・16号竪穴建物跡の西に隣接する。X505～510・Y-680Gr.　**主軸方位：**N-10°-W　**重複：**なし。**規模と形状：**3間4基の柱穴が一直線上に並ぶ。全長5m。　**柱穴：**柱穴跡は4基検出され、いずれもほぼ円形状を呈し、規模は小さいがしっかりとした掘り方を有する。北端pit1長径0.6m・短径0.45m・深さ0.51m、北から二番目pit2長径0.54m・短径0.44m・深さ0.39m、南から二番目pit3長径0.4m・短径0.38m・深さ0.47m、南端pit4長径0.55m・短径0.49m・深さ0.45m　**柱穴埋土：**暗黒褐色土ベース。　**時期：**古代（不明）。

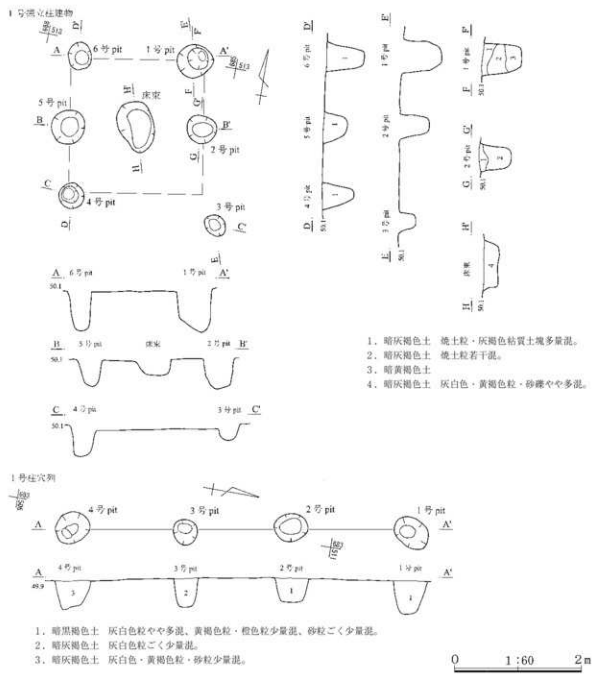


図52　3区1号掘立柱建物跡・1号柱穴列跡平面図・土層断面図・エレベーション図

第２項　竪穴建物跡

3区では16棟の竪穴建物跡が検出されている。いずれも調査区のほぼ中央部に集中して検出されており、激しく切り合っている。全容が検出できた竪穴建物跡で重複がないのは１棟のみである。また、同じような位置に竪穴建物を造営しようとする強い意志を感じる。竈はいずれも東壁に取り付き、主軸方位もほぼ類似している。また、全般的に東北～南西方向にやや長い長方形状を呈するなど、共通した要素が多い。これらの竪穴建物が同じ造営理念のもとに建設された竪穴建物跡である可能性があろう。

本調査区で検出された縦長の竪穴建物跡は本区の南に隣接する4区のさらに南に隣接する鹿島浦遺跡でも多数検出されている。各地の事例に勘案すれば、このような形状の竪穴建物は、単なる住居ではなく工房的な要素が顕著であるという傾向があるが、本調査区で検出された竪穴建物跡からはそのような工房的な要素は看取できなかった。この点は、4区の南に隣接する鹿島浦遺跡の調査成果と併せて、検討すべき課題と言えよう。

（１）3区1号竪穴建物跡

位置：3区の中央部やや東寄りの南端。3区の南端と東西両端にわたってコの字状に巡る巨大な区画溝3区1号溝跡の南側から検出された3区唯一の竪穴建物跡である。3区2・3号溝跡の西側。X500～505・Y-660～-665Gr.　**主軸方位：**不明　**重複：**なし。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。竪穴建物跡の東北隅にかかる部分の一部が検出されたのみである。床面までの深さ0.62m・面積2.5㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を平坦に削りだして形成している。　**掘り方：**床面と掘り方とはほぼ一致している。　**竈：**調査区外に出るため未検出。　**貯蔵穴：**未検出。　**時期：**古代（不明）。

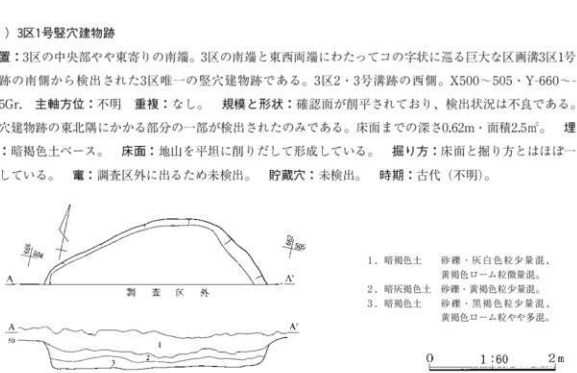
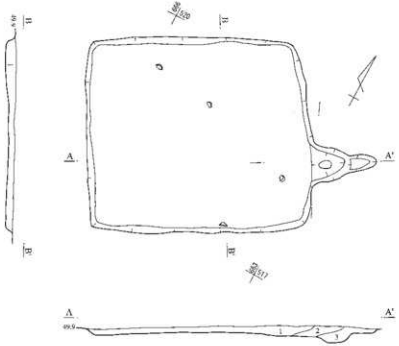


図53　3区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図

（２）3区2号竪穴建物跡

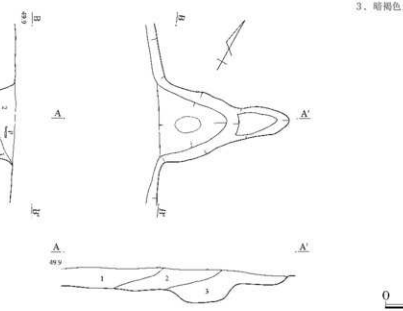
位置：3区の中央よりやや東北寄りの位置。3区3・9号竪穴建物跡のすぐ南に隣接する。X515～520・Y-660～-665Gr.　**主軸方位：**N-60°-E　**重複：**2区8号竪穴建物跡の北東約1/4を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。北東～南西方向にやや長い長方形状を呈し、東壁に竈が取り付く。長辺3.54m・短辺３m・床面までの深さ0.1m・面積10.98㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を平坦に削りだして床面を形成している。　**掘り方：**掘り方と床面とはほぼ一致している。　**竈：**東側壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部及び煙道は地山を削り出して形成され、煙道は燃焼部の奥に延

びる。両袖は建物内に全く張り出さない。燃焼部は建物の壁よりも外側に形成され、煙道は平坦な燃焼部の奥壁から急に立ち上がる。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**古代（不明）。



0　1:60　2m

1．暗褐色土　焼土粒・ローム塊混。
2．赤褐色土　焼土主体、ローム塊多混。
3．暗褐色土　焼土粒・塊多混。



0　1:30　1m

図54　3区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図

（3）3区3号竪穴建物跡

位置：3区の中央部の東北寄りの位置。3区2・8号竪穴建物跡のすぐ北側、3区7号竪穴建物跡のすぐ南側、3区6号竪穴建物跡のすぐ東側に隣接。X515～525・Y-660～-670Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**2区9号竪穴建物跡の南西側約1/2強を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。北東～南西方向に長い長方形状を呈し、東壁に竈が取り付く。長辺5.53m・短辺3.34m・床面までの深さ0.26m・掘り方までの深さは0.44m・面積18.6㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に、暗黄褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**検出された範囲のほぼ中央部が特に大きく掘り込まれ、凹凸が激しい。深さ0.25m程度。　**竈：**東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖は建物内に全く張り出さない。燃焼部は建物の壁の外側に形成され、壁燃焼部内部の掘り方はやや深く掘り込まれており、焼土・炭化物の堆積が顕著である。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**9世紀前半。

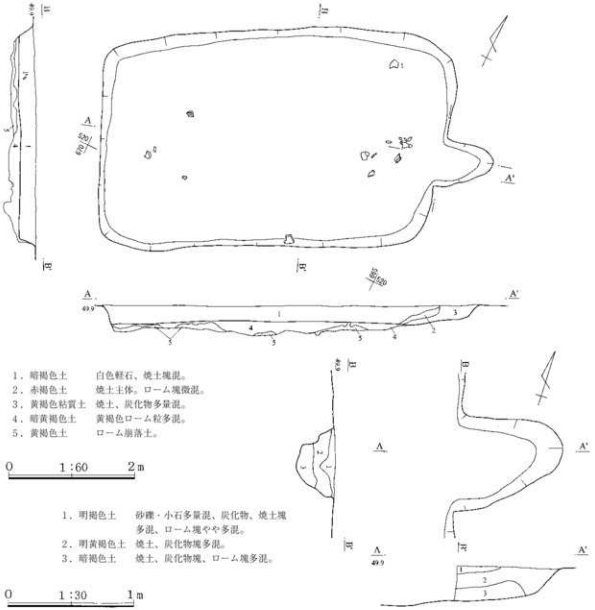


図55　3区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図

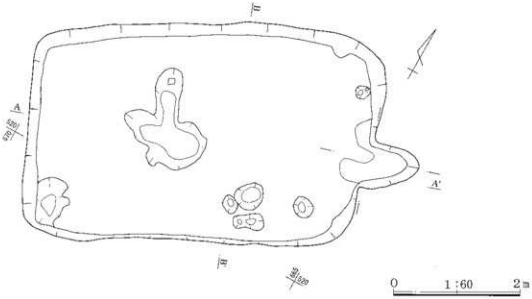


図56　3区3号竪穴建物跡掘り方平面図

3区3号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区3竪-1	須恵器　杯	床面直上 完形	口径135、底径8、器高38、器厚0.6	①青灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm白色・黒褐色粒子多混	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施削り・内面撫
3区3竪-2	土師器　杯	埋土 1/3	口径(13.6)、底径(6.4)、器高3.8、器厚0.8	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径1～3mm砂粒ごく微量混	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施削り・内面撫

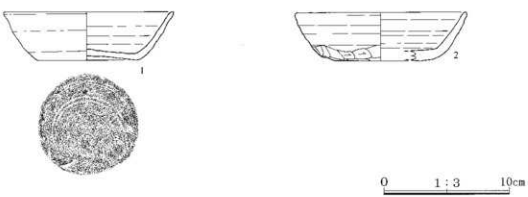


図57　3区3号竪穴建物跡出土遺物

(4) 3区4号竪穴建物跡

位置：3区の中央部の北寄りの位置。3区5号竪穴建物跡の北、3区3・9号竪穴建物跡・3区5号溝跡の西、X520・Y-670～-675Gr.　**主軸方位：**N-85°-E　**重複：**2区6号竪穴建物跡の北西隅を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。東西方向に長い長方形状を呈し、東壁に竈が取り付く。長辺3m・短辺2.2m・床面までの深さ0.05m・面積7.3㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を平坦に削り出して床面を形成している。　**掘り方：**掘り方と床面とはほぼ一致している。　**竈：**東南隅に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖は建物内に全く張り出さない。燃焼部は建物の壁の外側に形成され、壁燃焼部内部の掘り方はやや深く掘り込まれており、焼土・炭化物の堆積が顕著である。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**古代（不明）。

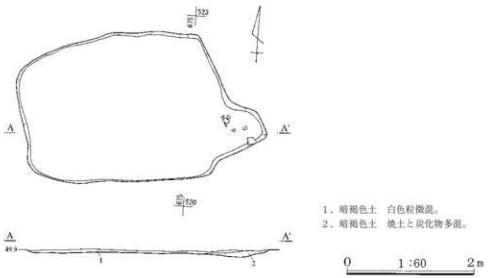


図58　3区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図

（５）3区5号竪穴建物跡

位置：3区の中央やや北寄りの位置。3区4号竪穴建物跡のすぐ南側、3区10・14・15・16号竪穴建物跡のすぐ北側、3区11号竪穴建物跡のすぐ東側。X510～515・Y-670～-675Gr.　**主軸方位：**N-85°-E　**重複：**3区6号竪穴建物跡の南西隅を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。東西に長

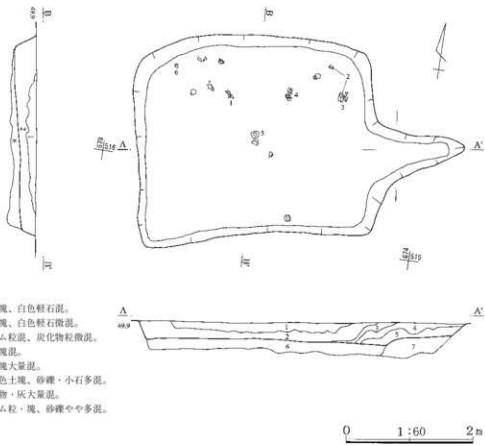


図59　3区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図

い長方形状を呈し、東壁に竈が取り付く。長辺3.7m・短辺3m・床面までの深さ0.28m・掘り方までの深さは0.45m・面積12.49㎡。　**埋土**：暗褐色土ベース。　**床面**：地山を大きく掘り込んだ上に、明黄褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方**：所々が大きく掘り込まれ、凹凸が激しい。深さ0.3m程度。　**竈**：東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は東側に大きく延びる。両袖とも建物内にほとんど張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成される。　**貯蔵穴**：なし。　**時期**：9世紀中葉。

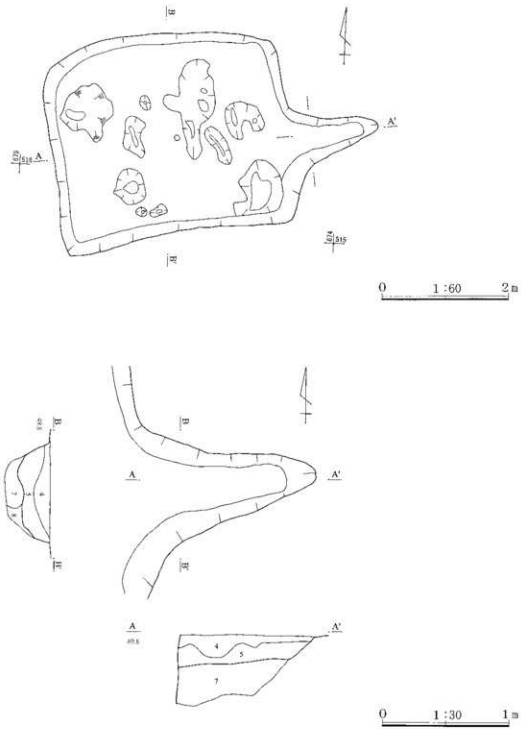


図60　3区5号竪穴建物跡掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図

3区5号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm/g)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区5竪-1	須恵器　杯	床面直上 1/2	口径13.8、底径7.9、器高4.3、器厚1	①暗青灰色　②やや不良　③緻密、径1mm以下～3mm白色粒子多量混	轆轤成形、底部回転糸切
3区5竪-2	須恵器　杯	床面直上 1/3	口径(12.8)、底径(7)、器高3.9、器厚0.9	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子少量混	轆轤成形、底部回転糸切
3区5竪-3	須恵器　杯	床面直上 1/4	口径(12.4)、底径(6.8)、器高(3.4)、器厚0.9	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子微量混、黒褐色粒子混	轆轤成形、底部回転糸切
3区5竪-4	須恵器　椀	埋土 2/3	口径(13)、底径9.6、器高4.8、器厚0.7	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm白色粒子多混、黒褐色粒子微量混	轆轤成形、底部回転篦削後高台部貼付
3区5竪-5	須恵器　盤	埋土 ほぼ完形	口径20.2、底径14.6、器高3.5、器厚0.6	①灰黄色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子・黒色粒子多混	轆轤成形、底部回転篦削後高台部貼付。内面に朱痕。
3区5竪-6	蛇紋岩製紡錘車	床面直上 ほぼ完形	上径5.2、下径4.2、厚1.4、孔径0.7、重68.67	①暗青緑色	表面擦過痕有、上面文字刻書「大林」、側面格子状線刻

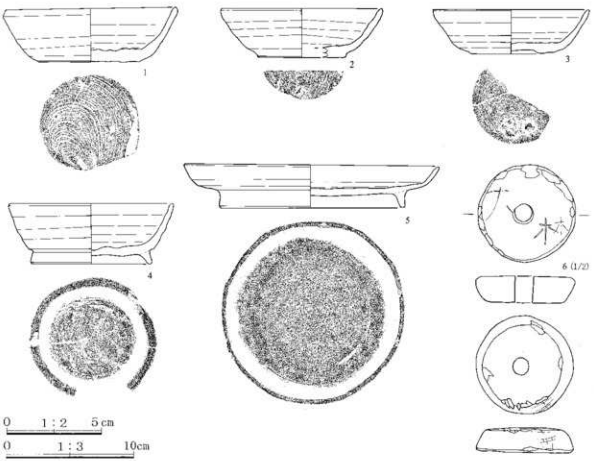


図61　3区5号竪穴建物跡出土遺物

（6）3区6号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央やや北寄りの位置。3区3・9号竪穴建物跡のすぐ西側。X515～520・Y-670～-675Gr.　**主軸方位：**N-80°-E　**重複：**3区4号竪穴建物跡に北西隅部を、3区5号竪穴建物跡に南西隅部を破壊される。3区5号溝跡を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。東西に長い長方形状を呈し、東壁に竈が取り付く。長辺4.9m・短辺3.6m・床面までの深さ0.38m・掘り方までの深さは0.57m・面積18.05m²。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に、暗褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**全体的に均質に掘り込まれており、凹凸が激

しい。深さ0.14m程度。　**竈**：東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖とも建物内に張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成される。　**貯蔵穴**：なし。　**時期**：9世紀前半。

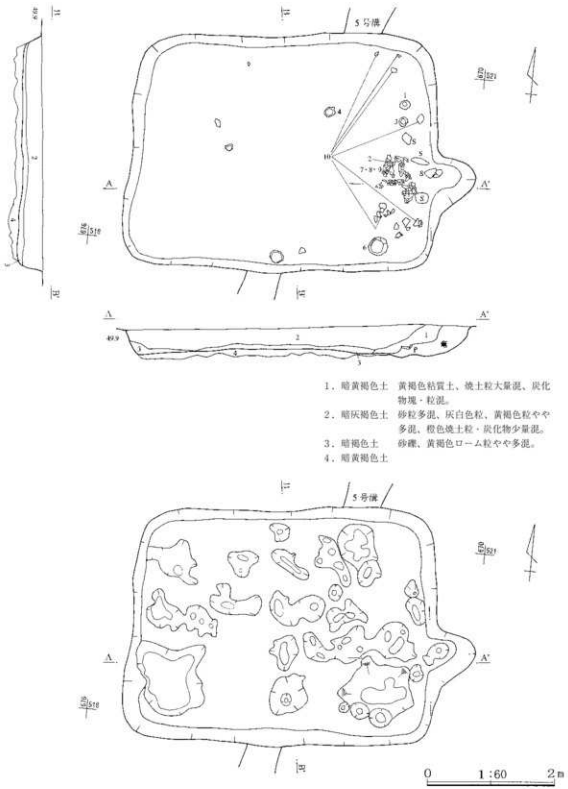


図62　3区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

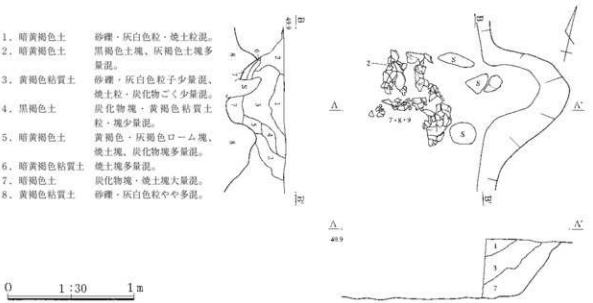


図63　3区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図

3区６号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区６竪-1	須恵器　杯	床面直上完形	口径 13.6、底径 8.4、器高 3.2、器厚 0.9	①灰黄褐色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・黒褐色粒子・砂礫多量混	轆轤成形、底部外面外縁部のみ篦削・中心部糸切
3区６竪-2	須恵器　杯	床面直上一部欠損	口径 13.3、底径 7.1、器高 3.7、器厚 1	①灰オリーブ色　②良好　③緻密、径１～5mm 砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区６竪-3	須恵器　杯	床面直上一部欠損	口径 12.8、底径 6.2、器高 4.1、器厚 1	①灰色　②良好　③緻密、径１～5mm 白色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区６竪-4	須恵器　杯	床面直上3/4	口径 13.6、底径 5、器高 3.4、器厚 1	①灰黄色　②良好　③緻密、径 1mm 白色・黒褐色・赤褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区６竪-5	土師器　杯	床面直上1/4	口径（15.4）、底径（8）、器高 6.3、器厚 0.4	①明赤褐色　②良好　③緻密	体部～底部外面篦削・内面横撫
3区６竪-6	土師器　甕	埋土ほぼ完形	口径 23、底径 8.6、器高 30.9、器厚 0.9	①赤褐色　②良好　③緻密、径１～2mm 白色・赤褐色・雲母粒子・砂粒少量混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
3区６竪-7	土師器　甕	埋土2/3	口径 21.2、底径 5.5、器高 28.8、器厚 0.8	①明赤褐色　②良好　③緻密、径１mm 白色・黒褐色・砂礫混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
3区６竪-8	土師器　甕	床面直上3/4	口径 21.6、底径 4.4、器高 27.5、器厚 0.6	①鈍い黄褐色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・茶褐色粒子・砂粒微量混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
3区６竪-9	土師器　甕	埋理土4/5	口径 20.2、底径 5.4、器高 27.5、器厚 0.6	①橙色　②良好　③緻密、径１～2mm 赤褐色・茶褐色粒・砂粒多混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫、体部外面下部に多量粘土付着
3区６竪-10	土師器　甕	埋理土、体～底部1/2	底径（5.1）、器高（24.4）、器厚 0.8	①明赤褐色　②良好　③緻密	体～底部外面篦削・内面撫

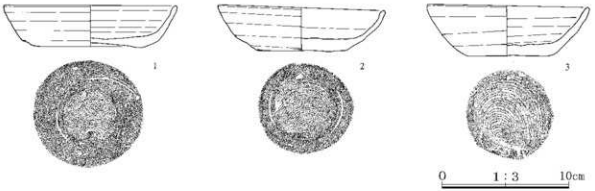


図64　3区6号竪穴建物跡出土遺物（1）

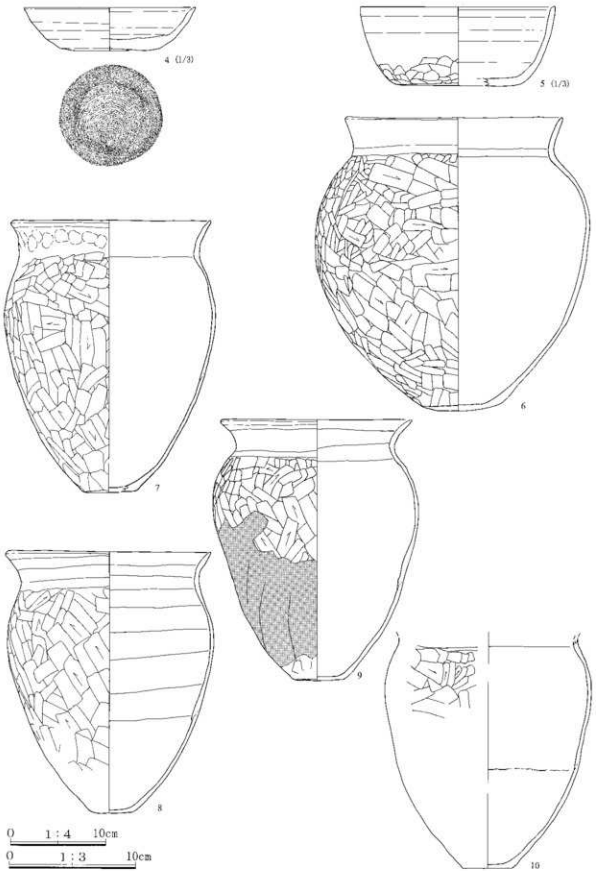


図65　3区6号竪穴建物跡出土遺物（2）

（7）3区7号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央やや東寄りの位置の北端。3区3・9号竪穴建物跡のすぐ北側。X525・Y-660～-665Gr.　**主軸方位：**N-35°-E　**重複：**なし。　**規模と形状：**北東側約1/2以上が調査区外に出るため、全容は不明。確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。北東～南西方向に長い長方形状を呈するものと推測される。長辺確認最大4.05m・短辺確認最大3.8m・床面までの深さ0.34m・掘り方までの深さは0.41m・面積7.05㎡。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**床面：**地山を平坦に削りだした上に暗黄褐色土で薄く貼床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**薄く均質に貼床が貼られており、平坦面を形成している。深さ0.07m程度。　**竈：**調査区外に出て、検出されていないが、土層断面や掘り方の検出状況から南東隅に構築された可能性があるが具体的には不明である。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**不明（古代）。

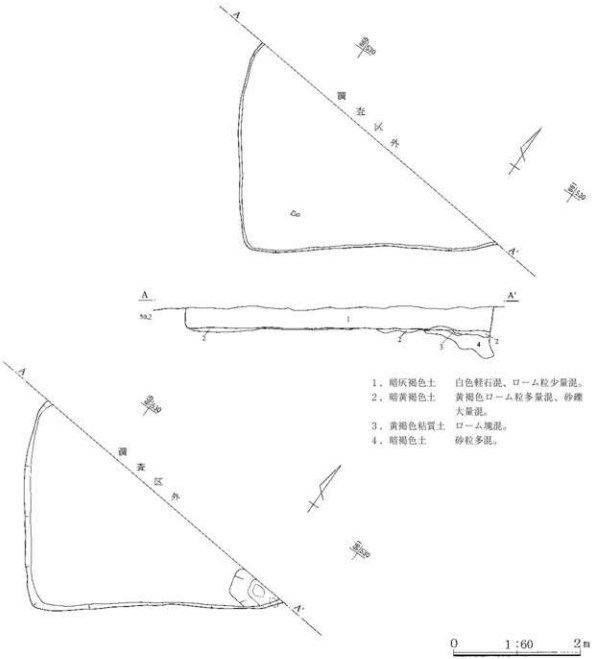


図66　3区7号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

（8）3区8号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央やや東寄りの位置。3区3・9号竪穴建物跡のすぐ南側。3区1号溝跡の北側。3区5号溝跡の東側。X510～515・Y-660～-665Gr.　**主軸方位：**N-60°-E　**重複：**3区2号竪穴建物跡に北東側約1/4強を破壊される。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。北東～南西方向に若干長い長方形状を呈するものと推測される。長辺3.45m・短辺3.25m・床面までの深さ0.2m・掘り方までの深さは0.3m・面積10.7㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をやや大きく掘り込んで上に暗黄褐色土で貼床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**部分部分が大きく掘り窪められ、凹凸がやや甚だしい。厚さ0.14m程度。　**竈：**東壁のほぼ中央に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、小規模である。残存状態も良くない。煙道は顕著には確認できなかった。両袖とも建物内に張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成される。　**貯蔵穴：**南東隅に作られる。南北にやや長い楕円形状を呈する。長径0.35m・短径0.28m・深さ約0.24m。　**時期：**8世紀後半。

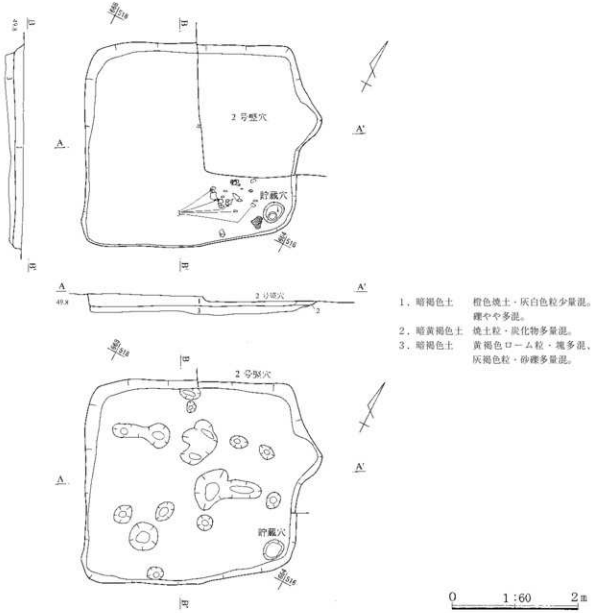


図67　3区8号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

３区８号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区8竪-1	須恵器　杯	床面直上 完形	口径 13.3、底径 7.3、器高 3.4、器厚 0.6	①灰白色　②やや不良　③緻密、径 1mm 以下白色・茶褐色粒子・砂粒やや多混	轆轤成形、底部回転篦削
3区8竪-2	須恵器　杯	埋土 1/4	口径 (13.5)、底径 (8)、器高 3.6、器厚 0.8	①鈍い黄色　②不良　③緻密、径 1mm 以下白色粒子混	轆轤成形、底部回転篦削
3区8竪-3	土師器　甕	掘方埋土 体～底部片	底径 (4)、器高 (26.1)、器厚 0.9	①鈍い赤褐色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・雲母粒子・砂粒微混	体～底部外面篦削・内面撫

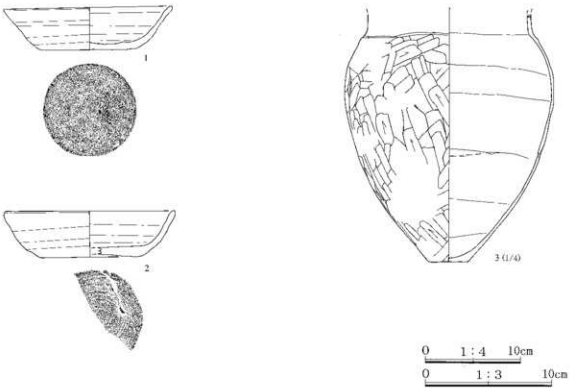
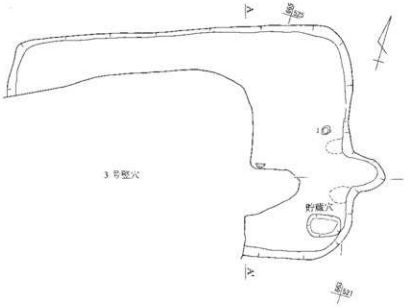


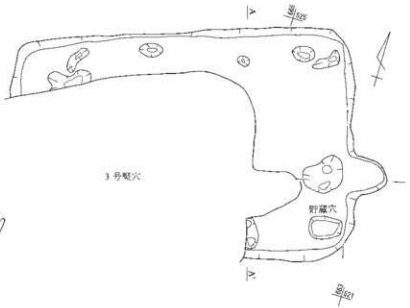
図68　3区8号竪穴建物跡出土遺物

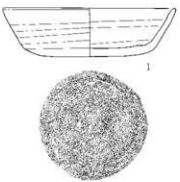
（9）3区9号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央からやや北東寄りの位置。3区7号竪穴建物跡のすぐ南側。3区6号竪穴建物跡のすぐ東側。3区2・8号竪穴建物跡のすぐ北側。X520・Y-660～-665Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**3区3号竪穴建物跡に南西側約1/2強を破壊される。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。北東～南西方向に長い長方形状を呈するものと推測される。長辺6.4m・短辺3.7m・床面までの深さ0.14m・掘り方までの深さは0.28m・確認面積18.79㎡。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**床面：**地山を比較的平坦に掘り込んで上に黄灰褐色土で貼床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**部分部分がやや大きく掘り窪められ、凹凸がやや甚だしい。厚さ0.14m程度。　**竈：**東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、小規模である。残存状態も良くない。煙道は顕著には確認できなかった。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成される。両袖は建物の内部に張り出すが、残存状態が悪く、痕跡しか検出できなかった。　**貯蔵穴：**南東隅に作られる。東西にやや長い隅丸長方形状を呈する。長径0.52m・短径0.35m・深さ約0.2m。　**時期：**８世紀後半。



1．暗灰褐色土　砂礫・小石やや多混、黄褐色粒少量混。
2．黄灰褐色土　砂礫多混、小石微量混。
3．暗灰褐色土　小礫混。





0　1:60　2m

0　1:3　10cm

図69　3区9号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物

3区9号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・接合関係	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区9竪-1	須恵器　杯	床面直上、口縁部一部欠損	口径 13.7、底径 8.5、器高 3.9、器厚 0.7	①灰黄色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・雲母粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転篦削

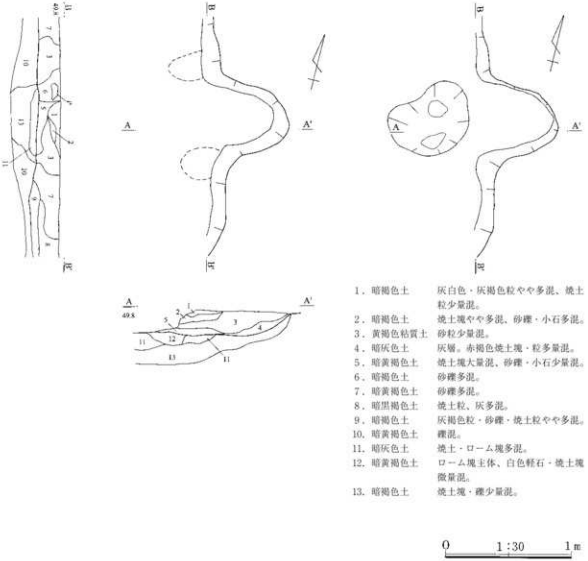


図70　3区9号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

(10) 3区10号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央からやや南寄りの位置。3区11号竪穴建物跡のすぐ南側。3区1号溝跡のすぐ北側。3区5号溝跡のすぐ西側。X505～510・Y-670～-680Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**3区15号竪穴建物跡の南東側約1/2強を掘り込んで破壊する。3区14号竪穴建物跡の拡張によって形成された竪穴建物跡。3区14号竪穴建物跡の拡張であることは、掘り方の精査で明らかに出来た。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。本調査区で検出された竪穴建物跡としては異例とも言えるほぼ正方形状を呈し、一辺5m・床面までの深さ0.67m・確認面積24.12㎡。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**床面：**地山を比較的平坦に掘り込んで、掘り窪んだ部分のみに黄灰褐色土を埋めて非常に薄く貼床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**部分的にやや大きく掘り窪めらるが、凹凸はあまりない。　**竈：**東壁のほぼ中央に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、小規模である。残存状態も良くない。煙道は顕著には確認できなかった。両袖は建物内に若干張り出した痕跡があるが、あまり明確ではない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成される。　**貯蔵穴：**不明。　**時期：**８世紀後半。

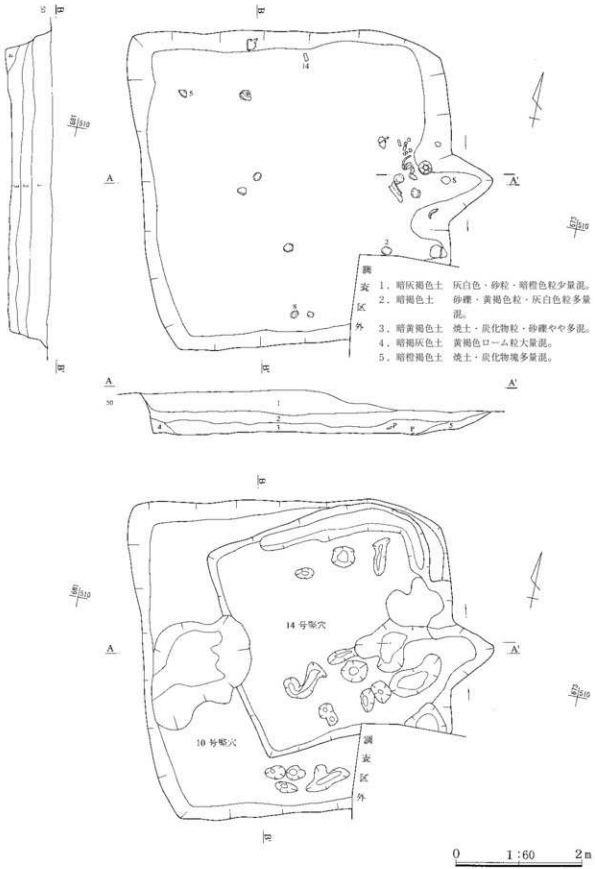
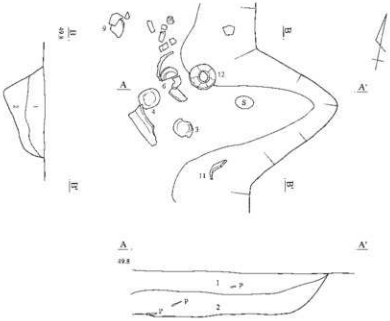


図71　3区10号竪穴建物跡平面図・土層断面図、10・14号竪穴建物跡掘り方平面図



1．暗褐色土　　灰白色粒・砂礫多量混。
2．暗赤褐色土　焼土塊多量混。

0　1:30　1m

図72　3区10号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図

3区10号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量(cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区10竪-1	須恵器 杯	埋土 完形	口径12.7、底径7.6、器高3.5、器厚0.7	①鈍い橙色 ②不良 ③緻密、径1～3mm白色・茶褐色・赤褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切。燈火器としての使用痕跡有、底部内面油煤痕跡遺
3区10竪-2	須恵器 杯	床面直上 4/5	口径13.3、底径8.8、器高3.3、器厚0.8	①浅黄色 ②やや不良 ③粗い、径1～5mm白色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区10竪-3	須恵器 杯	床面直上 一部欠損	口径14.8、底径9.4、器高4、器厚0.9	①鈍い黄橙色 ②やや不良 ③やや粗い、径1～5mm白色・黒色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切。体部外面2箇所正位焼成後刻書「王」
3区10竪-4	須恵器 杯	床面直上 一部欠損	口径14.7、底径8.6、器高4.3、器厚1.3	①鈍い黄橙色 ②やや不良 ③やや粗い、径1～5mm白色・黒色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区10竪-5	須恵器 杯	床面直上 2/3	口径13.4、底径7.4、器高3.6、器厚0.8	①灰白色 ②良好 ③粗い、径1～5mm白色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区10竪-6	須恵器 杯	床面直上 1/3	口径(13)、底径7、器高3.5、器厚1.1	①灰黄色 ②やや不良 ③緻密、径1～3mm赤褐色・茶褐色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区10竪-7	須恵器 杯	埋土 1/3	口径(14.4)、底径(9)、器高3.8、器厚1.1	①灰白色 ②やや不良 ③緻密、径1～3mm白色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区10竪-8	土師器 杯	床面直上 完形	口径11.4、底径5.8、器高4.4、器厚0.6	①黒色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切、全面黒色処理
3区10竪-9	土師器 杯	埋土 体～底部片	底径7.7、器高(4.4)、器厚1	①鈍い黄橙色 ②良好 ③緻密、径1～3mm白色粒子・砂礫多混	轆轤成形、底部回転糸切、焼成後刻書「上」、内面黒色処理
3区10竪-10	須恵器 杯	埋土 1/4	口径(12)、底径(7.4)、器高3.1、器厚0.8	①灰色 ②良好 ③緻密、径1～3mm白色粒子・砂礫やや多混	轆轤成形、底部回転糸切
3区10竪-11	土師器 甕	埋土 ほぼ完形	口径22.8、底径4.7、器高30.6、器厚0.7	①鈍い橙色 ②良好 ③緻密、径1mm以下白色粒子・砂粒混	口縁部内外面横撫、体～底部外面撫削・内面撫
3区10竪-12	土師器 甕	埋土 ほぼ完形	口径21.9、底径5.2、器高36.2、器厚0.7	①明赤褐色 ②良好 ③緻密、径1mm以下白色・赤褐色粒子・砂粒混	口縁部内外面横撫、体～底部外面撫削・内面撫
3区10竪-13	須恵器 鉢	埋土、口縁～体部片	口径(34.4)、器高(12)、器厚1.3	①浅黄色 ②良好 ③緻密、径1～5mm黒色粒子・砂粒多混	轆轤成形、体部外面叩・内面撫
3区10竪-14	土師質 土錘	埋土 ほぼ完形	全長9、幅3.2、器厚1.1、孔径0.9	①黄褐色 ②良好 ③緻密	外面撫

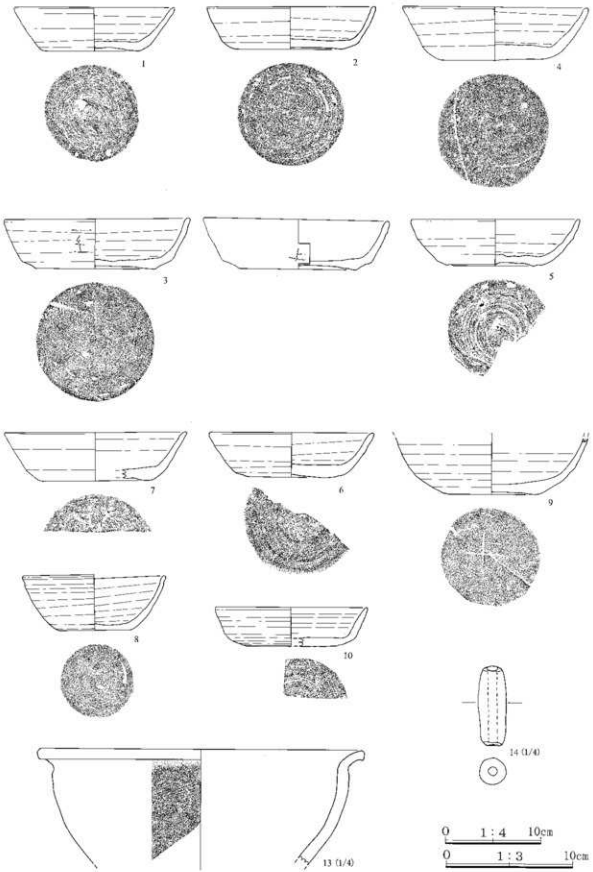
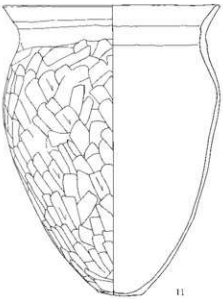
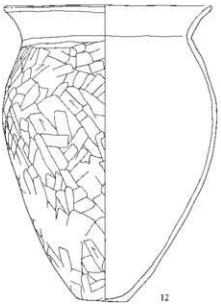


図73　3区10号竪穴建物跡出土遺物（1）





0　1：4　10cm

図74　3区10号竪穴建物跡出土遺物（2）

(11) 3区11号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央に位置する。3区10・14・15・16号竪穴建物跡及び3区1号柱穴列跡のすぐ北側。3区5号竪穴建物跡のすぐ西側。3区1号掘立柱建物跡のすぐ東側。X510～515・Y-680Gr.　**重複：**北西隅が3区12号竪穴建物跡の南東隅を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。北東～南西方向に細長い長方形状を呈しており、長辺4m・短辺3.35m・床面までの深さ0.55m・面積12.87㎡。南西壁が本調査前の試掘坑によって破壊されている。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出すが、部分的に若干深く掘り込んだ場所が広く散在している。掘り窪んだ部分のみに暗褐色土を埋めて非常に薄く貼床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**部分的に小さく掘り窪められ全体的に凹凸が見られるが、掘り込みはあまり深くない。　**竈：**東壁のほぼ中央に取り付く。建物全体の大きさに比してかなり大きく作られており、燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁よりも外側につくられる。煙道は建物の東北側にやや大きく張り出す。燃焼部の奥壁中央に支脚を据えた痕跡と考えられる小さな凹みを検出できた。右袖が建物内に若干張り出している。左袖はほとんど検出されなかった。　**貯蔵穴：**なし。**時期：**8世紀後半。

3区11号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区11竪-1	須恵器　杯	埋土 一部欠損	口径13.7、底径7.4、器高3.8、器厚0.8	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子少量混	轆轤成形、底部回転糸切
3区11竪-2	土師器　杯	埋土 1/2	口径(12.9)、底径(7)、器高3.5、器厚0.8	①鈍い橙色　②良好　③緻密	轆轤成形、底部回転施削、口縁～底部内面黒色処理、体部外面横位墨書「朝」
3区11竪-3	土師器　甕	埋土 2/3	口径18.9、底径3.9、器高28、器厚0.9	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径1mm以下砂粒混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫

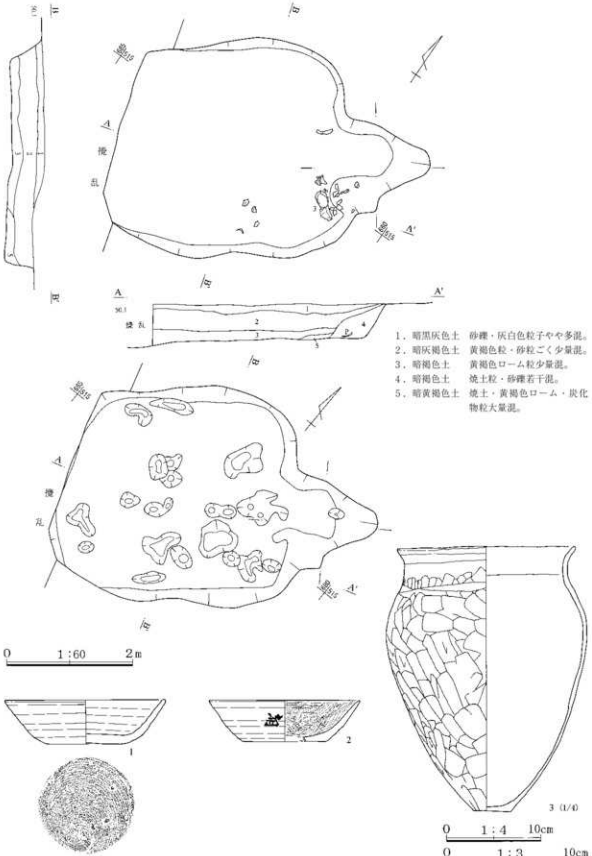
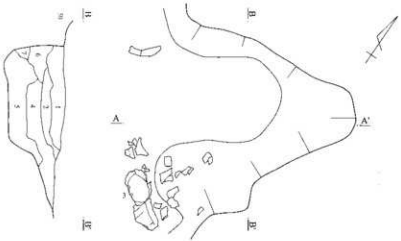
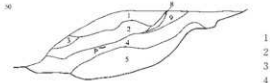
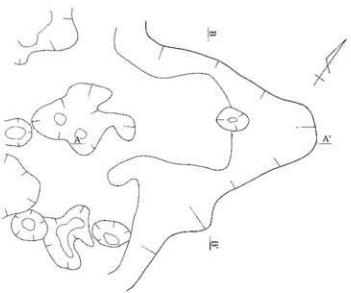


図75　3区11号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物





1．暗褐色土
2．暗黄褐色土　焼土・黄褐色粘質土多混。
3．暗黄褐色粘質土塊。
4．暗黒褐色土　焼土・炭化物粒大量混。
5．暗灰黒色土　黄褐色・焼土粒少量混。
6．暗黄褐色土　砂粒・焼土・炭化物粒少量混。
7．暗黄褐色土　炭化物・灰多量混。
8．暗赤褐色土　焼土塊。
9．暗黄褐色土　黄褐色粘質土と焼土との混土。
灰白色粒やや多混。



0　1:30　1m

図76　3区11号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

(12) 3区12号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央からやや西寄りの位置。3区13号竪穴建物跡のすぐ東側。3区1号掘立柱建物跡のすぐ北側。X510～515・Y-680～-685Gr.　**重複：**本竪穴建物跡の南東隅が3区11号竪穴建物跡に破壊される。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。北東～南西方向に細長い長方形状を呈し

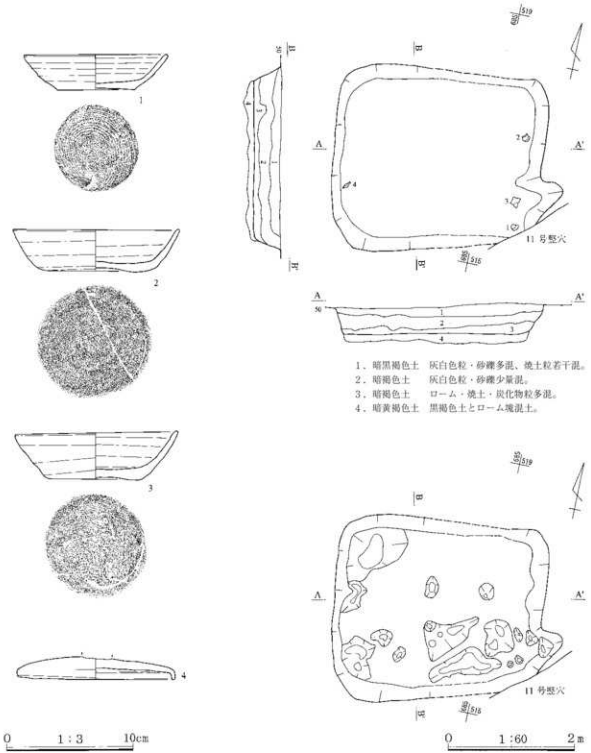


図77　3区12号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・出土遺物

ており、長辺3.7m・短辺2.94m・床面までの深さ0.41m・掘り方までの深さは0.56m・面積9.62㎡。中央よりやや東寄りの位置を南北に、本調査前の試掘坑によって破壊されている。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に、暗黄褐色土で硬質な貼床を形成している。部分的に若干深く掘り込んだ場所が広く散在している。深さ約0.15m。　**掘り方：**部分的に掘り窪められ全体的に凹凸が見られ、起伏がやや甚だしい。　**竈：**3区11号竪穴建物跡によって破壊された南東隅部に竈らしい突起がみられるが、焼土・炭化物等の出土はなく、不明確。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。

3区12号竪穴建物跡

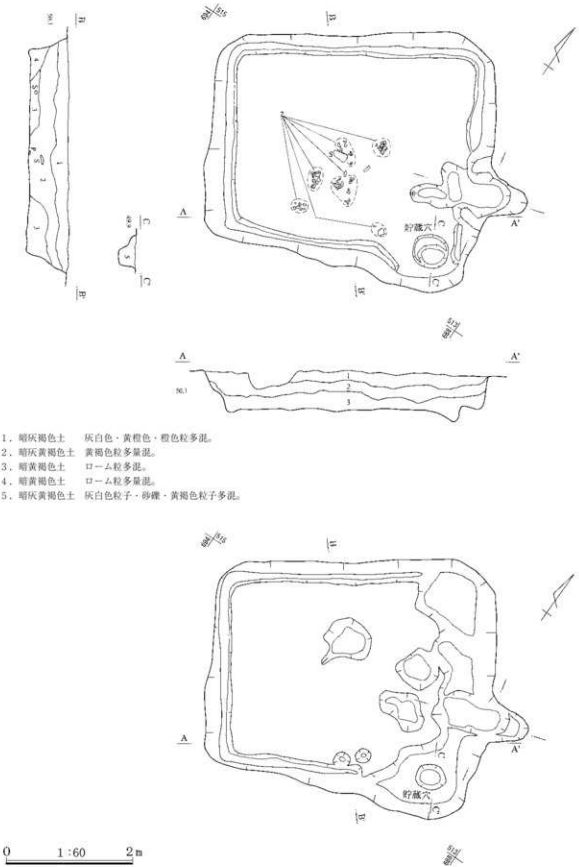
遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量(cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区12竪-1	須恵器 杯	床面直上 1/2	口径(12.2)、底径6.6、器高3、器厚0.8	①灰色 ②良好 ③緻密、径1mm以下白色粒子少量混	轆轤成形、底部回転糸切
3区12竪-2	須恵器 杯	埋土 3/4	口径14.1、底径8、器高3.5、器厚0.8	①灰黄色 ②不良 ③粗い、径1mm以下白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
3区12竪-3	須恵器 杯	埋土 2/3	口径13.8、底径7.8、器高4.1、器厚1	①灰黄色 ②良好 ③緻密、径1mm以下白色・黒色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
3区12竪-4	須恵器 蓋	埋土 摘み欠損	径13.4、器高(2)、器厚0.8	①灰色 ②良好 ③緻密、径1mm以下砂粒混	轆轤成形、内面擦過痕明瞭

(13) 3区13号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央からやや西寄りの位置。3区12号竪穴建物跡及び3区1号掘立柱建物跡の西側。3区3・4号土坑跡のすぐ北側。3区で検出された最西の竪穴建物跡。X510～515・Y-685～-690Gr.　**重複：**なし。**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。北東～南西方向に細長い長方形状を呈しており、南東の隅がやや外側に張り出す特異な形状を呈している。竈と貯蔵穴が存在する箇所以外に周溝が巡っている。長辺4.45m・短辺4.1m・床面までの深さ0.59m・面積16.4㎡。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。**床面：**地山をほぼ平坦に削り出すが、掘り窪んだ部分のみに暗黄褐色土を埋めて非常に薄く貼床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**竈前から建物中央にかけて、部分的に深く掘り込んだ場所が広く散在し凹凸が見られるが、掘り込みはあまり深くない。　**周溝：**最大上幅0.2m・最大下幅0.15m・深さ0.04m。**竈：**東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁とほぼ同位置につくられている。煙道は建物の東北側に張り出す。右袖が建物内に若干張り出している。左袖はほとんど張り出さない。竈の前面はやや広く、手前側に若干深く掘り窪められており、焼土や灰、炭化物の堆積が顕著であった。　**貯蔵穴：**南東隅部において検出。平面ほぼ円形を呈し、長径0.6m・短径0.54m・深さ約0.25m。　**時期：**9世紀前半。

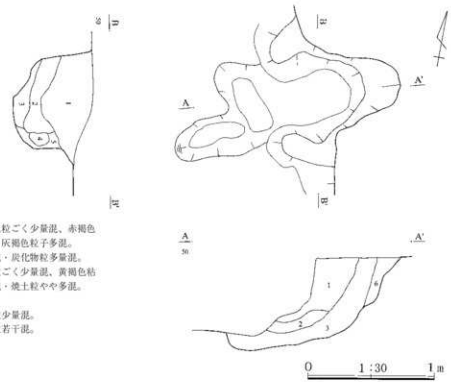
(14) 3区14号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央からやや南寄りの位置。3区5号竪穴建物跡のすぐ南側。3区1号溝跡のすぐ北側。3区5号溝跡のすぐ西側。3区10号竪穴建物跡の掘り方から検出。X505～510・Y-675Gr.　**主軸方位：**N-65°-E　**重複：**本竪穴建物跡の拡張によって形成された3区10号竪穴建物跡によって破壊されている。　**規模と形状：**3区10号竪穴建物跡の掘り方を精査した段階で、掘り方の残骸が辛うじて確認できた程度。確認面が完全に削平されており、検出状況は不良である。本調査区で検出された竪穴建物跡としては異例とも言えるほぼ正方形状を呈し、一辺約3.5m・確認面積12.22㎡。　**掘り方：**建物の東辺から北辺にかけて周溝状に比較的深い掘り込みがなされ、さらに部分的に掘り窪められ凹凸がある。　**竈：**東壁のほぼ中央に取り付く竈の痕跡が検出された。煙道は顕著には確認できなかった。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成される。**貯蔵穴：**不明。　**時期：**不明（古代）。



1．暗灰褐色土　灰白色・黄橙色・橙色粒多混。
2．暗灰黄褐色土　黄褐色粒多量混。
3．暗黄褐色土　ローム粒多混。
4．暗黄褐色土　ローム粒多量混。
5．暗灰黄褐色土　灰白色粒子・砂礫・黄褐色粒子多混。

図78　3区13号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図



1．暗灰黄褐色土　黄褐色粒ごく少量混、赤褐色焼土・灰褐色粒子多混。
2．暗赤褐色土　焼土塊・炭化物粒多量混。
3．暗褐色土　焼土粒ごく少量混、黄褐色粘質土塊・焼土粒やや多混。
4．灰黄褐色粘質土塊
5．暗灰褐色土　焼土粒少量混。
6．暗褐色土　焼土粒若干混。

図79　3区13号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図

3区13号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量(cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区13竪-1	須恵器　杯	埋土 1/3	口径(12.8)、底径(7)、器高4.9、器厚1.3	①浅黄色　②不良　③緻密	糸切離成形、底部回転糸切
3区13竪-2	土師器　甕	埋土 1/2	口径24.4、底径7.8、器高31.6、器厚0.7	①にぶい橙色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子・砂粒やや多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面斜削・内面撫

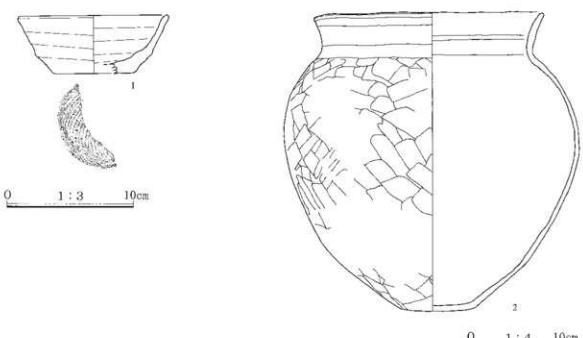


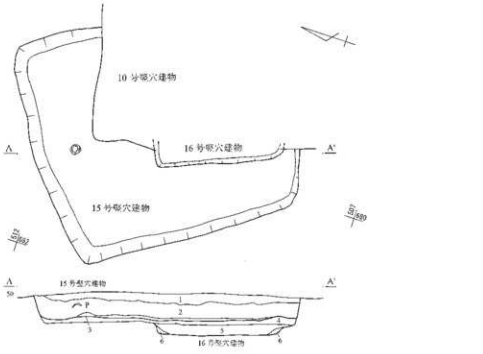
図80　3区13号竪穴建物跡出土遺物

(15) 3区15号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央からやや南寄りの位置。3区11号竪穴建物跡のすぐ南側。3区1号溝跡のすぐ北側。3区1号柱穴列跡のすぐ東側。X505～510・Y-675～-680Gr.　**主軸方位：**N-60°-E　**重複：**南東隅から中央にかけて3区10号竪穴建物跡によって約2/3が破壊されている。　**規模と形状：**3区10号竪穴建物跡によって大きく破壊されており、西・北辺と東辺のごく一部が検出できた程度である。また、確認面も完全に削平されており、検出状況は不良である。北東～南西方向にやや長い長方形状を呈し、長辺約3.6m・短辺3.5m・床面までの深さは0.41m・掘り方までの深さは約0.5m・確認面積6.22㎡。　**床面：**地山を凹凸激しく掘り込んだ後に暗茶褐色土を薄く均質に貼って、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**部分的に比較的深く掘り込まれ、凹凸が甚だしい。厚さ約0.09m。　**竈：**不明。　**貯蔵穴：**不明。　**時期：**8世紀後半。

(16) 3区16号竪穴建物跡

位置：3区のほぼ中央からやや南寄りの位置。3区11号竪穴建物跡のすぐ南側。3区1号溝跡のすぐ北側。3区1号柱穴列跡のすぐ東側。X505～510・Y-675～-680Gr.　**主軸方位：**N-60°-E　**重複：**3区15号竪穴建物跡床下から南西の壁のごく一部の痕跡が検出された程度である。　**規模と形状：**15号竪穴建物跡の床面からの深さは0.22m・確認面積0.8㎡。　**床面：**不明。　**掘り方：**不明。　**竈：**不明。　**貯蔵穴：**不明。　**時期：**不明(古代)。



1．暗黒褐色土　灰白色粒・焼土粒・砂礫少量混。
2．暗褐色土　灰白色粒・焼土粒・砂礫少量混。
3．暗灰褐色土　灰白色粒・砂粒やや多混。
4．暗茶褐色土　砂粒・黒褐色粒・黄褐色粒多混。
5．暗褐色土　灰白色粒多混、黒色土塊やや多混。
6．暗黄褐色土　黄褐色ローム粒多混。

図81　3区15・16号竪穴建物跡平面図・土層断面図

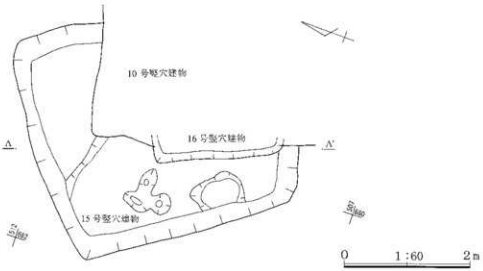


図82　3区15・16号竪穴建物跡掘り方平面図

3区 15 号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土位置・遺存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区15竪-1	須恵器　杯	埋土 1/4	口径 (13.4)、底径 (8)、器高 3.5、器厚 0.8	①灰色　②良好　③緻密、径1～5mm 白色・黒色粒子多量混	轆轤成形、底部回転糸切

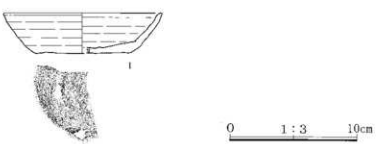


図83　3区15号竪穴建物跡出土遺物

第3項　溝跡

3区では7条の溝跡が検出されている。3区1～6号溝跡と、4区1号溝跡の北側に繋がる部分である。　調査区の東西両端と中央部の南側を斜めに横切るコの字型の巨大な3区1号溝は、調査対象範囲では総延長約100m近くに及び、竪穴建物跡群を区画するかに見えなくもないが、竪穴建物跡との重複は無くそれらとの時期差は不明である。

その他に4区から北側に延びる大きな4区1号溝跡の続きの部分が検出されている。奈良時代の用水路と考えられる遺構であるが4区1号溝の北側に延びる部分は、3区1号溝跡に破壊されている。

その他は小規模な溝跡である。3区5号溝跡は3区6号竪穴建物跡や3区1号溝跡に破壊されており、3区で検出された他の遺構よりも先行する古い溝跡と考えられる。

(1) 3区1号溝跡

位置：3区の東端から中央の南端寄り、さらに西端にかけて。X495～525・Y-635～-725Gr.　3区1号竪穴建物

跡・2～4・6号溝跡の北、3区1号掘立柱建物跡・1号柱穴列跡・2～16号竪穴建物跡等の南側。　**主軸方位：**東端の北端から南東方向に約12.5mはN-30°-W、約90°屈曲し、西南西に向きを変え、N-70°-E、西北・西南端では再び約90°向きを変え、N-20°-W　**重複：**3区3～6号溝跡及び3区で検出された4区1号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**3区の東北端から3区の中央部南端よりの位置を斜めに横切って調査区の西南・西北端に至る、コの字型に区画する巨大な溝跡。東北端から約12.5mの位置までは北北西～南南東方向、中央部東端でおよそ直角に屈曲してから南端中央西寄りの位置までは東北東～西南西方向に、その先は調査区外に出て、西北・西南端では再び直角に屈曲して北北西～南南東方向となる。西北・西南端では溝の肩両端は検出できず、東岸と底部の東半分だけが検出できただけである。調査区の東端及び西端で検出された続きの部分は北に延びている様子が判明するが、本調査区の北に当たる位置でかって昭和61・62年度に群馬県営波良瀬川流域地域地区公害防除特別土地改良事業に伴って太田市教育委員会が発掘調査した際には、その続きの部分らしい区画溝跡は検出されていない。調査対象範囲での確認全長は83.2m・推定延長は約100m・最大上幅4.8m・最大下幅1.8m・深さ1.35m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**暗黄褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。　**その他：**最下層が砂質土・シルト質土なので、水流があったとみられるが、底部付近はさほど水流によって浸食された様子は看取できない。規模や形状から見て、相応の、なんらかの施設等を囲った区画溝と考えられるが、調査対象範囲では、コの字型の大溝で区画された内側では竪穴建物跡群と小規模な掘立柱建物跡しか検出されず、どのような施設の範囲を区画した溝跡であるのかは明らかに出来なかった。また、生活道路と用水路を隔てて南側に隣接する4区においても、この大型区画溝跡に関連するような遺構は全く検出されていない。

（２）3区2号溝跡

位置：3区の東南端付近。3区1号溝跡の南側、3区4号溝跡の西側。X505・Y-640～-650Gr.　**主軸方位：**南西端約3.5mの位置までは北西方向N-25°-W、約35°屈曲し、西に向きを変え、S-80°-E　**重複：**3区3号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**3区の東南端付近から北西方向に向かい、途中、約3.5mの位置で西南西に向きを変え、屈曲点から約10mの位置で止まる、細く、小規模な溝跡。3区東南端より南側は調査区外に出る。南東に継続する部分は、南側に隣接する4区では検出されなかった。調査対象範囲での確認全長は約13m・最大上幅0.42m・最大下幅0.25m・深さ0.1m。断面は薄い逆台形状を呈している。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。

（３）3区3号溝跡

位置：3区の東南端付近。3区1号溝跡の南側、3区4号溝跡の西側。X505～510・Y-645～-650Gr.　**主軸方位：**N-30°-E　**重複：**3区1・2号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**3区の東南端からやや西寄りの位置を北東～南西方向に走向する小規模な溝跡。3区1号溝跡以北は検出されない。南西端は調査区外に出、4区13号溝跡に続く。調査対象範囲での確認全長は約8.8m・最大上幅0.34m・最大下幅0.2m・深さ0.11m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**暗灰黄褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。

（４）3区4号溝跡

位置：3区の東南端付近。3区1号溝跡の南側、3区2・3号溝跡の東側。X505～515・Y-635～-640Gr.　**主軸方位：**N-30°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**3区の東南端からやや北寄りの位置を北西～南東方向に走向す

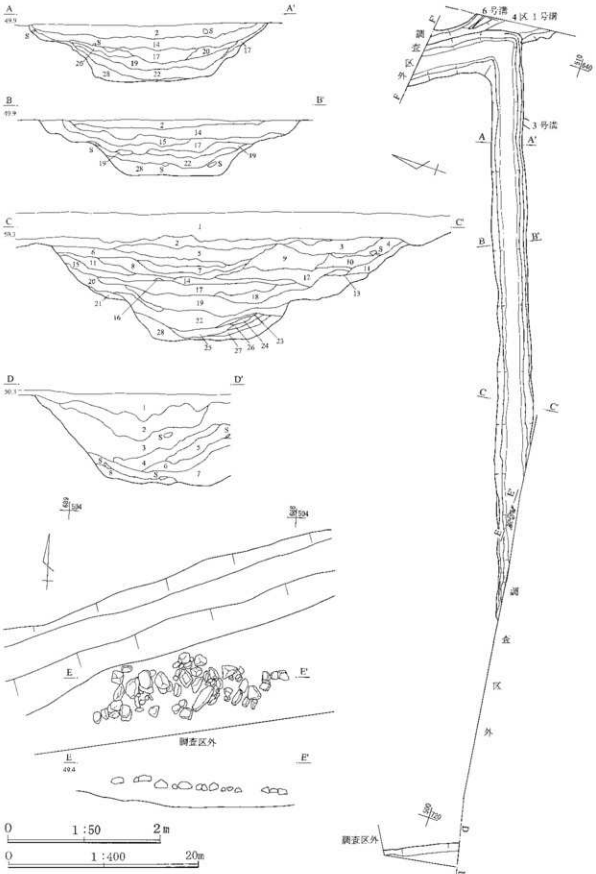
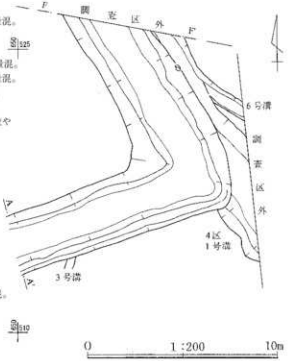
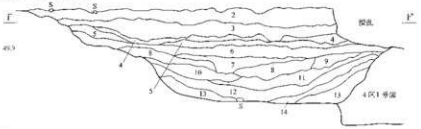


図84　3区1号溝跡平面図・土層断面図・エレベーション図

1．暗灰黄褐色土　黄褐色・灰褐色・灰白色粒多量混。
2．暗灰褐色土　砂礫、小石やや多混、黄褐色・黄橙色粒微量混。
3．暗黒灰色土　灰褐色土塊少量混、黄褐色粒やや多混、灰褐色土塊やや多混、黄褐色粒少量混。
4．暗灰色砂質土　As-B軽石多量混、黄橙色・赤褐色粒ごく少量混。
5．黒褐色土　砂礫・小石少量混、黄褐色ローム粒ごく少量混。
6．黄褐色土　砂礫・小石やや多混、黄褐色ローム粒多混。
7．暗黄褐色土　黄褐色・黄橙色粒、小石多混。
8．暗黒褐色土　黄褐色・黄橙色粒若干混、灰白色・灰褐色粒やや多混。砂礫多量混。
9．暗黄褐色土　砂礫・小石多量混。
10．暗灰黄褐色土　灰白色・褐灰色粒少量混。砂粒多量混。
11．明灰黄褐色土　灰褐色・赤褐色粒少量混。砂礫多量混。
12．明灰黄褐色土　黄橙色・灰褐色粒多量混。
13．明灰黄褐色砂質土　灰褐色・灰白色粒多量混。
14．明黄褐色砂質土　黄褐色粒多量混、明黄褐色土塊多混。
15．明褐灰色シルト質土　砂粒・灰白色・灰褐色粒多量混。
16．暗灰褐色土　黄褐色・灰白色粒ごく少量混。
17．暗灰色シルト質土　灰白色粒ごく少量混。
18．暗灰褐色土　砂礫・黄褐色土塊・灰白色粒やや多混。
19．暗褐色土　黄褐色粒大量混、灰白色・橙色粒ごく少量混。
20．暗灰色シルト質土　灰白色・黄褐色粒少量混。
21．暗黄褐色土　黄褐色ローム粒多量混。
22．暗灰褐色シルト質土　灰白色砂礫・黄褐色粒大量混。
23．暗青灰色シルト質土　灰白色粒ごく少量混。
24．暗黒褐色シルト質土　灰白色粒ごく少量混。
25．暗灰褐色シルト質土　灰白色・黒褐色砂礫多混。
26．暗黒灰色シルト質土　灰白色粒若干混。
27．暗灰色シルト質土
28．暗黄褐色シルト質土　黄褐色粒・黄褐色ローム塊大量混。





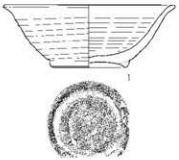


図85　3区1号溝跡東南隅部付近平面図・土層断面図・出土遺物、3区6号溝跡平面図

3区1号溝跡

遺物番号	器種	出土状況・保存状態	法量(cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区1溝-1	須恵器　椀	埋土 1/2	口径(14.6)、底径6.1、器高5.3、器厚0.8	①灰黄色 ②良好 ③緻密、径1～5mm白色・黒色粒子混	轆轤成形、底部回転糸切後高台部貼付

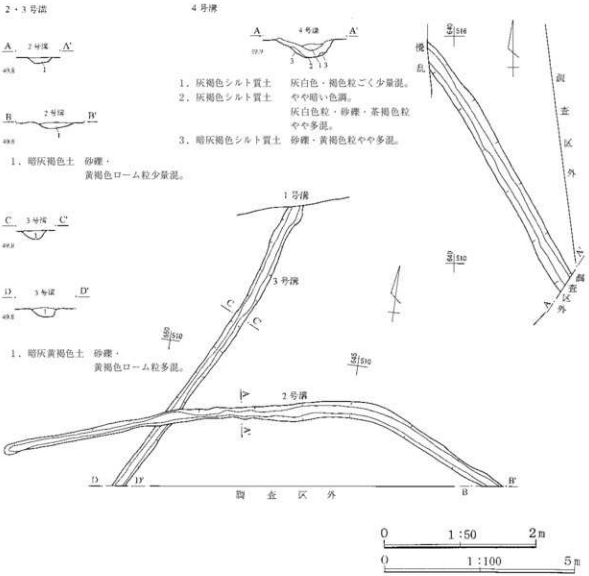


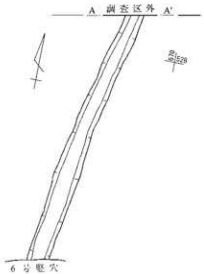
図86　3区2・3・4号溝跡平面図・土層断面図

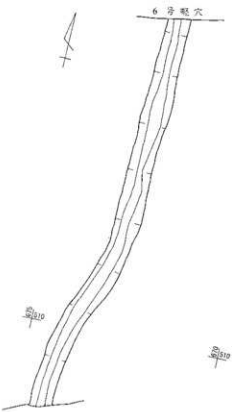
る小規模な溝跡。3区1号溝跡以北は検出されない。南東端は調査区外に出、4区2号溝跡に続く。調査対象範囲での確認全長は約7.1m・最大上幅0.5m・最大下幅0.2m・深さ0.16m。断面は逆台形状を呈している。**埋土：**灰褐色シルト質土ベース。　**時期：**8世紀後半。

（5）3区5号溝跡

位置：3区の中央から若干東寄りの位置。3区1～3・7～9号竪穴建物跡・2～4・6号溝跡・3区内4区1号溝跡の西側、3区1号掘立柱建物跡・1号柱穴列跡・4・5・10～16号竪穴建物跡・ピット群等の東側。X500～525・Y-670Gr.　**主軸方位：**N-30°-W　**重複：**3区6号竪穴建物跡・1号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**3区の中央よりやや東寄りの位置を南北に走向する小規模な溝跡。北端は調査区外に延びる。南端も調査区外に出、4区11・14号溝跡に続き、検出最大延長は約105mに及ぶ。調査対象範囲での確認全長は約26.5m・最大上幅0.7m・最大下幅0.3m・深さ0.61m。断面は逆三角形状を呈している。　**埋土：**灰褐色砂質土ベース。　**時期：**7世紀後半。

1．灰褐色砂質土　砂粒多混。





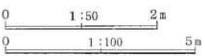


図87　3区5号溝跡平面図・土層断面図

（6）3区6号溝跡

位置：3区の北東端寄りの位置。3区1号・3区内4区1号溝跡の東側。X520・Y-635Gr.　**主軸方位：**N-65°-W　**重複：**3区1号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**3区の北東端を北西～南東方向に走向する小規模な溝跡。北西端は3区1号・4区1号溝跡に破壊され、南東端は調査区外に延びる。南端は調査区外に出る。調査対象範囲での確認全長は約2.6m・最大上幅0.88m・最大下幅0.51m・深さ0.5m。断面は逆台形状を呈している。**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**7世紀後半。

（7）3区内4区1号溝跡

位置：3区の北東端から東端の位置。3区4号溝跡のすぐ東側、3区6号溝跡のすぐ西側。X510～525・Y-635～-640Gr.　**主軸方位：**N-45°-W　**重複：**3区1号溝跡に破壊され、3区6号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**4区の東端付近で検出された奈良時代大溝の北側に続く部分。北はさらに調査区の外に延びている。3区の北東端から東端にかけて北西～南東方向に走向する大規模な溝跡。上面を3区1号溝跡に大きく破壊され、大部分は3区1号溝跡の底面下から検出された。残存状態は不良。3区調査対象範囲での確認全長は約14.3m・最大上幅2.1m・最大下幅1.8m・深さ0.5m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**8世紀前半。

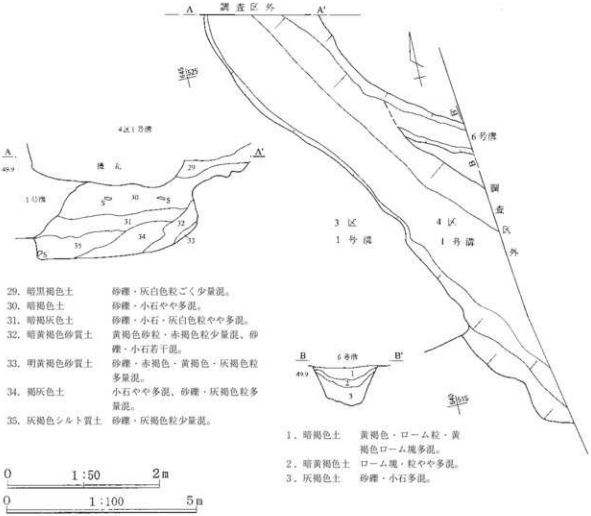


図88　3区内4区1・6号溝跡平面図・土層断面図

第4項　土坑・ピット跡

3区では4基の土坑跡と22基のピット跡が検出されている。22基のピット群は、調査区の中央やや北寄りの位置に集中して検出されている。調査時にも掘立柱建物跡の可能性を模索し、様々に試行を繰り返したが、平面図形態や掘り方がまちまちであり、掘立柱建物跡や柱穴列跡と考えるには無理があるように思われた。

いずれも用途は不明の穴である。出土遺物が少ないので、これらの土坑跡の時期は不明であるが、確認面や他の遺構との新旧関係から平安時代前期の遺構と考えられる。

（1）3区3号土坑跡

位置：3区の中央より西寄りの位置。3区13号竪穴建物跡のすぐ南側。X510・Y-690Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**東西に長い楕円形状を呈し、長径0.66m・短径0.46m・深さ0.22m・面積0.26㎡、断面は半楕円形状を呈す。**埋土：**暗褐色土ベース。

（2）3区4号土坑跡

位置：3区の中央より西寄りの位置。3区13号竪穴建物跡のすぐ南側。X510・Y-690Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**円形状を呈し、径0.5m・深さ0.35m・面積0.19㎡、断面はやや緩やかな逆三角形状を呈する。**埋土：**黒褐色土ベース。

（3）3区5号土坑跡

位置：3区の中央よりやや南寄りの位置。3区15号竪穴建物跡のすぐ西側。3区1号柱穴列跡のすぐ東側。X505・Y-680Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**円形状を呈し、径0.33m・深さ0.55m・面積0.08㎡、断面は半楕円形状を呈する。　**埋土：**暗黒褐色土ベース。

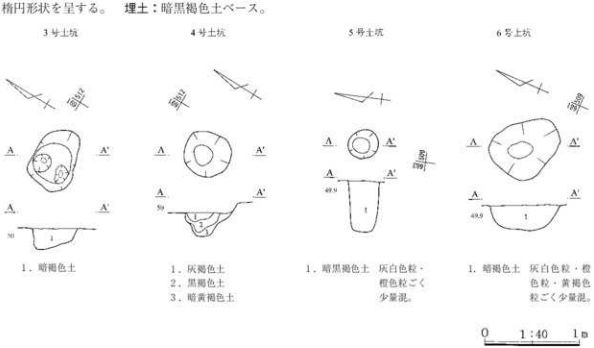


図89　3区3・4・5・6号土坑跡平面図・土層断面図

（４）3区6号土坑跡

位置：3区の中央よりやや南寄りの位置。3区15号竪穴建物跡のすぐ西側。3区1号柱穴列跡のすぐ東側。X505・Y-680Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**北西～南東方向に長い楕円形状を呈し、長径0.75m・短径0.62m・深さ0.25m・面積0.35㎡、断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

（５）3区ピット群

位置：3区の中央よりやや西北寄りの位置。3区11・12号竪穴建物跡のすぐ北側。3区4～6号竪穴建物跡のすぐ西側。X515～520・Y-680～685Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**他の遺構が無い空間に大小22基のピットが掘り込まれている。調査時にも掘立柱建物跡や柱穴列跡の可能性を模索し、さまざまに試行錯誤を繰り返したが、いずれも平面図の大きさも深さもまちまちであり、建物の一部を構成する柱穴とは見なしがたかった。用途は不明。　**埋土：**暗灰褐色砂質土ベース。

表2　3区ピット群内検出ピット一覧表

Pit No.	平面形状	断面形状	長径m	短径m	深さm
1	ほぼ円形	幅が狭く深い逆台形	0.35	－	0.34
2	東北東-西南西に長い楕円形	幅が狭く深い逆台形	0.45	0.35	0.34
3	ほぼ円形	浅く緩やかな逆台形	0.34	－	0.21
4	不整円形	幅が狭く深い逆台形	0.37	－	0.36
5	不整円形	隅丸二等辺三角形	0.39	－	0.32
6	隅丸長方形状	浅く緩やかな逆台形	0.7	0.48	0.15
7	北西-南東に長い楕円形	階段状	0.63	0.57	0.47
8	ほぼ円形	浅く緩やかな半不整円形	0.4	－	0.14
9	不整円形	浅い逆台形	0.49	0.44	0.2
10	ほぼ円形	浅い逆台形	0.45	－	0.22
11	東西にやや長い楕円形	幅が狭く深い逆台形	0.48	0.42	0.48
12	ほぼ円形	緩やかな逆三角形	0.24	－	0.12
13	東西にやや長い楕円形	緩やかな逆台形	0.44	0.38	0.24
14	ほぼ円形	幅が狭く深い逆台形	0.24	－	0.37
15	東西にやや長い楕円形	幅が狭く深い逆台形	0.39	0.28	0.41
16	北東-南西にやや長い楕円形	幅が狭く深い隅丸二等辺三角形	0.42	0.34	0.45
17	北西-南東に長い楕円形	幅がやや狭くやや深い半長円形	0.42	0.34	0.32
18	西北西-東南東にやや長い楕円形	幅がやや狭くやや深い逆台形	0.47	0.38	0.4
19	南北にやや長い楕円形	幅がやや狭い逆台形	0.41	0.39	0.19
20	東西に若干長い楕円形	半長円形	0.46	0.41	0.24
21	北東-南西にやや長い楕円形	半長円形	0.32	0.28	0.17
22	北東-南西にやや長い楕円形	隅丸逆三角形	0.56	0.5	0.48

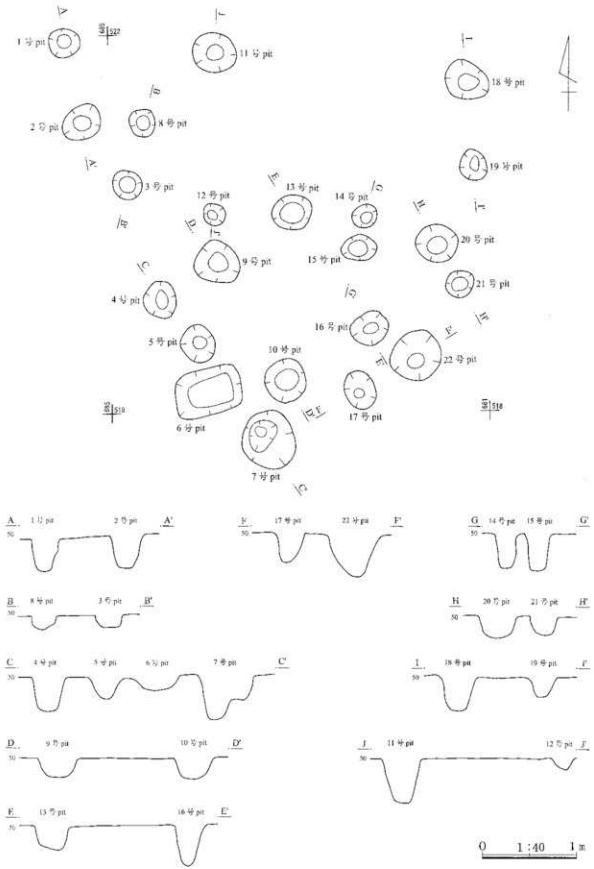
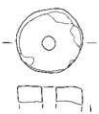


図90　3区ピット跡平面図・エレベーション図

第５項　表土出土遺物

３区表土

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm/g)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区表-1	土製　紡錘車	表土 ほぼ完形	径3.5、器厚 (1)、孔径 0.7 重 13.75	①にぶい黄色　②良好　③緻密	表面撫



0　1：2　5cm

図91　3区表土出土遺物

第4節　4区の遺構と遺物

4区は太田・桐生インターチェンジの北側の半円形の周回道路の中央の部分に当たる。北側を、東西に走る生活道路とそれに並行する用水路を隔ててインターチェンジ周回道路の北端部分に当たる3区と接している。面積は4,090㎡。確認面は1面のみであり、古墳時代後期～平安時代前期の遺構が同位置のレベルにおいて確認、検出されている。

中央部は、インターチェンジの緑地帯として破壊が及ばない範囲とされたため、当時の日本道路公団東京第二建設局と県教育委員会文化課との協議により調査対象から外されたため、調査区の中央が空白地帯になる。ゆえに、調査区は仮に東翼区・西翼区・中央南端区のおよそ3箇所に大まかに分けられる。3区と同様、西に隣接する大道東遺跡、その更に西側に隣接する大道西遺跡の集落が形されている微高地が、2区の東側から4区・鹿島浦遺跡との境に位置する南北方向の太田市道にかけて北側から入ってくる谷の東側の微高地に当たる。

古墳時代後期から平安時代に至る遺構が検出されている。掘立柱建物跡6棟、竪穴建物跡22棟、溝跡14条、井戸跡1基、土坑跡14基などの遺構が検出されている。

なお、遺構の調査を終了したところから、2・3区と同様、旧石器の確認調査を実施したが、旧石器は確認されなかった。

第1項　掘立柱建物跡

4区では掘立柱建物跡が6棟検出されている。いずれも調査区の西北隅に集中している。主軸方位は必ずしも一致していないが、大体が北西-南東方向に長い長方形状を呈しており、桁行3間×梁間2間もしくは2間×2間の小規模な側柱建物のみである。建物の規則的な配置がなされているとは見なしがたい。

（1）4区1号掘立柱建物跡

位置：4区の北西隅のやや中央寄りの位置。4区13号土坑跡のすぐ西側、4区2号掘立柱建物跡・4区12号竪穴建物跡のすぐ東側に隣接する。X465～475・Y-685～-695Gr.　**主軸方位：**N-25°-W　**重複：**建物の範囲内に4区14号土坑跡が入るが、新旧関係は不明である。　**規模と形状：**桁行3間×梁間2間の北西～南東方向に長い側柱建物で、長辺約7.6m・短辺5.74mの長方形状を呈する。北西辺及び南東辺の柱穴で建て替えの痕跡が特に明瞭であり、少なくとも2次にわたる変遷が想定できる。　**柱穴：**柱穴跡は10基検出され、いずれもしっかりとした掘り方を有し、柱痕が比較的明瞭に検出できたものもある。柱穴はいずれも不整円形状を呈し、規模は小さいがしっかりとした掘り方を有する。東北隅pit1長径0.99m・短径0.71m・深さ0.77m。東辺北から2番目pit2長径0.66m・短径0.59m・深さ0.5m。東辺北から3番目pit3長径0.5m・短径0.49m・深さ0.56m。南東隅pit4長径0.69m・短径0.62m・深さ0.68m・柱痕径0.17m。南辺中央pit5長径0.69m・短辺0.62m・深さ0.5m。南西隅pit6長径1.12m・短径0.75m・深さ0.7m・柱痕径0.14m。西辺北から3番目pit7長径0.74m・短径0.6m・深さ0.58m。西辺北から2番目pit8長径0.7m・短径0.61m・深さ0.6m・柱痕径0.18m。北西隅pit9長径0.7m・短径0.52m・深さ0.62m。北辺中央pit10長径1.31m・短径0.7m・深さ0.62m。　**柱穴埋**

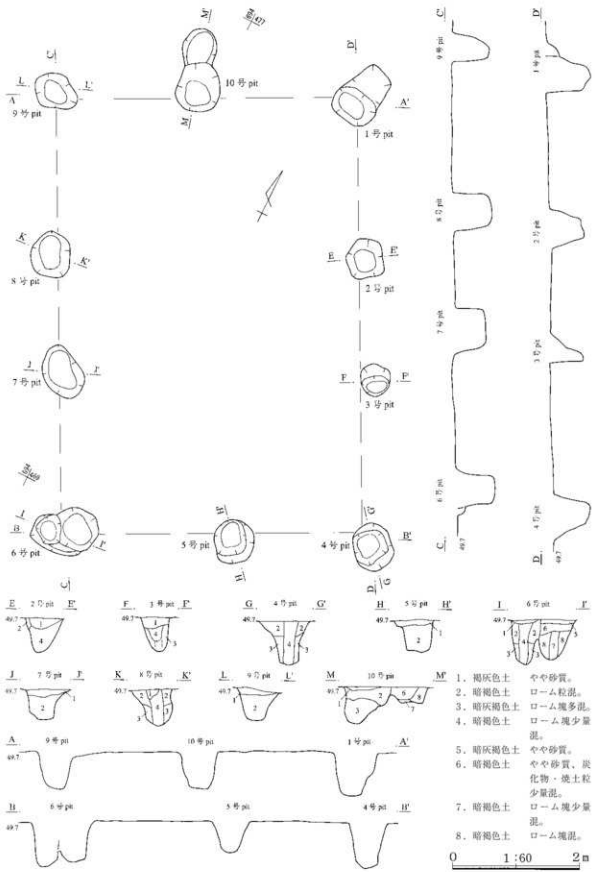


図92　4区1号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

土：暗灰褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。

（２）4区2号掘立柱建物跡

位置：4区の北西隅のやや中央寄りの位置。4区1号掘立柱建物跡のすぐ西側、4区3号掘立柱建物跡のすぐ北側に隣接する。X460～470・Y-695～-700Gr.　**主軸方位：**N-19°-W　**重複：**4区12号竪穴建物跡に北西隅を破壊される。4区3号掘立柱建物跡を掘り込む。　**規模と形状：**桁行３間×梁間２間の北西～南東方向に長い側柱建物で、長辺約7.32m・短辺5.57mの長方形状を呈する。柱穴の平面形態や埋土堆積状況からは建て替えがなされた痕跡は見出しがたい。　**柱穴：**柱穴跡は８基検出され、いずれもしっかりとした掘り方を有し、柱痕が比較的明瞭に検出できたものもある。柱穴はいずれも不整円形ないし楕円形状を呈し、規模は小さい。北西隅と西辺北から２番目の柱穴は4区12号竪穴建物跡によって破壊されている。東北隅pit1長径0.68m・短径0.5m・深さ0.5m・柱痕径0.18m。東辺北から２番目pit2長径0.58m・短径0.5m・深さ0.4m・柱痕径0.16m。東辺北から３番目pit3長径0.68m・短径0.5m・深さ0.41m・柱痕径0.14m。南東隅pit4長径0.54m・短径0.5m・深さ0.46m。南辺中央pit5長径0.5m・短辺0.44m・深さ0.34m。南西隅pit6径0.6m・深さ0.5m。西辺北から３番目pit7長径0.68m・短径0.44m・深さ0.51m。北辺中央pit10径0.5m・深さ0.48m。　**柱穴埋土：**暗灰褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。

（３）4区3号掘立柱建物跡

位置：4区の北西隅のやや中央寄りの位置。4区12号竪穴建物跡のすぐ南側、4区14・20・22号竪穴建物跡のすぐ北側に隣接する。X455～460・Y-695～-700Gr.　**主軸方位：**N-2°-W　**重複：**4区13号竪穴建物跡に南西隅を破壊される。4区2・4・5号掘立柱建物跡に掘り込まれる。　**規模と形状：**桁行３間×梁間２間の南北方向に長い側柱建物で、長辺約7.9m・短辺5.1mの長方形状を呈する。柱穴の平面形態や埋土堆積状況からは建て替えがなされた痕跡は見出しがたい。　**柱穴：**柱穴跡は９基検出され、いずれもしっかりとした掘り方を有し、柱痕が比較的明瞭に検出できたものが多い。柱穴はいずれも不整円形ないし楕円形状を呈し、規模は小さい。南西隅の柱穴は4区13号竪穴建物跡によって破壊されている。東北隅pit1長径0.68m・短径0.5m・深さ0.4m。東辺北から２番目pit2長径0.64m・短径0.58m・深さ0.5m・柱痕径0.21m。東辺北から３番目pit3長径0.48m・短径0.46m・深さ0.4m・柱痕径0.16m。南東隅pit4長径0.6m・短径0.5m・深さ0.42m・柱痕径0.2m。南辺中央pit5径0.48m・深さ0.4m・柱痕径0.12m。西辺北から３番目pit7径0.5m・深さ0.5m・柱痕径0.14m。西辺北から２番目pit8径0.5m・深さ0.32m。北辺北西隅pit9長径0.68m・短径0.5m・深さ0.28m。北辺中央pit10長径0.76m・短径0.58m・深さ0.66m・柱痕径0.2m。　**柱穴埋土：**暗灰褐色土ベース。　**時期：**８世紀後半。

（４）4区4号掘立柱建物跡

位置：4区の北西隅のやや中央寄りの位置。4区12号竪穴建物跡のすぐ南側、4区14・20・22号竪穴建物跡のすぐ北側に隣接する。X455～460・Y-695～-700Gr.　**主軸方位：**N-9°-W　**重複：**4区13号竪穴建物跡に南西隅を破壊される。4区3号掘立柱建物跡を掘り込む。　**規模と形状：**桁行２間×梁間２間の南北にやや長い側柱建物で、長辺約5.2m・短辺4.2mの長方形状を呈する。柱穴の平面形態や埋土堆積状況からは建て替えがなされた痕跡は見出しがたい。　**柱穴：**柱穴跡は６基検出され、いずれもしっかりとした掘り方を有し、柱痕が比較的明瞭に検出できたものが多い。柱穴はいずれも不整円形ないし楕円形状を呈し、規模は小さい。

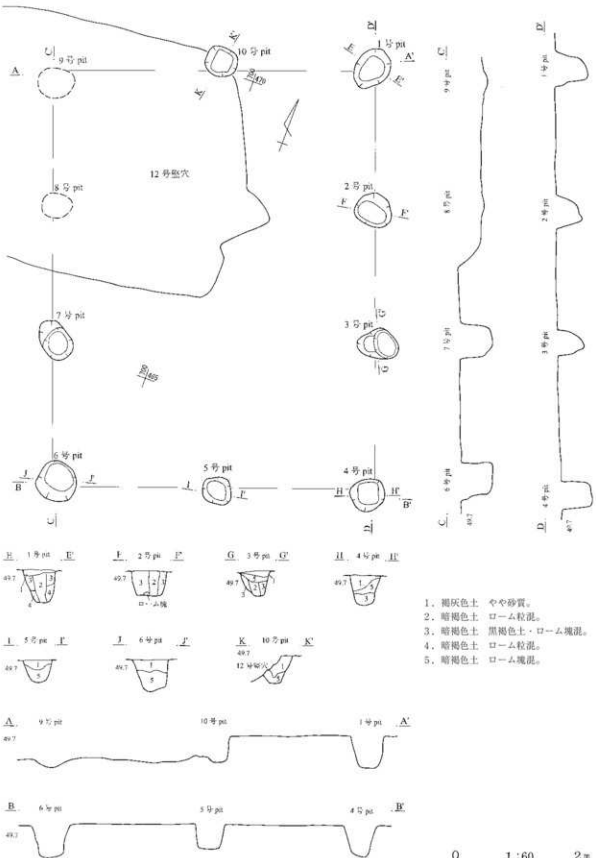


図93　4区2号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

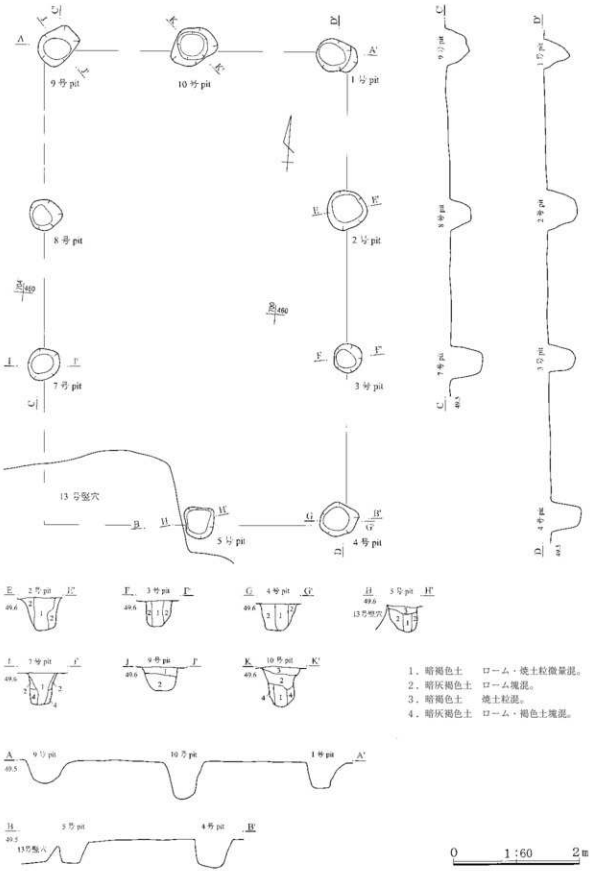


図94　4区3号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

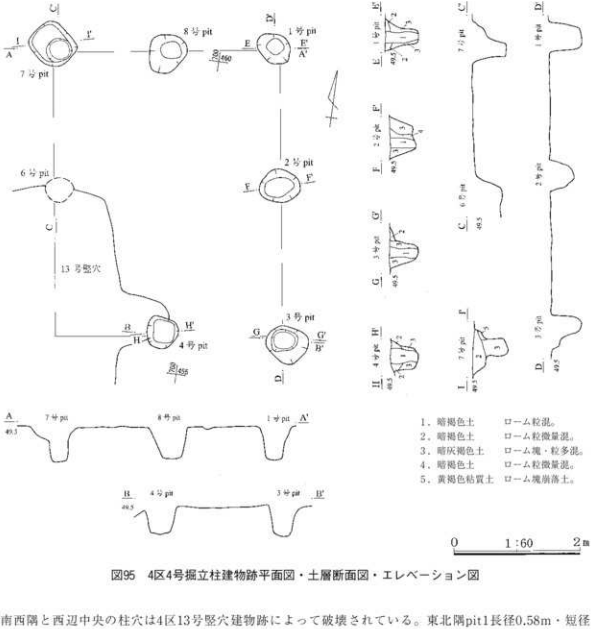


図95　4区4号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

南西隅と西辺中央の柱穴は4区13号竪穴建物跡によって破壊されている。東北隅pit1長径0.58m・短径0.48m・深さ0.5m・柱痕径0.18m。東辺中央pit2長径0.68m・短径0.5m・深さ0.4m・柱痕径0.18m。南東隅pit3長径0.7m・短径0.6m・深さ0.48m・柱痕径0.18m。南辺中央pit4径0.5m・深さ0.46m・柱痕径0.18m。北西隅pit7長径0.8m・短径0.7m・深さ0.59m。北辺中央pit8径0.6m・深さ0.5m。　**柱穴埋土：**暗褐色土ベース。**時期：**8世紀後半。

（5）4区5号掘立柱建物跡

位置：4区の北西隅付近の位置。4区6号掘立柱建物跡のすぐ南側、4区2号掘立柱建物跡のすぐ西側、4区12号竪穴建物跡のすぐ南西隅に隣接する。X460～465・Y-700～-705Gr.　**主軸方位：**N-2°-W　**重複：**4区3号掘立柱建物跡を掘り込む。　**規模と形状：**桁行2間×梁間2間の小規模な側柱建物で、南東隅が若干突出した1辺約5mの不整方形状を呈する。柱穴の平面形態や埋土堆積状況からは建て替えがなされた痕跡は見出しがたい。　**柱穴：**柱穴跡は8基検出され、いずれもしっかりとした掘り方を有し、柱痕が比較的明瞭に検出

できたものが多い。柱穴はいずれも不整円形ないし楕円形状を呈し、規模は小さい。東北隅pit1長径0.54m・短径0.42m・深さ0.34m。東辺中央pit2径0.5m・深さ0.34m。南東隅pit3長径0.58m・短径0.44m・深さ0.32m。南辺中央pit4径0.4m・深さ0.28m。南西隅pit5径0.42m・深さ0.32m。西辺中央pit6径0.4m・深さ0.26m。北西隅pit7径0.28m・深さ0.4m。北辺中央pit8径0.4m・深さ0.18m。　**柱穴埋土：**暗灰褐色土ベース。**時期：**8世紀後半。

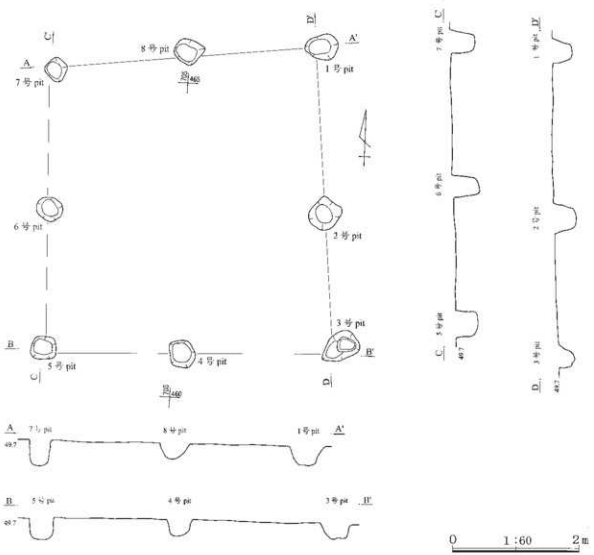


図96　4区5号掘立柱建物跡平面図・エレベーション図

（6）4区6号掘立柱建物跡

位置：4区の北西隅付近の位置。4区5号掘立柱建物跡のすぐ北側に隣接する。X465～470・Y-700～-705Gr.　**主軸方位：**N-24°-W　**重複：**北西隅を4区11号竪穴建物跡に掘り込まれ、破壊される。　**規模と形状：**北東～南西方向にやや長い桁行2間×梁間2間の小規模な側柱建物で、長辺約4.8m・短辺約4.1mの不整方形状を呈する。柱穴の平面形態や埋土堆積状況からは建て替えがなされた痕跡は見出しがたい。　**柱穴：**柱穴跡は8基検出され、いずれもしっかりとした掘り方を有し、本調査区で検出された他の掘立柱建物跡のようには柱痕は検出できなかった。柱穴はいずれも不整円形ないし楕円形状を呈し、規模は小さい。北西隅を4区

11号竪穴建物跡によって掘り込まれ、破壊されており、西辺中央柱穴pit6は深さのみ、北西隅柱穴pit7及び北辺中央柱穴pit8は底部付近のみが検出された。東北隅pit1長径0.68m・短径0.6m・深さ0.4m。東辺中央pit2長径0.56m・短径0.54m・深さ0.42m。南東隅pit3長径0.5m・短径0.48m・深さ0.54m。南辺中央pit4長径0.48m・短径0.46m・深さ0.32m。南西隅pit5長径0.6m・短径0.5m・深さ0.48m。西辺中央pit6径：破壊により不明・深さ（0.5m）。北西隅pit7長径（0.52m）・短径（0.46m）・深さ（0.5m）。北辺中央pit8径：破壊により不明・深さ0.38m。　**柱穴埋土：**暗灰褐色土ベース。　**時期：**8世紀後半。

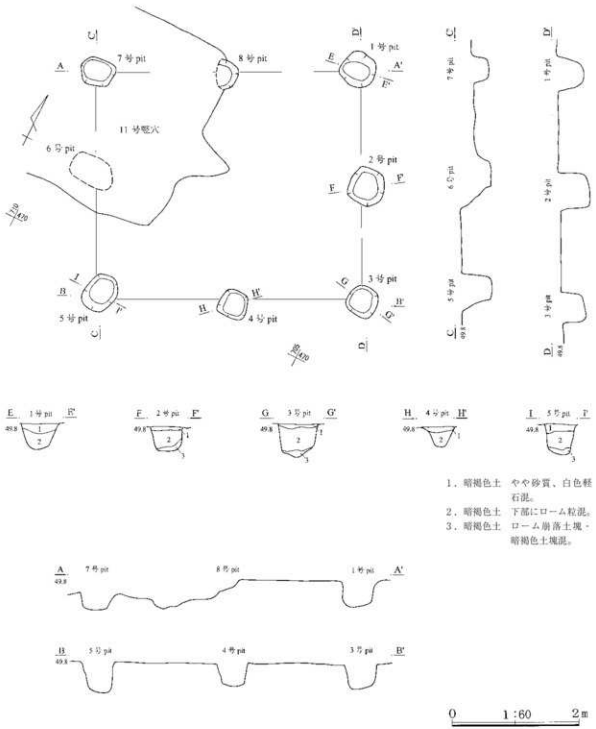


図97　4区6号掘立柱建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

第２項　竪穴建物跡

4区では22棟の竪穴建物跡が検出されている。うち、重複しているものを含めて、四辺が検出されているのはそのうちの14棟である。調査区の全域にまんべんなく散在しており、3区で検出された竪穴建物跡ほどの激しい切り合いは無い。全容が検出できた竪穴建物跡で重複がないものも７棟存在している。3区で検出されたのと同じように、同じような位置に竪穴建物を造営しようとする強い意志は3区ほどには顕著に感じられない。

2区・3区で検出された竪穴建物跡同様、竈が東壁に取り付くものが圧倒的多数であるが、調査対象範囲では、３棟だけ東壁に竈が取り付かない竪穴建物跡を検出している。主軸方位はほぼ類似している。また、3区同様、東北～南西方向にやや長い長方形状を呈する特徴的な竪穴建物跡がいくつか検出されている。先述したように、このような縦長の竪穴建物跡は、本調査区の北に隣接する3区で特に顕著であり、また本調査区の南側に隣接する鹿島浦遺跡でも多数検出されている。各地の事例に勘案すれば、このような形状の竪穴建物は、単なる住居ではなく工房的な要素が顕著であるという傾向があるが、本調査区で検出された竪穴建物跡からは、3区の同型の竪穴建物跡同様、工房的な要素は看取できなかった。この点は、本調査区の南に隣接する鹿島浦遺跡の調査成果と併せて、検討すべき課題と言えよう。

（１）4区1号竪穴建物跡

位置：4区の北東端よりやや中央寄りの位置。4区5号溝跡のすぐ西側に隣接する。X485・Y-635～-640Gr.**主軸方位：**N-13°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。東北東～西南西方向に長い長方形状を呈し、北辺に竈が取り付く。長辺4.15m・短辺3.32m・床面までの深さ0.16m・掘り方までの深さ0.27m・面積12.93㎡。　**埋土：**黒褐色土ベース。　**床面：**地山を比較的平坦に削りだした上に、約0.11mの厚さで暗褐色土を厚く貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**しっかりとした掘り込みであるが、地山は平坦に削り出されており、凹凸はあまり顕著ではない。　**竈：**上面の削平を受け、検出状況は余り良好とは言い難い。北壁の中央よりやや東寄りの位置に構築される。本遺跡では数少ない北側に竈が取り付く竪穴建物跡の一つである。燃焼部は地山を削りだして形成され、建物の壁とほぼ並行した位置に形成されている。左右両袖とも自然石を芯材とし粘土を貼って形成しているが完全に破壊されて粘土はほとんど見られず、芯材が露出している。煙道は顕著には検出できなかった。　**貯蔵穴：**竈の斜め右傍、建物の北東隅に掘り込まれている。東西に長い不整楕円形状を呈し、長径0.6m・短径0.46m・深さ0.15m。　**時期：**８世紀後半。

4区１号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区１竪-4	須恵器　杯	埋土 3/4	口径13.2、底径7.2、器高3.6、器厚0.6	①灰黄色　②良好　③粗い、径１～3mm黒褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外面墨書「正」

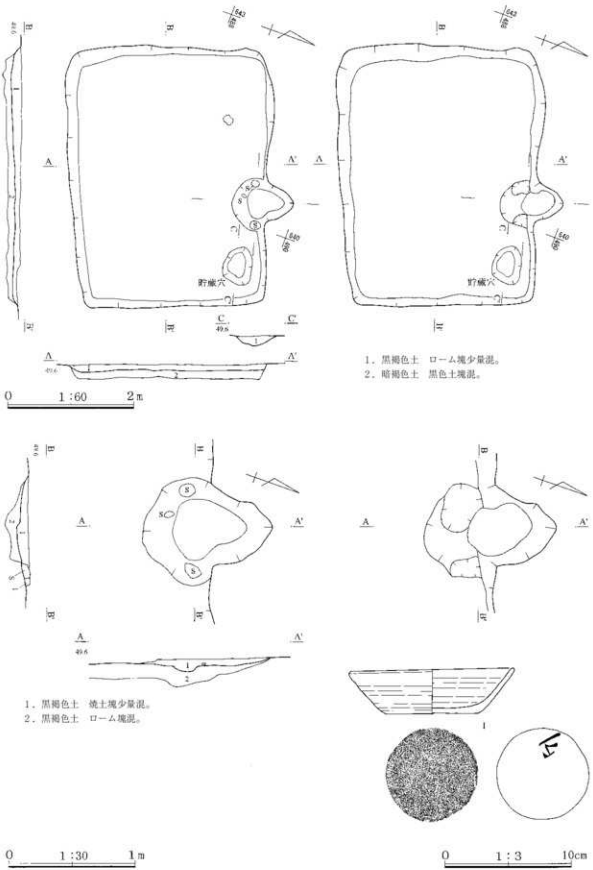
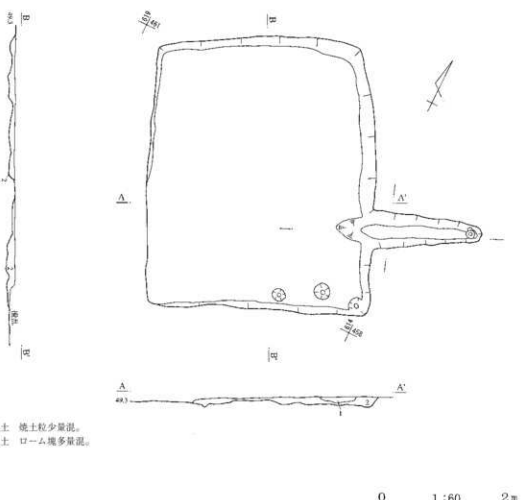


図98　4区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物

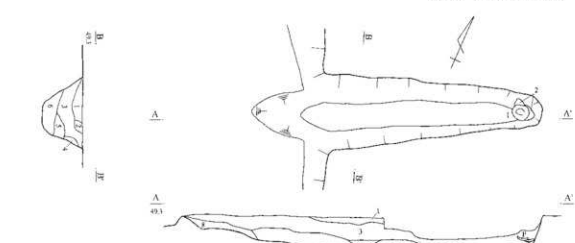
（2）4区2号竪穴建物跡

位置：4区の東翼区の西端、中央よりやや南寄りの位置。4区3号竪穴建物跡のすぐ南に隣接する。X455～460・Y-610～-615Gr.　**主軸方位：**N-67°-E　**重複：**4区4号竪穴建物跡の北東辺の一部を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は極めて不良で、検出時には床面直上であった。実際には掘り方の部分のみが残骸として検出できた程度である。北西～南東方向にやや長い長方形状を呈し、東壁に竈が取り付く。長辺4.25m・短辺3.52m・掘り方までの深さ0.15m・面積15.82㎡。　**埋土：**不明。　**床面：**地山を比較的平坦に削り出して厚さ約0.15m黒褐色土を貼り付けて硬質な床面を形成している。　**掘り方：**比較的平坦に削り出しているとはいえ、全体にあまり顕著ではないが、若干の起伏は存在している。床面下の土坑等は全く検出されなかった。　**竈：**北東側壁の南東寄りの位置に取り付く。燃焼部及び煙道は地山を削り出して形成され、煙道は燃焼部の奥に非常に長く延びる。壁からの突出は約1.74m。燃焼部・袖は掘り方のみが検出され、袖の様相は全く不明である。燃焼部は建物の壁と並行ないしその外側に形成され、煙道立ち上がりは不明確である。本遺跡2・3・4区で検出された竪穴建物跡では、煙道が顕著に確認できたものは非常に少なく、本竪穴建物ほど煙道が長く延びる例は、本遺跡では異例である。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**9世紀前半。



1．黒褐色土　焼土粒少量混。
2．黒褐色土　ローム塊多量混。

図99　4区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図



1．暗灰褐色土　砂粒多混、焼土・炭化物・ローム粒混。
2．暗黄褐色土　ローム粒多混、焼土・炭化物粒混。
3．灰褐色土　焼土粒・炭化物粒多混、ローム粒混。
4．黄褐色粘質土　ローム塊崩落土。
5．灰褐色土　ローム粒多混、炭化物・焼土粒少量混。
6．灰褐色土　ローム粒多混。
7．暗褐色土　ローム粒・焼土粒混。
8．暗褐色土　ローム塊多混。

図100　4区2号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図

4区2号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・遺存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区2竪-1	須恵器　杯	電掘方埋土 口縁一部欠	口径133、底径6.7、器高4.2、器厚0.9	①灰黄色　②良好　③粗い、径1～3mm黒褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切
4区2竪-2	須恵器　杯	電掘方埋土 口縁一部欠	口径133、底径7.2、器高3.9、器厚0.8	①灰黄色　②やや不良　③粗い、径1～3mm黒褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切後撫
4区2竪-3	土師器　甕	掘方埋土 口1～体部片	口径（132）、器高（63）、器厚0.6	①明褐色　②良好　③緻密、径1mm白色、黒褐色粒子・砂粒多混	口唇部内外面撫、口縁～体部外面撫削・内面撫

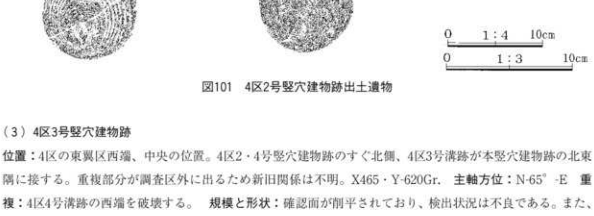


図101　4区2号竪穴建物跡出土遺物

（3）4区3号竪穴建物跡

位置：4区の東翼区西端、中央の位置。4区2・4号竪穴建物跡のすぐ北側、4区3号溝跡が本竪穴建物跡の北東隅に接する。重複部分が調査区外に出るため新旧関係は不明。X465・Y-620Gr.　**主軸方位：**N-65°-E　**重複：**4区4号溝跡の西端を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。また、竪穴建物跡の西側大半が調査区外に出るため、調査できたのは竈が取り付く北東辺と、北東及び南東の隅部だけである。形状は不明。北東辺4.27m・床面までの深さ0.39m・掘り方までの深さは0.45m・面積4.11㎡。

埋土：灰褐色土ベース。　**床面**：地山を平坦に削り出した上に、黄灰褐色土を厚さ約0.06mで薄く貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方**：地山を平坦に削り出しており、大きな掘り込みはないが、全体的に微小な凹凸はみられる。深さ0.06m程度。　**竈**：北東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖は建物内に大きく張り出す。燃焼部は建物の壁の内側に形成され、壁燃焼部内部の掘り方はあまり顕著ではない。上面の削平により煙道はほとんど検出されなかったが、燃焼部の奥壁から急激に立ち上がる様子が看取された。　**貯蔵穴**：建物の北東隅、竈左袖のはるか北側で検出された。東西に長い楕円形状を呈し、長径0.53m・短径0.46m・深さ0.5m。**時期**：不明（古代）。

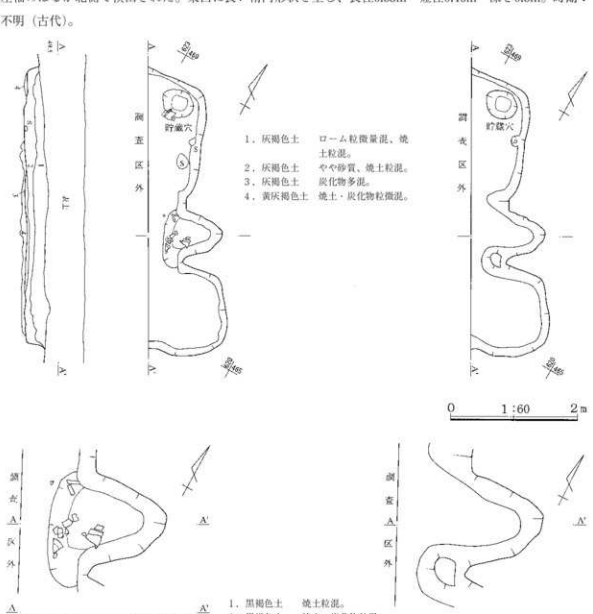


図102　4区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

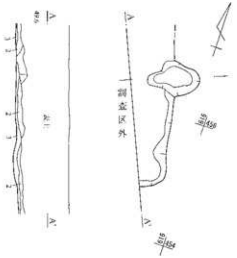
4区3号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区3竪-1	鉄器　刀子	埋土 柄先一部欠	全長 (11.4)、刃部長 7.6、 柄長 (3.2)、幅 1.3、器厚 0.4		

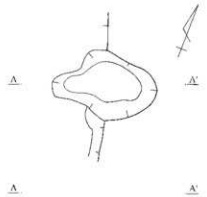
図103　4区3号竪穴建物跡出土遺物

(4) 4区4号竪穴建物跡

位置：4区の東翼区西端の中央部よりやや南寄りの位置。4区3号竪穴建物跡の南、4区6号溝跡の北に隣接する。X450～455・Y-615Gr.　**主軸方位：**N-65°-E　**重複：**4区2号竪穴建物跡に北東隅を掘り込まれ、破壊される。　**規模と形状：**確認面が削平されており、ほとんど掘り方のみが検出できたような状態で、検出状況は不良である。東北～南西方向の方形の竪穴建物跡であることは判明するが、建物跡の大部分は西側調査区外に出、建物跡の北東隅を4区2号竪穴建物跡によって掘り込まれて破壊されるため、全容は全く不明である。東北側の壁に竈が取り付く。竈と南東隅部付近が検出できたに過ぎない。床面までの深さ0.12m・掘り方までの深さは0.15m・確認面積1.53㎡。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**床面：**地山を平坦に削り出した上に灰褐色土を約0.03m貼って平坦で硬質な床面を形成している。　**掘り方：**比較的平坦に地山を削りだしており、あまり凹凸は顕著ではない。　**竈：**北東辺に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。ほとんど掘り方のごく薄い残骸のみ検出。両袖は建物内に少し張り出している。燃焼部は建物の壁とほぼ並行の位置から外側にかけて形成されているが、残存状態が極めて悪く、詳細は不明である。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**不明（古代）。



1．灰褐色土
2．灰褐色土　焼土・砂粒微混。
3．灰褐色土　やや砂質、ローム塊混。



1．黒褐色土　焼土粒微量混。
2．黒褐色土　焼土粒少量混。

図104　4区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図

（5）4区5号竪穴建物跡

位置：4区の東翼の南西端寄りの位置。4区7号竪穴建物跡のすぐ東側、4区8号竪穴建物跡・1・2・3号土坑跡のすぐ北側に隣接する。X440・Y-605～-610Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**4区6号竪穴建物跡の南西隅を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。東北東～西南西方向に長い長方形状を呈し、東側に竈が取り付く。長辺3.65m・短辺3.14m・床面までの深さ0.24m・掘り方までの深さは0.31m・面積11.82㎡。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**床面：**地山をやや大きく掘り込んだ上に、黄白色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**中央部の所々が大きく掘り込まれ、凹凸が激しい。深さ0.07m程度。　**竈：**東壁の中央からやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、両袖と煙道は明確に検出出来なかった。両袖は建物内にほとんど張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置にほぼ並行して形成される。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。

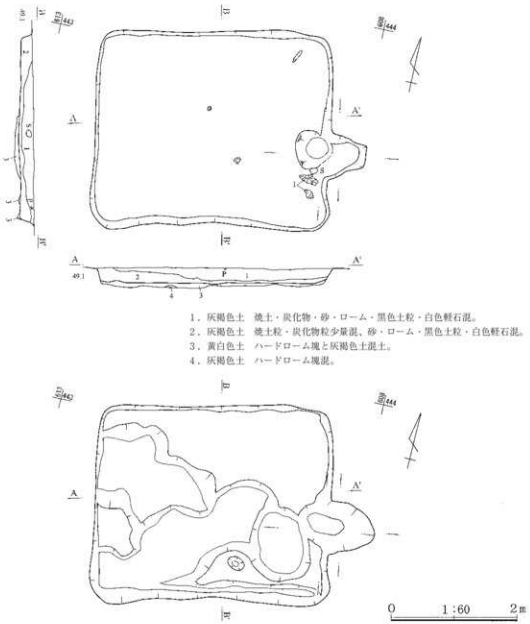


図105　4区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

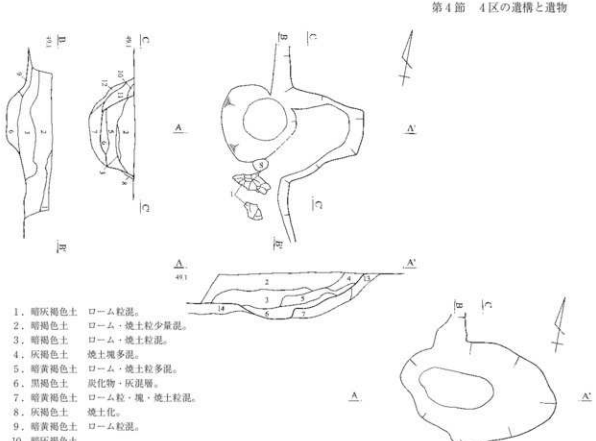


図106　4区5号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

４区５号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
４区５竪-1	土師器　鉢	床面直上 4/5	口径 17.8、底径 9.2、器高 11.9、器厚 1.1	①鈍い黄橙色　②良好　③緻密、径 3mm 赤・黒褐色粒子・砂粒多混	輪積成形、底部回転施削、内面黒色処理

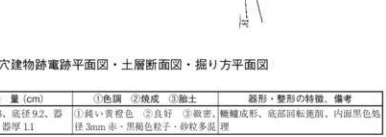


図107　4区5号竪穴建物跡出土遺物

（６）４区6号竪穴建物跡

位置：4区の東翼区の南西端寄りの位置。4区7号竪穴建物跡のすぐ東側、4区8号竪穴建物跡・1号井戸跡・1・2・3号土坑跡のすぐ北側に隣接する。X440～445・Y-605～-610Gr.　**主軸方位：**N-60°-E　**重複：**4区5号竪穴建物跡に南西隅を掘り込まれ、破壊される。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は不良である。北東～南西方向に長い長方形状を呈し、北東側の壁に竈が取り付く。長辺4.48m・短辺3.18m・床

面までの深さ0.1m・掘り方までの深さは0.17m・確認面積12.87㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を比較的平坦に削り出した上に、暗褐色土で貼り床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**比較的平坦に地山を削りだしているため、ほとんど凹凸は見られない。深さ0.07m程度。　**竈：**東壁の中央から南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は明確に検出出来なかった。左右両袖は建物内に若干張り出す。燃焼部は建物の壁よりも外側に形成される。燃焼部の奥壁は煙道に向かって緩やかに立ち上がる。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**不明（古代）。

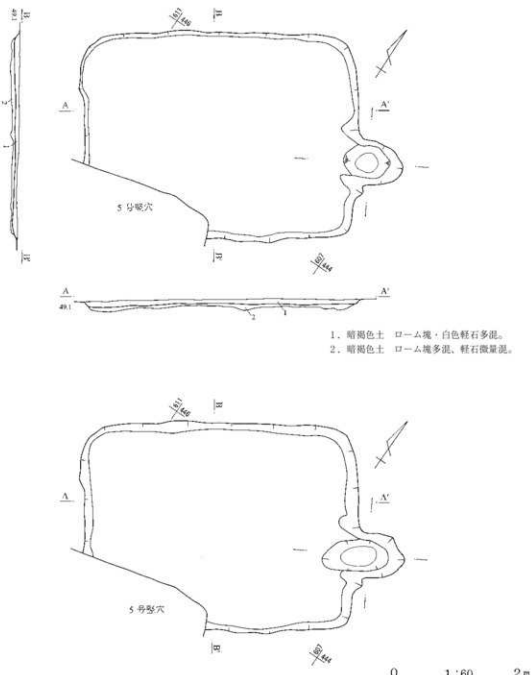


図108　4区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

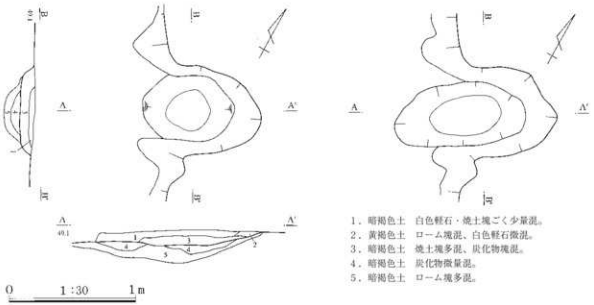


図109　4区6号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

（7）4区7号竪穴建物跡

位置：4区の東翼区と中央南端区の接点付近。4区南端部の北東隅の位置。4区5・6号竪穴建物跡のすぐ西側。4区9号竪穴建物跡のすぐ東側、4区8号竪穴建物跡の北側。X435～440・Y-610～-615Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**なし。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況は極めて不良である。東北東～西南西方向に長い長方形状を呈し、北東壁に竈が取り付く。南西隅から約1/2は、確認面が床面直上に当たっており、竪穴建物跡の掘り込みすら検出することができなかった。長辺3.2m・短辺2.21m・床面までの深さ0.09m・掘り方までの深さは0.2m・面積7.39m²。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に灰黄褐色砂質土で貼床を貼り、硬質な床面を形成している。　**掘り方：**全体に凹凸が甚だしく、特に中央部分が不整円形の土坑状に深く掘り窪められている。深さ0.03～0.11m。　**竈：**北東側壁の中央よりやや南側の位置に取り付く。燃焼部は地山を削りだして形成され、煙道は顕著に確認できなかった。両袖は全く建物内に張り出さない。燃焼部は建物の壁の外側に形成され、掘り方はやや深く掘り窪められており、焼土や炭化物・灰などの堆積が顕著である。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**不明（古代）。

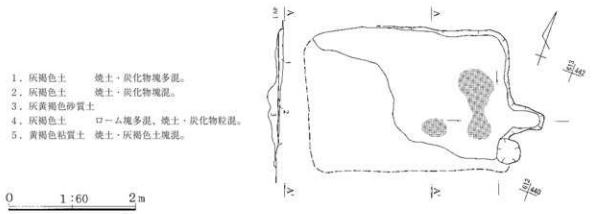


図110　4区7号竪穴建物跡平面図・土層断面図

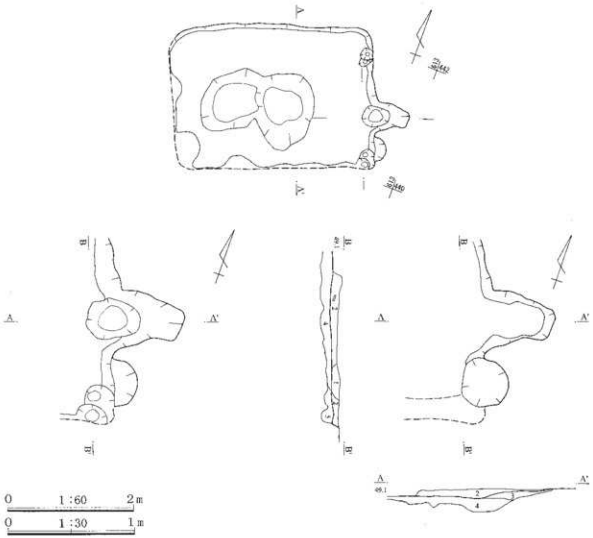


図111　4区7号竪穴建物跡掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

（8）4区8号竪穴建物跡

位置：4区の東翼区と中央南端区の接点付近の南端の位置。4区7号竪穴建物跡の南側。4区4号土坑跡のすぐ西側に隣接。X425～430・Y-605～-610Gr.　**主軸方位：**N-78°-E　**重複：**なし。　**規模と形状：**南西隅が調査区外に出る。東北東～西南西方向に長い長方形状を呈する。長辺4.47m・短辺3.5m・床面までの深さ0.52m・確認面積16.46㎡。　**埋土：**黒褐色土ベース。　**床面：**地山を平坦に削り出して床面を形成している。**掘り方：**掘り方と床面とがほぼ一致している。　**竈：**東壁の南東隅寄りに取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖とも建物内に張り出さない。燃焼部は建物の壁の位置の外側に形成され、燃焼部奥壁から煙道への立ち上がりはやや急角度である。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**不明（古代）。

4区8号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・保存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区8竪-1	土師質　土鍋	埋土 完形	全長4.2、幅1.1、厚0.6、孔径0.4	①鈍い褐色　②良好　③緻密	外面無
4区8竪-2	土師質　土鍋	埋土 完形	全長4、幅1.2、厚0.8、孔径0.3	①鈍い黄褐色　②良好　③緻密	外面無

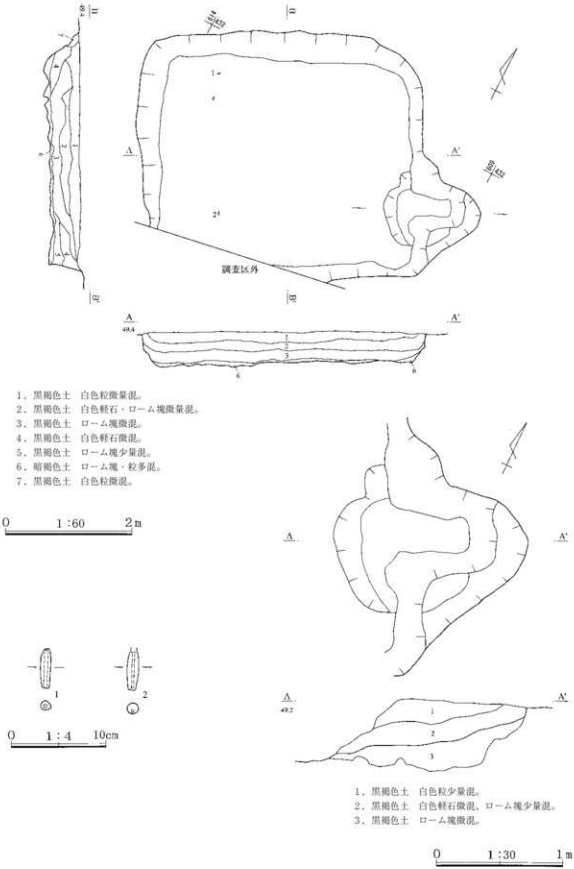


図112　4区8号竪穴建物跡平面図・土層断面図、竈跡平面図・土層断面図、出土遺物

（9）4区9号竪穴建物跡

位置：4区の中央南端区の北東隅付近の位置。4区7号竪穴建物跡の西側に隣接。X435～440・Y-615～-620Gr.　**主軸方位：**不明。　**重複：**なし。　**規模と形状：**確認面が削平されており、さらに大部分が北側の調査区外に出るため検出状況は極めて不良。竪穴建物跡の南辺と東辺及び西辺のごくごく一部が検出されたのみ。南辺3.75m・床面までの深さ0.24m・掘り方までの深さは0.34m・確認面積1.17㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。**床面：**地山をやや大きく掘り込んだ上に、黒褐色土を比較的薄く貼り、平坦に整えて硬質な床面を形成している。　**掘り方：**部分部分がやや大きく掘り窪められ、凹凸がやや甚だしい。厚さ0.02m～0.1m程度。**竈：**未検出。　**貯蔵穴：**未検出。　**時期：**不明（古代）。

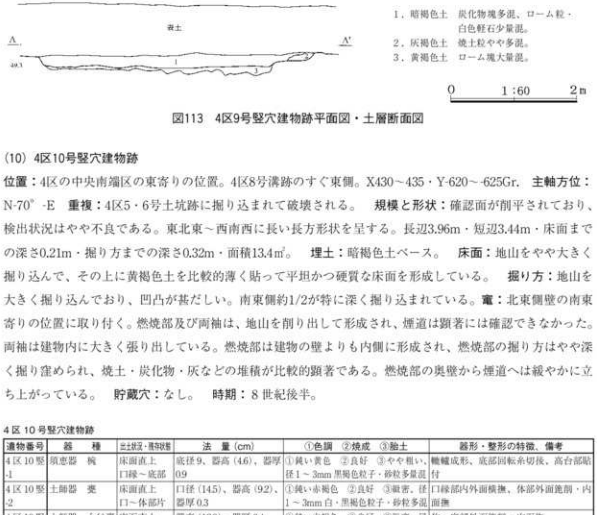


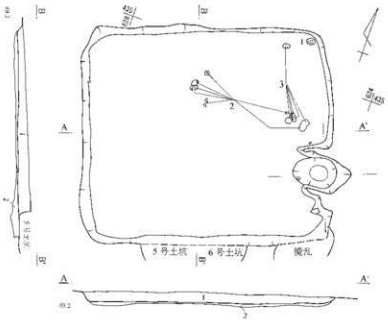
図113　4区9号竪穴建物跡平面図・土層断面図

（10）4区10号竪穴建物跡

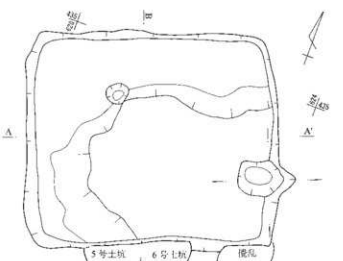
位置：4区の中央南端区の東寄りの位置。4区8号溝跡のすぐ東側。X430～435・Y-620～-625Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**4区5・6号土坑跡に掘り込まれて破壊される。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。東北東～西南西に長い長方形状を呈する。長辺3.96m・短辺3.44m・床面までの深さ0.21m・掘り方までの深さ0.32m・面積13.4㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をやや大きく掘り込んで、その上に黄褐色土を比較的薄く貼って平坦かつ硬質な床面を形成している。　**掘り方：**地山を大きく掘り込んでおり、凹凸が甚だしい。南東側約1/2が特に深く掘り込まれている。**竈：**北東側壁の南東寄りの位置に取り付く。燃焼部及び両袖は、地山を削り出して形成され、煙道は顕著には確認できなかった。両袖は建物内に大きく張り出している。燃焼部は建物の壁よりも内側に形成され、燃焼部の掘り方はやや深く掘り窪められ、焼土・炭化物・灰などの堆積が比較的顕著である。燃焼部の奥壁から煙道へは緩やかに立ち上がっている。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。

4区10号竪穴建物跡

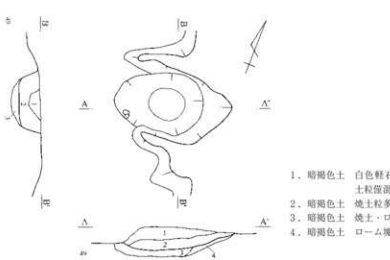
遺物番号	器　種	出土状況・接合状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区10竪-1	須恵器　椀	床面直上　口縁～底部	底径9、器高（4.6）、器厚0.9	①純い黄色　②良好　③やや粗い、径1～3mm黒褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切後、高台部貼付
4区10竪-2	土師器　甕	床面直上　口縁～体部片	口径（14.5）、器高（9.2）、器厚0.3	①純い赤褐色　②良好　③緻密、径1～3mm白・黒褐色粒子・砂粒多混	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内面撫
4区10竪-3	土師器　台付甕	床面直上　体～底部片	器高（12.9）、器厚0.4	①純い赤褐色　②良好　③緻密、径1～3mm白・黒褐色粒子・砂粒多混	体～底部外面施削・内面撫
4区10竪-4	土師質　土錘	埋土　完形	全長4.8、幅1.2、器厚0.5、孔径0.3	①純い黄褐色　②良好　③緻密	外面撫



1．暗褐色土　ローム塊少量混。
2．黄褐色土　ローム塊多混。



0　1:60　2m



1．暗褐色土　白色軽石・ローム・焼土粒僅混。
2．暗褐色土　焼土粒多混。
3．暗褐色土　焼土・ローム塊少量混。
4．暗褐色土　ローム塊多混。

0　1:30　1m

図114　4区10号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

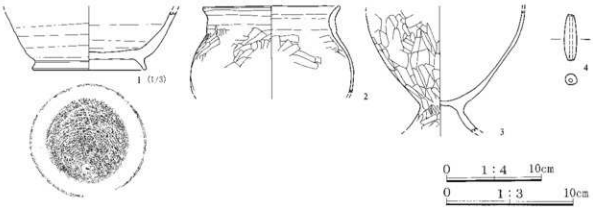


図115　4区10号竪穴建物跡出土遺物

(11) 4区11号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区の北西隅付近の位置。4区13号溝跡のすぐ南側に隣接。X470・Y-705～-710Gr.　**主軸方位：**N-90°-E　**重複：**4区6号掘立柱建物跡の北西隅を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。東西方向に細長い長方形状を呈しており、長辺4.1m・短辺3.05m・床面までの深さ0.22m・掘り方までの深さ0.3m・面積12.52㎡。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。　**床面：**地山を大きく掘り込んだ上に暗褐色土を埋めて非常に薄く貼床を貼り、硬質な床面を形成している。**掘り方：**地山を大きく掘り込んでおり、特に竪穴建物跡の北東・南東・南西の各隅付近が深く掘り窪められ、

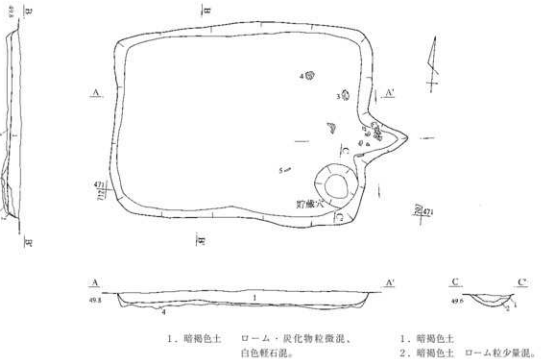


図116　4区11号竪穴建物跡平面図・土層断面図

床下土坑状に窪んでいる。全体的に凹凸が甚だしい。　**竈：**東壁のほぼ中央に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁よりも外側につくられ、掘り方はやや深く掘り込まれ焼土の堆積が顕著である。煙道は明瞭には検出出来なかった。竈の両袖は、建物内部に張り出さない。燃焼部の奥壁は煙道に向かって緩やかに立ち上がる。　**貯蔵穴：**竈の右脇、竪穴建物跡南東隅に掘り込まれている。不整円形状を呈しており、1辺約0.7m・深さ約0.18m。　**時期：**9世紀前半。

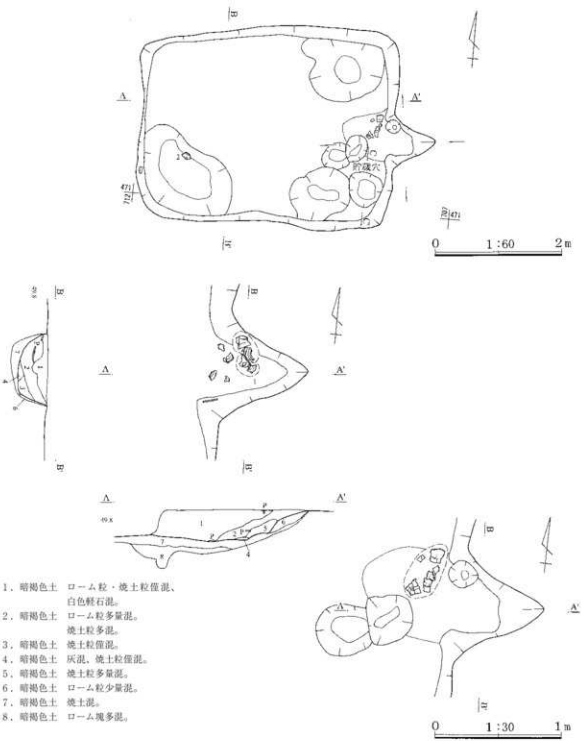


図117　4区11号竪穴建物跡掘り方平面図、竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

4区11号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区11竪-1	須恵器　杯	竈理土、口縁一部欠	口径12.5、底径6.6、器高3.7、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1～3mm白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
4区11竪-2	須恵器　杯	掘方埋土 1/4	口径(13.5)、底径7、器高3.7、器厚0.9	①灰黄色　②良好　③緻密	轆轤成形、底部回転糸切、体部外面正位墨書「×人」
4区11竪-3	土師器　椀	床面直上 1/3、高台部欠	口径(17.2)、底径8.1、器高(5.3)、器厚0.9	①橙色　②良好　③やや粗い、径1～3mm白・黒褐色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切後撫、高台部貼付
4区11竪-4	須恵器　薬壺	床面直上 口縁部欠	底径6.2、器高(6.2)、器厚0.8	①灰色　②良好　③緻密、径1mm白・茶・黒褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
4区11竪-5	鉄器　鎌	埋土 柄先一部欠	全長(11.5)、刃部長7.6、柄長(3.2)、器厚0.6		

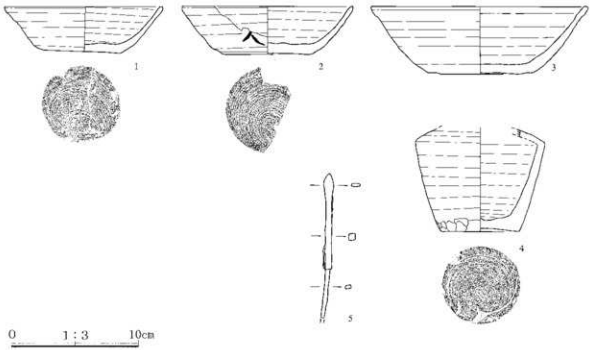


図118　4区11号竪穴建物跡出土遺物

(12) 4区12号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区の北端付近ほぼ中央の位置。4区1号掘立柱建物跡のすぐ西側に隣接。X465・Y-695～-700Gr.　**主軸方位：**N-90°-E　**重複：**4区2号掘立柱建物跡の北西隅を破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。東西方向に細長い長方形状を呈しており、長辺4.8m・短辺3.94m・床面までの深さ0.37m・掘り方までの深さは0.64m・面積19.95m²。東壁の中央より南寄りの位置に竈が取り付く。北辺から東辺にかけて、壁に段差が顕著に認められるが、竪穴建物の拡張等に伴う造作とは考えにくい。段の幅は0.15m程度と狭く、棚状の施設とも考えにくい。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山を比較的大きく掘り込んだ上に、暗褐色土を薄く均質に貼って平坦な面を造作し、硬質な貼床を形成している。　**掘り方：**部分的に掘り窪められ全体的に凹凸が見られ、特に竈前と建物の南東隅付近が床下の土坑状に深く掘り込まれている。深さ約0.27m。起伏がやや甚だしい。　**竈：**東壁のやや南寄りの位置に取り付く。燃焼部及び両袖は、地山を削り出して形成され、燃焼部は建物の壁の若干内側に形成されている。煙道は顕著には検出されなかった。燃焼部の奥壁から煙道への立ち上がりはかなり緩やかである。両袖は建物内にほとんど張り出さない。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**9世紀前半。

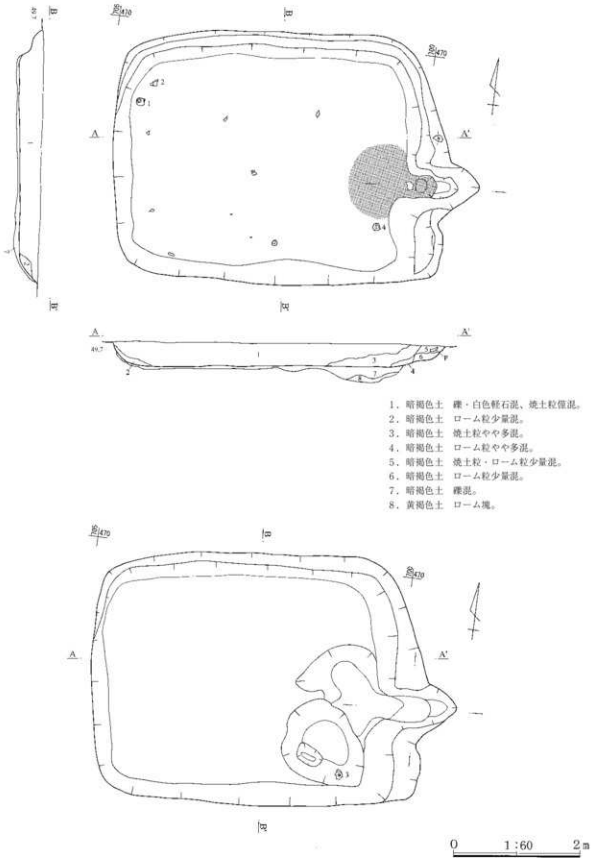


図119　4区12号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

1．暗褐色土　焼土・ローム粒・白色軽石混。
2．暗褐色土　焼土粒多量混、ローム粒多混。
3．暗褐色土
4．暗褐色土　焼土粒少量混。
5．暗褐色土　焼土・ローム粒僅混。
6．暗褐色土　焼土・ローム粒少量混。

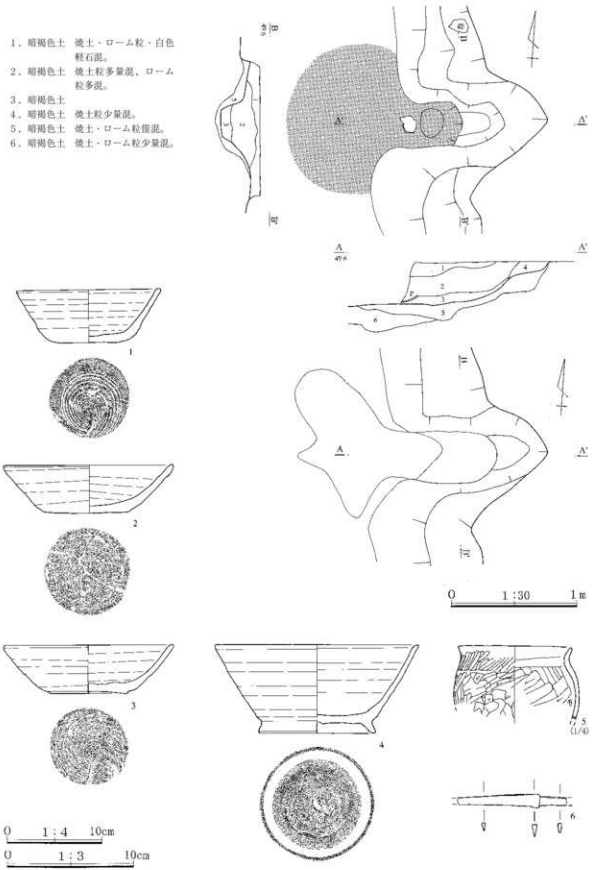


図120　4区12号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物

4区12号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・遺存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区12竪-1	須恵器　杯	床面直上 口縁一部欠	口径11.4、底径5、器高4.2、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1～3mm白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切、焼成時歪んで大きく湾曲する
4区12竪-2	須恵器　杯	埋土 3/4	口径13.4、底径9、器高3.8、器厚0.9	①灰黄色　②やや不良　③緻密、径1～3mm白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
4区12竪-3	須恵器　杯	掘方埋土 1/2	口径13.4、底径6、器高3.8、器厚0.8	①黄い橙色　②良好　③粗い、径1～5mm茶・黒褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切
4区12竪-4	須恵器　椀	床面直上 1/3	口径(16.1)、底径9.3、器高7、器厚0.8	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切後撫、高台部貼付
4区12竪-5	土師器　甕	埋土、口縁～体部片	口径(12)、器高(7.7)、器厚0.6	①黒褐色　②良好　③緻密、径1mm白・茶・黒褐色粒子・砂粒少量混	口唇部内外面撫、口縁～体部外面施削・内面撫
4区12竪-6	鉄器　刀子	埋土、刃・柄先一部欠	全長(8.6)、刃部長(6.5)、柄長(2.2)、幅1.1、器厚0.4		

(13) 4区13号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央からやや北寄りの位置。4区14・20・22号竪穴建物跡のすぐ北側に隣接する。X450～455・Y-700～-705Gr.　**主軸方位：**N-78°-E　**重複：**4区3・4号掘立柱建物跡の南西隅を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。東北東～西南西方向に細長い長方形状を呈している。竈及び竈前右脇以外に周溝が巡っている。長辺4.65m・短辺3.84m・床面までの深さ0.47m・掘り方までの深さ0.63m・面積17.19m²。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出すが、部分的に掘り窪んだ部分があり、暗黄褐色土・暗褐色土を埋めて床を貼り、硬質な床面を形成している。全面的な貼り床は形成されていない。　**掘り方：**南壁に沿う部分と南西隅が特に大きく掘り込まれて凹凸が見られる。南壁の周溝よりも内側では、壁にほぼ沿って浅いピット状の掘り込みが5基並んでいるが、あまり深くない。用途は不明である。　**周溝：**最大上幅0.26m・最大下幅0.22m・深さ0.07m。**竈：**東壁の中央から南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁とほぼ同位置につくられている。燃焼部の掘り方は、あまり深く掘り込まれてはいないが、焼土や灰の堆積が顕著であった。煙道は顕著には検出できなかった。両袖の芯材を掘えた痕跡と考えられる小規模なピット状の掘り込みが検出された。そこからみれば、両袖は若干建物の内部に張り出していたようである。竈の前面はやや広く、手前側に若干深く掘り窪められており、焼土や灰、炭化材の堆積が顕著であった。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。

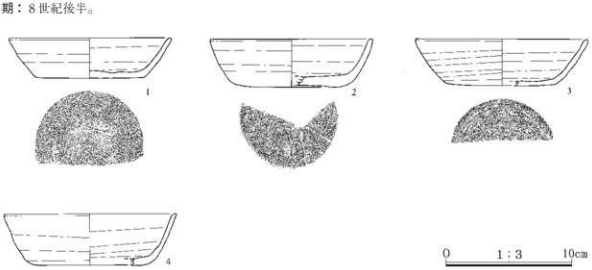


図121　4区13号竪穴建物跡出土遺物

4区13号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区13竪-1	須恵器　杯	床面直上 3/5	口径129、底径8.6、器高3.2、器厚0.6	①灰色　②良好　③緻密、径1～3mm白色粒子僅混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外面外縁部のみ施削
4区13竪-2	須恵器　杯	埋土 1/2	口径129、底径7、器高3.8、器厚1	①灰黄色　②良好　③緻密、径1～3mm黒褐色・白色粒子・砂粒微量混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外面外縁部のみ施削
4区13竪-3	須恵器　杯	床面直上 1/3	口径（137）、底径（8.4）、器高3.7、器厚0.4	①浅黄色　②やや不良　③緻密、径1～3mm赤・茶・黒褐色・白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
4区13竪-4	須恵器　杯	床面直上 1/5	口径（136）、底径（8.4）、器高4.1、器厚0.6	①灰色　②良好　③緻密、茶・黒褐色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転糸切

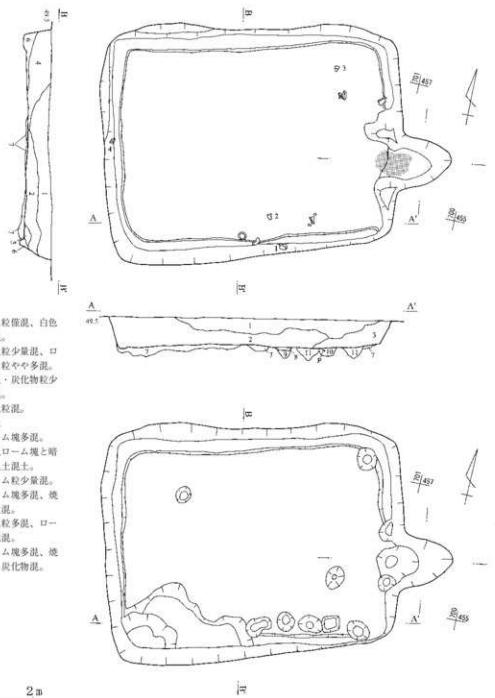


図122　4区13号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

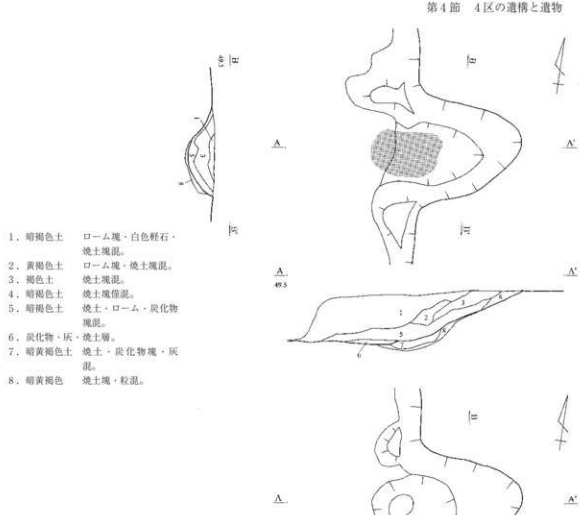
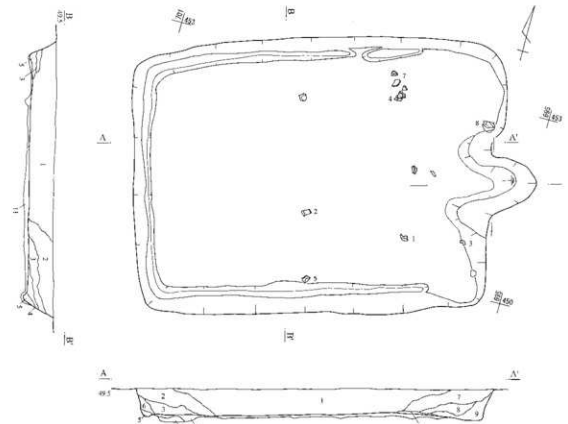


図123　4区13号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

(14) 4区14号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央の東寄りの位置。4区13号竪穴建物跡のすぐ南側、4区16・17号竪穴建物跡のすぐ北側に隣接する。X445～450・Y-695～-700Gr.　**主軸方位：**N-75°-E　**重複：**4区20・22号竪穴建物跡を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**確認面が削平されており、検出状況はやや不良である。東北東～西南西方向に細長い長方形状を呈している。北・西・南の三方の壁際に周溝が巡っている。長辺5.9m・短辺4.15m・床面までの深さ0.4m・掘り方までの深さ0.5m・面積24.87㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.03～0.1mの暗褐色土を貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**竈前の建物南東隅と中央の南壁よりの位置が特に大きく掘り込まれて床下土坑状を呈しているが、掘り込み自体は浅い。掘り方の精査により、元来、全く同一主軸で、東壁の中央よりやや南寄りの位置に竈が取り付いた東西約4.7m・南北約3.3m程度、東北東～西南西方向に長く、北・西・南の壁際に周溝が巡る竪穴

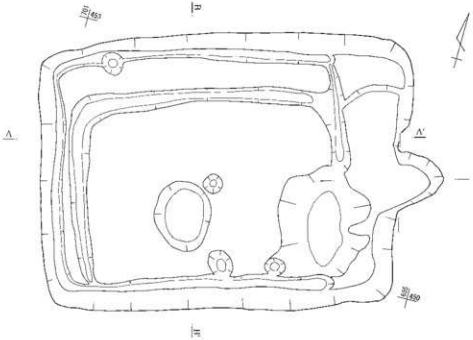
建物を、西壁と南壁をそのままにして、北側に約0.7m、東側に約1.1m程度拡張させて形成された竪穴建物跡であることが判明した。　**周溝：**最大上幅0.3m・最大下幅0.12m・深さ0.05m。　**竈：**東壁のほぼ中央に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、燃焼部は建物の壁よりも内側につくられている。燃焼部の掘り方は、あまり深く掘り込まれてはいないが、焼土や灰の堆積が顕著であった。煙道は顕著には検出できなかった。両袖は粘土等を貼り付けて形成されており、建物の内部に比較的大きく張り出す。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。

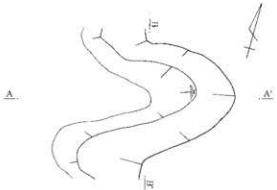


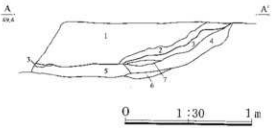
1．暗褐色土　ローム・焼土・炭化物粒、白色軽石混。
2．暗褐色土　ローム粒多混、白色軽石混。
3．黒褐色土　ローム粒多混、白色軽石混。
4．暗褐色土
5．暗褐色土　ローム粒混。
6．黒褐色土　ローム粒少量混。
7．暗褐色土　焼土粒やや多混、炭化物粒少量混、白色軽石混。
8．暗褐色土　焼土・炭化物粒少量混。
9．暗褐色土　ローム粒少量混、焼土粒少量混。
10．暗褐色土　焼土・ローム粒僅混。
11．暗褐色土　焼土粒僅混。
12．褐色土　ローム塊・粒・砂粒多混。

0　1:60　2m

図124　4区14号竪穴建物跡平面図・土層断面図







1．暗褐色土　焼土粒多混、炭化物粒少量混。
2．暗褐色土　焼土粒多量混。
3．暗灰色土　灰層。
　　焼土粒多混、炭化物混。
4．暗褐色土　焼土粒やや多混。
5．暗褐色土　焼土・ローム粒少量混。
6．暗褐色土　焼土・ローム粒僅混。
7．灰層
8．暗褐色土　焼土多混。固く締まっている。

図125　4区14号竪穴建物跡掘り方平面図・竈跡平面図・土層断面図

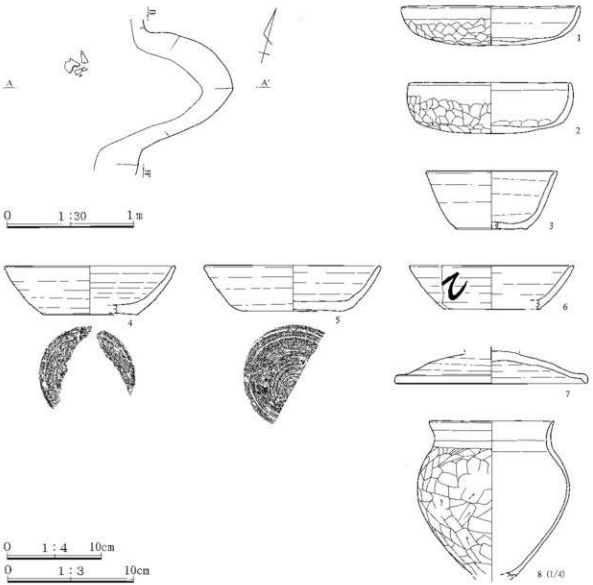


図126　4区14号竪穴建物跡竈跡掘り方平面図、出土遺物

4区 14 号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区14竪-1	土師器　杯	床面直上 2/5	口径 (14.2)、器高 3.1、器厚 0.4	①橙色　②良好　③緻密、径 1～3mm 白色粒子・砂粒微量混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
4区14竪-2	土師器　杯	床面直上 1/4	口径 (13)、器高 4、器厚 0.7	①鈍い褐色　②良好　③緻密、径 3mm 以下白色粒子・砂粒僅混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
4区14竪-3	土師器　杯	埋土 2/3	口径 (10.4)、底径 (5.6)、器高 4.6、器厚 0.7	①明赤褐色　②良好　③緻密、径 1～5mm 白色・茶褐色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転糸切、内面黒色処理
4区14竪-4	須恵器　杯	床面直上 1/3	口径 (13.5)、底径 (7.6)、器高 3.8、器厚 0.9	①灰白色　②良好　③やや粗い、径 1～3mm 白色・黒褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
4区14竪-5	須恵器　杯	床面直上 1/3	口径 (14)、底径 (8.1)、器高 3.6、器厚 0.8	①青灰色　②やや不良　③緻密、径 1mm 以下白色・茶・黒褐色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
4区14竪-6	須恵器　杯	埋土、口縁～体部片	口径 (13)、底径 (7.6)、器高 (3.5)、器厚 0.7	①灰黄色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・茶褐色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、体部外面正位墨書「乙」
4区14竪-7	須恵器　蓋	床面直上 3/4、摘部欠	口径 15.3、器高 (2.3)、器厚 0.8	①灰黄色　②良好　③緻密	轆轤成形
4区14竪-8	土師器　甕	埋土、口縁～体部片	口径 13.2、器高 (16.4)、器厚 0.7	①鈍い赤褐色　②良好　③緻密、径 1mm 白・茶・黒褐色粒子・砂粒混	口縁部内外面撫、体部外面篦削・内面撫

(15) 4区15号竪穴建物跡

位置：4区の中央南端区のほぼ中央の位置。4区12号溝跡のすぐ西側に隣接する。X420～425・Y-645Gr.　**主軸方位：**N-55°-E　**重複：**4区10号土坑跡に北西辺を掘り込まれて破壊されている。　**規模と形状：**確認面が削平され、南隅側約1/5が調査区外に出、北西側約1/4程度が4区10号土坑跡に破壊されており、検出状況は不良である。北東～南西方向にやや長い長方形状を呈している。長辺3.56m・短辺3.1m・床面までの深さ0.28m・掘り方までの深さ0.4m・確認面積7.54m²。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.05～0.12mの暗褐色土を貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**掘り込み自体は浅いが、凹凸が顕著である。　**竈：**北東壁のほぼ中央に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、燃焼部は建物の壁よりも内側につくられている。燃焼部の掘り方は、あまり深く掘り込まれてはいないが、焼土や灰の堆積が顕著であった。煙道は顕著には検出できなかった。両袖は粘土等を貼り付けて形成されており、建物の内部に比較的大きく張り出す。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**6世紀後半。

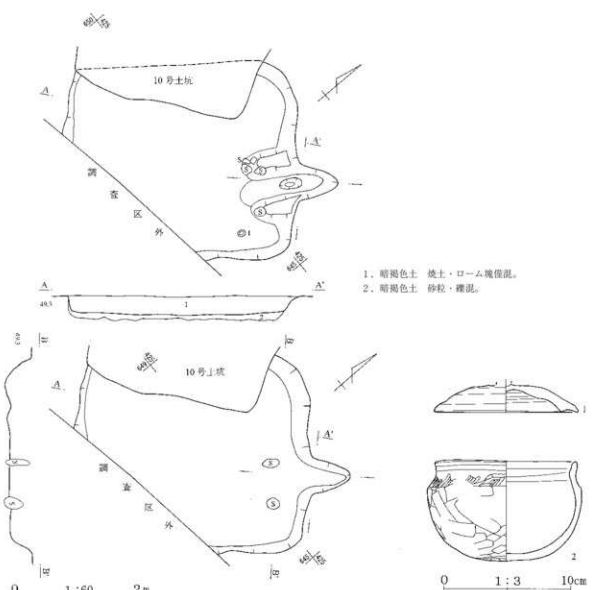


図127　4区15号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図、出土遺物

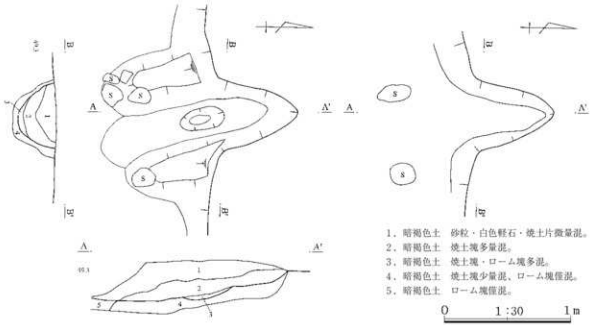


図128　4区15号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

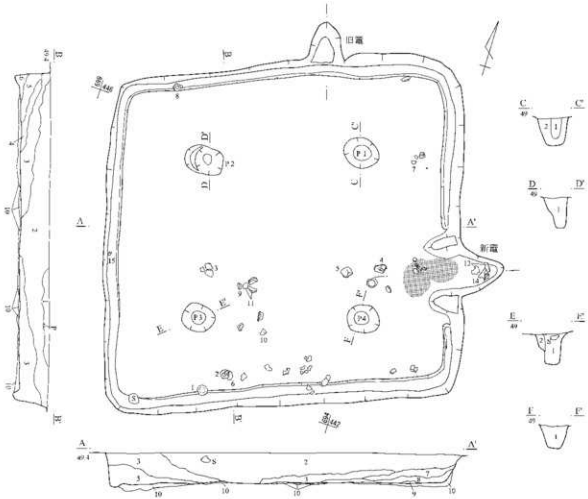
4区 15 号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区 15 竪-1	須恵器　甕	床面直上 損部欠	口径 11.4、器高 (22)、器厚 0.9	①灰褐色　②良好　③やや粗い、径 1～3mm 白色・茶褐色粒子・砂粒多混	輪轆成形
4区 15 竪-2	土師器　短頸壺	埋土 3/4	口径 11.3、器高 7.9、器厚 0.7	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体部外面箆削・内面撫

(16) 4区16号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区の中央からやや南寄りの位置の東端。4区14・20・22号 竪穴建物跡のすぐ南側に隣接する。X440～445・Y-690～-695Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**4区17号竪穴建物跡の東側約半分を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**東北東～西南西方向。正方形状を呈する。東壁の中央より南寄りの位置と北壁の中央よりもやや東寄りの位置の２箇所に竈が取り付くが、竪穴建物跡廃絶時に使用されていた竈は東壁に取り付く竈である。竪穴建物造営時に造られた北壁に取り付く竈を廃棄して、新たに東壁に取り付く竈に造っている。竈前以外の四周に周溝が巡り、本調査区検出の竪穴建物跡では数少ない４箇所に柱穴を有する竪穴建物跡である。柱穴は概ね径0.5m前後の東西にやや長い楕円形状を呈しており、いずれもしっかりとした掘り方を有している。１辺5.5m・床面までの深さ0.47m・掘り方までの深さ0.54m・面積30.89㎡。**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.05～0.07mの暗褐色土を薄く貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**全般的に均質で、比較的凹凸は少ない。若干、ピット状の浅い窪みをつくる。　**柱穴：**pit1長径0.58m・短径0.48m・柱痕径0.16m・深さ0.46m・東西に長い楕円形状を呈する。pit2長径0.6m・短径0.45m・深さ0.48m・東西に長い楕円形状を呈する。pit3径0.5m・深さ0.5m・ほぼ円形を呈する。pit4長径0.5m・短径0.48m・深さ0.48m・東西に若干長い楕円形状を呈する。　**周溝：**最大上幅0.2m・最大下幅0.17m・深さ0.1m、比較的しっかりとした掘り込み。　**竈：**竪穴建物跡廃棄時の新竈は、東壁の中央から南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁とほぼ並行する位置につくられている。燃焼部の掘り方は、深く掘り込まれ、焼土や灰の堆積が顕著であった。燃焼部の奥壁から煙道にかけては比較的急に立ち上がる。煙道は顕著には検出できなかった。両袖は粘土等を貼り付けて形成されており、建物の内部に比較的大きく張り出す。掘り方の精査で、両袖の左右に芯材を据えた痕跡と考

えられるピット状の窪みが検出できたが、竈は竪穴建物廃絶時に破壊されており、芯材そのものは検出されていない。一方、竪穴建物造営当初に造られた旧竈は、北壁の中央からやや東寄りの位置に取り付く。燃焼部は新竈と同様、地山を削り出して形成され、建物の壁よりもやや外側の位置につくられている。燃焼部の掘り方は浅い。燃焼部の奥壁から煙道にかけては比較的急に立ち上がる。煙道は顕著には検出できなかった。両袖は竈の付け替えの際に完全に破壊されており、原形を全くとどめないが、掘り方の精査で、掘り方で両袖の左右に芯材を据えた痕跡と考えられるピット状の窪みが検出でき、両袖は建物の内側に大きく張り出していた様子が看取できる。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。



1．暗褐色土　黒褐色土塊少量混、ローム・焼土粒少量混、白色軽石混。
2．暗褐色土　焼土・ローム粒少量混、白色軽石混。
3．暗褐色土　ローム粒やや多混。
4．暗褐色土　黒褐色土塊・ローム塊少量混。
5．暗褐色土　ローム粒少量混、焼土粒微混。
6．暗褐色土　ローム・黒褐色土粒少量混。
7．暗褐色土　黒褐色・ローム・焼土粒やや多混。
8．暗褐色土　焼土・ローム粒少量混。
9．黒褐色土　ローム・焼土粒少量混。
10．暗褐色土　ローム粒混。

0　1:60　2m

図129　4区16号竪穴建物跡平面図・土層断面図

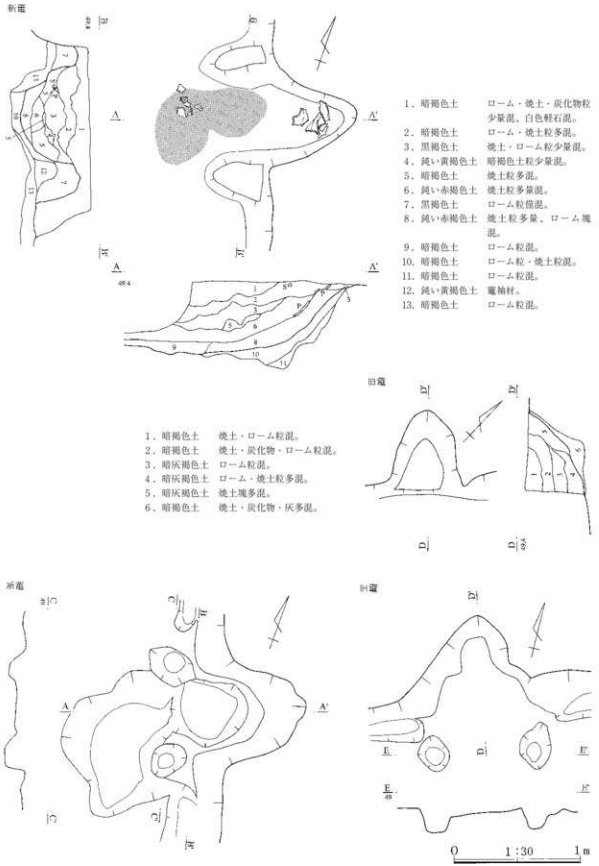


図130　4区16号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・エレベーション図

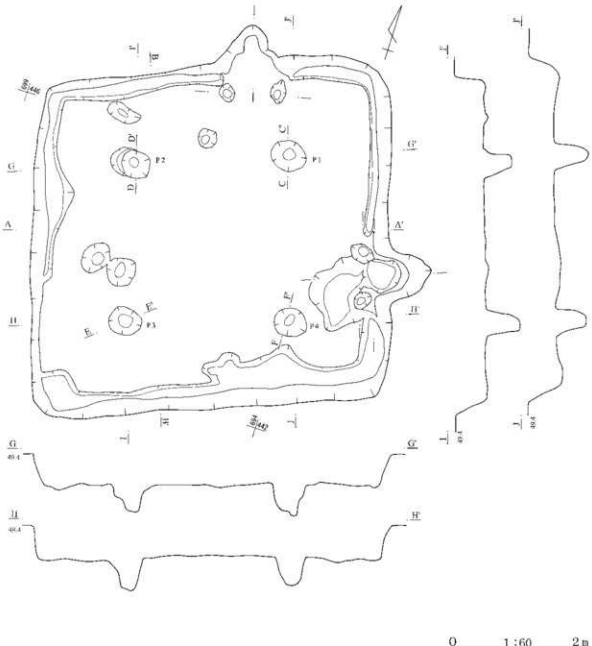


図131　4区16号竪穴建物跡掘り方平面図・エレベーション図

4区 16 号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・遺存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区16竪-1	須恵器　杯	床面直上 完形	口径14.6、底径9.5、器高3.5、器厚0.7	①灰白色　②やや不良　③緻密、径1～3mm黒・茶褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
4区16竪-2	須恵器　杯	床面直上、口縁部一部欠	口径13.5、底径9.6、器高3.6、器厚0.9	①灰白色　②良好　③やや粗い、径1～3mm赤・茶・黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外面外縁部のみ篦削
4区16竪-3	須恵器　杯	床面直上 3/4	口径14.4、底径8.4、器高3.6、器厚0.9	①灰白色　②やや不良　③やや粗い、径1～5mm茶・黒褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外面外縁部のみ篦削
4区16竪-4	須恵器　杯	床面直上 4/5	口径14.2、底径8、器高4.3、器厚0.9	①黄灰色　②良好　③緻密、径1～3mm白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外面外縁部のみ篦削
4区16竪-5	須恵器　杯	床面直上 3/4	口径14.4、底径8.5、器高3.5、器厚0.8	①灰白色　②良好　③やや粗い、径1～3mm黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切篦削
4区16竪-6	須恵器　杯	床面直上 1/3	口径(13.8)、底径(7.8)、器高5.1、器厚1.2	①灰白色　②良好　③緻密、径1～3mm黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切

4区16竪-7	須恵器　杯	床面直上 1/3	口径（15）、底径（9.5）、器高3.3、器厚0.6	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色粒子混	轆轤成形、底部回転篦削
4区16竪-8	須恵器　杯	床面直上 1/2	口径13.2、底径10、器高2.8、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1～3mm黒褐色・白色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転篦削
4区16竪-9	須恵器　杯	床面直上 1/3	口径（14.2）、底径（9）、器高4.1、器厚0.8	①黄灰色　②やや不良　③やや粗い、径1～3mm赤・茶・黒褐色・白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転篦削
4区16竪-10	須恵器　杯	床面直上 1/4	口径（13.4）、底径（8.8）、器高3.6、器厚0.7	①灰黄褐色　②やや不良　③緻密、径1～3mm白色・茶褐色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転篦削
4区16竪-11	須恵器　椀	埋土 1/3	口径（18.3）、底径（13）、器高7.1、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1～3mm白色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転篦削、高台部貼付
4区16竪-12	土師器　甕	埋土 1/4	口径（22）、器高（22.6）、器厚0.7	①鈍い褐色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子・砂粒混	口縁部内外面撫、体部外面撫削・内面撫
4区16竪-13	土師器　甕	掘方埋土、口縁～体部片	口径（24）、器高（10.6）、器厚0.6	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径2mm以下砂粒・雲母粒・白色・赤褐色粒子混	口縁部内外面撫、体部外面撫削・内面撫
4区16竪-14	土師器　甕	埋土、口縁～体部片	口径（21.9）、器高（12.3）、器厚0.5	①鈍い褐色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色・白色粒子・砂粒微量混	口縁部内外面撫、体部外面撫削・内面撫
4区16竪-15	三彩陶器　小皿	床面直上 口縁一部欠	口径（4.5）、摘部径1.5、器高1.5、器厚0.3	①灰白色　②良好　③緻密	轆轤成形、摘部周囲に三彩の黄緑色・赤褐色の痕跡が若干遺

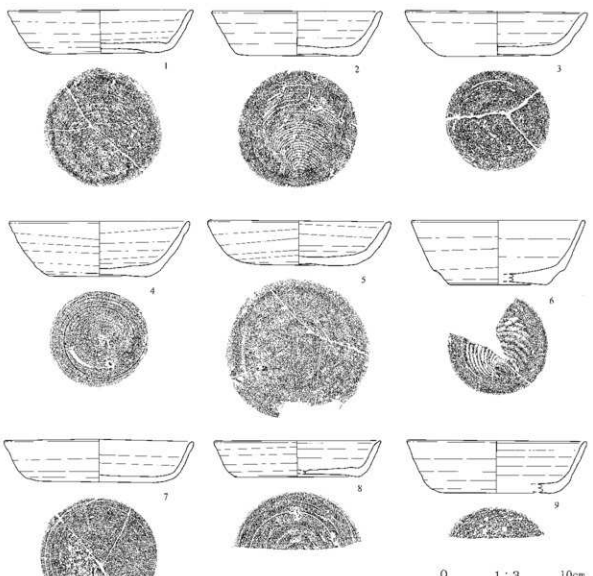


図132　4区16号竪穴建物跡出土遺物（1）

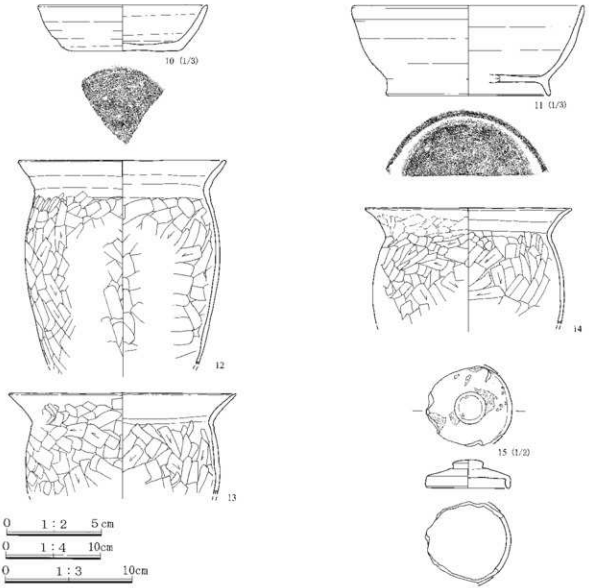


図133　4区16号竪穴建物跡出土遺物（2）

(17) 4区17号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区の中央からやや南寄りの位置の東端。4区14・20・22号 竪穴建物跡のすぐ南側に隣接する。X440・Y-695～-700Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**4区16号竪穴建物跡に東側約半分を掘り込まれて破壊される。　**規模と形状：**東北東～西南西に長い長方形状を呈していたものと思われる。検出された北壁及び南壁の一部と西壁の壁際では周溝が検出された。西辺（短辺か？）約3.8m・床面までの深さ0.5m・掘り方までの深さ0.6m・面積11.73㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.05～0.1m暗黄褐色土をほぼ均質に貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**西南隅と西壁際の中央が特に深く掘り込まれ、凹凸は比較的顕著である。また、隅部や壁際に4箇所の平面ピット状の掘り込みが見られるが、いずれも浅く、柱穴とは見なしがたい。　**周溝：**最大上幅0.14m・最大下幅0.1m・深さ0.05m。**竈：**4区16号竪穴建物跡に破壊されたため検出できず。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。

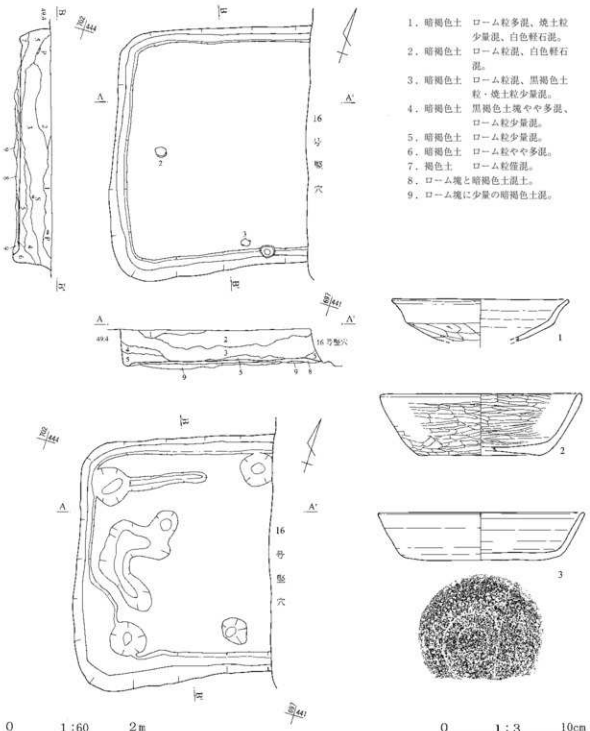


図134　4区17号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物

4区17号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・接合関係	法　量(cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区17竪-1	土師器　杯	埋土、口縁～体部片	口径(14)、器高3.3、器厚0.5	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径1mm以下白色・茶褐色粒子・砂粒微量混	口縁部内外面撫、体～底部外面施削・内面撫
4区17竪-2	土師器　杯	埋土、口縁～体部片	口径(16)、底径(9.8)、器高4.8、器厚0.9	①鈍い黄橙色　②良好　③緻密、径1mm以下白色・茶褐色粒子・砂粒微量混	轆轤成形、体～底部外面施削・内面黒色処理・施磨
4区17竪-3	須恵器　杯	埋土 1/2	口径16.3、底径12、器高3.8、器厚0.6	①鈍い橙色　②不良　③緻密、径1mm以下白色粒子・茶・赤褐色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転施削

(18) 4区18号竪穴建物跡

位置：4区の中央南端区の西寄りの位置の北端。X420～425・Y-660～-665Gr. **主軸方位：**N-66°-E **重複：**なし。**規模と形状：**確認面が削平され、北側約1/2が調査区外に出ており、検出状況は不良である。南辺3.4m・床面までの深さ0.57m・掘り方までの深さ0.67m・確認面積7.86㎡。 **煙土：**暗褐色土ベース。**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.05～0.1mの黄褐色土を貼って硬質な床面を形成している。**掘り方：**掘り込みはほぼ平担である。中央やや南西寄りの位置にやや深い掘り込みが顕著であるが、床下の土坑と言うほどの深い掘り込みではない。 **竈：**北東壁に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁よりも外側につくられている。燃焼部の掘り方は、あまり深く掘り込まれてはいないが、焼土や灰の堆積が顕著であった。煙道はやや長く延びる。燃焼部奥壁から煙道部へは緩やかに立ち上がる。右袖は粘土等を貼り付けて形成されており、建物の内部に比較的大きく張り出す。左袖は調査区外に出るため不明。**貯蔵穴：**なし。 **時期：**7世紀前半。

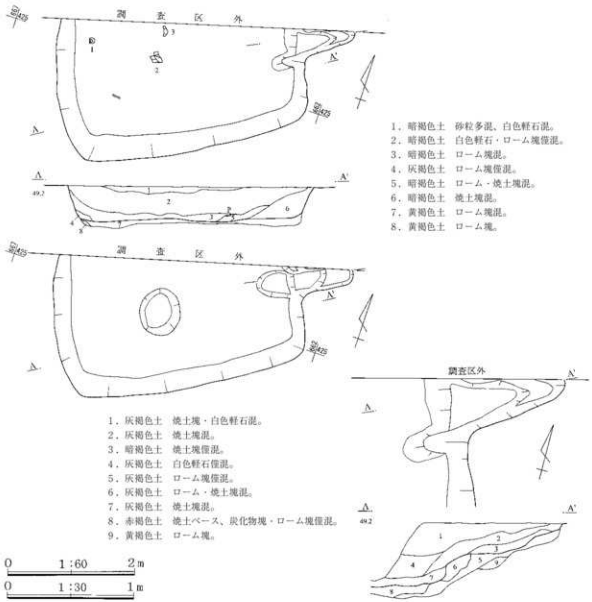


図135　4区18号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図・竈跡平面図・土層断面図

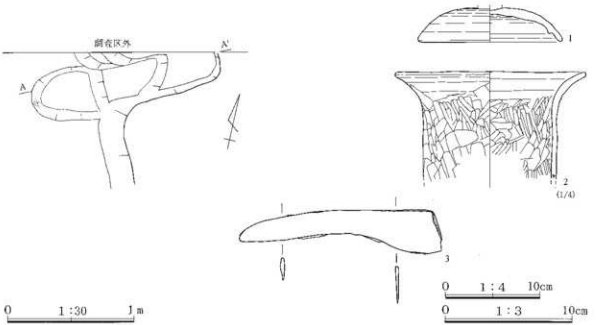


図136　4区18号竪穴建物跡竈跡掘り方平面図、出土遺物

4区18号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区18竪-1	須恵器　蓋	埋土、摘部欠、1/3	口径11.4、器高(2.7)、器厚0.7	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm茶・黒褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形
4区18竪-2	土師器　甕	埋土、口縁～体部片	口径(20.2)、器高(11.5)、器厚0.8	①鈍い黄橙色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子、茶・赤褐色粒子・砂粒混	口縁部内外面撫、体部外面箆削・内面撫
4区18竪-3	鉄器　鎌	埋土完形	全長159、幅34、器厚0.2		

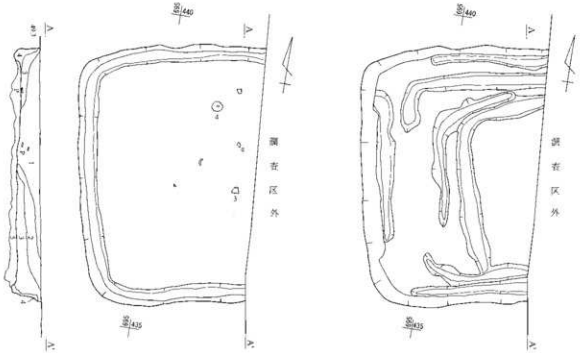
(19) 4区19号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区中央より南寄りの位置の東端。X435・Y-690～-695Gr.　**主軸方位：**不明　**重複：**なし。**規模と形状：**確認面が削平され、東側約1/2が調査区外に出ており、検出状況は不良である。検出された北壁及び南壁の一部と西壁の壁際では周溝が検出された。西辺3.8m・床面までの深さ0.38m・掘り方までの深さ0.52m・確認面積11.09m^2。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.05～0.14mの暗褐色土を貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**掘り込みはほぼ平坦である。　掘り方からは何重にも方形に巡る周溝痕が検出でき、本竪穴建物が西側及び北側に2回ずつ拡張を繰り返して形成されていった様子が判明する。まず、西辺が約3m程度の小型の竪穴建物が造営され、それを、確認できた範囲で北側に約0.3～0.7m・西側に約0.7mほど拡張して新たに竪穴建物跡が造営され、さらにそこから北側に約0.4m・西側に約0.6m・南側に約0.2m拡張して、検出された竪穴建物が形成されたという、過程が明らかになった。　**周溝：**最大上幅0.2m・最大下幅0.15m・深さ0.08m。比較的しっかりとした掘り方を有する。　**竈：**調査区外に出るため検出できず。　**貯蔵穴：**なし。　**時期：**8世紀後半。

4区19号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量 (cm)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区19竪-1	須恵器　杯	埋土 1/4	口径(12.7)、底径(7.6)、器高3.5、器厚0.6	①灰色　②良好　③緻密、径1～3mm白色粒子・砂粒僅混	轆轤成形、底部回転箆削
4区19竪-2	須恵器　杯	埋土、体～底部片	底径(8)、器高(3.3)、器厚1	①灰黄色　②良好　③緻密、径1～3mm白色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切

4区19竪-3	須恵器　椀	埋土 1/3	口径(15.8)、底径10、器高6.9、器厚0.8	①灰色　②良好　③緻密、径1～5mm白・黒褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切、高台部貼付
4区19竪-4	須恵器　蓋	埋土、縁部欠	摘部径5.8、器高(2.9)、器厚0.8	①灰色　②良好　③やや粗い、径1mm白・茶・黒褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形



1、暗褐色土　焼土粒・白色軽石混、炭化物僅混。
2、暗褐色土　焼土塊・ローム塊混。
3、暗褐色土　焼土塊・ローム塊少量混。
4、黄褐色土　ローム塊多混。
5、暗褐色土　ローム塊多混。

0　1:60　2m

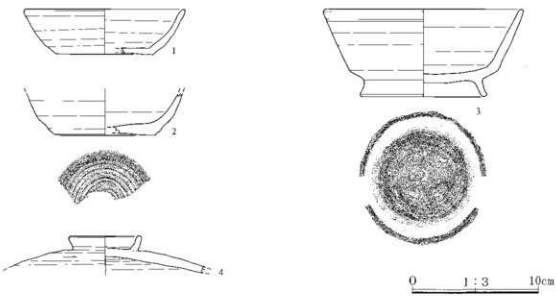


図137　4区19号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図、出土遺物

(20) 4区20号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央の東寄りの位置。X450・Y-695～-700Gr.　**主軸方位：**N-8°-E　**重複：**南側大部分を4区14号竪穴建物跡に破壊される。　**規模と形状：**確認面が削平され、南側大部分を4区14号竪穴建物跡に破壊され、検出状況は不良である。北壁の一部と北西隅部だけが検出できた程度である。床面までの深さ0.4m・掘り方までの深さ0.46m・確認面積2.16m²。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.03～0.06mの暗褐色土を貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**掘り込みはほぼ平坦で顕著な凹凸は全く見られない。　**竈：**北壁に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁よりも外側につくられている。煙道はあまり顕著には検出できなかった。燃焼部奥壁から煙道部へは緩やかに立ち上がる。両袖は4区14号竪穴建物跡によって破壊され、不明。　**貯蔵穴：**未検出。　**時期：**8世紀後半。

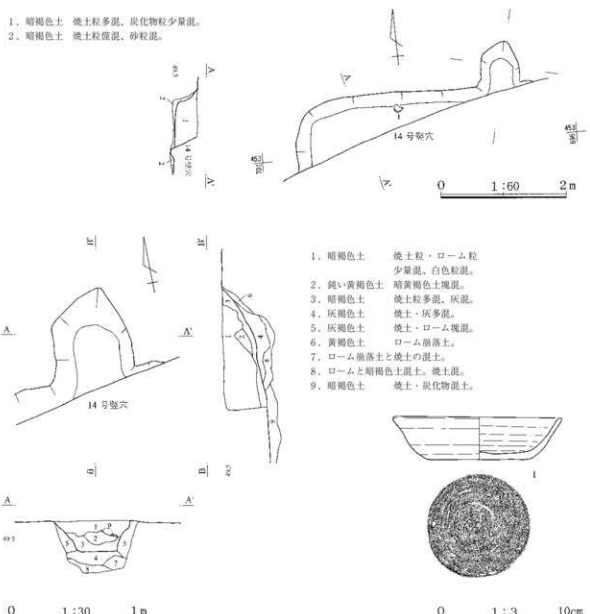


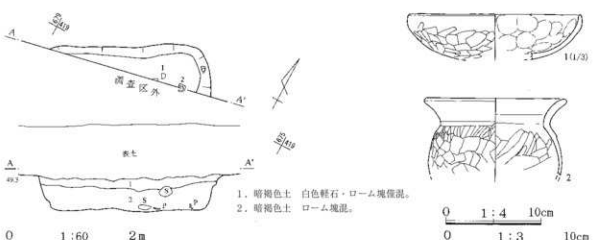
図138　4区20号竪穴建物跡平面図・土層断面図・竈跡平面図・土層断面図、出土遺物

4区20号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区20竪-1	須恵器　杯	床面直上、口縁部一部欠	口径13.3、底径8、器高3.4、器厚0.6	①鈍い黄色　②やや不良　③微密、径3mm白色粒子・砂粒やや多混	轆轤成形、底部回転糸切

(21) 4区21号竪穴建物跡

位置：4区の南端中央区の西寄りの位置の南端。X415・Y-675Gr.　**主軸方位：**不明。　**重複：**なし。　**規模と形状：**確認面が削平され、南側大部分が調査区外に出るため、全容は全く不明であり、検出状況は不良である。北壁の一部と北東隅部だけが検出できた程度である。床面までの深さ0.5m・確認面積1.12㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出して床面を形成している。　**掘り方：**掘り方と床面とがほぼ一致している。　**竈：**調査区外に出るため未検出。　**貯蔵穴：**未検出。　**時期：**8世紀後半。



4区21号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区21竪-1	土師器　杯	埋土 1/5	口径（13.8）、器高（3.5）、器厚0.5	①橙色　②良好　③微密、径1mm以下茶・黒褐・白色粒子・砂粒混	口縁部内外面撫、体部外面施削・内面撫
4区21竪-2	土師器　甕	埋土、口縁～体部片	口径15.1、器高（8.3）、器厚0.8	①褐色　②良好　③微密、径1mm以下白・茶・赤褐色粒子・砂粒多量混	口縁部内外面撫、体部外面施削・内面撫

図139　4区21号竪穴建物跡平面図・土層断面図、出土遺物

(22) 4区22号竪穴建物跡

位置：4区の西翼区の中央の東端。4区16・17号 竪穴建物跡のすぐ北側に隣接する。X445～450・Y-690～-695Gr.　**主軸方位：**N-75°-E　**重複：**4区14号竪穴建物跡に北西隅側約1/3を掘り込まれて破壊されている。**規模と形状：**北北西～南南東方向に長い長方形状を呈する。東壁のほぼ中央と南寄りの位置の2箇所に竈が取り付くが、竪穴建物跡廃絶時に使用されていた竈は南寄りの位置に取り付く竈である。竪穴建物造営時に造られた東壁中央に取り付く竈を廃棄して、新たにその南隣に竈を造っている。竈前以外の4周に周溝が巡り、長辺4.65m・短辺3.5m・床面までの深さ0.4m・掘り方までの深さ0.52m・確認面積12.38㎡。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**床面：**地山をほぼ平坦に削り出した上に、厚さ0.05～0.12m暗褐色土を比較的薄く貼って硬質な床面を形成している。　**掘り方：**全般的に均質で、比較的凹凸は少ない。南壁際と中央にピット状の掘りが認められる。　床下pit1.長径0.95m・短径0.6m・深さ0.35m、北東～南西に細長い不整楕円形状を呈

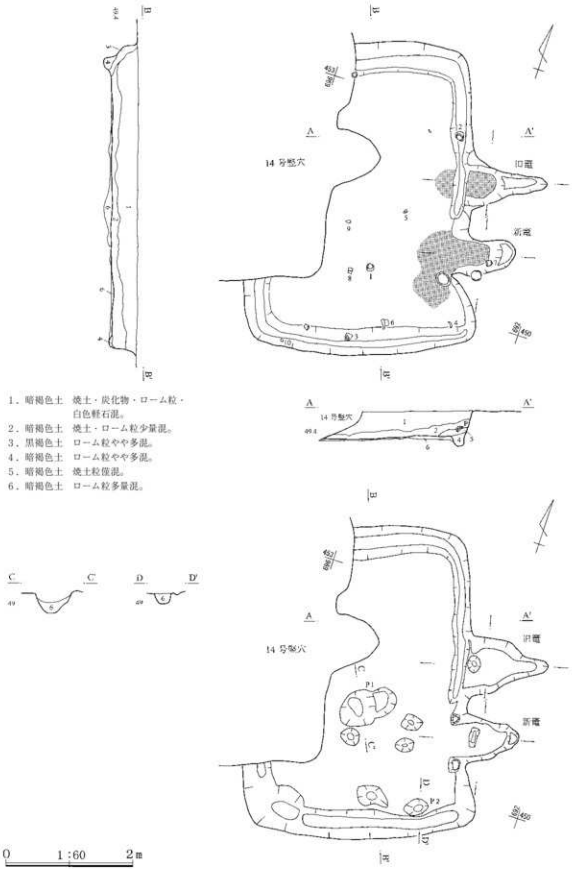
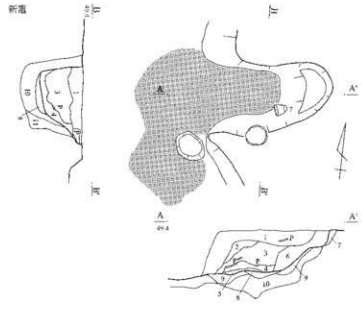


図140　4区22号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

新竈

4区22号竪穴建物跡新竈

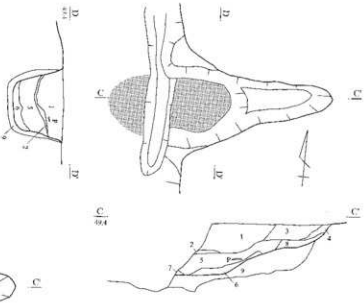
1．暗褐色土　ローム・焼土粒少量混、白色軽石混。
2．暗褐色土　ローム粒少量混。
3．暗褐色土　ローム粒少量混。
4．暗褐色土　焼土粒やや多混。
5．青灰色土　焼土粒やや多混。
6．暗褐色土　焼土粒多量混。
7．暗褐色土　焼土粒僅混。
8．青灰色灰層　焼土粒多混、炭化物少量混。
9．暗褐色土　焼土粒多量混。
10．暗褐色土　焼土粒少量混。
11．鈍い黄褐色土



旧竈

4区22号竪穴建物跡旧竈

1．暗褐色土　焼土・ローム粒少量混、白色軽石混。
2．鈍い黄褐色土　暗褐色粒僅混。
3．暗褐色土　焼土粒多量混。
4．暗褐色土　焼土粒少量混。
5．暗褐色土　ローム・焼土粒やや多混。
6．暗褐色土　焼土粒・灰多量混。
7．鈍い赤褐色土　焼土粒大量混。
8．暗褐色土　焼土粒やや多混。
9．暗褐色土　焼土粒やや多混、灰多量混。



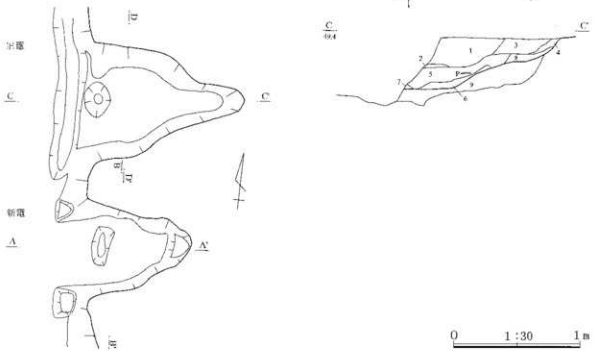


図141　4区22号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘り方平面図

する。床下pit2.長径0.38m・短径0.25m・深さ0.15m・東西に長い楕円形状を呈する。　**周溝：**最大上幅0.5m・最大下幅0.25m・深さ0.18m。比較的しっかりとした掘り方を有する。　**竈：**竪穴建物跡廃棄時の新竈は、東壁の南寄りの位置に取り付く。燃焼部は地山を削り出して形成され、建物の壁よりも外側に出る。燃焼部の掘り方は、深く掘り込まれ、焼土や灰の堆積が顕著であった。掘り方の精査で、燃焼部のほぼ中央に支脚の据え付け痕と見られる窪みが検出されている。燃焼部の奥壁から煙道にかけては比較的急に立ち上がる。煙道は顕著には検出できなかった。両袖は粘土等を貼り付けて形成されており、建物の内部に比較的大きく張り出す。掘り方の精査で、両袖の左右に芯材を据えた痕跡と考えられるピット状の窪みが検出できたが、竈は竪穴建物廃絶時に破壊されており、芯材そのものは検出されていない。一方、竪穴建物造営当初に造られた旧竈は、東壁のほぼ中央の位置に取り付く。燃焼部は新竈と同様、地山を削り出して形成され、建物の壁よりもやや外側の位置につくられている。燃焼部の掘り方は深く、焼土・炭化物の堆積が顕著であった。掘り方の精査で、燃焼部の中央には新竈と同様、支脚の据え付け痕とみられる掘り込みが検出されている。燃焼部の奥壁から煙道にかけては比較的急に立ち上がる。煙道は燃焼部の奥に比較的長く延びている。長さ約0.7m。両袖は竈の付け替えの際に完全に破壊されており、原形を全くとどめない。　**貯蔵穴：**なし。**時期：**8世紀後半。　**その他：**須恵器薬壷・須恵器杯・須恵質円面硯など特殊な遺物が出土している。

4区 22 号竪穴建物跡

遺物番号	器　種	三上状況・残存状態	法 量 (cm/cc)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区22竪-1	須恵器　杯	床面直上、口縁部一部欠	口径 12.4、底径 6.8、器高 4.1、器厚 0.7	①浅黄色　②やや不良　③やや粗い、径1～3mm 黒・茶褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
4区22竪-2	須恵器　杯	床面直上、口縁部一部欠	口径 13.3、底径 7.6、器高 3.6、器厚 0.8	①灰黄褐色　②やや不良　③緻密、径1～5mm 赤・茶・黒褐色・白色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転糸切
4区22竪-3	須恵器　杯	床面直上 3/4	口径 12.3、底径 7.4、器高 3.4、器厚 0.6	①鈍い褐色　②やや不良　③緻密、径1～5mm 赤・黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
4区22竪-4	須恵器　杯	床面直上 4/5	口径 13.4、底径 7、器高 4.1、器厚 0.8	①灰色　②良好　③粗い、径1～5mm 白色・黒褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切
4区22竪-5	須恵器　杯	埋土 3/4	口径 14.4、底径 8.5、器高 3.5、器厚 0.8	①灰白色　②良好　③やや粗い、径1～3mm 黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
4区22竪-6	土師器　甕	埋土、口縁一体部片	口径 (18.6)、器高 (11)、器厚 0.5	①明赤褐色　②良好　③緻密、径 1mm 以下黒褐色・白色粒子・砂粒多混	口縁部内外面撫、体部外面撫削・内面撫
4区22竪-7	須恵器　薬壷	床面直上 完形	口径 6.4、底径 5、器高 7.6、器厚 1.4	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
4区22竪-8	須恵器　杯	床面直上 完形	口径 7.8、底径 5.6、器高 6.8、器厚 0.8、容量 130	①青灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色粒子やや多混	轆轤成形、底部回転糸切、口縁部が焼成時の歪みで枠付ている。容器内漆付着
4区22竪-9	須恵器　円面硯	埋土、脚部欠	径 (15)、器高 (27)、器厚 1.1	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～5mm 白色粒子多混	轆轤成形、硯面部縁・内堤・脚部貼付。黄面に朱墨痕有り。
4区22竪-10	鉄器　鎌	埋土、切先・刃部・柄部一部欠	全長 (4.5)、幅 (2.7)、器厚 0.5		

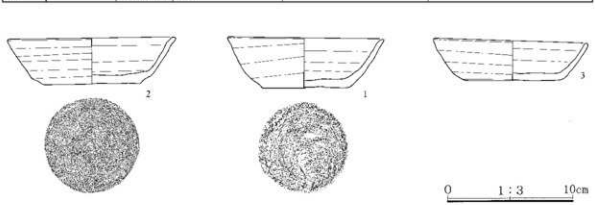


図142　4区22号竪穴建物跡出土遺物（1）

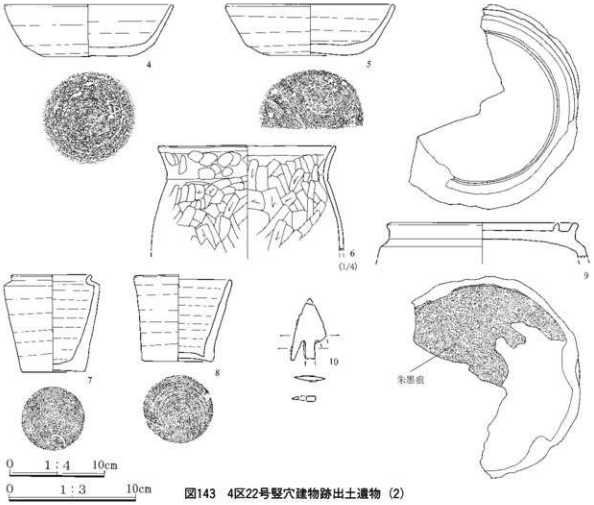


図143　4区22号竪穴建物跡出土遺物（2）

第3項　溝跡

4区では14条の溝跡が検出されている。4区1・2・13・14号溝跡は、3区で北側が検出されている。また、4区1・3・4・7・8・9・10・12号溝跡は南側に隣接する鹿島浦遺跡で南に続く部分が検出されている。4区1号溝跡は、奈良時代の用水路と考えられる遺構であるが、それ以外は比較的小規模な溝跡ばかりで、方位に乗ったり、あるいはなんらかの範囲を区画したと見られる溝跡は見あたらない。

（1）4区1号溝跡

位置：4区の東翼区の北東端から東端の位置。X445～490・Y-585～-620Gr.　**主軸方位：**X470～490Gr.はN-45°-W、X445～470Gr.付近はN-25°-W　**重複：**4区3・4・6号溝跡を破壊する。　**規模と形状：**3区の北東端から続き4区北東端から東端にかけて北西～南東から若干向きを変えて北北西～南南東方向に走向する大規模な溝跡。3区から4区の東翼区中央位の位置まではN-45°-Wの方向で流れ、その南側では向きを北北西～南南東方向に変える。南側は調査区外に出るが、さらに南側に隣接する鹿島浦遺跡調査区に続き、北関東自動車道太田桐生インターチェンジの調査対象範囲での総延長は約300mに及んでいる。南流するに従って、

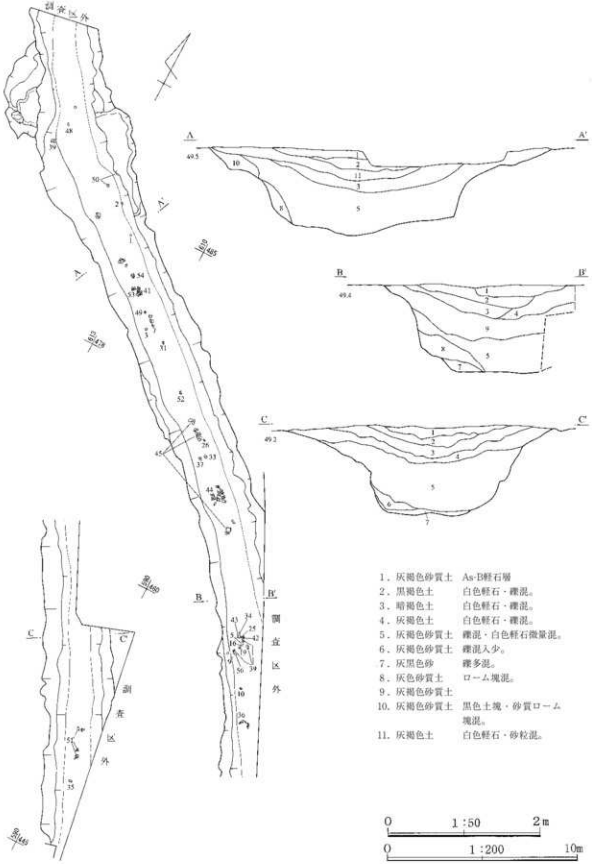


図144　4区1号溝跡平面図・土層断面図

南北方向の向きに近づいていく傾向が看取できる。法面の検出状況から、人為的な水路と考えられる。流路の向きが南流するに従って若干変化がみられるのは、地形に左右されてのことと考えられるが、元来は自然の流路であったものに人が手を加えて水路として利用していた可能性もあろう。4区内での確認全長は約58.5m・最大上幅3.5m・最大下幅1.8m・深さ1.2m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**灰褐色砂質土ベース。　**時期：**８世紀前半。

４区１号溝跡

遺物番号	器　種	出土状況・遺存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
４区１溝-1	土師器　杯	埋土 1/2	口径 10.1、器高 3.6、器厚 0.7	①橙色　②良好　③緻密、径１～3mm 黒・茶褐色粒子・砂粒多混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
４区１溝-2	須恵器　杯	埋土 完形	口径 13.1、底径 6.1、器高 4.1、器厚 0.9	①灰黄色　②良好　③緻密、径１～5mm 赤・茶・黒褐色・白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-3	須恵器　杯	埋土 3/4	口径 12.6、底径 7.1、器高 3.8、器厚 0.8	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～5mm 茶・黒褐色・白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-4	須恵器　杯	埋土 2/3	口径 12.5、底径 6.8、器高 3.5、器厚 0.8	①灰色　②良好　③粗い、径 1mm 以下～5mm 白色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-5	土師器　杯	埋土 2/3	口径 13.4、底径 6.6、器高 4、器厚 0.8	①黄橙色　②良好　③やや粗い、径１～3mm 黒・茶・赤褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-6	土師器　杯	埋土 2/3	口径 12.8、底径 6.2、器高 3.5、器厚 0.7	①黄橙色　②良好　③やや粗い、径１～3mm 黒・茶・赤褐色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-7	須恵器　杯	埋土 3/4	口径（11.8）、底径 7.5、器高 3.6、器厚 0.8	①青灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下黒褐色・白色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-8	須恵器　杯	埋土 2/3	口径（13）、底径 8.2、器高 3.7、器厚 0.7	①灰白色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・黒褐色粒子少量混	轆轤成形、底部回転糸切、篦削
４区１溝-9	須恵器　杯	埋土 2/3	口径 12、底径 6.4、器高 3.8、器厚 1	①灰色　②良好　③粗い、径 1mm 以下～5mm 白色・黒褐色粒子多量混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-10	須恵器　杯	埋土 3/4	口径 14、底径 7.8、器高 4.3、器厚 1.1	①灰白色　②良好　③緻密、径１～3mm 黒・茶褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外面黒書「田人」
４区１溝-11	須恵器　杯	埋土 1/2	口径 13.3、底径 7.6、器高 3.4、器厚 0.5	①灰白色　②良好　③やや粗い、径１～5mm 黒褐色・白色粒子・砂粒やや多混	轆轤成形、底部回転糸切、底部外縁のみ一部篦削
４区１溝-12	土師器　杯	埋土 1/2	口径 16.4、底径 8.2、器高 5、器厚 1	①赤褐色　②良好　③緻密、径１～5mm 白色粒子・砂粒微量混	轆轤成形、底部回転糸切、内面黒色処理
４区１溝-13	土師器　椀	埋土、体～底部片	底径（7.6）、器高 6.8、器厚 1.2	①明赤褐色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・赤褐色粒子微量混	轆轤成形、底部回転篦削、内面黒色処理後篦削
４区１溝-14	須恵器　杯	埋土 2/5	口径（14）、底径 8.5、器高 3.6、器厚 0.7	①灰白色　②良好　③緻密、径１～2mm 黒褐色・白色粒子・砂粒やや多混	轆轤成形、底部回転篦削
４区１溝-15	須恵器　杯	埋土 1/2	口径（10.2）、底径 5.5、器高 3.3、器厚 0.6	①灰黄色　②良好　③緻密、径 1mm 以下黒褐色・白色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-16	須恵器　杯	埋土 1/4	口径（13.1）、底径（8）、器高 3.3、器厚 0.9	①灰黄色　②やや不良　③緻密、径１～3mm 赤・黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-17	須恵器　杯	埋土 1/3	口径（12）、底径（6）、器高 3.7、器厚 0.7	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色粒子多混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-18	須恵器　杯	埋土 1/4	口径（13.1）、底径（7.7）、器高 3.3、器厚 0.7	①灰白色　②良好　③粗い、径１～5mm 黒・茶褐色粒子・砂粒多量混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-19	須恵器　杯	埋土 2/5	口径（13.4）、底径 8.2、器高 3.3、器厚 0.8	①灰白色　②良好　③やや粗い、径１～5mm 赤・茶・黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-20	須恵器　杯	埋土 1/3	口径（14）、底径（9.2）、器高 3.9、器厚 0.9	①灰白色　②良好　③やや粗い、径１～5mm 茶・黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転篦削
４区１溝-21	須恵器　杯	埋土 1/4	口径（14.3）、底径（8.2）、器高 3.8、器厚 0.9	①黒色　②やや不良　③緻密、径 1mm 以下～2mm 白色・赤褐色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転篦削
４区１溝-22	須恵器　杯	埋土 1/4	口径（123）、底径（6.8）、器高 3.8、器厚 0.7	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転篦削
４区１溝-23	須恵器　杯	埋土 1/4	口径（119）、底径（5.2）、器高 3.9、器厚 0.7	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下黒褐色粒子・砂粒やや多混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-24	須恵器　杯	埋土 1/3	口径（13）、底径（6.6）、器高 4.1、器厚 0.9	①灰黄色　②やや不良　③緻密、径 1mm 以下白色粒子多混	轆轤成形、底部回転糸切
４区１溝-25	須恵器　杯	埋土 1/4	口径（149）、底径（8.8）、器高 4.4、器厚 0.9、	①灰白色　②やや不良　③緻密、径１～5mm 黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転篦削

4区1溝-36	須恵器	杯	埋土 1/3	口径(14.2)、底径(8.5)、器高3.5、器厚0.8	①灰黄色　②良好　③やや粗い、径1～5mm黒・茶褐色・白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形、底部回転篦削
4区1溝-27	須恵器	椀	埋土 3/5	口径18.2、器高6.5、器厚0.6	①灰黄褐色　②良好　③やや粗い、径1～5mm赤・茶・黒褐色・白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形
4区1土師器-28	土師器	杯	埋土 1/4	口径(8.5)、器高(3.6)、器厚1.1	①鈍い黄褐色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm茶・黒褐色・白色粒子・砂粒少混	輪鍵成形、底部回転篦削、内面黒色処理後篦磨
4区1溝-29	須恵器	椀	埋土 3/4	口径14.3、底径8.7、器高4.7、器厚0.7	①灰色　②良好　③緻密、径1～5mm白色・黒褐色粒子・砂粒多混	輪鍵成形、底部回転篦削後高台部貼付
4区1溝-30	須恵器	椀	埋土 2/3	口径13.5、底径8.5、器高4.9、器厚0.7	①灰黄色　②不良　③やや粗い、径1～5mm黒・赤・茶褐色・白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形、底部回転篦削後高台部貼付
4区1溝-31	須恵器	椀	埋土 3/5	口径(12.1)、底径7.9、器高5.4、器厚1.1	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色・白色粒子・砂粒混	輪鍵成形、底部回転糸切後高台部貼付
4区1溝-32	須恵器	椀	埋土 1/3	口径(10.4)、底径(7.1)、器高5.6、器厚0.7	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色・白色粒子少量混	輪鍵成形、底部回転篦削後高台部貼付
4区1溝-33	須恵器	椀	埋土、口縁部・高台部欠	底径11.5、器高(4)、器厚0.9	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm白色粒子多量混、砂粒混	輪鍵成形、底部回転篦削後高台部貼付
4区1溝-34	土師器	蓋	埋土 4/5	口径18.2、器高5.8、器厚0.8	①鈍い橙色　②良好　③緻密、径1～4mm黒・茶・赤褐色粒子・砂粒混	上表面篦削、内面撫
4区1溝-35	須恵器	蓋	埋土 4/5	口径15.3、摘部径4、器高3.4、器厚1.1	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色・白色粒子・砂粒微量混	輪鍵成形、外面に墨書「田人」
4区1溝-36	須恵器	蓋	埋土 3/4	口径17.2、摘部径4.7、器高4.6、器厚0.7	①灰白色　②良好　③やや粗い、径1～5mm茶・黒褐色・白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形
4区1溝-37	須恵器	蓋	埋土 3/4	口径18.4、底径5.5、器高4.4、器厚0.8	①黄灰色　②良好　③やや粗い、径1mm以下～5mm黒褐色・白色粒子・砂粒多量混	輪鍵成形
4区1溝-38	土師器	蓋	埋土、3/4、摘部欠	口径237、器高5.6、器厚1.3	①明赤褐色　②不良　③緻密、径1～3mm黒褐色・白色粒子・砂粒微量混	輪鍵成形
4区1溝-39	須恵器	鉢	埋土、4/5、底部欠	口径323、底径14、器高222、器厚1.9	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm黒褐色・白色粒子・砂粒混	輪鍵成形
4区1溝-40	土師器	三脚付鉢	埋土、1/2、脚部欠損	口径197、底径164、器高(9.2)、器厚1.5	①赤褐色　②良好　③緻密、径1～5mm白色・黄褐色粒子・砂粒やや多混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削、内面撫
4区1溝-41	須恵器	鉢	埋土 1/2	口径32、底径18、器高24.8、器厚1.2	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm白色・黒褐色粒子混	輪鍵成形、底部篦削
4区1溝-42	須恵器	鉢	埋土、口縁～体部1/2	口径(25.6)、底径(13.3)、器高15、器厚1.5	①橙色　②良好　③緻密、径1～3mm黒・茶褐色・白色粒子・砂粒少量混	輪鍵成形、体部外面篦削・内面撫
4区1溝-43	須恵器	鉢	埋土、口縁～体部片	口径(44.8)、器高(14.9)、器厚1.5	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～2mm白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形
4区1溝-44	須恵器	大甕	埋土、口縁～体部5/6	口径302、底径(85)、器高(458)、器厚1.4	①灰色　②不良　③緻密、径1～5mm茶・黒褐色・白色粒子・砂粒混	輪鍵成形、体部内外面撫
4区1溝-45	須恵器	大甕	埋土 3/4	口径278、器高514、器厚2.2	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～3mm白色・黒褐色粒子・砂粒混	輪鍵成形、体部内外面叩
4区1溝-46	須恵器	大甕	埋土、口縁～体部片	口径(22)、器高(14.7)、器厚1.2	①灰色　②良好　③やや粗い、径1～3mm黒褐色・白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形、体部外面叩・内面撫
4区1溝-47	須恵器	甕	埋土、口縁～体部1/3	口径(108)、器高(12.5)、器厚0.8	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色粒子・砂粒微混	輪鍵成形
4区1溝-48	須恵器	壺G	埋土、口縁・底部一部欠	口径(5.5)、底径(4.5)、器高(198)、器厚1.2	①灰白色　②やや不良　③粗い、径1mm以下～5mm白色・黒・茶褐色粒子・砂粒多混	輪鍵成形、底部回転篦削
4区1溝-49	須恵器	小壺	埋土、口縁～頸部欠	底径(6.3)、器高(5.4)、器厚0.6	①鈍い黄橙色　②不良　③緻密、径1mm以下砂粒やや多混	輪鍵成形、底部回転篦削、器面の剥落が著だしい
4区1溝-50	須恵器	壺	埋土、口縁～体部一部欠	口径(17.6)、器高(27.1)、器厚1.5	①灰オリーブ色　②やや不良　③緻密、径1mm以下～2mm白色・黒褐色粒子・砂粒微混	輪鍵成形、体～底部内外面叩
4区1溝-51	須恵器	甕	埋土、肩～底部1/2	底径115、器高(193)、器厚1.5	①灰色　②良好　③緻密、径1～5mm白色・黒褐色粒子・砂粒少量混	輪鍵成形、底部篦削
4区1溝-52	須恵器	長頸瓶	埋土、口縁～体部片	口径188、器高(115)、器厚1	①灰色　②良好　③やや粗い、径1mm以下～5mm白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形
4区1溝-53	須恵器	横瓶	埋土 5/6	口径(128)、器高252、器厚1.3	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下～10mm黒・茶褐色・白色粒子・砂粒混	輪鍵成形、体部内外面叩
4区1溝-54	須恵器	横瓶	埋土、体部1/2	口径(6.3)、器高179、器厚1.8	①灰色　②不良　③緻密、径1mm以下～5mm黒褐色・白色粒子・砂粒多混	輪鍵成形、体部内外面叩
4区1溝-55	須恵器	提瓶	埋土、注口～底部片	注口外径(42)、注口内径底25、底径(113)、器高(103)、器厚1.4	①灰白色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm黒褐色・白色粒子・砂粒混	輪鍵成形、底部回転篦削、底部～注口にかけて液体痕遺る
4区1溝-56	須恵器	瓶	埋土、体部～底部片	体部現存最大径(26.4)、底径(132)、器高(20.5)、器厚1.7	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下～5mm白色・黒褐色粒子・砂粒少量混	輪鍵成形

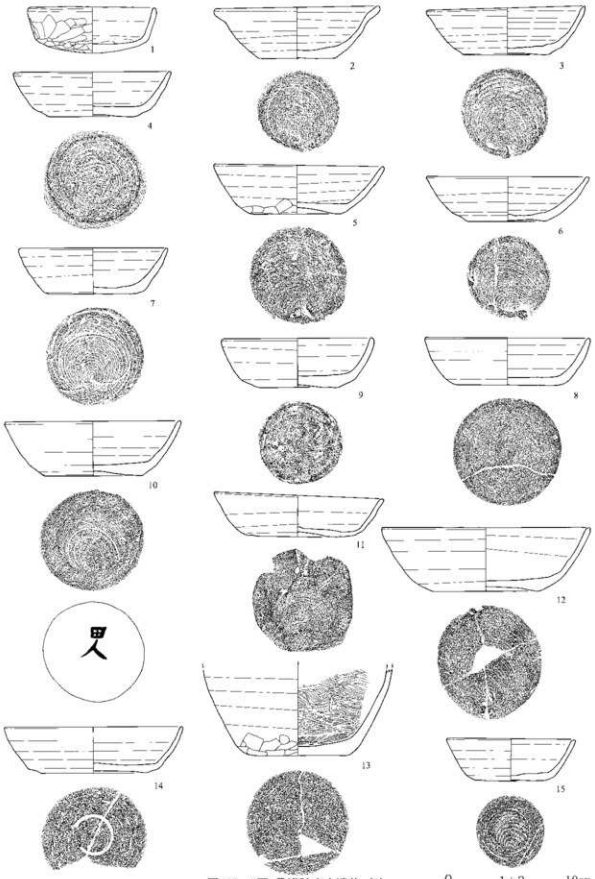


図145　4区1号溝跡出土遺物（1）

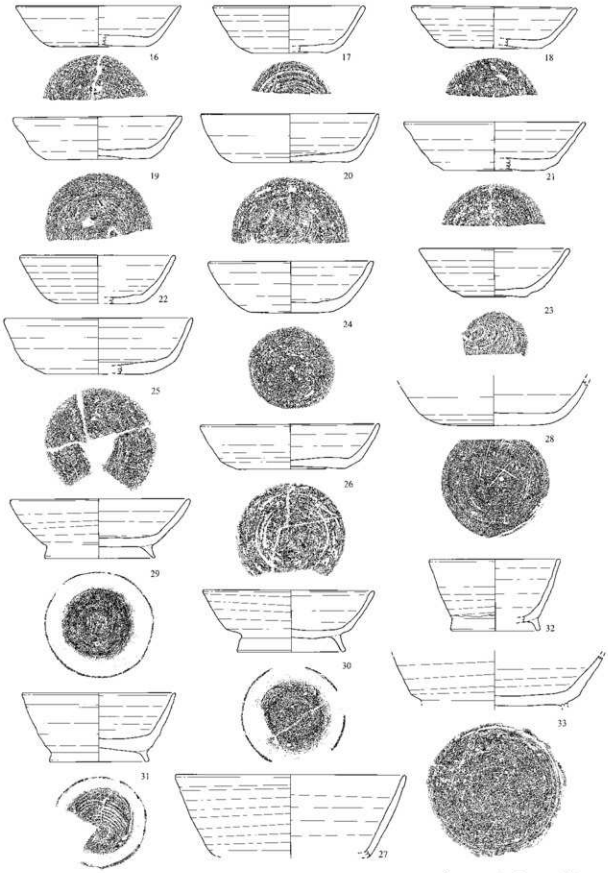


図146　4区1号溝跡出土遺物（2）

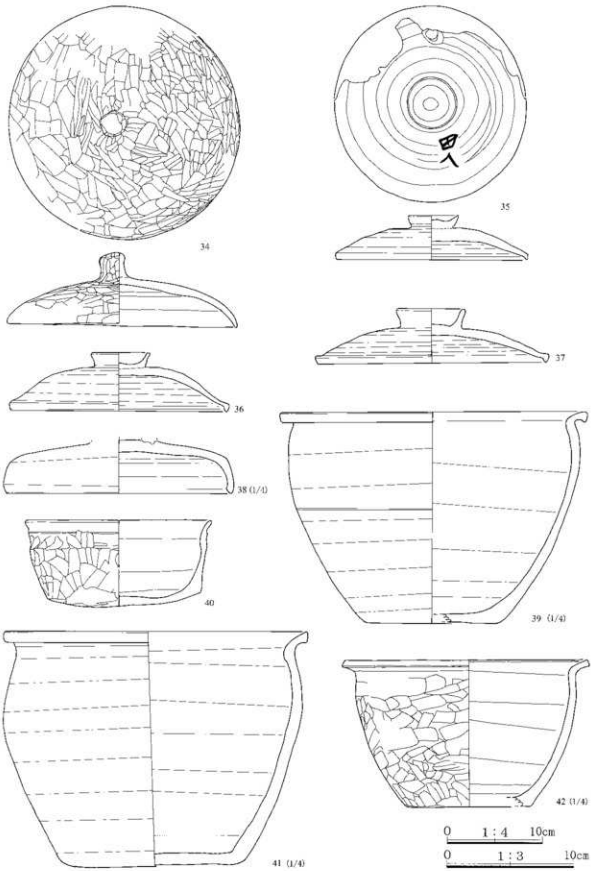


図147　4区1号溝跡出土遺物（3）

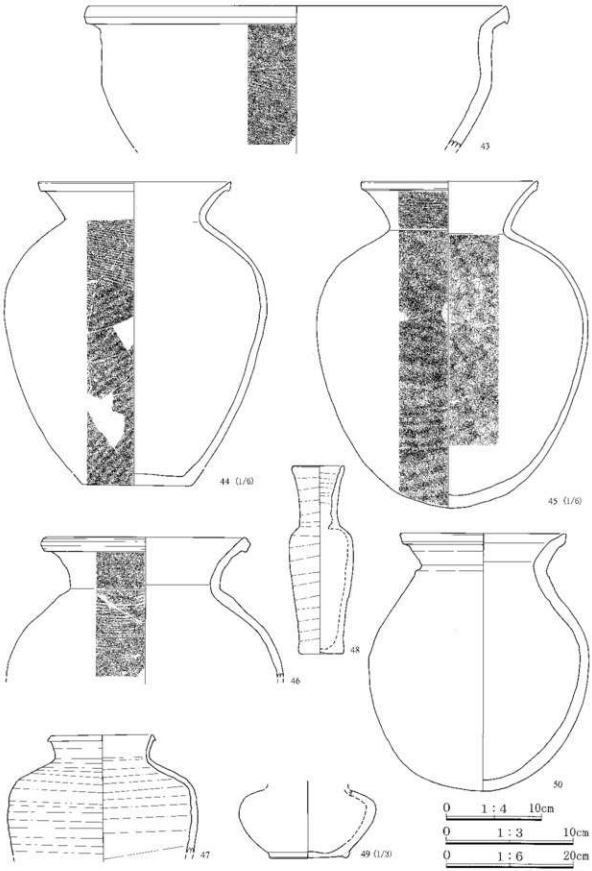


図148　4区1号溝跡出土遺物（4）

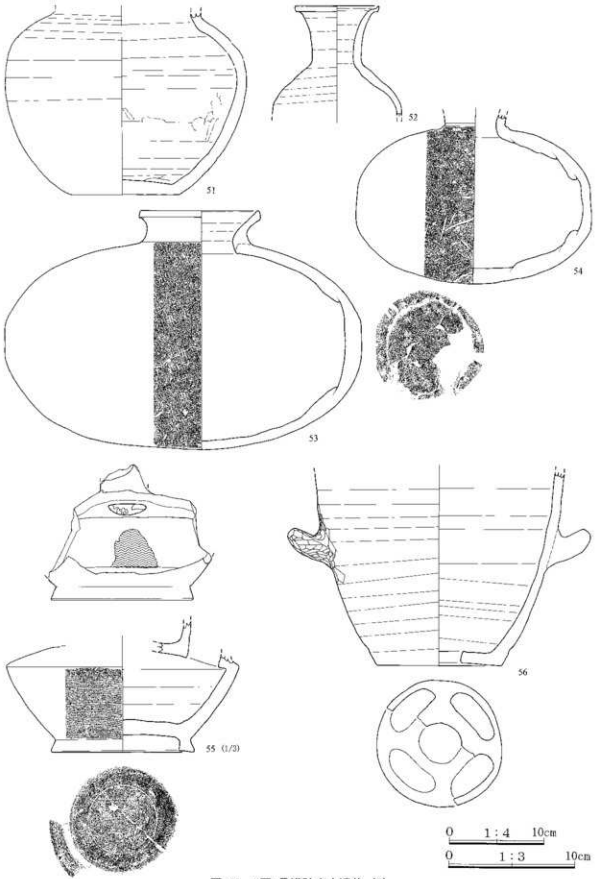


図149　4区1号溝跡出土遺物（5）

（２）4区2号溝跡

位置：4区の東翼区の北端の中央付近。4区1号溝跡の西側、4区5号溝跡の東側。X480～490・Y-620～-625Gr. **主軸方位：**N-30°-W。　**重複：**4区3号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**4区の東翼区北端の中央の位置を北西～南東方向に走向する小規模な溝跡。4区3号溝跡に破壊され、以南は検出されない。北端から6.5mの位置で、長さ約１mにわたって土橋状に中断する。調査対象範囲での確認全長は約12m・最大上幅0.5m・最大下幅0.3m・深さ0.08m。断面は緩やかな逆台形状を呈している。　**埋土：**暗黄褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

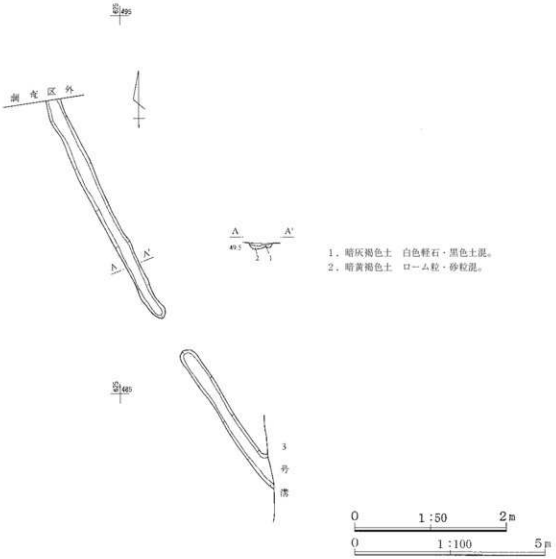


図150　4区2号溝跡平面図・土層断面図

（３）4区3号溝跡・9号溝跡

位置：4区3号溝跡として検出されているのは4区の東翼区の北寄りの位置。4区3号竪穴建物跡・4号溝跡の西側。9号溝跡として検出されているのは4区南端中央区の東寄りの位置。4区8号溝跡のすぐ西側、4区10号溝跡のすぐ東側に隣接する。X420～485・Y-615～-635Gr.　**主軸方位：**3号N-7°-E、9号N-25°-E　**重複：**4区3号溝跡は4区1号溝跡に破壊され、4区2号溝跡を破壊する。9号溝跡の部分は重複無し。　**規模と形状：**4区

東翼区の北からやや西寄りの位置を北北東～南南西方向に走向し、中央緑地帯の調査対象外の部分を経て南端中央区では北東・南西方向に流れる小規模な溝跡。南端は調査区外に出、南側に隣接する鹿島浦遺跡で続く部分が検出されており、北関東自動車道太田・桐生インターチエンジの建設に伴う調査対象範囲では総延長約165mに及んでいる。鹿島浦遺跡における検出状況では、南流するに従って西側へ向きを大きくしており、若干蛇行している状況が看取できる。4区3号溝跡の確認全長は約18.1m・最大上幅0.8m・最大下幅0.4m・深さ0.24m。4区9号溝跡の確認全長は約12.5m・最大上幅1m・最大下幅0.4m・深さ0.52m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**8世紀後半。

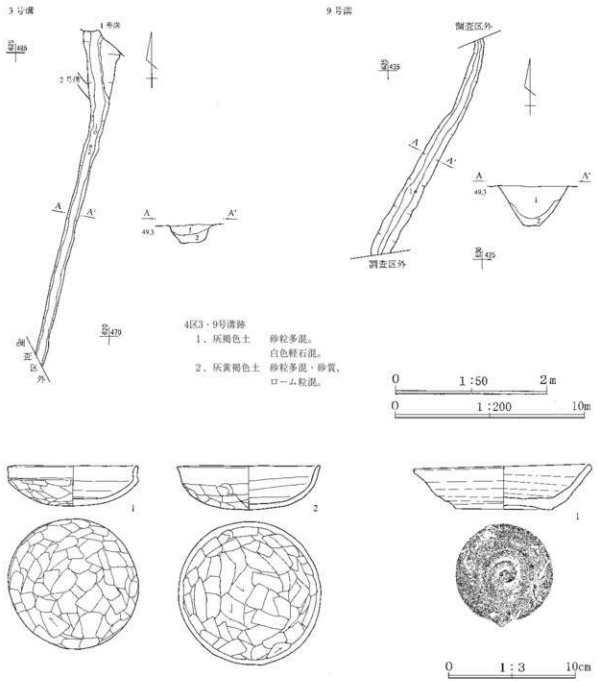


図151　4区3・9号溝跡平面図・土層断面図、出土遺物

4区3・9号溝跡

遺物番号	器　種	出土状況・残存状態	法　量（cm）	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区3溝-1	土師器　杯	埋土定形	口径10.4、器高3.2、器厚0.6	①橙色　②良好　③緻密、径1mm以下茶・黒褐色・白色粒子・砂粒微量混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
4区3溝-2	土師器　杯	埋土定形	口径11.3、器高3.4、器厚0.4	①褐色　②良好　③緻密、径1mm以下白色粒子・茶・赤褐色粒子・砂粒微量混	口縁部内外面撫、体～底部外面篦削・内面撫
4区9溝-1	須恵器　杯	埋土定形	口径14.1、底径7.6、器高3.6、器厚0.9	①灰色　②良好　③緻密、径1mm以下黒褐色・白色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転篦削

（4）4区4号溝跡・8号溝跡

位置：4区4号溝跡として検出されているのは4区の東翼区の北寄りの位置。4区3号溝跡の東側。X465～490・Y-610～-620Gr．8号溝跡として検出されているのは4区南端中央区の東寄りの位置。4区10号竪穴建物跡のすぐ西側、4区9号溝跡のすぐ東側に隣接する。X425～435・Y-625～-630Gr．**主軸方位：**4号N-18°-E、8号N-15°-E　**重複：**4区4号溝跡は4区3号竪穴建物跡及び1号溝跡に破壊される。8号溝跡の部分は重複無し。　**規模と形状：**4区東翼区の北寄りの位置を東端から西端にかけて北北東～南南西方向に走向し、中央緑地帯の調査対象外の部分を経て南端中央区では北北東～南南西方向に流れる小規模な溝跡。南端は調査区外に出、南側に隣接する鹿島浦遺跡で続く部分が検出されており、北関東自動車道太田桐生インターチェンジの建設に伴う調査対象範囲では総延長約170mに及んでいる。鹿島浦遺跡における検出状況では、南流するに従って若干南北寄りに向きを大きくしている。4区4号溝跡の確認全長は約25m・最大上幅0.9m・最大下幅0.6m・深さ0.2m。4区8号溝跡の確認全長は約12.1m・最大上幅1.4m・最大下幅0.7m・深さ0.4m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

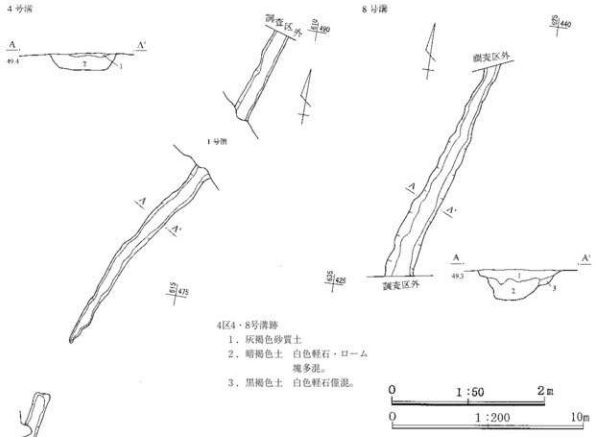


図152　4区4・8号溝跡平面図・土層断面図

（5）4区5号溝跡

位置：4区の東翼区の北西端の位置。4区1号竪穴建物跡の東側に隣接。X485～490・Y-635Gr.　**主軸方位：**N-20°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**4区北西端を北北西～南南東方向に走向する小規模な溝跡。北端は調査区外に延び、南端も調査区外に出るが、両端とも北に隣接する3区及び4区南端部では検出されていない。調査対象範囲での確認全長は約5.9m・最大上幅1.1m・最大下幅0.4m・深さ0.37m。断面は半楕円形状を呈している。　**埋土：**灰褐色砂質土ベース。　**時期：**不明（古代）。

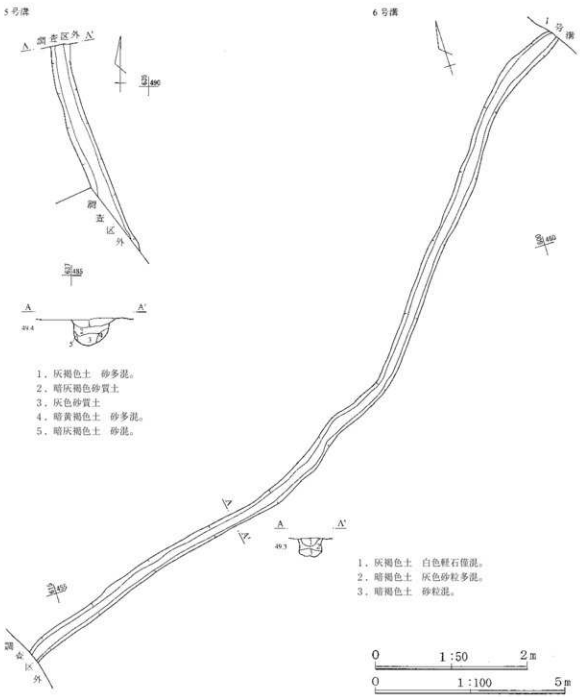


図153　4区5・6号溝跡平面図・土層断面図

（６）４区６号溝跡

位置：4区の東翼区のやや南寄りの位置。4区2・4号竪穴建物跡の南側。X450～465・Y-595～-615Gr.　**主軸方位：**約東半分はN-40°-E、西半分はN-77°-E　**重複：**4区1号溝跡に破壊される。　**規模と形状：**4区東翼区のやや南よりの位置を北東～南西方向から東北東～西南西方向に走向する小規模な溝跡。東端は4区1号溝跡に破壊され、西端は中央緑地帯の調査対象外範囲に延びるが、西翼区ではその続きの部分は検出されていない。調査対象範囲での確認全長は約22m・最大上幅0.3m・最大下幅0.2m・深さ0.25m。断面は半楕円形状を呈している。　**埋土：**暗褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

（７）４区７号溝跡

位置：4区の西翼区の西端寄りから中央の位置。4区3～5号掘立柱建物跡、4区12～14・16・17・19・20・22号竪穴建物跡の西側。X415～460・Y-695～-715Gr.　**主軸方位：**N-25°-E　**重複：**なし。　**規模と形状：**4区西翼区の北寄りの西端から中央にかけての位置を北北西～南南東方向に走向する。西端は調査区外に出る。南端は南に隣接する鹿島浦遺跡に続き、北関東自動車道太田・桐生インターチエンジ建設に伴う調査対象範囲では総延長約130mに及ぶ。南流するに従って南北方向に向きを変えている。調査対象範囲での確認全長は約124m・最大上幅1.4m・最大下幅0.8m・深さ0.4m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

（８）４区10号溝跡

位置：4区の南端中央区の中央からやや東寄りの位置。4区9号溝跡の西側、4区12号溝跡の東側。X425・Y-635～-640Gr.　**主軸方位：**N-30°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**4区南端中央区のやや東寄りの位置を北北西～南南東方向に走向する。北端は調査区内、北壁から約２mの所からはじまり、南端は調査区外に出る。南端は南に隣接する鹿島浦遺跡に続き、北関東自動車道太田桐生インターチエンジ建設に伴う調査対象範囲では総延長約150mに及ぶ。南流するに従って東側に角度を変えている。調査対象範囲での確認全長は約5.6m・最大上幅1.1m・最大下幅0.7m・深さ0.4m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

（９）４区11・14号溝跡

位置：11号溝跡は、南端中央区の西寄りの位置、4区21号竪穴建物跡の西側に隣接する。X415～420・Y-675～-680Gr.　14号溝跡は、4区の西翼区の北東端の位置。X480・Y-675Gr.　**主軸方位：**11号溝跡N-30°-E、14号溝跡N-0°-EW　**重複：**なし。　**規模と形状：**4区11号溝跡は4区南端中央区の西寄りの位置を北東～南西方向に流れ、南北両端は調査区外に出る。確認全長は４m・最大上幅0.8m・最大下幅0.6m・深さ0.25m。断面は逆台形状を呈する。南端は南に隣接する鹿島浦遺跡では検出されていない。北端は中央緑地帯の調査対象範囲外を経て西翼区北東端の14号溝跡に続く。4区14号溝跡は、北端は北側に隣接する3区5号溝跡に続き、本遺跡で検出された範囲での総延長は約105mに及んでいる。調査対象範囲での確認全長は約４m・最大上幅１m・最大下幅0.2m・深さ0.45m。断面は緩い逆三角形状を呈している。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

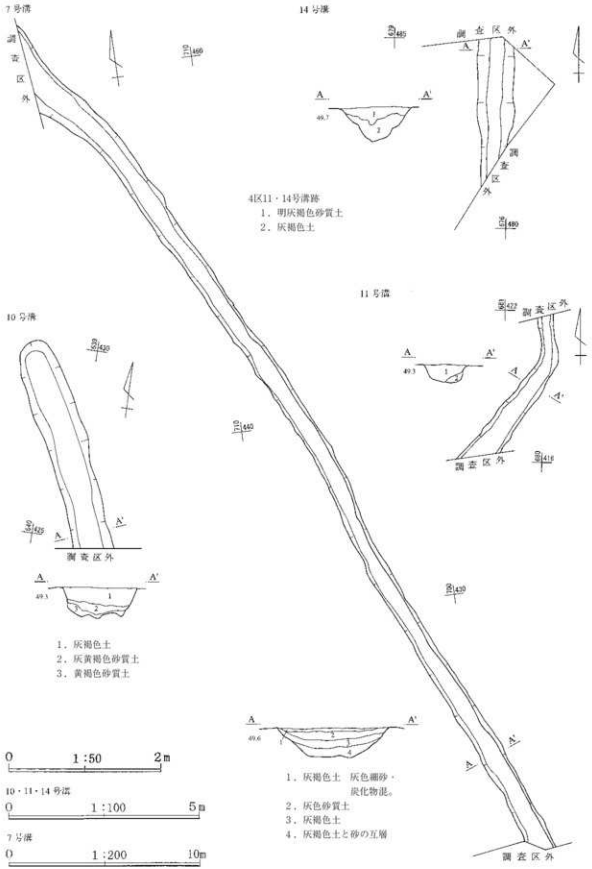


図154　4区7・10・11・14号溝跡平面図・土層断面図

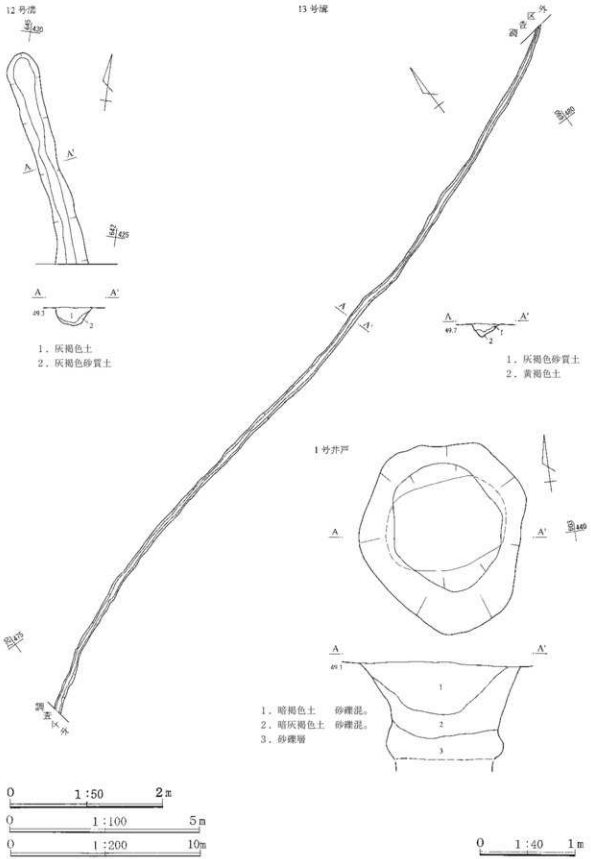


図155　4区12・13号溝跡、1号井戸跡平面図・土層断面図

(10) 4区12号溝跡

位置：4区の南端中央区の中央から若干東寄りの位置。4区10号溝跡の西側、4区15号竪穴建物跡の東側。X420～425・Y-640～-645Gr.　**主軸方位：**N-23°-W　**重複：**なし。　**規模と形状：**4区南端中央区の若干東寄りの位置を北北西～南南東方向に走向する。北端は調査区内、北壁から約１mの所からはじまり、南端は調査区外に出る。南端は南に隣接する鹿島浦遺跡に続き、北関東自動車道太田桐生インターチエンジ建設に伴う調査対象範囲では総延長約17m。調査対象範囲での確認全長は約5.7m・最大上幅0.7m・最大下幅0.5m・深さ0.25m。断面は逆台形状を呈している。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

(11) 4区13号溝跡

位置：4区の西翼区の北端寄りの位置。4区1・2・6号掘立柱建物跡、11・12号竪穴建物跡の北側に隣接する。X470～480・Y-675～-720Gr.　**主軸方位：**N-70°-E　**重複：**なし。　**規模と形状：**4区西翼区の北端寄りの位置を東北東～西南西方向に走向する。東西両端とも調査区外に出る。東端は北側に隣接する3区3号溝跡に続く。本遺跡での総延長は約90m。調査対象範囲での確認全長は約44.7m・最大上幅0.4m・最大下幅0.2m・深さ0.17m。断面は逆三角形状を呈している。　**埋土：**灰褐色土ベース。　**時期：**不明（古代）。

第４項　井戸跡

4区では１基の井戸跡が検出されている。本遺跡2～4区では唯一の井戸跡である。膨大な面積を調査した割には、意外にも井戸跡は少ない。現代では湧水量が豊富で、2区の東側で検出された2区と3・4区との間に北から入る谷は、調査時に度々水没し、調査を困難にするほどの湧水量があった。この地区では、古代より湧水が豊富で、比較的水の確保が容易であったがために、調査面積に比して検出された井戸跡の数は少ないのかもしれない。

(１) 4区1号井戸跡

位置：4区の東翼区の南端寄りの位置。4区5・6号竪穴建物跡の東側に隣接。X435～440・Y-600～-605Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**外長径2m・外短径1.7m・本体長径1.3m・本体短径0.9m・面積2.72㎡。外縁は南北にやや長い楕円形状を、本体は東西にやや長い楕円形状を呈する。断面は口の開いた朝顔型の円筒形状を呈する。深さ約1.1mのところまで調査。　**埋土：**暗灰褐色土ベース。

第5項　土坑・ピット跡

4区では14基の土坑跡と13基のピット跡が検出されている。

土坑群は概ね、東翼区の南端付近から南端中央区にかけ、比較的集中しているように見受けられる。なお、7号土坑跡は欠番である。

ピット群は概ね、特に西翼調査区の北寄りの掘立柱建物跡群周囲で特に集中して検出されている。これらのピット群は、調査時にも掘立柱建物跡の可能性を模索し、様々に試行を繰り返したが、平面図形態や掘り方がまちまちであり、掘立柱建物跡や柱穴列跡と考えるには無理があるように思われた。報告するのはその中でもあきらかに人為的な掘り込みであることが確実視される13基についてである。

いずれも用途は不明の穴である。出土遺物が少ないので、これらの土坑跡の時期は不明であるが、確認面や他の遺構との新旧関係から平安時代前期の遺構と考えられる。

（1）4区1号土坑跡

位置：4区の東翼区の中央から西寄りの位置の南端。4区5・6号竪穴建物跡の南、4区8号竪穴建物跡・3号土坑跡の東、4区1号井戸跡の南西に隣接。X430・Y-605Gr.　**重複：**4区2号土坑跡を破壊する。　**規模と形状：**北西～南東方向に細長い隅丸長方形状を呈する。長径2.1m・短径0.78m・深さ0.2m・面積1.6㎡。断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

（2）4区2号土坑跡

位置：4区の東翼区の中央から西寄りの位置の南端。4区5・6号竪穴建物跡の南、4区8号竪穴建物跡・3号土坑跡の東、4区1号井戸跡の南西に隣接。X430～435・Y-605Gr.　**重複：**4区1号土坑跡に南西端部を破壊される。　**規模と形状：**北東～南西方向に細長い隅丸長方形状を呈する。長径1.75m以上・短径1.43m・深さ0.29m・確認面積2.3㎡。断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

（3）4区3号土坑跡

位置：4区の東翼区の中央から西寄りの位置の南端。4区5・6号竪穴建物跡の南、4区8号竪穴建物跡の東、4区1・2号土坑跡の南に隣接。X430・Y-605Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**北北西～南南東方向に細長い隅丸長方形状を呈する。長径2.41m・短径1.55m・深さ0.3m・面積3.4㎡。断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

（4）4区4号土坑跡

位置：4区の南端中央区の東端。X425・Y-605Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**北東～南西方向に長い楕円形状を呈していたものと考えられるが、南西側を大きく破壊されているため、詳細は不明。深さ0.27m・確認面積0.8㎡、断面はやや緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**黒褐色土ベース。

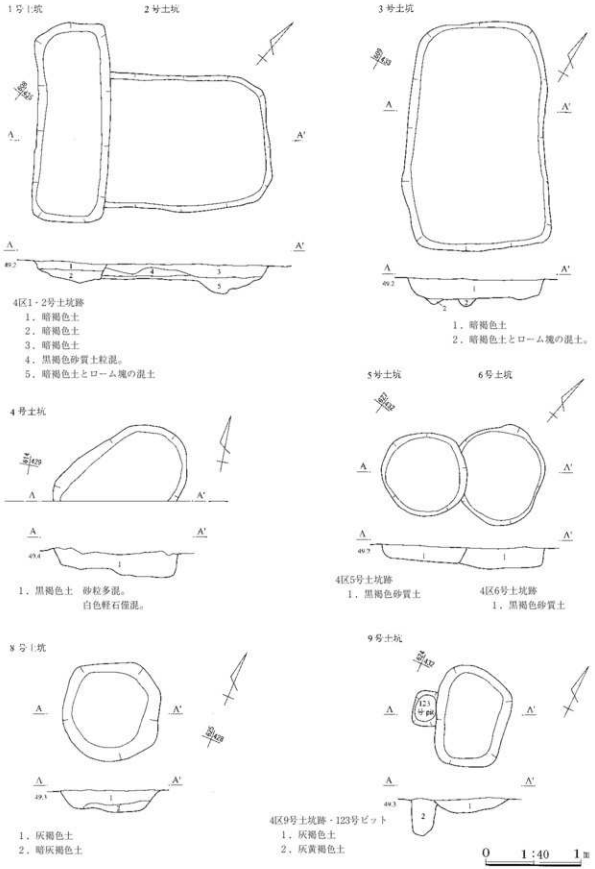


図156　4区1～6・8・9号土坑跡、123号ピット跡平面図・土層断面図

（５）4区5号土坑跡

位置：4区の南端中央区の東寄りの位置、4区10号竪穴建物跡のすぐ南側に重複。X430・Y-625Gr.　**重複：**4区6号土坑跡の南西端を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**ほぼ円形状を呈する。径0.9m・深さ0.18m・面積0.6㎡、断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**黒褐色砂質土ベース。

（６）4区6号土坑跡

位置：4区の南端中央区の東寄りの位置、4区10号竪穴建物跡のすぐ南側に重複。X430・Y-625Gr.　**重複：**4区5号土坑跡に南西端を掘り込まれて破壊される。　**規模と形状：**ほぼ円形状を呈する。径１m・深さ0.22m・確認面積0.8㎡、断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**黒褐色砂質土ベース。

（７）4区8号土坑跡

位置：4区の南端中央区の東寄りの南端の位置、4区10号竪穴建物跡・5・6号土坑跡の南側、4区8号溝跡の東側。X425・Y-625Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**ほぼ円形状を呈する。径1.15m・深さ0.22m・面積0.9㎡、断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

（８）4区9号土坑跡

位置：4区の南端中央区の中央東寄りの位置、4区10号竪穴建物跡・5・6号土坑跡の東側。X430・Y-620Gr.　**重複：**4区123号ピット跡の北東端を掘り込んで破壊する。　**規模と形状：**北西～南東方向に細長い不整隅丸台形状を呈する。長径1.05m・短径0.7m・深さ0.15m・面積0.7㎡、断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

（９）4区123号ピット跡

位置：4区の南端中央区の中央東寄りの位置、4区10号竪穴建物跡・5・6号土坑跡の東側。X430・Y-620Gr.　**重複：**北東端を4区9号土坑跡に掘り込まれて破壊されている。　**規模と形状：**楕円形状を呈する。長径0.34m・短径0.22m以上・深さ0.4m、断面は半長円形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

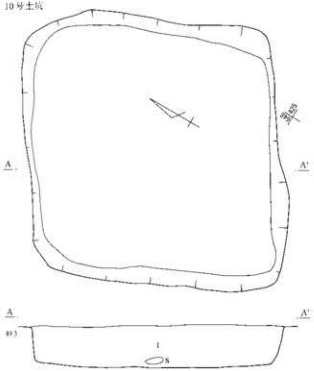
（10）4区10号土坑跡

位置：4区の南端中央区のほぼ中央の位置、4区15号竪穴建物跡の北側に重複。X420～425・Y-645Gr.　**重複：**4区15号竪穴建物跡を破壊する。　**規模と形状：**隅丸方形状を呈する大きな土坑。径約2.75m・深さ0.45m・面積7.4㎡、断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

（11）4区11号土坑跡

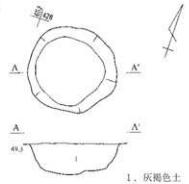
位置：4区の南端中央区のほぼ中央の位置、4区12号土坑跡の東側に隣接。X425・Y-650Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**円形状を呈する。径約１m・深さ0.32m・面積0.7㎡、断面は逆台形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

10号土坑



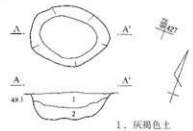
1．暗褐色土

11号土坑



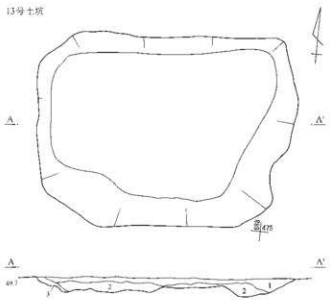
1．灰褐色土

12号土坑



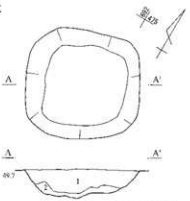
1．灰褐色土
2．黒褐色土

13号土坑



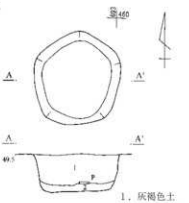
1．灰褐色土
2．灰褐色砂質土
3．灰黄褐色砂質土

14号土坑



1．暗褐色土
2．黄色土

15号土坑



1．灰褐色土
2．暗黄褐色土

0　1:40　1m

図157　4区10～15号土坑跡平面図・土層断面図

(12) 4区12号土坑跡

位置：4区の南端中央区のほぼ中央の位置、4区11号土坑跡の西側に隣接。X425・Y-650Gr.　**重複：**なし。**規模と形状：**東西に長い楕円形状を呈する。長径0.85m・短径0.62m・深さ0.28m・面積0.4㎡、断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

(13) 4区13号土坑跡

位置：4区の西翼区の北東寄りの位置、4区1号掘立柱建物跡の東側に隣接。X475・Y-685～-690Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**東西に長い隅丸台形状を呈する大きな土坑。長径2.75m・短径2.07m・深さ0.2m・面積5㎡、断面は浅く非常に緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

(14) 4区14号土坑跡

位置：4区の西翼区の北東寄りの位置、4区1号掘立柱建物跡の内側。4区13号土坑跡の西側に隣接。X470・Y-690Gr.　**重複：**4区1号掘立柱建物跡の内側に入るが、掘立柱建物跡との新旧関係は不明。　**規模と形状：**方形状を呈する。一辺約1.17m・深さ0.3m・面積1.24㎡、断面は緩やかな逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

(15) 4区15号土坑跡

位置：4区の西翼区の中央から若干北東寄りの位置、4区4号掘立柱建物跡の東側に隣接。X455・Y-690Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**不整円形状を呈する。径1m・深さ0.4m・面積0.7㎡、断面は掘り込みが直な逆台形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

(16) 4区27号ピット跡

位置：4区の東翼区の中央から若干南西寄りの位置、4区2号竪穴建物跡の東側に隣接。X455・Y-610Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**円形状を呈する。径0.4m・深さ0.36m、断面は半長円形状を呈する。　**埋土：**灰褐色土ベース。

(17) 4区32・33号ピット跡

位置：4区の東翼区の北西端近くの位置、4区5号溝跡の東側に隣接。X485・Y-630Gr.　**重複：**北側に位置する32号ピット跡が南側の33号ピット跡の北端を僅かに掘り込んで破壊している。　**規模と形状：**長円形状を呈する。32号：長径0.6m・短径0.5m・深さ0.29m、断面は深い逆台形状を呈する。33号：長径0.62m・短径0.49m・深さ0.28m、断面は深い逆台形状を呈する。　**埋土：**黒・暗褐色土ベース。

(18) 4区46・47号ピット跡

位置：4区の東翼区の中央、南端近くの位置、4区1・2号土坑跡の南、3号土坑跡の東に隣接。X430・Y-605Gr.　**重複：**南側に位置する46号ピット跡が北側の47号ピット跡の南端を掘り込んで破壊している。　**規模と形状：**不整円形状を呈する。46号：長径0.53m・短径0.49m・深さ0.42m、断面は深い逆台形状を呈する。47号：長径0.25m・残存短径0.16m・深さ0.3m、断面は深い逆台形状を呈する。　**埋土：**暗・灰褐色土ベース。

(19) 4区402号ピット跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央位置。X450・Y-705Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**東西に細長い楕円形状を呈する。中央に柱痕がのこる。長径0.78m・短径0.5m・柱痕径0.2m・深さ0.6m、断面は深い逆台形状を呈する。**埋土：**暗褐色土ベース。

(20) 4区418号ピット跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央からやや西寄りの位置。X450・Y-705Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**東西にやや長い楕円形状を呈する。中央に柱痕がのこる。長径0.57m・短径0.48m・柱痕径0.15m・深さ0.45m、断面は深い逆台形状を呈する。**埋土：**暗褐色土ベース。

(21) 4区428号ピット跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央からやや南寄りの位置。X445・Y-705Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**北西～南東にやや長い楕円形状を呈する。中央に柱痕がのこる。長径0.76m・短径0.68m・柱痕径0.18m・深さ0.52m、断面は逆台形状を呈する。**埋土：**暗褐色土ベース。

(22) 4区431号ピット跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央からやや西寄りの位置。X450・Y-705Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**円形状を呈する。中央に柱痕がのこる。径0.4m・柱痕径0.17m・深さ0.42m、断面は半長円形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

(23) 4区432号ピット跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央からやや西寄りの位置。X450・Y-700～-705Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**北西～南東方向に長い楕円形状を呈する。長径0.77m・短径0.52m・深さ0.54m、断面は不整逆台形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

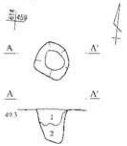
(24) 4区442号ピット跡

位置：4区の西翼区のほぼ中央からやや西寄りの位置。X445・Y-700Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**円形状を呈する。径0.62m・柱痕径0.16m・深さ0.5m、断面は半長円形状を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

(25) 4区450号ピット跡

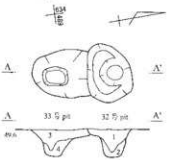
位置：4区の西翼区のほぼ中央からやや西寄りの位置。X445・Y-700～-705Gr.　**重複：**なし。　**規模と形状：**北西～南東方向にやや長い楕円形状を呈する。長径0.75m・短径0.6m・深さ0.54m、断面は隅丸の緩い逆三角形を呈する。　**埋土：**暗褐色土ベース。

27号 pit



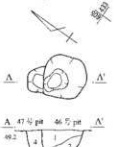
1．暗褐色土
2．褐色土

32・33号 pit



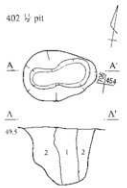
1．黒褐色土
2．黒褐色土とローム塊の混土。
3．暗褐色土　白色軽石混。
4．暗褐色土とローム塊の混土。

46・47号 pit



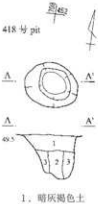
1．暗褐色土　白色軽石・黒色土塊混。
2．暗褐色土
3．暗褐色土
4．暗灰褐色土

402号 pit



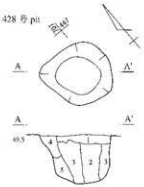
1．暗褐色土　ローム粒混。
2．暗褐色粘質土

418号 pit



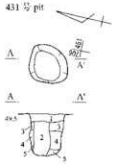
1．暗灰褐色土
2．暗褐色土
3．暗褐色土

428号 pit



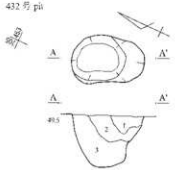
1．暗褐色土　砂粒多混・ローム粒混
2．暗褐色土　ローム粒混
3．暗褐色土　ローム塊混
4．暗灰褐色土
5．暗褐色土　ローム塊多混。

431号 pit



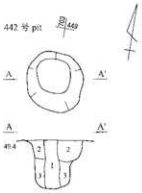
1．暗灰褐色土　砂粒多混・焼土粒混。
2．暗褐色土　ローム粒混。柱痕。
3．暗褐色土　ローム粒少量混。
4．暗褐色土　ローム塊混。
5．黄褐色土　ローム崩落土。

432号 pit



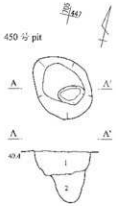
1．暗褐色土　焼土粒多混。
2．暗褐色土　ローム粒混。
3．暗灰褐色土　ローム粒混。

442号 pit



1．暗褐色土　ローム粒混。
2．暗褐色土　ローム粒・焼土粒少量混。
3．暗灰褐色土　ローム塊混。

450号 pit



1．暗褐色土　ローム粒・焼土粒混。砂粒多混。
2．暗褐色土　ローム塊混。

0　1:40　1m

図158　4区ピット跡平面図・土層断面図

第6項　畠跡

4区の南西隅のX415～435・Y-690～-710Gr.の範囲内で畠跡が検出された。畝の走向は北東～南西方向で、畝間等は検出されない。灰白色のシルト質土で上面を覆われている。

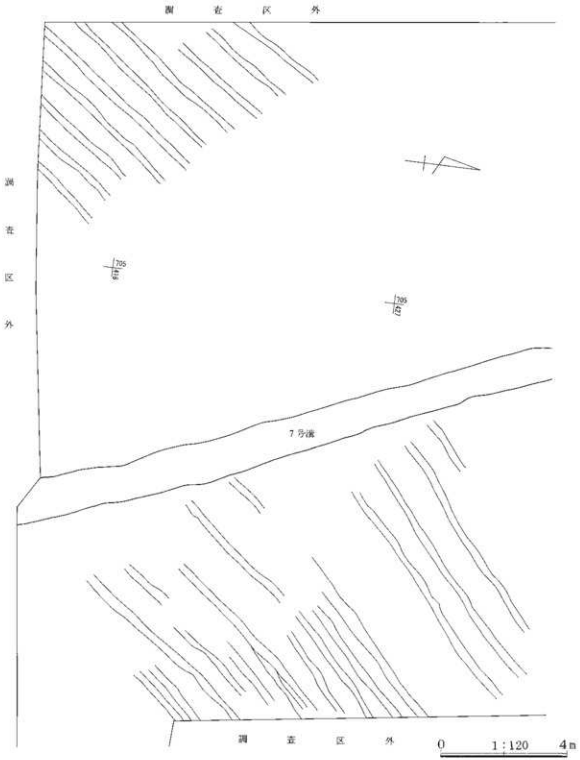


図159　4区畠跡平面図

第7項　表土出土遺物

4区表土

遺物番号	器　種	三土状況・原形状態	法　量 (cm/g)	①色調　②焼成　③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区表-1	土師器　杯	400・-700 1/3	口径 (18.6)、底径 (10)、器高 5.7、器厚 0.8	①明赤褐色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～ 4mm 黒・茶褐色粒子・砂粒混	口唇部内外面横撫、体～底部外面施削・内面撫
4区表-2	須恵器　杯	410・-690 3/4	口径 (12.6)、底径 6.6、器高 3.6、器厚 0.8	①緑灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～ 5mm 黒褐色・白色粒子・砂粒少量混	轆轤成形、底部回転糸切
4区表-3	須恵器　杯	410・-700 1/2	口径 (12.6)、底径 7.4、器高 3.3、器厚 0.8	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～ 5mm 黒褐色・白色粒子・砂粒多混	轆轤成形、底部回転糸切・外縁部のみ施削
4区表-4	土師器　甕	420・-700、口縁～胴部片	口径 23.2、器高 (14.3)、器厚 0.6	①橙色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～ 5mm 白色・黒褐色粒子・砂粒多混	口縁部内外面撫、体部外面施削・内面撫
4区表-5	蛇紋岩製　紡錘車	460・-690 完形	上径 5.2、下径 3.2、器厚 1.8、孔径 1、重 73.5	①暗緑色	側面横位に刻書「富寿」
4区表-6	須恵器　杯	表土 2/3	口径 10.1、底径 5.8、器高 4.1、器厚 0.7	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・黒褐色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
4区表-7	須恵器　杯	表土 3/4	口径 13.5、底径 5.7、器高 3.7、器厚 0.9	①灰白色　②良好　③緻密、径 1mm 以下白色・黒褐色粒子・砂粒混	轆轤成形、底部回転糸切
4区表-8	須恵器　杯	表土 1/3	口径 (12.5)、底径 6、器高 3.6、器厚 0.9	①灰色　②良好　③やや粗い、径 1mm 以下～ 5mm 白色・黒褐色粒子・砂礫多量混	轆轤成形、底部回転糸切
4区表-9	須恵器　蓋	表土 1/5	径 (20.2)、摘部径 (6.2)、器高 (4.5)、器厚 1	①灰色　②良好　③緻密、径 1mm 以下～ 5mm 白色・黒褐色粒子多混	轆轤成形

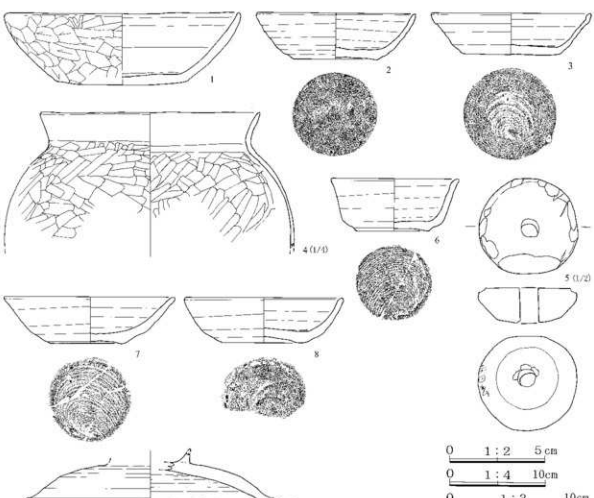


図160　4区表土出土遺物

第４章　調査成果の整理とまとめ

第１節　2～4区で出土した文字資料について

表３　楽前遺跡2～4区出土文字資料一覧

遺物番号	出土遺構	器種	文字記入部位方向	釈文
3区10竪-3	3区10号竪穴建物跡埋土	須恵器・杯	体部外面・正位(二箇所)	王
3区11竪-2	3区11号竪穴建物跡埋土	土師器・杯	体部外面・横位	朝
4区1竪-1	4区1号竪穴建物跡埋土	須恵器・杯	底部外面	正
4区11竪-2	4区11号竪穴建物跡埋土	須恵器・杯	体部外面・正位	×人
4区14竪-6	4区14号竪穴建物跡埋土	須恵器・杯	体部外面・正位	乙
4区1溝-10	4区1号溝跡埋土	須恵器・杯	底部外面	田人
4区1溝-35	4区1号溝跡埋土	須恵器・蓋	蓋部外面	田人
3区5竪-7	3区5号竪穴建物跡床面直上	石製紡錘車	上面	大林
4区表-5	4区表土(X460・Y-690Gr.)	石製紡錘車	側面・横位	富寿

本遺跡2～4区から出土した文字資料は、墨書土器６点と刻書土器１点、刻書紡錘車が２点である。10,865㎡を調査し、掘立柱建物跡10棟、竪穴建物跡45棟が検出されているような集落遺跡としては、極めて少ない部類である。

第１項　墨書・刻書土器

出土状況　墨書・刻書土器は、いずれも竪穴建物跡の埋土中から出土している。埋土中からの出土であるので、各資料の出土状況にさしたる特徴はない。７点中５点が4区からの出土で、一見、4区からまとまって出土しているようにみえるが、全体の点数が少ないので、特徴とまで言い切ることは出来ないだろう。同じ遺構から複数の墨書・刻書土器が出土している例もない。墨書・刻書土器の出土点数が極めて少ないため、出土した遺構が、遺跡内の特定のエリアに集中しているということもなく、また各々の資料の、それぞれ出土した各遺構内における出土状況を検討しても、特に共通したりあるいは際だった特色を指摘できるものはなかった。

集落遺跡から出土する墨書・刻書土器は、集落内における各種集団が、祭祀・儀礼等の行為に際して、集団の標識として特定の文字を記したものと考えられているが（平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』22 1989、のち同氏著『墨書土器の研究』 吉川弘文館 2000に収録、関和彦「古代村落の再検討と村落首長」『歴史学研究』626 1991、のち、同氏著『日本古代社会生活史の研究』　校倉書房 1994に収録）、本遺跡出土の資料では、とにかく墨書土器出土個体数の僅少なため、墨書された文字から集落内の小集団の動向を窺い知ることは困難である。

文字記入の状況　墨書土器に記された文字いずれも一箇所のみの記載である。文字が記入されている部

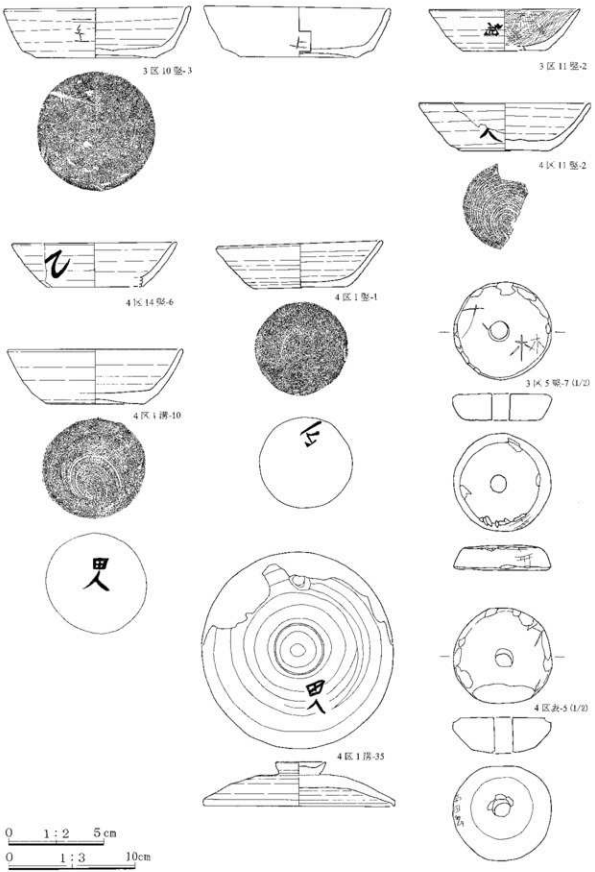


図161　楽前遺跡出土文字資料

位に関して言えば、底部が２例、体部が４例、蓋外面が１例となる。文字の記入位置はまちまちである。一般的に、関東地方における集落遺跡出土の墨書・刻書土器では、体部に記入される例が多いのに対し、官衙遺跡出土の墨書土器では底部外面に記されるものが多いという傾向がある。

器種　器種の点で言えば、本遺跡出土の墨書・刻書土器は、７点中、須恵器が６点を占める。この点も、墨書・刻書土器の全般的な傾向としてはやや異例であり、墨書・刻書土器の出土が特に顕著な関東地方の奈良・平安時代集落遺跡出土資料の全般的な傾向では、概して土師器の方が多いという特色がある。ただし、文字が記された土器の器種は、その遺跡出土土器全体の傾向と同様なのであり、特に、須恵器ないし土師器のどちらかが選ばれて、文字が記入されたというような事例は全く見受けられない。本遺跡においても、須恵器の流通・消費の頻度が一般に比べて高かったために、文字が記入された土器にも須恵器の割合が高いというだけのことであろう。本遺跡が所在する群馬県太田市一帯は、上野国内でも須恵器生産が盛行した地域であり、本遺跡の約２km南東に位置する金山丘陵には、須恵器窯が多く造られていたことがわかっている。

実際、須恵器窯が多い遠江西部、尾張、美濃、出雲西部などの地域においては、奈良・平安時代集落遺跡出土土器の中での須恵器の占める割合の高さに比例して、墨書土器にも須恵器が多い傾向が指摘できる（藤田憲宏「墨書・刻書土器の出土傾向とその背景」吉村武彦編『古代文字資料のデーターベースの構築と地域社会の研究－平成11～13年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書』2002、高島英之「墨書・刻書土器からみた古代の出雲地域」『出雲古代史研究』15 2005、のち高島英之『古代東国地域史と出土文字資料』東京堂出版 2006に収録）。

記載内容　単語が記載されたのは、4区1号溝跡出土の資料２点に記された「田人」で、人名と考えられる。4区11号竪穴建物跡出土の須恵器杯体部外面に正位で記され、上部が欠損していて不明なものも「人」という末尾の文字のみは辛うじて判読でき、同様の文字が記されていた可能性もある。いずれにしても具体的なところは不明である。それ以外はいずれも１文字のみの記載である。１文字のみの記載であれば、文字の内容は如何様にも解釈することが可能であり、記された文字の意味を解明することは難しい。記されている文字の種類もまちまちで、文字の意味などを特定することも困難である。

刻書土器は3区10号竪穴建物跡から出土した須恵器杯の体部外面に正位で二箇所に「王」と土器焼成前の粘土生乾きの段階で刻書されたもの１点のみである。これも２箇所に同じ文字が１文字のみ記されており、同様にその意味を確定することは難しい。ただ、古代東国に多く分布していた壬生氏とその部民である壬生部の「壬生」を「生王」と表記する例があるので、壬生氏ないし壬生部の氏族名の一部を表記した可能性も、一案として想定することは許されるであろう。

本遺跡からは脚付きの円面硯の破片などが出土しており、墨痕及び摩耗痕の顕著な硯の存在は、当地における識字層の存在を示唆するところであろう。

第２項　刻書紡錘車

本遺跡出土の刻書紡錘車は２点であり、3区5号竪穴建物跡と4区の表土中から各々１点ずつ出土している。

3区5号竪穴建物跡出土の刻書紡錘車に記された「大林」の文字の意味は、関連する他の文字資料等の出土もないので不明である。地名とも人名とも、それぞれその一部とも如何様にも解釈することが出来る。

一方、4区の表土から出土した刻書紡錘車に記されている「富寿」の文字は、明らかに吉祥句であろう。

紡錘車は繊維に撚りをかける際に使用される弾み車であり、すでに弥生時代には使用されていたことが認められている。形は後世に至るまでほとんど変化がないが、８世紀以降、しばしば文字が記されることがある。記された文字は、土製・石製のものを問わず、鋭利な道具で刻みつけられたものがほとんどである。

文字が記された古代の紡錘車は、現在までのところ、全国的に見ても出土範囲が非常に限られており、京都府長岡京市長岡京跡右京６条２坊７坪出土のもの と岩手県奥州市伯済寺遺跡出土のもの、及び、平成19年に新たに出土した佐賀県小城市丁永遺跡出土の資料の合計３点以外は、関東地方のみに限られる。とりわけ群馬県南西部から埼玉県北西部にかけての地域を中心に集中して出土する。分布範囲がきわめて限られる遺物であり、南関東地域では東京都内で３点、神奈川県内で２点、山梨県内で１点と非常に少ない。また、北関東地域でも栃木県内では４点、茨城県内では12点と、上野・北武蔵地域以外での類例は非常に少ない。また、隣接する長野県や新潟県では、現在までの出土例はない。

この大変特徴的な出土文字資料である墨書・刻書紡錘車は、集落遺跡出土の墨書・刻書土器などと同様、古代村落における祭祀や儀礼にかかわるものと考えられる。

群馬県内出土の刻書紡錘車　現在までに出土が把握できた、群馬県内から出土した文字が記された紡錘車は今のところ約60点程度で、全てが刻書されたものである。文字が記載された紡錘車の割合は、県内出土の奈良・平安時代の全紡錘車の約１割強である。

出土状況　出土遺跡の分布状況をみると、一見、群馬県央の平野部と鏑川流域一帯の遺跡にまとまっていると言えそうだが、鏑川流域が多いのは、吉井町の矢田遺跡から多数まとまって出土しているからであり、出土遺跡の分布状況は従来より言われているように、上野国域内では西南部一帯中心と言うことができるだろう。ちなみにこの矢田遺跡は、上野国域内では最も多くの紡錘車が出土した遺跡であり、出土数は95個を数える。そのうち、８～11世紀のものと考えられる事例は58点を数える。文字が記された事例は11例であり、同時代の紡錘車の約２割弱のものに文字が記されていることになる。出土した紡錘車の絶対量が多ければ、必然的に文字が記されたものの量も多くなろうが、矢田遺跡では、この種の遺物が特に多い群馬県内の平均よりも、さらにおよそ倍の率で文字が記されていると言うことになり、遺跡の性格付けを考える上で重要な要素となる。また、それらのおよそ９割以上が、竪穴建物跡からの出土である。それらは、集落の中における何らかの祭祀・儀礼にかかわるものとの見方が有力であるが、出土状況から祭祀や儀礼に使用されたことが明確にわかるような例はない。

年代　出土資料の年代をみると、７世紀末まで遡るとみている資料も存在する。しかしながら、８世紀後半から９世紀代にかけての資料が圧倒的多数であり、中心は９世紀代と考えられる。

形状・材質　断面が薄台形状のものがほとんどで、これも県内出土の奈良・平安時代の紡錘車全体の傾向と一致している。上径はおよそ４～５cm前後のものが多い。

紡錘車の重量は、紡錘車の機能に関わる重要な意味を有するが、県内出土の刻書紡錘車はおおむね40～70gの間に収まり、なかでも50g以上のものが大半を占める。県内出土の奈良・平安時代の紡錘車全体の傾向からみると、文字が記されたものにはやや重いものが多いように見受けられる。ただ、県内出土の紡錘車全体の傾向では、平安時代になると50～70gのものが30～50ｇのものを若干上回るようになる。刻書紡錘車の資料数も平安時代になって増加してくるので、県内出土の刻書紡錘車で50gを越えるものが多いのは、それらの中に平安時代の紡錘車が多いことに因るものであり、この点でも県内出土紡錘車の全体的な傾向の通りと言うことができる。紡ぎ出される糸の太さ・大きさ、あるいは繊維の種類によって紡錘車の大小が使い分けられていたことにより、大型重量のものや小型軽量のものもそれなりに存在していたと考えられる。

また、材質は、高崎市大八木屋敷遺跡出土の資料と太田市稲荷宮遺跡出土の資料の２点以外すべて石製である。県内出土の奈良・平安時代の紡錘車の約7割強は石製であるが、文字が記された紡錘車での割合は圧倒的に石製のものが多いと言うことになる。ただし、茨城県内出土の刻書紡錘車の事例では、半数を土製のものが占めている。文字が記される紡錘車の材質は、あくまでもその地域において盛行した紡錘車の材質に左右されるとみてよいだろう。

石材の種類が判明しているものには蛇紋岩が多く滑石片岩がそれに次いでいる。県内出土の紡錘車全体では、滑石片岩製のものが約５割で、蛇紋岩製のものが約３割をしめるが、平安時代の資料では蛇紋岩製のものが滑石片岩製のものの倍になるなど状況が逆転するので、群馬県内出土の古代刻書紡錘車に蛇紋岩製のものが多く見られる点は、刻書紡錘車には平安時代の資料が多いことに因るからだと考えられる。

記載内容　これまで見てきたように、県内出土の刻書紡錘車にみられる年代及び形態の特徴は、文字が記されていない他の一般的な紡錘車の全体的な傾向とほぼ一致していると言うことが判明した。このことは言い換えれば、特段、大型重量あるいはその逆で小型軽量のものや、特殊な材質のものなど、特徴的な紡錘車が選ばれて文字が記されたのではなく、ごく一般的な、日常使用されている紡錘車に、ある時点で何らかの必要があって文字が記されていたということになる。

刻書紡錘車に記載された文字の意味は人名や地名とみられるものが多い。また、文字が記された場所や方向などはまちまちで、書式が完備していたわけではない。これらの点は墨書土器の文字記載方法と似ているが、刻書紡錘車では１文字のみ記載するものは却って少なく、複数の文字が記されたものがほとんどであり、墨書土器の様相とは異なる特徴も指摘できる。記された内容は、墨書土器と同様、多種多様である。

刻書紡錘車は、集落内における何らかの祭祀・儀礼等の行為に使用されたことからみれば、記された人名や地名は祭祀や儀礼を執り行った人物や願をかけた人物の名と考えられる。前橋市芳賀東部団地Ⅱ遺跡出土の資料には「勢多郡楊□□五百□部□」と、祭祀・儀礼を執り行った人の名前を、その人物の居住地から記載している。玉村町福島曲戸遺跡出土の資料にも「上野国 迎 路 飼 路 路」という語が記されており、同様の可能性がある（実物資料に当たっての筆者の読み直し。当該報告書掲載の釈分では異なる）。

県内出土の刻書紡錘車の事例では、このように居住地名から書き出す確実な例は、現在までのところ前橋市芳賀東部団地Ⅱ遺跡出土の資料だけであるが、他の地域から出土した例には似たような書き方の資料が若干ある。埼玉県本庄市南大通線内遺跡からは上面に「武蔵国児玉郡草田郷戸主太田マ身万呂」と刻書されたものが、また、東京都国立市仮屋上遺跡からは下面に「武蔵国多磨（郡）」、側面に「羊」と刻書されたものが、さらに千葉県大網白里町南麦台遺跡からは上下面両面に「下総国千葉郡千葉郷」と刻書されたものが、さらに前述したように茨城県水戸市二の沢Ｂ遺跡（古墳群）からは側面に「轉田郷戸主君子部大倡麻呂」と刻書された資料がそれぞれ出土している。これらの資料も、祭祀・儀礼を執り行った者たちが、自分たちの名を、鬼神や疫神・祟神・悪霊を含むところの神仏に対して示したものと考えられる。いずれも基本的には、国－郡－郷という律令制によって定められた地方区分に基づいた書き方がなされており、荷札木簡や正倉院に遺る調庸布墨書銘など、役所に対して租税を貢納する際になされた書きかたとよく似ている。そうした租税納入の際に用意された木簡や調・庸などへの書式を模倣して、編み出された書式なのであろう。祭祀・儀礼を執り行った人物を神仏に対して特定できるように示すことによって、願いごとが成就するように、あるいは神仏からの御利益を確実に受けられるように、悪霊・疫神・祟神などからの恐ろしい祟りや災いを回避できるように願ったためと考えられる。

その一方で、明らかに人名しか記されないものも存在している。このような例は、墨書土器でもまま見受

けられることであり、墨書土器の場合でも人名が記されるものには、居住する国・郡・郷名などから記された例よりも、人物の名前だけが記されたものの方が圧倒的に多い。墨書土器と同様、人名だけが記されたものは、居住する国・郡・郷名から記されたものの省略形と解釈することが可能であり、祭祀・儀礼を執り行った人、あるいはその集団の代表と解釈できよう。

このほか、記載内容の点から注目されるのが前橋市前田遺跡から出土した資料で、側面に横位で「福道志万家都无」と刻書されている。「都无」とは「紡む」すなわち紡錘車そのもののことである。「福道志万」とは「福道」という人物と「志万」という二名の人物を指すのかあるいは「福道志万」あるいは「福道志万呂」という一人の人物を指すのか、明確にはしがたい部分もあるが、おそらくは後者である可能性が高いであろう。ただ単に「都无」＝紡錘車の所有を示した記載ではなく、何らかの祭祀・儀礼に当たって使用された紡錘車の所属を示すとともに、祭祀・儀礼の主体者・執行者を「神仏」に対して示すためのものと考えられる。

墨書・刻書紡錘車の用途と機能　さて、これら墨書・刻書紡錘車が、祭祀・儀礼に際して使われたことを明確に示している例が、太田市尾島工業団地遺跡出土の資料に記された「矢田□人即万呂矢田公子家守状」と言う文言や、太田市東長岡戸井口遺跡出土の資料に記された「中村田□盛長□」「太綾神奉奉上」という文言、玉村町福島曲戸遺跡出土の資料に記された「村長解申□□召□」などのような、願文様の文言が記された資料や、沼田市戸神源訪Ⅱ遺跡出土の資料のような仏堂の絵が線刻された資料、吉井町大字神保字北高原採集の資料のような「真佛」の語とその下に蓮弁の線刻画が描かれた資料などであろう。

太田市尾島工業団地遺跡出土の資料に記された「矢田□人即万呂矢田公子家守状」という文言は、「矢田□人即万呂」と「矢田公子家守」とが何者かに対して「状す」（申し上げる）ことを意味している。「申し上げる」対象は、神仏と考えて間違いないだろう。

また、太田市東長岡戸井口遺跡出土の資料には「太綾神奉奉上」と記されており、「太綾神」に奉納されたことを物語る。この紡錘車自体を「太綾神」に奉納したのか、それともこの紡錘車は願文を示すだけの機能であったのかは明確にしがたいが、いずれにしても神仏に供献する儀式や祭りで使われたものといえよう。上面に記された「中村田□盛長□」は、「太綾神」に奉上する行為を行った人物の名であり、祭祀・儀礼を執り行った人物かあるいは祭祀・儀礼を主宰した集団の代表人物の名と考えられる。「太綾神」なる神についても詳細は不明であり、「太綾」がその神が鎮座する場所の地名なのか、あるいは繊維製品としての「太綾」を意味するのかも現段階でははっきりしない。ただ、「太綾」の語が繊維製品を意味しており、「太綾神」が紡織・織物生産に関わる神であれば、紡錘車という糸紡の道具に記された内容としては大変興味深い内容である。

このような神仏への願文、あるいは神仏への供献などの文言が記された紡錘車の例は、群馬県内出土のこれらの資料に限らない。例えば千葉県千葉市ムコアラク遺跡出土の刻書紡錘車には「南無 界 秋 林 如 申 神 ◎ 為」と記されていて、文言の意味はよくとれないものの何らかの願文とみられるし、埼玉県岡部町熊野遺跡から出土した石製紡錘車の下面には「道乙朋道具伏状」とあり、「道乙と朋道がともに伏して申し上げます」との意味で、祈願文そのものが記されている。

上記のような、紡錘車に直接刻書された文言によって、それらが呪術や信仰に関わるものであることが明白な資料が存在する一方、両棟に鴟尾、軒先に風鐸を有する瓦葺きの仏堂が線刻で描かれた沼田市戸神源訪Ⅱ遺跡出土の資料のように、描かれた絵画によって信仰や祭祀に関わるものであることが明らかな紡錘車の出土も、近年ではいくつか報じられている。

群馬県吉井町大字神保字北高原において採集された資料には「真佛」の語と蓮弁の絵画的表現が線刻されており、仏教的な信仰に関わるものであることは間違いないところであろう。こうした古代の地方社会における仏教信仰を示す刻書・刻画紡錘車の出土例は最近、各地において増えつつあり注目できる。

蓮弁が刻画された紡錘車としては、他地域出土の資料でも、例えば茨城県東町出土幸田台遺跡出土の資料や、埼玉県熊谷市北島遺跡出土の資料、埼玉県川越市弁天西遺跡出土資料などのような類例がある。ただ、これらの資料が、仏教的な信仰に関わる供養や儀礼の中で、どのように使用されたのかという点を具体的に解明することは現在のところは難しく、また、このような刻書紡錘車の使われ方を解明する上で手助けとなるような文献史料も皆無である。

群馬県内出土の資料では、さらに沼田市戸神諏訪Ⅱ遺跡出土資料がある、側面に「有馬酒麻呂」の人名と、仏堂と考えられる建築物の絵画が刻画されている。稚拙な表現ながら、寄棟造風の屋根に瓦葺きの様子が線刻で表現され、棟の両端には鴟尾、軒先には風鐸、柱の上部には斗栱もそれぞれ表現されており、本格的な瓦葺建築の仏堂を描いたものと考えられる。もちろん単なる戯画ではなく、仏教的信仰の対象としての仏堂を意識して描いたものであり、この紡錘車が仏教的信仰に伴って使用されたものであることは間違いないであろう。出土した遺跡からは平安時代の小規模な仏堂の跡が見つかっており、仏教信仰の浸透のようすがわかる。

本県外の類例としては、栃木県河内郡上三川町多功南原遺跡の９世紀第３四半期の竪穴建物跡SI70からは「多心」「善」「苦」「経」など、仏教的な文言が記された例があったり、埼玉県本庄市大久保山遺跡出土の石製紡錘車（側面に須弥山・供花・仏像が刻画）や、埼玉県北本市下宿遺跡出土の石製紡錘車（上面に如来形仏像の上半身と印相が刻画）などのように仏像が描かれた資料も存在している。

また、仏像とは考えにくいが、埼玉県児玉町枇杷橋遺跡出土の石製紡錘車のように、文字とともに、人面墨書・刻書土器によく似た人面が刻画されたものもある。人面墨書・刻書土器との関連を考えれば、この紡錘車に刻画された人面も祭祀に関わるものと考えられよう。この枇杷橋遺跡出土の刻書紡錘車に刻画された人面には、上から傷を付けて抹消しようとしたような痕跡が見受けられる。

このような祭祀・信仰に関わるとみられる文言や絵画が記されたり描かれたりしている紡錘車の存在からも、これら刻書紡錘車が祭祀や儀礼の場で使用されたことは明らかである。ただし、最初にも述べたように、記された文字の記載内容は実に多種多様であり、祭祀・儀礼それ自体のスタイルや、祭祀・儀礼の中での紡錘車の使用方法などはそれぞれの事例によってケース・バイ・ケース的に多様であったと見ざるを得ない。

紡錘車は糸紡ぎの道具であるが、祭祀や信仰の具体的な内容については、紡織という紡錘車本来の用途に関わるものであるのか否か、明確にしがたいものがほとんどである。群馬県内出土の資料では、「太綾神奉奉上」と刻書された太田市東長岡戸井口遺跡出土の資料が、わずかに紡織と関連する祭祀に関わる可能性を推測できる程度に過ぎない。ただ、古来より女神に対する奉献物として紡織具が使われるケースがあり、また、千葉県市川市下総国分寺跡出土の石製紡錘車のように、上面に文字と併せて紡錘車で糸を紡ぐ様を表現した絵画が刻画された例も存在することからも、紡織と全く無関係な祭祀・信仰に関わるものばかりとは言い難い。日常的な紡織行為の中で、あるいはまた神衣を織るなど特別な繊維製品の紡織に伴う祭祀の場での使用、など双方のケースを想定できる。

その一方で、紡錘車本来の用途を離れた祭祀・儀礼の場で使用されるような場合も存在したと考えられる。紡錘車の機能である「回転」に注目し、回転する機能が呪術的な意味と結びつき、例えばマニ車に類似するような呪具・法具的用途も想定できる。

また、紡錘車が本来的に有する機能とは全く離れるが、墓壙や地鎮遺構から出土する円盤状土製品・鉄製品との形状の類似から、銭貨の代用品・模造品としての使用も、可能性の一つとしては考えられる。

おわりに　刻書紡錘車が使われた祭祀や儀礼には、紡錘車本来の用途・機能に関連する紡織に関わるものである場合と、紡錘車本来の用途・機能からは全くかけ離れたものである可能性の双方が想定できる。群馬県内出土の事例からは、祭祀・儀礼の具体的な内容をはっきりできるものはまだ少ないというのが現状である。しかしながら、紡錘車を含む広義の紡織具が神に奉納されていたことや、他地域からではあるが紡錘車に糸紡ぎの様子が刻画された資料が出土していることからみても、それら墨書・刻書紡錘車が広義の紡織作業に関わる祭祀・信仰・儀礼の中で使用された場合が存在したことは間違いないところであろう。

また、その一方で、上述したように紡織という紡錘車の有する本来の機能からはかけ離れた祭祀・儀礼等の行為の中で使用された可能性も存在するわけである。

それら文字が記された紡錘車が上野国西南部から武蔵国北西中部の地域一帯に特に集中して出土する理由については、現段階では明確にしがたい部分が大きい。しかしながら、墨書・刻書紡錘車の出土が集中する地域即ち紡錘車に文字を記す風習が盛行した地域は、近代まで連綿と続く一大養蚕地域とほぼオーバーラップしている。また、群馬県西南部一帯が古代において布生産の盛行した地域の一つであったことは従来から指摘されているとおりである。絹糸紡ぎにおいても紡錘車が使用されたことから考えられるならば、この地域一帯に墨書・刻書紡錘車の分布が特に著しいことの背景を、養蚕と絹織物生産の盛行と結びつけることも可能性の一つとしては想定できるのではないだろうか。すなわち絹織物生産を含む広範囲にわたる布生産の盛行に伴う特徴的な信仰及び祭祀・信仰の存在が、祭祀や儀礼に際して紡錘車に文字を記入するという行為の原因になっているのではないだろうか。

近年、各地から出土が報じられている刻書紡錘車には、絵画が描かれた資料を含め、仏教関係の内容を有するものが目立ってきている。これまで、古代の在地社会における信仰については、神祇祭祀的な面がクローズアップされてきたが、昨今の古代東国の集落遺跡からの仏教関係遺物の出土状況を勘案すれば、神祇信仰・道教的信仰とともに仏教信仰も想像以上に古代東国村落社会の人々に浸透していたことが判明する。従来、古代の民衆社会における仏教的信仰の浸透状況については、畿内を中心とする西日本地域については『日本霊異記』所収の説話などによって明らかであったが、東国社会においても、相応に古代の民衆社会に仏教的信仰が根付いていた様子が、これらの出土文字資料から明らかになってきている。仏教的な文言や絵画などが記された紡錘車も、東国の民衆社会における仏教信仰盛行の中で、地域における特徴的な祭祀・信仰の形態と結びついて形成されたものと考えることができよう。

このような、在地における集落遺跡から出土した文字資料を検討することが、律令制下の地方の村落社会の構造や、祭祀・儀礼行為の実態、古代の在地社会における信仰の諸様相を解明する唯一の手段と言っても過言ではない。それらがある種の地域にかなり限定されて存在している資料であればこそ、それら資料そのものについて検討することが直接的にその地域における特異な祭祀・信仰の形態や、ひいてはそれらを生み出した社会構造の解明につながってくるわけであり、そこにこそこのような出土遺物に即した研究の意義が存在するのである。今後、さらなる調査を続けることによって資料の蓄積をはかり、研究の進展を期したいと考える。

第２節　まとめ

本遺跡検出遺構の時期　これまでみてきたように、本書で報告する楽前遺跡の調査では、奈良時代を主体とし、古墳時代中期から平安時代中期の集落遺跡が検出された。関東地方の古代集落遺跡では、おおむね、古墳時代後末期、飛鳥・白鳳期頃から形成され、古墳時代後末期と平安時代９世紀頃が集落のピークであるという消長過程をとることが多い。むしろ、奈良時代・８世紀を主体とする集落は概して少数である。しかしながら本遺跡では、調査対象範囲が限られているとはいえ、５～６世紀代と考えられる竪穴建物跡が検出されてはいるものの、それらの数は少数であり、また、通常のケースでは竪穴建物跡の数が非常に多くなる９世紀代のものも少ない。本遺跡における竪穴建物跡の主体は、あくまでも６世紀後半から７世紀末・８世紀代にかけてである。

東山道駅路に近接する集落　本遺跡では、西側に隣接する大道東遺跡及び、南側に隣接する鹿島浦遺跡において幅12～13mに及ぶ、両側に側溝を有する古代の道路跡が検出されており、この道路遺構は、古代の宮都から東日本内陸部の諸国を縦貫し、東北地方の陸奥国府多賀城（現・宮城県多賀城市）に到る古代の一級幹線道路である東山道駅路の遺構と考えらる。

周知の通り、近年、わが国における古代道路の研究は、各地における古代道路遺構の相次ぐ発見も相まって長足の進歩を遂げた。その中で、上野国内では、国内南部の平野部を直線的に東西に貫通する「牛堀・矢ノ原ルート」と称される初期官道と、『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条に記載されている国内５箇所の駅家と群馬県前橋市元総社町付近に想定される上野国府を通る後期駅路「国府ルート」の２系統の大規模官道跡が発見されている。

上野国の駅路　上野国は、東は下野、北は陸奥と越後、西は信濃、南は武蔵の各国と接する。北関東地方一帯は、古くは「毛野の国」と呼ばれていたようであるが、701年（大宝元）の大宝律令制定によって行政区画がほぼ確定し、ほぼ現在の群馬県域に相当する範囲が国域とされた。東山道に属することとなり、713年（和銅６）５月２日に出された「諸国郡郷名著-好字-」の詔によって上毛野国から上野国へと表記が変更されたものと考えられる。藤原宮跡から出土した７世紀後半頃の荷札木簡の表記は「上毛野国車評桃井里大贄鮎」とあり、大宝令制以前の表記であるが、711年（和銅４）銘の多胡碑には「上野国片岡郡緑野郡甘良郡多胡郡」とすでに大宝令制以後の表記になっている。また、726年（神亀３）銘の金井沢碑にも「上野国群馬郡下賛郷高田里」とあり、「上野国」の表記が定着していたことが伺える。

大宝令制による上野国は、碓氷・片岡・甘楽・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐井・新田・山田・邑楽の13郡から構成されていたが、711年（和銅４）に甘楽郡・緑野郡・片岡郡の３郡から６郷300戸を割いて多胡郡が新設され、14郡になった。『和名抄』の記述によると国府は群馬郡に所在した。具体的な国府の遺跡自体はまだ発見されていないが、古来より前橋市元総社町一帯に比定する考え方が有力である。前橋市元総社町の元総社寺田遺跡の発掘調査において、人形や斎串などの祭祀遺物とともに「国厨」「曹司」「国」「厨」等と書かれた墨書土器が出土しており、国府がその近辺に存在する可能性がさらに高まっている。上野国は最初上国であったが、811年（弘仁２）に大国に昇格された。この昇格の理由は定かではないが、土地開発による耕地の増大に伴い、生産力が上昇したことによるものと考えられよう。さらに826年（天長３）には常陸・上総などの諸国と同様、国守に親王を任ずる親王任国とされたが、これは親王を官職に就けることで経済的に処遇することを目的にした制度であり、守に任じられた親王は国務に従事することはなく、

また現地にも赴任しない習わしであった。以後は、本来は次官である「介」が実質上の長官となった。

国内には東山道駅路が東西に通り、『延喜兵部省式』諸国伝馬条に、

上野国駅馬　坂本十五疋、野後、群馬、佐位、新田各十疋。

伝馬　碓氷、群馬、佐位、新田郡各五疋

と、あり、坂本（碓氷郡）・野後（碓氷郡）・群馬（群馬郡）・佐位（佐位郡）・新田（新田郡）の５駅が置かれ、各駅家所在郡の郡家には伝馬が設置されていたことが見える。坂本が15疋を置く他は、いずれも「中路」としての規定通り駅馬数である。さらに899年（昌泰２）には碓氷関が置かれた。また、『延喜左右馬寮式』御牧条には、利刈（群馬郡）・有馬島（群馬郡）・沼尾（所在地不明）・拝志（所在地不明）・久野（所在地不明）・市代（吾妻郡）・大塩（所在地不明）・塩山（所在地不明）・新屋（甘楽郡）の９つの官牧が所在したことが見える。

上野国の駅路についても、早く大槻如電『駅路通』や吉田東吾『大日本地名辞書』、郭岡良弼『日本地理志料』などの先駆的な業績があり、はじめて全国的規模で古代駅路を具体的に想定した古典的な業績である藤岡謙次郎編『古代日本の交通路』Ⅰ～Ⅳ（大明堂、1978）では、金坂清則氏が地積図上の検討から高崎市から群馬町を経て前橋市元総社町の国府推定地を通る路線を想定している。これが後に「国府ルート」と称される『延喜兵部省式』諸国伝馬条所載の５駅家と国府想定地を通るルートである。

金坂氏が地積図上の検討及び現地地形の踏査から想定した『延喜兵部省式』諸国伝馬条所載の上野国５駅家のルート上では、1970年代末期から80年代前半にかけて、まず高崎市浜川町の御布呂遺跡で、1108年（天仁元）に降下したと考えられる浅間山噴出火山灰層の前後から両側溝を有する複数時期の道路遺構が検出されたのを皮切りに、高崎市（旧群馬町域）熊野堂遺跡など、複数箇所における発掘調査において古代の道路遺構が次々と確認され、金坂氏が想定する『延喜兵部省式』諸国伝馬条所載駅家を通るルート上に、部分的にではあるが間違いなく古代の道路遺構が存在していたことが証明された。その後、これらの調査成果をうけて、当時の群馬町教育委員会では、町域内を通るこの想定路線上で、古代駅路確認を目的とした発掘調査を全国に先駆けていち早く実施している。こうした成果は、全国的にも発掘調査によって古代駅路を確認し得た初めての例として特筆すべきであろう。

この金坂氏想定の東山道駅路ルート上で相次いで古代道路遺構が発掘調査されていたほぼ同時期の1984年、旧新田郡新田町（現・太田市）の大東（のちに大東遺跡）及び市（のちに市宿遺遺跡）で撮影された空中写真に、地表面に東西に並行する２条の溝跡がソイルマークとして確認された。その後、1988年にこのソイルマークが確認された地点で発掘調査を実施したところ、幅約13mで並行する溝跡が検出され、それが、旧新田町（現・太田市）の西に接する旧佐波郡境町（現・伊勢崎市）で1983年以来確認・調査されている「牛堀」と称される直線状の灌漑用水路を延長するラインに一致した位置にあることが判明した。

この「牛堀」は、伊勢崎市西部の旧市町村堺に沿って東西に一直線状に伸びており、また、東の延長線は、太田市に所在する「新田堀」のラインに合致する。伊勢崎市内の牛堀ライン上における確認のための発掘調査によって、矢ノ原遺跡など数箇所においてこの用水路から約13m間隔で並行する溝跡が確認できたため、先の太田市大東遺跡の調査成果と考え合わせ、古代道路遺構であると考えられた。この想定は、さらにこのライン上、大東遺跡の東に位置する太田市市宿遺跡でも約13.5m間隔で南北に並行する溝跡が２本検出され、国家座標による広範囲な位置確認により、伊勢崎市牛堀遺跡・矢ノ原遺跡と太田市大東遺跡・市宿遺遺跡で検出された約13.5m間隔で南北に並行する溝跡が一直線上に位置していることも確認できたことによっ

てこれら溝跡が古代道路の両側溝であることが確実となったことで裏付けられた。この古代道路遺構は、旧境町から旧新田町にかけて6地点において発掘調査がなされており、約10kmにわたって断続的に確認された。この新たに発見された大規模な古代道路跡は「牛堀・矢ノ原ルート」と名付けられ、検出された遺構の考古学的な年代データから、7世紀後半に造営され、8世紀後半段階には廃絶していることを根拠に、金坂氏が想定された延喜式所載駅家と国府を通る「国府ルート」に先行する初期の東山道駅路であると性格づけられた。

その後、1993年、高崎市宿大類町～中大類町の高崎情報団地遺跡からも約10m幅で並行する2本の溝跡が検出され、境町牛堀～新田町新田堀で確認された「牛堀・矢ノ原ルート」古代道路跡と連続する道路跡であることが判明し、このルートは約30kmにわたって連続していることが判明した。

「牛堀・矢ノ原ルート」上で次々と古代道路遺構が発掘調査され、検出されていた1990年、新田町の下新田遺跡から、幅約12mの両側溝を有する古代道路遺構が約300mにわたって検出された。先述した「牛堀・矢ノ原ルート」から北に約500mの場所に位置しており、方向からみても「牛堀・矢ノ原ルート」と並行する、いわば第3のルートである。このルートは「下新田ルート」と命名された。ただし、このルートについては、現段階では下新田遺跡以外ではあまり発掘調査によって確認されておらず、並行する「牛堀・矢ノ原ルート」や『延喜式』段階の駅路との関係については、現段階では定見をみていない。

古代駅路を発掘調査によって考古学的に検証する方法は、全国に先駆けて群馬県内において初めて実施され、その後の調査・研究が進展してきたわけである。その意味で、古代道路研究史上、本県で古代道路遺跡・遺構の調査にあたってきた研究者が果たしてきた役割は特筆すべきであろう。　また、本県内においては、東山道駅路として1.「国府ルート」、2.「牛堀・矢ノ原ルート」3.「下新田ルート」の3つのルートが確認されており、古代駅路の変遷過程を考える上での一つのモデルケースを示した点でも重要である。

初期の上野国内東山道駅路「牛堀・矢ノ原ルート」　　先述したように、1984年太田市の大東（のちに大東遺跡）及び市（のちに市宿通遺跡）で撮影された空中写真に、ともにN-83°-E方向で地表面に東西に並行する2条の溝跡がソイルマークとして確認された。方向が全く同じで一直線上に位置することから、これら2箇所で確認されたソイルマークは一連のものであることが想定された。その後、このソイルマークが確認された地点で発掘調査を実施したところ、幅約13mで並行する溝跡が検出され、古代の道路遺構であることが判明した。それが、太田市の西に接する伊勢崎市の旧境町地域で1983年以来確認・調査されている「牛堀」と称される直線状の古代の灌漑用水路を延長するラインに一致した位置にあることにいち早く気づかれた。この「牛堀」は、伊勢崎市北部の旧市町村堺に沿って東西に一直線状に約3kmにわたって伸びており、また、東の延長線は、伊勢崎市の東に接する太田市の旧新田町地域に所在する「新田堀」のラインとも合致している。伊勢崎市の牛堀ライン上における確認のための発掘調査によって、矢ノ原遺跡など数箇所においてこの用水路から約13m間隔で並行する溝跡が確認できたため、先の太田市大東遺跡の調査成果と考え合わせ、古代道路遺構の可能性が指摘されたが、さらにこのライン上、大東遺跡の東に位置する新田町市宿通遺跡でも約13.5m間隔で南北に並行する溝跡が2本検出され、国家座標による広範囲な位置確認により、伊勢崎市牛堀遺跡・矢ノ原遺跡と太田市大東遺跡・市宿通遺跡で検出された約13.5m間隔で南北に並行する溝跡などと一直線上に位置することも確認され、これらが古代道路遺構であることが確実となったのである。これらのことから、この古代灌漑用水路「牛堀」を新田町内で検出された古代道路の北側溝を拡幅して形成されたものと認識し、これが「牛堀・矢ノ原ルート」と名付けられた。

この古代道路遺構は、伊勢崎市（旧境町）上淵名の牛堀遺跡、同東新井の矢ノ原遺跡、太田市（旧新田町）

大東の大東遺跡、市の市宿通遺跡、市野井の下原宿遺跡、小金井の上根遺跡など６地点で発掘調査されており、いずれも幅約12m前後で、南北両側に側溝を有する道路遺構が、N-83°-E方向に一直線上に約10kmにわたって確認され、用水堀などの地割痕跡から推定できる部分を含めると、N-83°-E方向のラインは伊勢崎市今泉町付近から太田市八幡付近まで総延長約12kmに及ぶ。

その後、1993年、伊勢崎市牛堀遺跡から現・広瀬川や利根川を越えた西約15kmの地点に位置する高崎市宿大類町の高崎情報団地遺跡では、約10m幅の古代道路跡がN-100°～101°-E方向で一直線に約100mにわたって発見され、走向は、伊勢崎市今泉町付近から太田市八幡付近に至るルートとは異なるものの、路面幅の規模や遺構の存続年代が一致することから「牛堀・矢ノ原ルート」に連続する道路跡であることが判明し、このルートは約30kmにわたって連続していることが判明した。

さらにその後、この高崎情報団地遺跡から現・利根川を挟んで約６kmほど東の延長線上に位置する佐波郡玉村町砂町遺跡では、高崎情報団地で検出された古代道路遺構と同じN-100°～101°-E方向で、幅約９～10mの古代道路跡が発見された。道路跡の走向が高崎情報団地で検出された道路遺構と全く同じである。また、その東の延長線上約500mの地点にある同町上福島尾柄町遺跡からも同じN-100°～101°-E方向の両側溝を有する道路遺構が検出されたが、幅は約７mと、高崎情報団地及び砂町遺跡で検出された古代道路跡に比べて小規模になる。また、さらにその東の延長線上に位置する同町中之坊遺跡からも同じくN-100°～101°-E方向の両側溝を有する道路遺構が検出されたが、幅は約6mと、さらに小規模になっている。

いずれにしても、高崎市宿大類町から玉村町上福島に至る約６km強にわたってN-100°～101°-E方向の両側溝を有する道路遺構が検出されたことにより、N-83°-E方向のラインの伊勢崎市今泉町付近から太田市八幡付近までの約12kmルートとあわせ、上野国南端部に近い平野部を約26kmにわたって敷設された古代道路の存在が明らかになったわけである。

現在の所、N-100°～101°-E方向のラインとN-83°-E方向のラインとの走向転換点は現・広瀬川付近に求められるようである。現・広瀬川は、ほぼ古代の利根川の旧河道と考えられているが、そうすると利根川の渡河点を境に駅路の走向が変換すると想定するのも一案であろう。

先述したように、このルートは、金坂氏が国府をはさんで『延喜兵部式』諸国伝馬条に記載されている上野国内５箇所の駅の想定地を勘案しながら歴史地理学的に想定された「国府ルート」の位置から南側へ約５kmと大幅にかけ離れており、それまでは全く交通路の存在が想定されたことがない地域において、「国府ルート」上で考古学的に確認できた古代道路遺構を上回る規模の大規模な直線道が発見されたわけであり、当然のことながら、その性格付けが問題となった。

常識的に考えても幅が約10～12m前後もあり、同一方向で総延長約10kmにわたって一直線に伸びる道路が、その規模から見て官道でないことはあり得ないが、一方で国府に向かう「国府ルート」が既に考古学的にも確認されており、両路線の関係がまず問題となるのは自然である。

境町から新田町にかけて「牛堀・矢ノ原ルート」上で発掘調査された道路遺構は、境町牛堀遺跡では６世紀末の古墳を破壊して道路が造られており、同町矢ノ原遺跡では８世紀後半以前に道路が機能を停止していたことが判明している。また、高崎市中大類町～宿大類町の高崎情報団地遺跡では、やはり７世紀前半の古墳を乗り越えて道路が造られ、道路側溝は８世紀後半から９世紀前半の遺構によって破壊されている。また、高崎情報団地遺跡検出の古代道路の東延長線上で発見された玉村町砂町遺跡では、上層は1108年（天仁元）降下の浅間火山灰に覆われた水田跡に覆われていて、道路側溝からは７世紀後半の須恵器が出土している。以上の点から「牛堀・矢ノ原ルート」は、７世紀後半頃に造営され、８世紀後半には廃絶した道路であこ

とが判明した。この点は、古代駅路の造営年代を推定する上で大きな根拠の一つとなっている、埼玉県所沢市の東の上遺跡で検出された東山道駅路武蔵路と考えられる道路遺構の年代観（7世紀後半造営、8世紀後半廃絶）とも合致しており、また、「牛堀・矢ノ原ルート」上で検出された道路跡の多くが幅約12m程度であるという点も、埼玉県所沢市東の上遺跡で検出された道路遺構の規模と一致している。このように「牛堀・矢ノ原ルート」の走向の直線性や路面幅の規模や年代観などが、東山道駅路武蔵路と共通することから、高崎市南部～玉村町～伊勢崎市中心部～境町～新田町～太田市北西部間に想定される「牛堀・矢ノ原ルート」は、7世紀以降8世紀後半以前の間で機能していた、「国府ルート」に先行する東山道駅路であると想定されるに至ったのである。

2002年には、北関東自動車道の建設に伴う太田市東今泉町の大道西遺跡の発掘調査で、約13m間隔で南北に並行して東西に一直線に伸びる2本の古代の溝跡が約200mにわたって検出され、東山道駅路である可能性が指摘された。この路線については、側溝から出土した遺物の年代観から8世紀前半段階に存在していたことは間違いないが、廃絶の年代については明確に出来ておらず、また、旧新田町以西で確認されている「牛堀・矢ノ原ルート」・「下新田ルート」とは走行方向が異なるので、これら二路線いずれに接続・対応する駅路であるのかが問題になっていた。

しかしながら、大道西遺跡の西側に隣接する八ヶ入遺跡や、東側に隣接する大道東遺跡・鹿島浦遺跡でもこの道路遺構の延長部分が検出され、金山丘陵の東側にあたる太田市東今泉町一帯では約1kmにわたって古代道路遺構が検出されるに至り、とくに大道東遺跡における竪穴建物跡群と道路遺構との重複・前後関係から、ほぼ7世紀後半のかなり早い時期に造営され、8世紀前半段階のうちに廃絶している様子が判明した。

大道東遺跡・大道西遺跡・八ヶ入遺跡・鹿島浦遺跡ともに、本報告書刊行の段階ではまだ整理作業の途上にあり、これらの遺跡において検出された幅12～13mの道路遺構の正確な年代観については、今後刊行される予定の各遺跡の発掘調査報告書を参照していただきたい。また、金山丘陵西側における「牛堀・矢ノ原ルート」及び「下新田ルート」と、金山丘陵東側において、北関東自動車道の建設に先立って行われた発掘調査において相次いで発見された幅12～13mの古代道路遺構との正確な関係を解明するには、道路遺構が発掘調査され、確実に存在が認められる太田市の市・小金井付近から金山・八王子丘陵を越えた所までの約2km間の調査を待たなければならないところであろう。

しかしながら、いずれにしても幅12～13mという規模と、7世紀後半段階に造営され、8世紀前半段階にはいち早く廃絶しているという極めて短い存続年代からみれば、金山丘陵以東で北関東自動車道の建設に先立つ発掘調査において本遺跡に隣接して検出された古代道路遺構は、金山丘陵以西において検出された「牛堀・矢ノ原ルート」の続きの部分と考えるのが自然である。

そうなると高崎市南部の宿大類町から玉村町北部の上福島を経て、伊勢崎市今泉町・太田市八幡付近に至り、さらに金山丘陵の北麓付近の緩やかな峠を越えて太田市東今泉町に到る、群馬県南部の平野部を東西に横断する約40km以上に及んで、幅約12～13mの巨大な直線的道路遺構が断続的に検出されていることになるわけである。

第3のルート　「下新田ルート」　1990年、新田町（現・太田市）の下新田遺跡から、幅約12mの両側溝を有する古代道路遺構が約300mにわたって検出された。先述した「牛堀・矢ノ原ルート」から北に約500mの場所に位置しており、走向はN-80°-Eで、N-83°-E方向の「牛堀・矢ノ原ルート」とほぼ並行している、いわば第3のルートである。このルートは坂爪久純氏によって「下新田ルート」と命名された。遺構の

確認面、1108年（天仁元）降下の浅間火山灰層よりは確実に下層で、出土遺物は８世紀から９世紀にかけての遺物が出土した。遺構・遺物の状況からは、明確な造営と廃絶の年代は判明しえないが、路面から出土した遺物の年代が「牛堀・矢ノ原ルート」の存続推定年代よりもやや新しい時期であるので、「牛堀・矢ノ原ルート」よりも後代まで道路として機能していた可能性が高い。ただ、このルートについては、現段階では下新田遺跡以外では発掘調査によってあまり確認されておらず、並行する「牛堀・矢ノ原ルート」や『延喜式』段階の駅路との関係については、現段階では定見をみていない。

なお、「牛堀・矢ノ原ルート」を東山道駅路本路とみて、それにほぼ並行する「下新田ルート」を『続日本紀』宝亀２年（771）10月己卯条にみえる武蔵国が東山道に所属していた時代に、武蔵に向かわず新田駅から下野国足利駅に直接至る「便道」とみる考え方がある。また、この「下新田ルート」を真っ直ぐ東方に延長すると新田評・郡家と推定される太田市小金井から天良町にかけて所在する天良七堂遺跡に達し、さらに東へ延長すると山田郡家想定地である金山丘陵の北端に位置する太田市緑町古氷地区に至り、さらに現・渡良瀬川を越えて足利市街地方面に向かう。下野国足利郡家に比定されている足利市国府野遺跡は、現・渡良瀬川左岸のJR足利駅付近の市街地内に位置しているので、このルートの延長線上周辺には、少なくとも三郡の郡家の存在が想定できる。よってこの「下新田ルート」は郡家間相互を結ぶ伝馬路である可能性も指摘できよう。

「国府ルート」と「牛堀・矢ノ原ルート」との関係について　先にも述べたように高崎市東部～玉村町～伊勢崎市南東部～太田市西部間で断続的に確認されている「牛堀・矢ノ原ルート」では、境町牛堀遺跡・矢ノ原遺跡・高崎市高崎情報団地遺跡・玉村町砂町遺跡などで確認できた遺構・遺物の年代観から、７世紀後半頃に造営され、８世紀後半には廃絶した道路であることが判明している。この点は、埼玉県内や東京都内で発掘調査によって確認できた東山道駅路武蔵路の年代観（７世紀後半造営、８世紀後半廃絶）、規模ともに一致しており、７世紀以降８世紀後半以前の間で機能していた、「国府ルート」に先行する東山道駅路であると想定されている。

一方、「国府ルート」上で発掘調査された群馬町菅谷の菅谷（高貝戸）遺跡の堆積土層断面を検討した結果、道路の側溝が９世紀後半の竪穴建物跡を破壊して掘削されている様子が確認されたことから、その初源を９世紀後半とする見方が現在のところ支配的である。　また、「国府ルート」上の群馬町熊野堂遺跡で検出された道路遺構の側溝は、古代には付帯していないかあるいは存在したとしても片側のみとする理解もあり、これまでの各地における駅路跡の発掘調査の結果確認された両側溝を有する駅路特有のスタイルに反するとみられる。さらに「国府ルート」上で発掘調査で確認された道路遺構は、いずれも幅員が約4.5～７m前後であり、発掘調査で確認できた側溝の状態が必ずしも一定ではなく、現・利根川以東の想定路線上で発掘調査により古代の道路遺構が確認できたのは、現在のところまだ伊勢崎市赤堀酒匂遺跡第２地点一箇所のみに過ぎない。

以上の諸点から、「国府ルート」は『延喜式』段階の東山道駅路ですらなく、国府の西側に部分的に設けられた道であるとする極端な仮説すら提示されるに至っている。

「国府ルート」を新しい段階の東山道駅路と考え、「牛堀・矢ノ原ルート」をそれより古い段階の東山道駅路とする考え方は非常に魅力的である。しかしながら「牛堀・矢野原ルート」は７世紀後半には建設され、８世紀前半段階にはもう使用されなくなってしまうわけだから、全国的な国府の造営・整備に先行して整備され、漸く国府や国分寺の造営以前の時期には早くも廃絶する駅路ということになってしまう。しかも、国府推定地からはだいぶ離れた場所を通っていることになる。

国府造営以前に駅路が整備されていたならば国府を駅路の沿線に造営することは十分可能なはずであるし、むしろそうするのが自然であろう。また、「牛堀・矢ノ原ルート」を初期の東山道駅路と仮定すると、『延喜式』に記載される群馬駅家の位置を路線上に想定することができないという問題が生じてくるが、国府の造営以前に、先行して駅路が整備されたと考えるよりほかあるまい。

前にも述べたように、駅路とは都と各国とを結ぶ官道であり、都と各国を結ぶとは、端的に言って都と各国の国府とを結ぶ道路ということになろう。確かに「牛堀・矢ノ原ルート」は幅員が12mもあり、両側に側溝を備えた大規模な道路であることには間違いない。だが、国府から離れた位置を通っており、しかも国府の完成・整備後まもなくの時期である8世紀後半にはすでに廃絶していることからみるならば、「牛堀・矢ノ原ルート」は、群馬郡への国府の設置によって東山道駅路の路線そのものが大きく変更される以前の段階に建設・整備された東山道駅路であり、国府の造営に伴って、国府付近を通る新しい路線として新たに設定されたのが東山道駅路「国府ルート」であるとみるべきではないだろうか。なお、そのように想定するには、現段階で「国府ルート」の遺構が、発掘調査の結果9世紀後半以降のものと考えられている点が問題となろう。ただ、「国府ルート」上における発掘調査の結果でも、道路遺構の上限を8世紀後半にみる地点もある。今後、「国府ルート」上で道路遺構を発掘調査し、道路の建設年代を考古学的に確定させることが急務である。

「国府ルート」の設定が、全くの道路新設ではなく、従来、本路より下ランクの、群馬評（郡）家と他評（郡）家など他の官衙とを結ぶ小規模な官道が存在していたものを、群馬郡家付近への国府の造営に伴ってそれが駅路本路に昇格させられた可能性は否定できないだろう。いずれにしても「国府ルート」は、必ずしも国府以西に部分的に設けられた道路とばかり単純には言い切れないのである。

新田駅家　新田駅家は、『続日本紀』宝亀2年（771）10月己卯（27日）条に、

太政官奏。武蔵国雍ㇰ属㆓山道㆒、兼承㆓海道㆒、公使繁多、祇供難ㇰ堪。其東山駅路、従㆓上野国新田駅㆒、達㆓下野国足利駅㆒。此便道也。而枉従㆓上野国邑楽郡㆒、経㆓五箇駅㆒、至㆓武蔵国㆒。事畢去日、又取㆓同道㆒、向㆓下野国㆒。今東海道者、従㆓相模国夷参駅㆒、達㆓下総国㆒。其間四駅、往還便近。而去ㇰ此就ㇰ彼損害甚多。臣等商量、改㆓東山道㆒、属㆓東海道㆒、公私得ㇰ所、人馬有ㇰ息。奏可。

とあり、それまで東山道に所属していた武蔵国が東海道所管替えがなされたのにともなって、それまで「便道」とされてきた新田駅と下野国足利駅とを直接結ぶ駅路ルートが本路となった。上野国内では文献史料上他の4駅の存在については『延喜式』段階までしかさかのぼって確認することは出来ないのであるが、新田駅だけはこの『続日本紀』の記事により少なくとも宝亀2年以前にその存在がさかのぼることが確認できる。

太田市（旧新田郡新田町）村田から小金井にまたがる入谷遺跡では、「牛堀・矢ノ原ルート」に面して、7世紀後半から8世紀後半にかけての一辺約180mの方形区画溝に四周を囲まれた中に総柱瓦葺礎石建物が2棟検出され、それを新田駅家そのもの、あるいは関連施設とみる考え方がある。

入谷遺跡が「牛堀・矢ノ原ルート」に面しており、さらにそこで検出された建物遺構が8世紀後半には廃絶している点が、ほぼ「牛堀・矢ノ原ルート」の廃絶したと考えられる時期と合うので、これを「牛堀・矢ノ原ルート」時期の東山道駅路に伴う新田駅家と想定することは、きわめて整合性に富む妥当な解釈であるように見受けられる。しかしながら検出された建物の配置や数からみて、駅家ないしその関連施設としては不自然な点もあり、疑問も残らないではない。

また、入谷遺跡が8世紀後半に廃絶しているところからみて、宝亀2年の武蔵国所管替に伴う東山道駅路

武蔵路の駅路としての廃止後に路線の変更があり、新田駅家が入谷遺跡から別な地点に移転したのではないかとみる考え方もある。

新田郡内には東山道駅路が東西に貫通し、『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条によれば、上野・下野両国から武蔵国への分岐点となった陸上交通上の要衝であり、官人の公務通行を支援すべく設けられた施設である新田駅家が置かれていた。古代において、官衙はそれぞれが比較的近辺にまとまって配置されていた様子が判明しているので、新田駅家も新田郡家からさほど遠くない場所に設置されていたものと考えるのが自然である。新田駅家の所在地としては、太田市新田村田から寺井にかけての場所に想定する意見が強い（『新田町誌』通史編1 1990）。

本遺跡に近接する「牛堀・矢ノ原ルート」の性格　「牛堀・矢ノ原ルート」は、７世紀後半という非常に早い時期に設置・整備されたにも関わらず、幅が約12mにも及び、国内南部の平野部を数十kmにわたって直線的に貫通しているところからみて、体裁を整えたばかりの律令中央政府の強力な意志によって造営されたのは間違いないところであろう。その意味において、まさに名実ともに「官道」と称するにふさわしい道路である。当然のことながら公用の移動者に行路上の様々な便宜を与える施設がなければ公務旅行は不可能であったろうから、なんらかの機関なり施設なりは存在していたであろう。例えば評家あるいはその出先機関のような施設がその機能を担った可能性もある。

国府造営以前にいち早く建設された大規模官道「牛堀・矢ノ原ルート」上に国府を置かず、わざわざ路線から離れた位置に国府を設置した理由を究明することは、上野国地域の古代史を研究する上で重要な課題の一つとなろうが、本項の目的からは外れるし、また紙幅の制約もあるので、他の機会に譲ることにしたい。ただ、現段階では、中央政府の意向と、中央政府と在地豪族との協力、さらには在地豪族のパワーバランスなどが要因となって、従来存在していた大規模官道沿線に国府を造営することに失敗し、結果的に６世紀末～７世紀段階での在地社会屈指の勢力の影響下にある群馬郡中枢域に国府が造営されたことによって、駅路もまた国府付近を通るルートへと路線の変更を余儀なくされたものと考えている。国府付近を通らない官道は、もはや「駅路」ではあり得なくなったのである。

「牛堀・矢ノ原ルート」や埼玉県・東京都内で発見された東山道武蔵路など、７世紀後半段階に造営される幅約12mにも及ぶ直線的道路とは、広域行政区画東山道を貫く道路としての性格から、理念的に都と陸奥とを結ぶ官道として構想されたものであり、各地方支配の拠点である国府の造営に先だって、律令制支配の貫徹を可視的に地方に示すための装置の一つとしていち早く整備されたものと考える。

言うまでもなく、辺要及び「異民族」支配は、「帝国」としての律令国家の成立に必要十分条件であり、そのために東辺の辺要たる陸奥・出羽の支配は律令国家にとって、それが「帝国」たらしめるためにも急務であったことは周知の通りである。

陸奥にはすでに７世紀中葉段階に宮城県仙台市郡山遺跡という大規模な官衙が、他の地方官衙に先駆けて造営されていた。これは律令制支配を辺要にまで貫徹するための拠点であり、かつ在地社会に対する極めて示威的な視覚的装置であったことに相違ない。

ほぼ同時期に、中央には巨大宮都である難波宮（前期）があり、さらに天武朝の難波京焼亡に前後して、『周礼』の王都世界を、王権の本貫地たる大和盆地の中央に理念的に実現しようとした、巨大な条坊を有する「新益京」こと藤原京が構想される。中央にかってないほどの巨大な宮室と都城を造営し、辺要に、各国支配の拠点に先駆けていち早く大規模な官衙を造営する。そして、巨大な都城と巨大な辺要支配のための拠点的地方官衙とを結ぶ交通路として、幅12mにも達する大規模な直線的官道が理念的に構想され、造営され

たのではないだろうか。その一つが7世紀後半段階に成立する東山道駅路であり、群馬県内では「牛堀・矢ノ原ルート」と称される古代道路跡に相当するのがまさにそれであろう。

そして、それらは「理念的」に構想されたが故にこそ、律令中央政府の強大な権力をもって、部分的にではあろうが、在地社会の論理・実情を無視、あるいは無理強行して造営されたという側面も存在していたであろうことは想像に難くない。そのような「無理・強行」が在地における論理や実態と齟齬を来したところに、結果的に、初期官道沿線に国府造営がかなわなかったこと、ひいては駅路段階でのほぼ全面的とも言うべき路線変更に至ったのが、上野国内における初期官道と駅路の変遷とその背景であると言うことができるのではないだろうか。

本遺跡の遺構遺物からは、古代駅路との直接的な関連を示すような遺構・遺物がとくに発見されているわけではないが、4区16号竪穴建物跡から出土した奈良三彩小壺蓋や、4区22号竪穴建物跡から出土した須恵器蓋壺・須恵器脚・脚付円面硯・土師器蓋など一般集落ではあまり出土することがない遺物も若干出土しており、周辺遺跡における出土遺物の様相とも検討して、官衙・官道との関連を念頭に置いて本遺跡の性格を考える必要があろう。とくに、大きさや形状から4区16号竪穴建物跡出土の奈良三彩小壺の身の部分に相当すると考えられる奈良三彩小壺の破片が、南に隣接する鹿島浦遺跡から出土している（報告書未刊）。今後、関連を詳細に検討する必要がある。

いずれにしても本遺跡は古代官道に非常に近い場所に所在したわけであり、本遺跡における古代集落の形成に際して、付近を通過する古代官道のそれなりの影響が想定できる。

参考文献

・伊勢崎市教育委員会編『三軒屋遺跡Ⅰ－上野国佐位郡衙正倉跡の調査』 2007
・伊藤廉倫「群馬県下新田遺跡の道路遺構」（『季刊考古学』46 1994）
・茨城県考古学協会編『茨城県考古学協会シンポジウム　古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として』 2005
・太田市史編纂委員会編『太田市史 通史編 原始古代』 太田市 1996
・太田市教育委員会編『天良七堂遺跡』 2008
・柏瀬順一「上野国・下野国間における東山道の駅路の性格について」（『群馬文化』196 1984）
・金坂清則「上野国府とその付近の東山道、および群馬・佐位駅家について」（『歴史地理学紀要』16 1974）
・金坂清則「上野国」（藤岡謙二郎編『日本古代の交通路』Ⅱ 大明堂 1978）
・木下良「上野・下野両国と武蔵国における古代東山道駅伝路の再検討」（『栃木史学』4 1990）
・木下良編『古代を考える 古代道路』 吉川弘文館 1996
・木本雅康「宝亀二年以前の東山道武蔵路について」（『古代交通研究』創刊号 1992）
・木本雅康『古代の道路事情』 吉川弘文館 2000
・黒坂周平『東山道の実証的研究』 吉川弘文館 1992
・群馬県教育委員会文化財保護課編『群馬県歴史の道調査報告書第16集　東山道』 1983
・群馬県史編纂委員会編『群馬県史 通史編2 原始古代2』 群馬県 1991

・群馬県立歴史博物館編『第70回企画展 古代のみちーたんけん！東山道駅路ー』 2001
・小池浩平「東山道駅路に関する一考察－武蔵路の設置の意味について－」（『群馬県立歴史博物館紀要』21 2000）
・古代交通研究会編『日本古代道路事典』 八木書店 2004
・小宮俊久「新田町市宿通遺跡の道路状遺構」（『群馬文化』223 1990）
・埼玉考古学会編『埼玉考古学会シンポジウム　坂東の古代官衙と人々の交流』 2002
・坂爪久純「境町『牛堀』遺跡について」（『群馬文化』203 1984）
・坂爪久純・小宮俊久「上野国の古代道路」（『古代交通研究』 創刊号 1992）
・坂爪久純「上野国の古代道路－牛堀・矢ノ原ルートとそれをめぐる道路遺構について－」（『古代文化』47 1995）
・坂爪久純「上野国の東山道駅路－最近の発掘成果から－」（『古代文化』 49 1997）
・坂爪久純「東山道駅路と牛堀」（『境町史3 歴史編』1997）
・財団法人古代學協会『東山道武蔵路の調査研究 道路遺構等確認調査報告』 2001
・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『年報』22～27 2003～2008
・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『東今泉鹿島遺跡』 2006
・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『向矢部遺跡』 2007
・静岡県考古学会編『静岡県考古学会2005年度シンポジウム 古代の役所と寺院－郡衙とその周辺』 2006
・下新田遺跡発掘調査団『群馬県新田郡下新田遺跡』 1992
・鈴木景二「都郡間交通と在地秩序」（『日本史研究』379 日本史研究会 1994）
・須田茂「群馬県（上野国）における東山道研究上の諸問題」（『文化財信濃』15-3 1989）
・高井佳弘「群馬県太田市大道西遺跡の推定東山道駅路」（『古代交通研究』13 2004）
・高島英之『古代出土文字資料の研究』 東京堂出版 2000
・高島英之『古代東国地域史と出土文字資料』 東京堂出版 2006
・田中広明『地方の豪族と古代の官人-考古学が説く古代社会の権力構造-』 柏書房 2003
・田中広明『国司の館－古代の地方官人たち－』 学生社 2006
・土屋文明『萬葉集上野國歌私注』 煥乎堂 1944
・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編 2003
・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物編 2004
・長井正欣「高崎情報団地遺跡の道路状遺構」（『古代交通研究』4 1995）
・中里正憲「群馬県砂町遺跡の古代道路遺構」（『古代交通研究』9 2000）
・中村太一『日本古代国家と計画道路』 吉川弘文館 1996
・新田町誌編纂委員会編『新田町誌 第1巻 通史編』 新田町 1990
・新田町教育委員会編『入谷遺跡』Ⅰ～Ⅳ 1982～2002
・根本靖「所沢市東の上遺跡の性格について－『官衙的遺構』を中心に－」（『埼玉考古』37 2002）
・平川南『墨書土器の研究』 吉川弘文館 2000
・森田悌「上野国内の東山道」（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』45 1996、のち同『日本古代の駅伝と交通』岩田書院 2000に収録）
・森田悌「古代上野国の東山道」（『群馬文化』275号 2002）
・吉井町多胡碑記念館編『紡む－紡錘車が語る多胡郡』 2008

写真図版

2区全景（北）

2-1区全景（上空）

PL.2

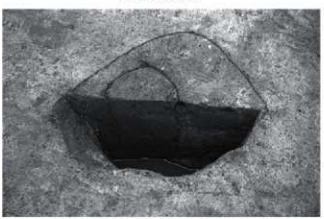
2-2 区全景（上空）

2-2 区北半部全景（上空）

2-1 区全景（西）

2-2 区全景（北）

2-1 区 1 号掘立柱建物跡全景（西）

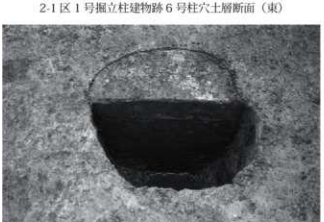


2-1 区 1 号掘立柱建物跡 4 号柱穴土層断面（東）

2-1 区 1 号掘立柱建物跡 5 号柱穴土層断面（東）

2-1 区 1 号掘立柱建物跡 6 号柱穴土層断面（東）

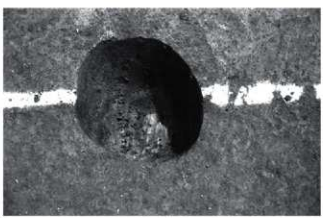
2-1 区 1 号掘立柱建物跡 8 号柱穴土層断面（西）



2-1 区 1 号掘立柱建物跡 9 号柱穴土層断面（西）

2-1 区 2 号掘立柱建物跡全景（南）

2-1 区 2 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（西）

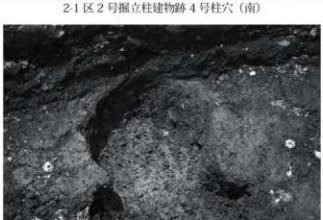


2-1 区 2 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（西）

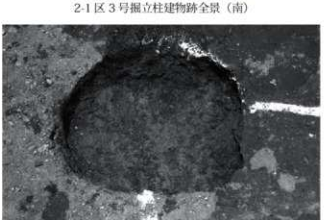
2-1 区 2 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（西）

2-1 区 2 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（南）

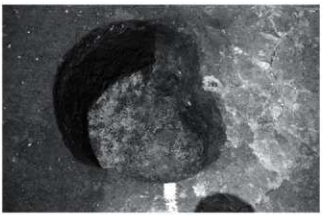
2-1 区 3 号掘立柱建物跡全景（南）



2-1 区 3 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（東）

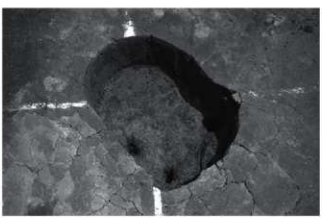


2-1 区 3 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（西）

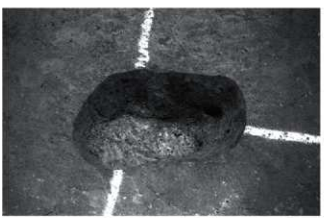


2-1 区 3 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（北）

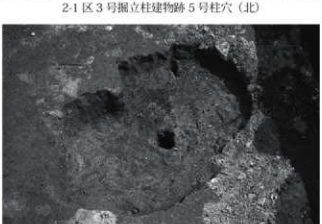
2-1 区 3 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（北）



2-1 区 3 号掘立柱建物跡 5 号柱穴（北）



2-1 区 3 号掘立柱建物跡 6 号柱穴（北）



2-1 区 3 号掘立柱建物跡 7 号柱穴（北）

2-1 区 3 号掘立柱建物跡 9 号柱穴（北）

2-1 区 1・6 号溝跡全景（北）

2-1 区 1・6 号溝跡土層断面（南）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（西）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（北）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（北）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（北）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（北）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（東）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（東）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（東）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（北）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（北）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（北）

2-1 区 15 号溝跡遺物出土状況（西）

2-1 区 2 号粘土採掘坑跡全景（北）

2-1 区 4 号粘土採掘坑跡全景（南）

2-2 区 1 号竪穴建物跡全景（東）

2-2 区 1 号竪穴建物跡遺物出土状況（東）

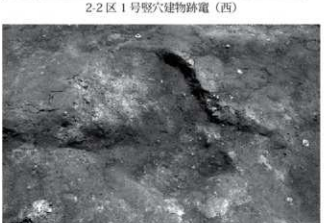
2-2 区 1 号竪穴建物跡掘り方全景（東）

2-2 区 1 号竪穴建物跡土層断面（東）

2-2 区 1 号竪穴建物跡内貯穴・ピット 1 土層断面（北）

2-2 区 1 号竪穴建物跡竈（西）

2-2 区 2 号竪穴建物跡全景（東）



2-2 区 2 号竪穴建物跡竈（西）

2-2 区 2 号竪穴建物跡掘り方（東）

2-2 区 2 号竪穴建物跡土層断面（東）

2-2 区 2 号竪穴建物跡内ピット 2（西）

2-2 区 2 号竪穴建物跡内貯蔵穴土層断面（南）

2-2 区 3 号竪穴建物跡全景（西）

2-2 区 3 号竪穴建物跡竈（西）

2-2 区 3 号竪穴建物跡掘り方（西）

2-2 区 3 号竪穴建物跡土層断面（東）

2-2 区 3 号竪穴建物跡土層断面（南）

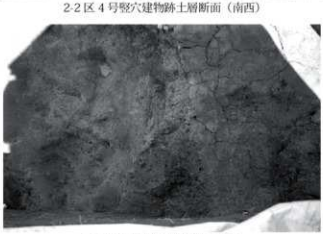
2-2 区 4 号竪穴建物跡全景（南西）

2-2 区 4 号竪穴建物跡遺物出土状況

2-2 区 4 号竪穴建物跡掘り方（東）

2-2 区 4 号竪穴建物跡土層断面（南西）

2-2 区 7 号竪穴建物跡・6 号粘土採掘坑全景（西）



2-2 区 7 号竪穴建物跡竈（西）

2-2 区 7 号竪穴建物跡土層断面（南）

2-2 区 8 号竪穴建物跡全景（西）

2-2 区 8 号竪穴建物跡竈（西）

2-2 区 8 号竪穴建物跡土層断面（東）

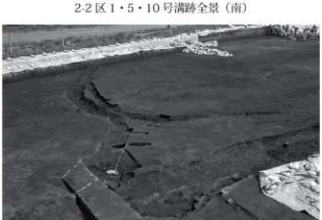
2-2 区 8 号竪穴建物跡土層断面（南）

2-1 区 1 号溝跡全景（南）

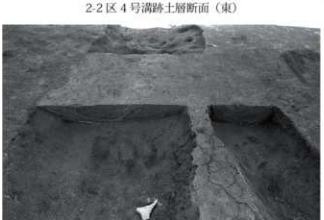
2-2 区 1・5 号溝跡土層断面（南）

2-2 区 1・5・10 号溝跡全景（南）

2-2 区 4 号溝跡土層断面（東）



2-2 区 2・3 号溝跡全景（北西）



2-2 区 2・3 号溝跡土層断面（西）

2-2 区 2・3 号溝跡遺物出土状況（西）

2-2 区 2・3 号溝跡土層断面（西）

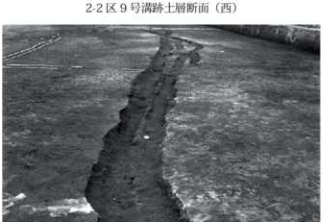
2-2 区 7 ～ 9 号溝跡全景（西）

2-2 区 7 号溝跡土層断面（西）

2-2 区 8 号溝跡土層断面（西）

2-2 区 9 号溝跡土層断面（西）

2-2 区 10 号溝跡土層断面（南）

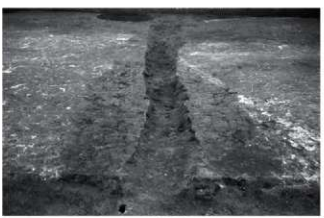


2-2 区 11 ～ 13 号溝跡全景（南）

2-2 区 11 ～ 13 号溝跡土層断面（南）

2-2 区 14 号溝跡全景（南）

2-2 区 14 号溝跡土層断面（南）

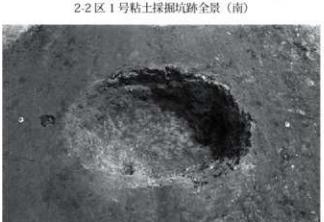


2-2 区 15 号溝跡全景（西）

2-2 区 15 号溝跡土層断面（東）

2-2 区 1 号粘土採掘坑跡全景（南）

2-2 区 5 号粘土採掘坑跡全景（東）

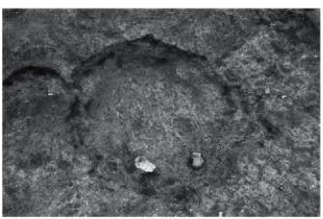


2-2 区 4 号土坑跡全景（北）

2-2 区 4 号土坑跡土層断面（南）

2-2 区 5 号土坑跡全景（北）

2-2 区 5 号土坑跡土層断面（北東）



2-2 区 6 号土坑跡全景（西）

2-2 区 6 号土坑跡土層断面（東）

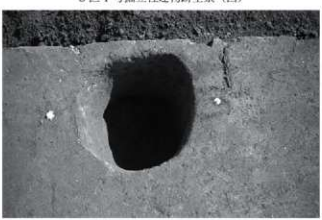
2-3 区全景（西）

3 区東半部遺構検出状況（西）

3 区西半部遺構検出状況（東）

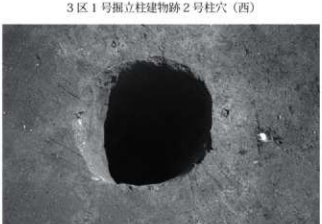
3 区 1 号掘立柱建物跡全景（西）

3 区 1 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（西）

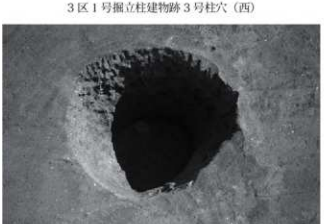


3 区 1 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（西）

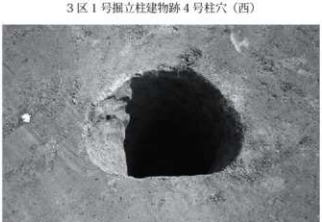
3 区 1 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（西）



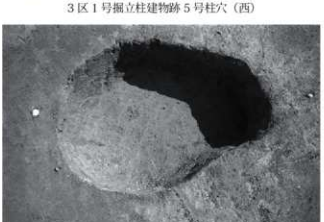
3 区 1 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（西）



3 区 1 号掘立柱建物跡 5 号柱穴（西）



3 区 1 号掘立柱建物跡 6 号柱穴（西）



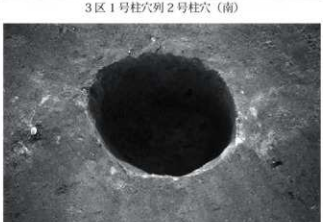
3 区 1 号掘立柱建物跡床束（西）

3区1号柱穴列全景（南）

3区1号柱穴列1号柱穴（南）

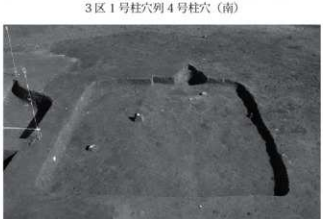
3区1号柱穴列2号柱穴（南）

3区1号柱穴列3号柱穴（南）



3区1号柱穴列4号柱穴（南）

3区1号竪穴建物跡全景（北）



3区2号竪穴建物跡全景（西）

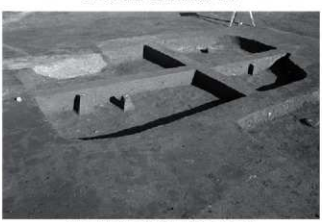
3区2号竪穴建物跡竈全景（西）

3 区 2 号竪穴建物跡土層断面（南）

3 区 2 号竪穴建物跡土層断面（東）

3 区 3 号竪穴建物跡全景（西）

3 区 3 号竪穴建物跡竈（西）



3 区 3 号竪穴建物跡土層断面（南西）

3 区 3 号竪穴建物跡土層断面（東）

3 区 4 号竪穴建物跡全景（西）

3 区 4 号竪穴建物跡竈（西）

3 区 5 号竪穴建物跡全景（西）

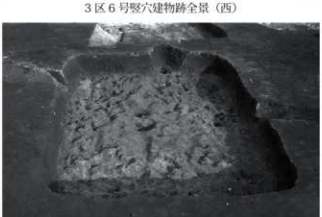
3 区 5 号竪穴建物跡竈掘り方（西）

3 区 5 号竪穴建物跡土層断面（南）

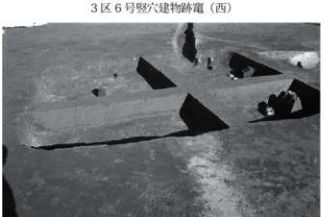
3 区 5 号竪穴建物跡土層断面（西）

3 区 6 号竪穴建物跡全景（西）

3 区 6 号竪穴建物跡竈（西）



3 区 6 号竪穴建物跡掘り方（西）



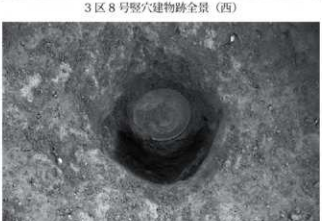
3 区 6 号竪穴建物跡土層断面（南）

3区6号竪穴建物跡土層断面（西）

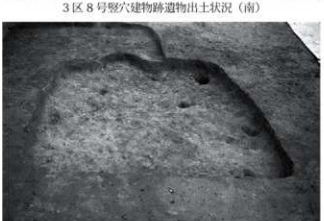
3区7号竪穴建物跡全景（南）

3区8号竪穴建物跡全景（西）

3区8号竪穴建物跡遺物出土状況（南）

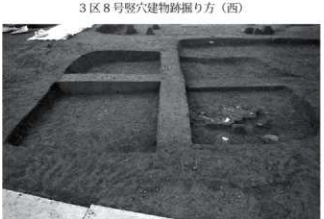


3区8号竪穴建物跡遺物出土状況（北）



3区8号竪穴建物跡掘り方（西）

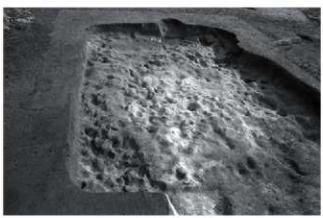
3区8号竪穴建物跡土層断面（西）



3区8号竪穴建物跡土層断面（南）

3 区 9 号竪穴建物跡全景（西）

3 区 9 号竪穴建物跡竈（西）



3 区 9 号竪穴建物跡掘り方（西）

3 区 9 号竪穴建物跡土層断面（西）

3 区 10 号竪穴建物跡全景（西）

3 区 10 号竪穴建物跡遺物出土状況（西）

3 区 10 号竪穴建物跡遺物出土状況（西）

3 区 10 号竪穴建物跡掘り方（西）

3 区 10 号竪穴建物跡土層断面（南）

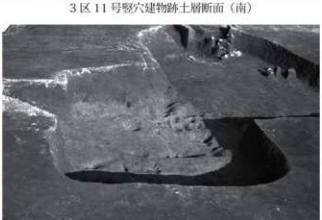
3 区 11 号竪穴建物跡全景（西）

3 区 11 号竪穴建物跡遺物出土状況（南）

3 区 11 号竪穴建物跡掘り方（西）

3 区 11 号竪穴建物跡土層断面（南）

3 区 12 号竪穴建物跡全景（西）



3 区 12 号竪穴建物跡掘り方（西）

3 区 13 号竪穴建物跡全景（西）

3区 13 号竪穴建物跡竈土層断面（西）

3区 13 号竪穴建物跡掘り方（西）

3区 13 号竪穴建物跡土層断面（西）

3区 15・16 号竪穴建物跡全景（西）

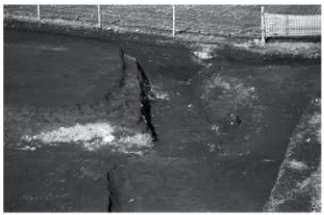
3区 15・16 号竪穴建物跡掘り方（南）

3区 15・16 号竪穴建物跡土層断面（東）

3区 1 号溝跡東半部全景（東）

3区 1 号溝跡東半部全景（西）

3区1号溝跡土層断面（南）



3区1号溝跡東南隅部（南）

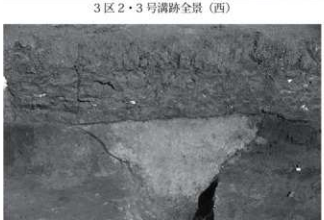
3区1号溝跡土層断面（西）

3区1号溝跡南辺（東）

3区1号溝跡西辺（東）

3区2・3号溝跡全景（西）

3区5号溝跡全景（南）



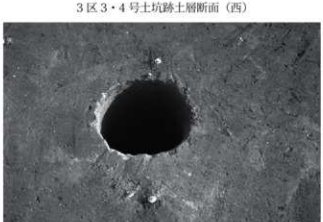
3区5号溝跡土層断面（南）

3区4-1号溝跡全景（北）

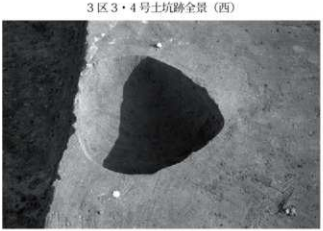
3区6号溝跡全景（西）

3区3・4号土坑跡土層断面（西）

3区3・4号土坑跡全景（西）



3区5号土坑跡全景（北）



3区6号土坑跡全景（北）

3区ピット群全景（北）

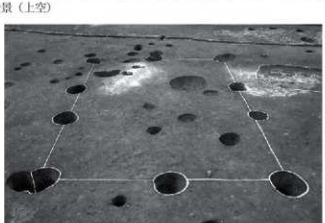
4区西半部全景（南）

4 区全景（上空）

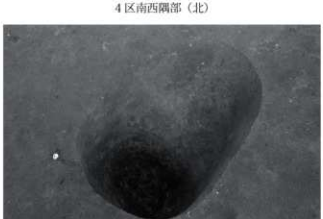
4 区東翼区全景（上空）

4 区西翼区全景（上空）

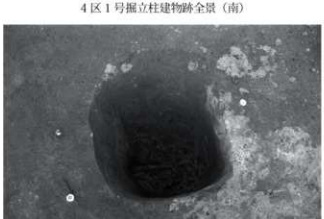
4 区南西隅部（北）



4 区 1 号掘立柱建物跡全景（南）



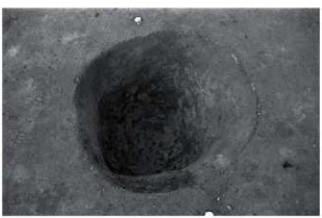
4 区 1 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（南）



4 区 1 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（南）

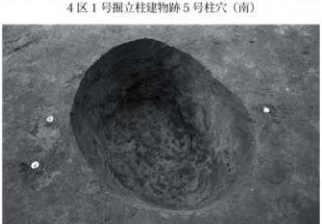
4 区 1 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（南）

4 区 1 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（南）

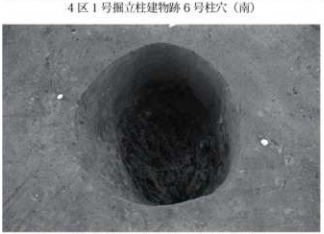


4 区 1 号掘立柱建物跡 5 号柱穴（南）

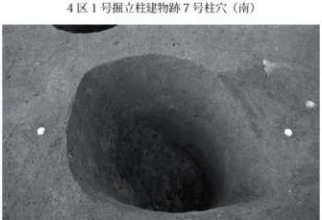
4 区 1 号掘立柱建物跡 6 号柱穴（南）



4 区 1 号掘立柱建物跡 7 号柱穴（南）



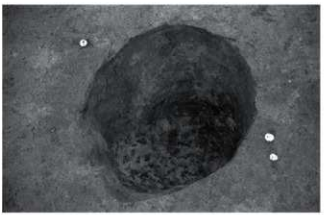
4 区 1 号掘立柱建物跡 8 号柱穴（南）



4 区 1 号掘立柱建物跡 9 号柱穴（南）

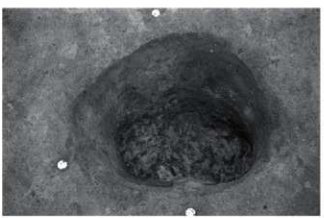
4 区 1 号掘立柱建物跡 10 号柱穴（南）

4 区 2 号掘立柱建物跡全景（北）

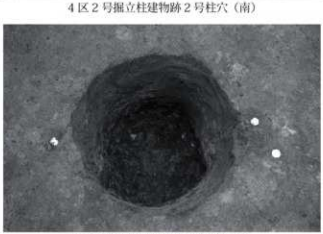


4 区 2 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（南）

4 区 2 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（南）

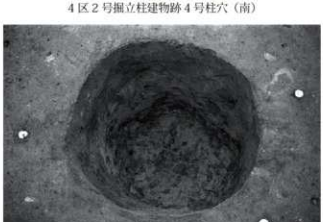


4 区 2 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（南）

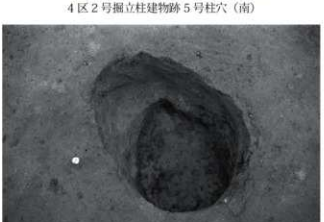


4 区 2 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（南）

4 区 2 号掘立柱建物跡 5 号柱穴（南）



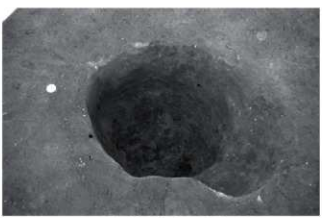
4 区 2 号掘立柱建物跡 6 号柱穴（南）



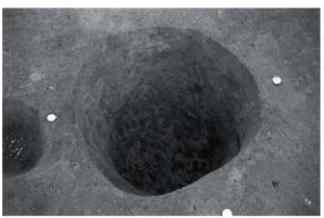
4 区 2 号掘立柱建物跡 7 号柱穴（南）

4 区 2 号掘立柱建物跡 10 号柱穴（南）

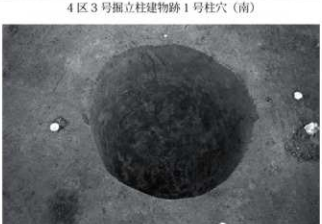
4 区 3 号掘立柱建物跡全景（西）



4 区 3 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（南）

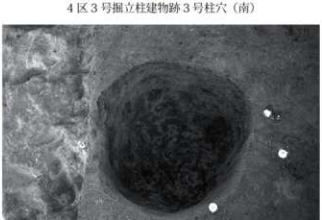


4 区 3 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（南）

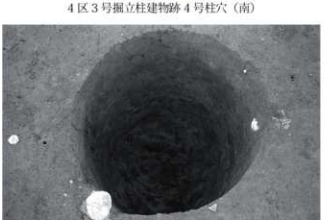


4 区 3 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（南）

4 区 3 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（南）



4 区 3 号掘立柱建物跡 5 号柱穴（南）

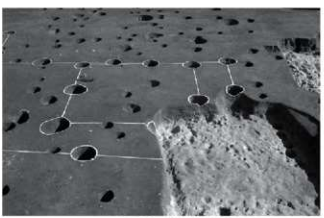


4 区 3 号掘立柱建物跡 7 号柱穴（南）

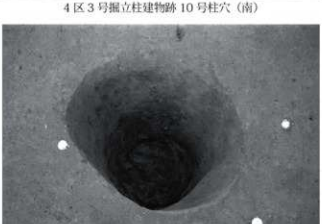
4 区 3 号掘立柱建物跡 8 号柱穴（南）

4 区 3 号掘立柱建物跡 9 号柱穴（南）

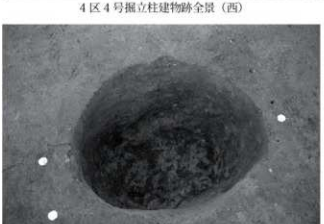
4 区 3 号掘立柱建物跡 10 号柱穴（南）



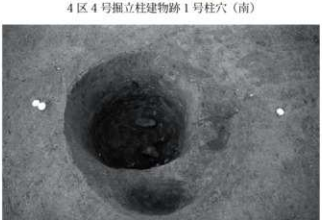
4 区 4 号掘立柱建物跡全景（西）



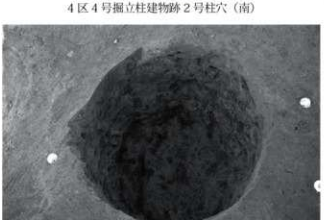
4 区 4 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（南）



4 区 4 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（南）



4 区 4 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（南）

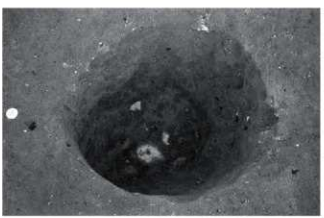


4 区 4 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（南）

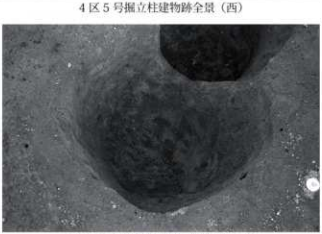
4 区 4 号掘立柱建物跡 7 号柱穴（南）

4 区 4 号掘立柱建物跡 8 号柱穴（南）

4 区 5 号掘立柱建物跡全景（西）

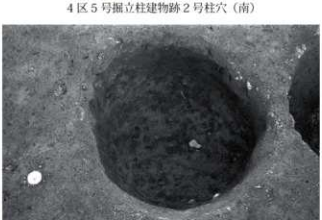


4 区 5 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（南）

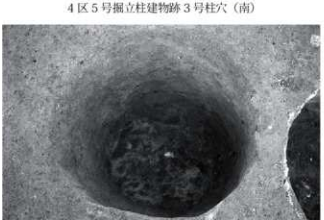


4 区 5 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（南）

4 区 5 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（南）

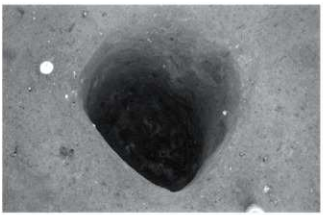


4 区 4 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（南）

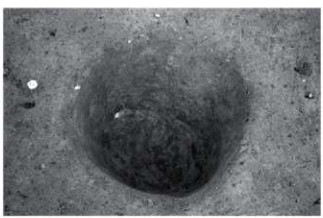


4 区 4 号掘立柱建物跡 5 号柱穴（南）

4 区 4 号掘立柱建物跡 6 号柱穴（南）

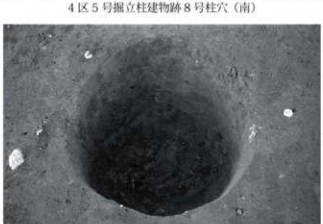


4 区 4 号掘立柱建物跡 7 号柱穴（南）

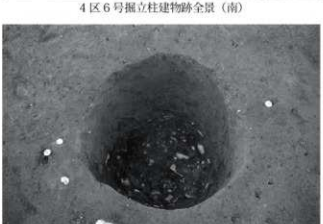


4 区 5 号掘立柱建物跡 8 号柱穴（南）

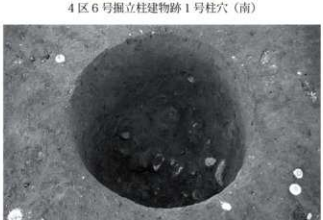
4 区 6 号掘立柱建物跡全景（南）



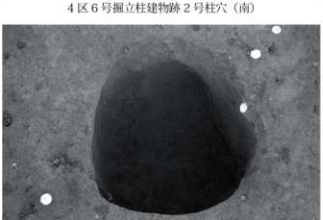
4 区 6 号掘立柱建物跡 1 号柱穴（南）



4 区 6 号掘立柱建物跡 2 号柱穴（南）



4 区 6 号掘立柱建物跡 3 号柱穴（南）



4 区 6 号掘立柱建物跡 4 号柱穴（南）

4 区 6 号掘立柱建物跡 5 号柱穴（南）

4 区 1 号竪穴建物跡全景（南）

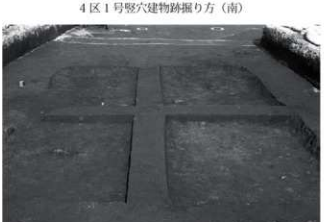
4 区 1 号竪穴建物跡竈（南）

4 区 1 号竪穴建物跡貯蔵穴（南）

4 区 1 号竪穴建物跡貯蔵穴土層断面（南）

4 区 1 号竪穴建物跡掘り方（南）

4 区 1 号竪穴建物跡土層断面（南）



4 区 1 号竪穴建物跡土層断面（西）

4 区 2 号竪穴建物跡全景（西）

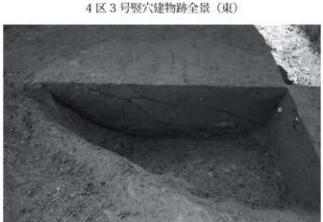
4 区 2 号竪穴建物跡竈（西）

4 区 2 号竪穴建物跡竈土層断面（西）

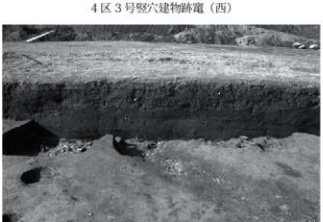
4 区 2 号竪穴建物跡土層断面（南）

4 区 3 号竪穴建物跡全景（東）

4 区 3 号竪穴建物跡竈（西）

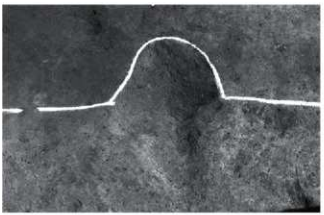


4 区 3 号竪穴建物跡竈土層断面（北）



4 区 3 号竪穴建物跡土層断面（東）

4 区 4 号竪穴建物跡全景（東）



4 区 4 号竪穴建物跡竈（西）

4 区 5 号竪穴建物跡全景（西）

4 区 5 号竪穴建物跡竈（西）

4 区 5 号竪穴建物跡竈土層断面（南）

4 区 5 号竪穴建物跡竈土層断面（西）

4 区 5 号竪穴建物跡掘り方（西）

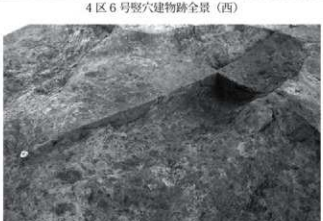
4 区 5 号竪穴建物跡遺物出土状況（西）

4 区 5 号竪穴建物跡土層断面（東）

4 区 5 号竪穴建物跡土層断面（南）

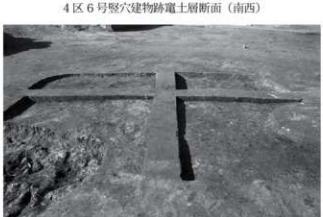
4 区 6 号竪穴建物跡全景（西）

4 区 6 号竪穴建物跡竈（西）

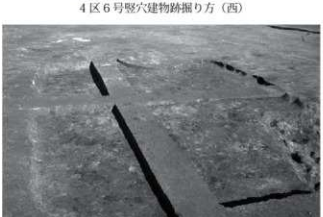


4 区 6 号竪穴建物跡竈土層断面（南西）

4 区 6 号竪穴建物跡掘り方（西）



4 区 6 号竪穴建物跡土層断面（南）



4 区 6 号竪穴建物跡土層断面（西）

4 区 7 号竪穴建物跡全景（西）

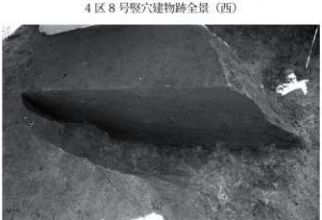
4 区 7 号竪穴建物跡竈（西）

4 区 7 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 7 号竪穴建物跡土層断面（西）

4 区 8 号竪穴建物跡全景（西）

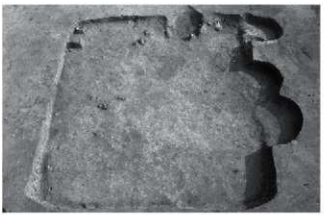
4 区 8 号竪穴建物跡竈（西）



4 区 8 号竪穴建物跡竈土層断面（北）

4 区 8 号竪穴建物跡土層断面（南）

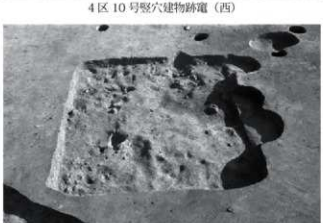
4 区 9 号竪穴建物跡全景・土層断面（南）



4 区 10 号竪穴建物跡全景（西）

4 区 10 号竪穴建物跡竈（西）

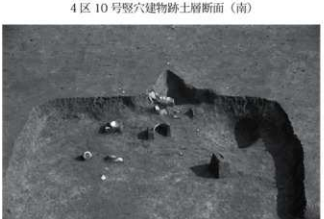
4 区 10 号竪穴建物跡竈土層断面（北西）



4 区 10 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 10 号竪穴建物跡土層断面（南）

4 区 11 号竪穴建物跡全景（西）

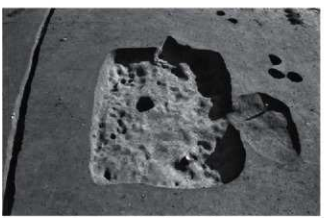


4 区 11 号竪穴建物跡遺物出土状況（西）

4 区 11 号竪穴建物跡竈（西）

4 区 11 号竪穴建物跡竈土層断面（南西）

4 区 11 号竪穴建物跡貯蔵穴土層断面（西）


4 区 11 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 11 号竪穴建物跡土層断面（南）

4 区 11 号竪穴建物跡土層断面（西）

4 区 12 号竪穴建物跡全景（西）

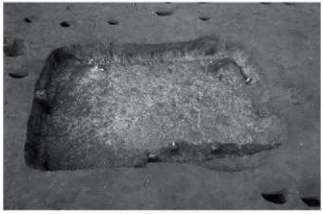
4 区 12 号竪穴建物跡竈（西）

4 区 12 号竪穴建物跡竈土層断面（南西）

4 区 12 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 12 号竪穴建物跡土層断面（南）

4 区 12 号竪穴建物跡土層断面（西）



4 区 13 号竪穴建物跡全景（南）

4 区 13 号竪穴建物跡竈（西）

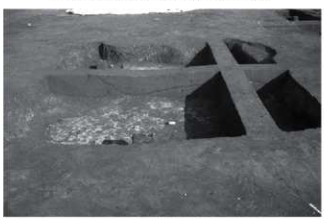
4 区 13 号竪穴建物跡竈土層断面（南西）

4 区 13 号竪穴建物跡掘り方（西）

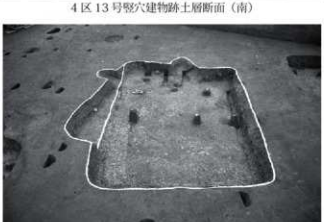
4 区 13 号竪穴建物跡遺物出土状況（北）

4 区 13 号竪穴建物跡南東隅ピット列（西）

4 区 13 号竪穴建物跡土層断面（南）



4 区 13 号竪穴建物跡土層断面（西）



4 区 14・20 号竪穴建物跡全景（西）

4 区 14 号竪穴建物跡竈（西）

4 区 14 号竪穴建物跡竈土層断面（南西）

4 区 14・20 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 14・20 号竪穴建物跡土層断面（南）

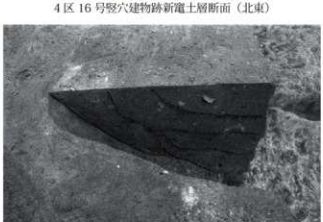
4 区 14・20 号竪穴建物跡土層断面（西）

4 区 16 号竪穴建物跡全景（西）

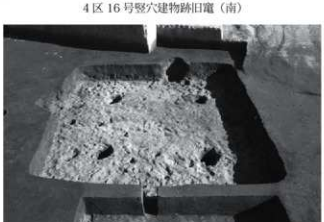
4 区 16 号竪穴建物跡新竈（西）

4 区 16 号竪穴建物跡新竈土層断面（北東）

4 区 16 号竪穴建物跡旧竈（南）



4 区 16 号竪穴建物跡旧竈土層断面（西）

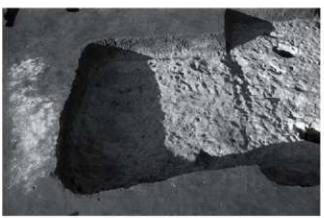


4 区 16 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 16 号竪穴建物跡土層断面（南）

4 区 16 号竪穴建物跡土層断面（西）

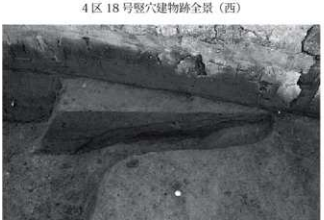
4 区 17 号竪穴建物跡全景（西）


4 区 17 号竪穴建物跡掘り方（南）

4 区 17 号竪穴建物跡土層断面（西）

4 区 18 号竪穴建物跡全景（西）

4 区 18 号竪穴建物跡竈（西）


4 区 18 号竪穴建物跡竈土層断面（南）

4 区 18 号竪穴建物跡掘り方（西）

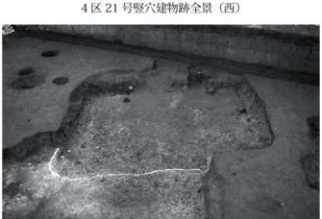
4 区 18 号竪穴建物跡土層断面（南）

4 区 19 号竪穴建物跡全景（西）

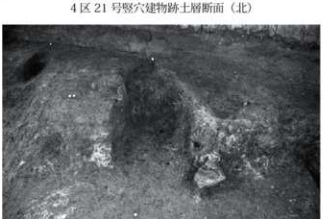
4 区 19 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 21 号竪穴建物跡全景（西）

4 区 21 号竪穴建物跡土層断面（北）



4 区 22 号竪穴建物跡全景（西）



4 区 22 号竪穴建物跡新竈（西）

4 区 22 号竪穴建物跡新竈土層断面（南西）

4 区 22 号竪穴建物跡旧竈（西）

4 区 22 号竪穴建物跡旧竈土層断面（南西）

4 区 22 号竪穴建物跡掘り方（西）

4 区 1 号溝跡全景（北）

4 区 1 号溝跡全景（南）

4 区 1 号溝跡土層断面 AA'（南）

4 区 1 号溝跡土層断面 BB'（南）

4 区 1 号溝跡土層断面 CC'（南）

4 区 1 号溝跡遺物出土状況（南西）

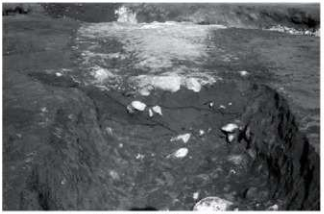
4 区 1 号溝跡遺物出土状況（西）

4 区 1 号溝跡遺物出土状況（西）

4 区 2 号溝跡全景（北）

4 区 2 号溝跡全景（南）

4 区 2 号溝跡土層断面 AA'（南）



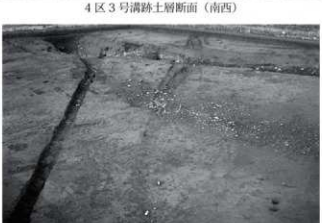
4 区 2 号溝跡土層断面（南）

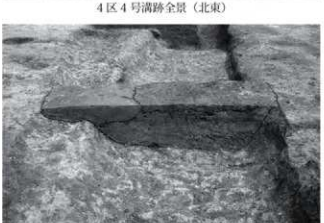
4 区 3 号溝跡全景（南西）

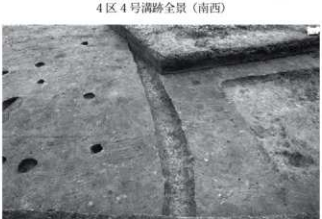
4 区 3 号溝跡遺物出土状況（南西）

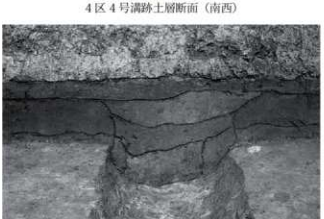
4 区 3 号溝跡土層断面（南西）

4 区 4 号溝跡全景（北東）


4 区 4 号溝跡全景（南西）


4 区 4 号溝跡土層断面（南西）


4 区 5 号溝跡（北）


4 区 5 号溝跡土層断面（南）

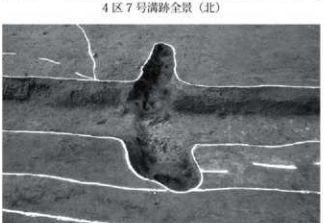
4 区 6 号溝跡全景（東）

4 区 6 号溝跡土層断面（西）

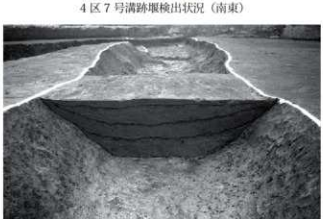
4 区 7 号溝跡全景（南）

4 区 7 号溝跡全景（北）

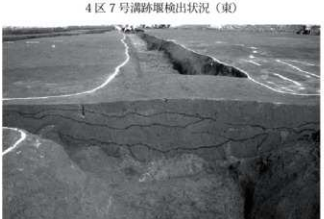
4 区 7 号溝跡堰検出状況（南東）



4 区 7 号溝跡堰検出状況（東）



4 区 7 号溝跡土層断面 AA'（南）



4 区 7 号溝跡土層断面（南）

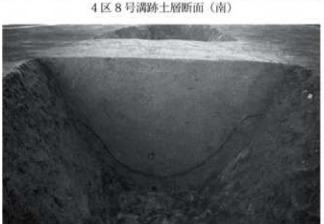
4 区 7 号溝跡土層断面（南）

4 区 8・9 号溝跡全景（北）

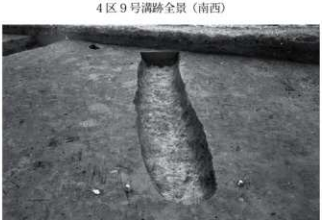
4 区 8 号溝跡全景（南）

4 区 8 号溝跡土層断面（南）

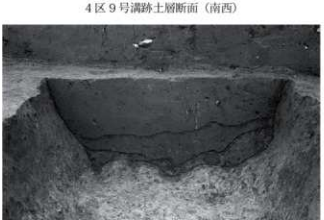
4 区 9 号溝跡全景（南西）



4 区 9 号溝跡土層断面（南西）



4 区 10 号溝跡全景（北西）



4 区 10 号溝跡土層断面（北）

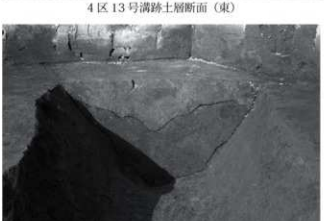
4 区 11 号溝跡全景（南）

4 区 11 号溝跡土層断面（南）

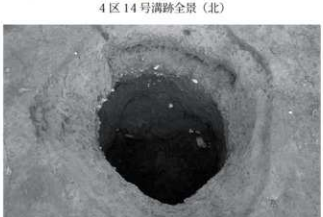
4 区 13 号溝跡全景（東）

4 区 13 号溝跡土層断面（東）

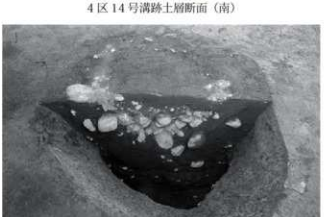
4 区 14 号溝跡全景（北）



4 区 14 号溝跡土層断面（南）



4 区 1 号井戸跡全景（南）

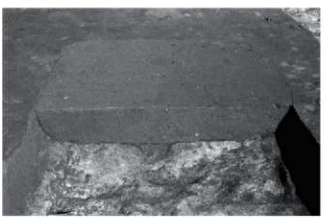


4 区 1 号井戸跡土層断面（南）

4 区 1・2 号土坑跡全景（南東）

4 区 1・2 号土坑跡土層断面（南東）

4 区 3 号土坑跡全景（南）

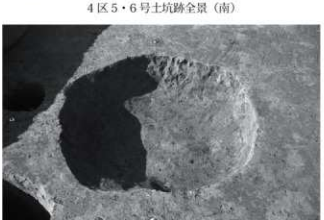


4 区 3 号土坑跡土層断面（南）

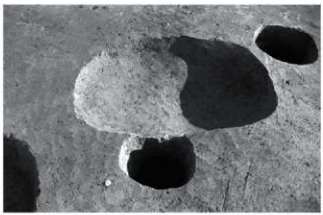
4 区 4 号土坑跡全景（西）

4 区 5・6 号土坑跡全景（南）

4 区 5・6 号土坑跡土層断面（南東）



4 区 8 号土坑跡全景（東）

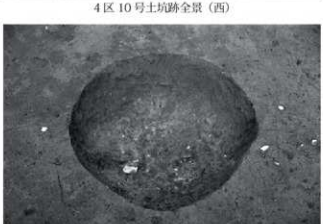


4 区 9 号土坑跡全景（西）

4 区 9 号土坑跡土層断面（南）

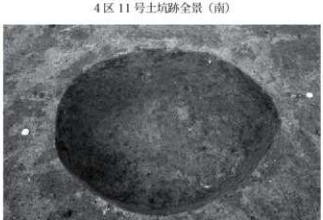
4 区 10 号土坑跡全景（西）

4 区 10 号土坑跡土層断面（西）

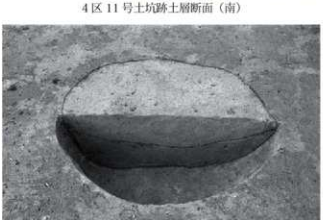


4 区 11 号土坑跡全景（南）

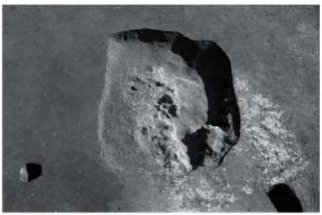
4 区 11 号土坑跡土層断面（南）



4 区 12 号土坑跡全景（南）

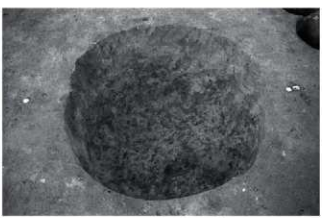


4 区 12 号土坑跡土層断面（南）



4 区 13 号土坑跡全景（西）

4 区 13 号土坑跡土層断面（南）

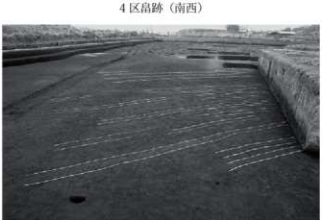


4 区 15 号土坑跡全景（南）

4 区 15 号土坑跡土層断面（南）

4 区畠跡（南西）

4 区畠跡（南西）



4 区畠跡（南）

4 区畠跡（南西）

PL.54

4 区畠跡（南）

4 区畠跡（南東）

2区5溝-1

2区15溝-1

2区15溝-2

2区15溝-3

2区15溝-4

2区15溝-5

2区15溝-6

2区15溝-7

2区15溝-8

2区15溝-9

2区15溝-10

2区15溝-11

2区15溝-12

2区15溝-13

2区15溝-14

2区15溝-15

2区15溝-16

2区15溝-17

2区15溝-21

2区15溝-18

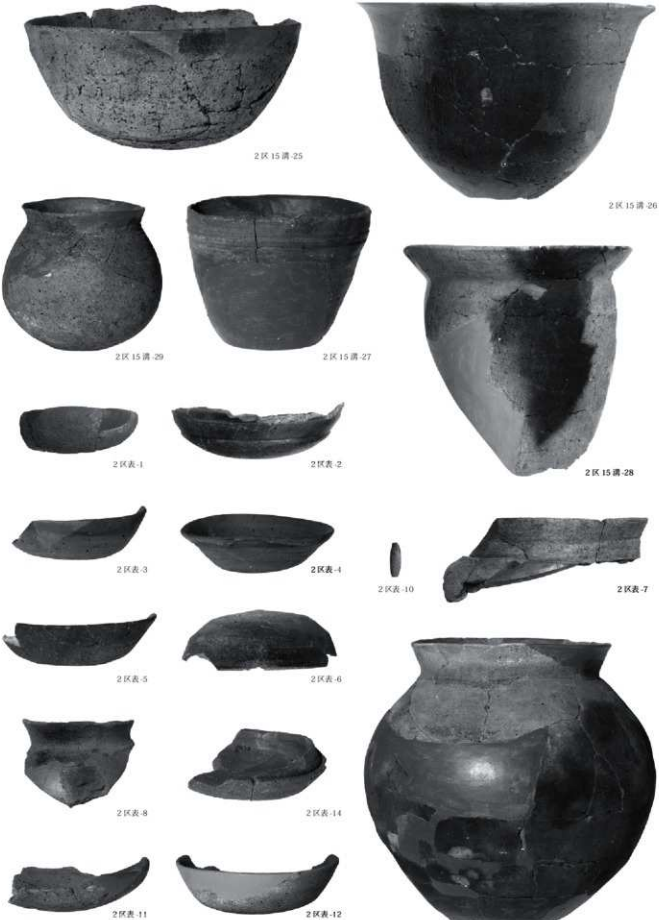
2区15溝-19

2区15溝-22

2区15溝-23

2区15溝-24

2区溝跡出土遺物


2区15溝-25
2区15溝-26
2区15溝-29
2区15溝-27
2区15溝-28
2区表-1
2区表-2
2区表-3
2区表-4
2区表-10
2区表-7
2区表-5
2区表-6
2区表-8
2区表-14
2区表-11
2区表-12
2区表-9

2区溝跡・表土出土遺物

2区表-13

2区表-16

2区表-17

2区表-15

2区1竪-1

2区3竪-3

2区8竪-3

2区8竪-2

2区4竪-1

2区1竪-2

2区3竪-1

2区3竪-2

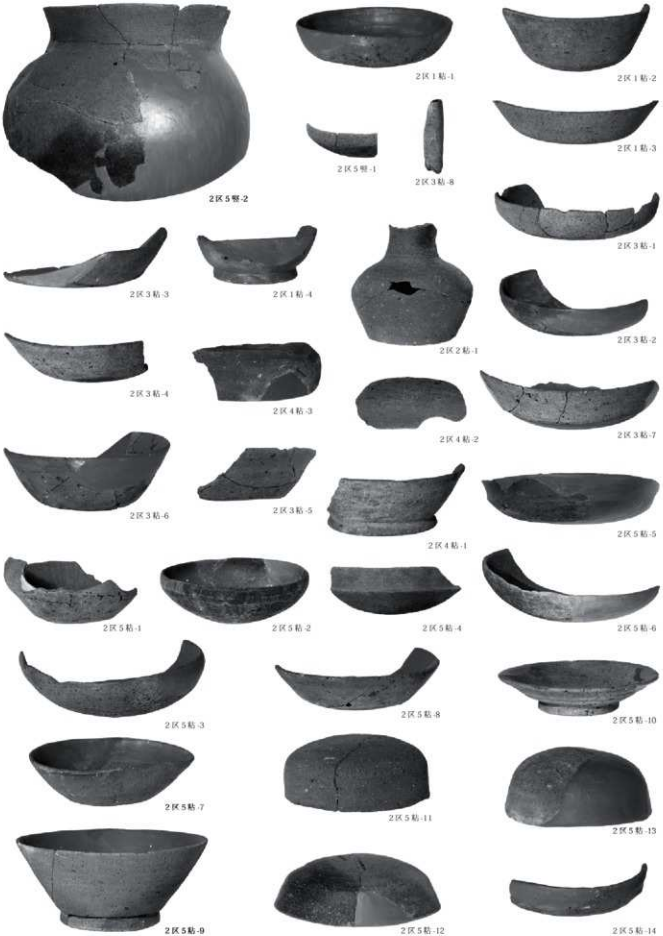
2区7竪-1

2区8竪-4

2区8竪-1

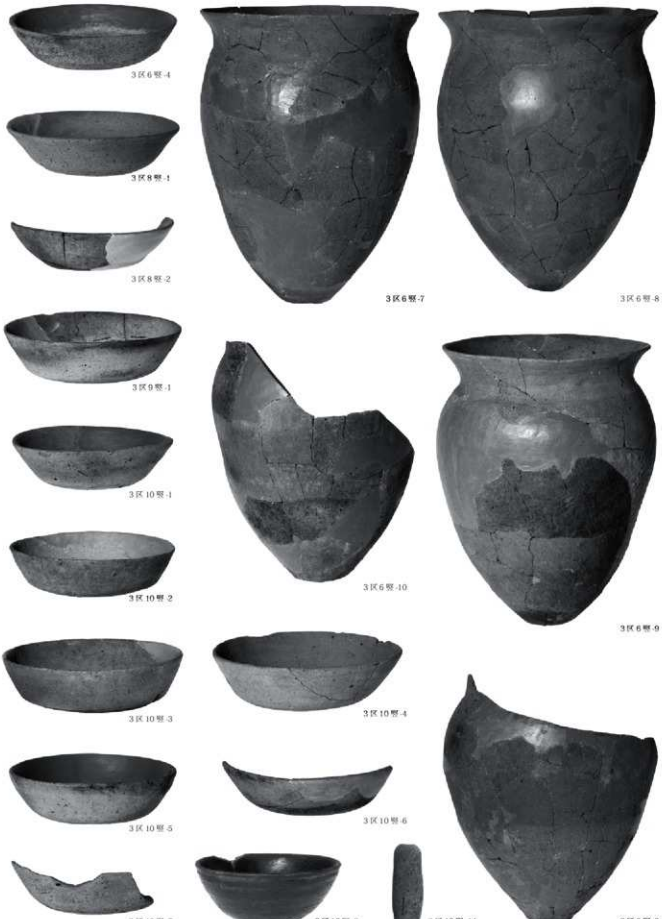
2区8竪-5

2区表土・竪穴建物跡出土遺物

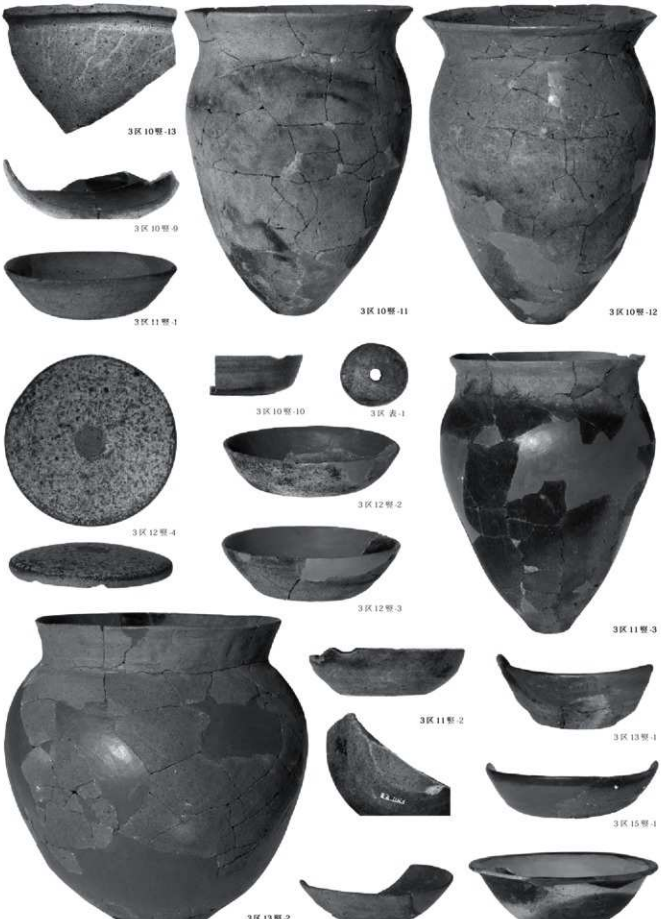


2区竪穴建物跡・粘土採掘坑跡出土遺物

2区粘土採掘坑跡・3区竪穴建物跡出土遺物



3区竪穴建物跡出土遺物



3区竪穴建物跡・溝跡出土遺物

4区竪穴建物跡出土遺物(1)

4区15竪-1

4区16竪-10

4区16竪-15

4区16竪-12

4区14竪-7

4区14竪-8

4区16竪-1

4区16竪-2

4区15竪-2

4区16竪-5

4区16竪-8

4区16竪-3

4区16竪-4

4区16竪-9

4区16竪-6

4区16竪-11

4区16竪-14

4区16竪-7

4区16竪-13

4区17竪-1

4区竪穴建物跡出土遺物（2）

4区竪穴建物跡出土遺物（3）

4区1溝-1

4区1溝-2

4区1溝-3

4区1溝-4

4区1溝-5

4区1溝-6

4区1溝-7

4区1溝-8

4区1溝-9

4区1溝-10

4区1溝-11

4区1溝-13

4区1溝-12

4区1溝-14

4区1溝-15

4区1溝-16

4区1溝-17

4区1溝-18

4区1溝-19

4区1溝-20

4区1溝-21

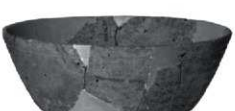
4区1溝-22

4区1溝-23

4区1溝-26

4区1溝-24

4区1溝-25


4区1溝-27

4区1号溝跡出土遺物（1）

4区1溝-28

4区1溝-30

4区1溝-31

4区1溝-29

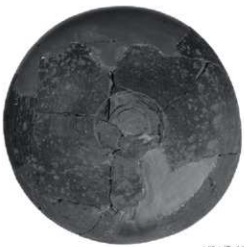
4区1溝-32

4区1溝-33

4区1溝-34

4区1溝-35

4区1溝-37


4区1溝-38

4区1号溝跡出土遺物（2）

4区1溝-36

4区1溝-39

4区1溝-40

4区1溝-43

4区1溝-42

4区1溝-41

4区1溝-44

4区1号溝跡出土遺物（3）

4区1溝-45

4区1溝-46

4区1溝-47

4区1溝-49

4区1溝-50

4区1溝-48

4区1溝-51

4区1溝-52

4区1溝-54

4区1溝-55

4区1号溝跡出土遺物（4）

4区1溝-53

4区1溝-56

4区表-5

4区3溝-1

4区3溝-2

4区表-3

4区9溝-1

4区表-2

4区表-6

4区表-4

4区表-9

4区表-1

4区表-7

4区表-8

4区1・3・9号溝跡、表土出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	がくまえいせき（いち）
書名	楽前遺跡（1）
副書名	北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	454
編著者名	高島英之
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090323
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784-2
遺跡名ふりがな	がくまえいせき
遺跡名	楽前遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしひがしいまいずみまち
遺跡所在地	群馬県太田市東今泉町
市町村コード	10205
遺跡ID	1139
北緯（日本測地系）	361939
東経（日本測地系）	1392326
北緯（世界測地系）	361945
東経（世界測地系）	1392317
調査期間	20040401-20050331
調査面積	10865
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	古墳・飛鳥・奈良・平安時代
遺跡概要	竪穴建物跡＋掘立柱建物跡＋溝跡＋土坑跡＋粘土採掘坑跡-土師器・須恵器
特記事項	古代官道東山道駅路周辺集落
要約	古墳時代後期・飛鳥・奈良・平安時代後期にかけての掘立柱建物跡10棟、柱穴列跡1条、竪穴建物跡45棟、溝跡36条、井戸跡1基、粘土採掘坑6基、土坑跡27基などの遺構が検出され、古代に形成された集落としての様相を呈している。掘立柱建物跡はいずれも桁行3間×梁間2間程度の小規模な側柱建物か、2間四方ないし桁行2間×梁間1間程度の総柱建物跡であり、配置も整然としたものではない。検出状況からは、計画的な建物配置がなされた形跡は看取しがたいところで、官衙やその関連施設あるいは在地首長居宅などの一部を構成した建物とは考えにくい。南側約30～50mの位置を東山道駅路が通り、古代の幹線道路に近接した集落遺跡としての性格を有している。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第454集

楽前遺跡（1）　北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査報告書

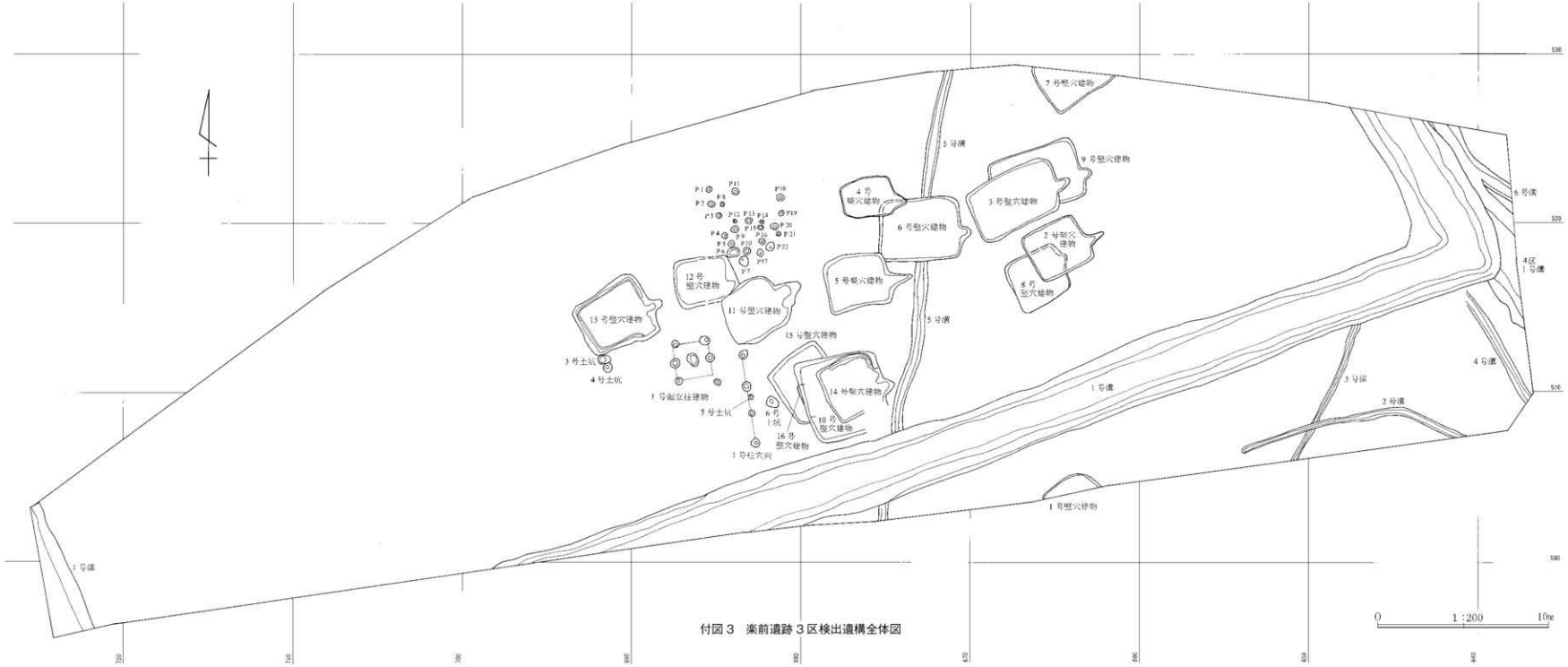
平成21年(2009) 3月16日　印刷
平成21年(2009) 3月23日　発行

発行／編集　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地の2
電話0279-52-2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org

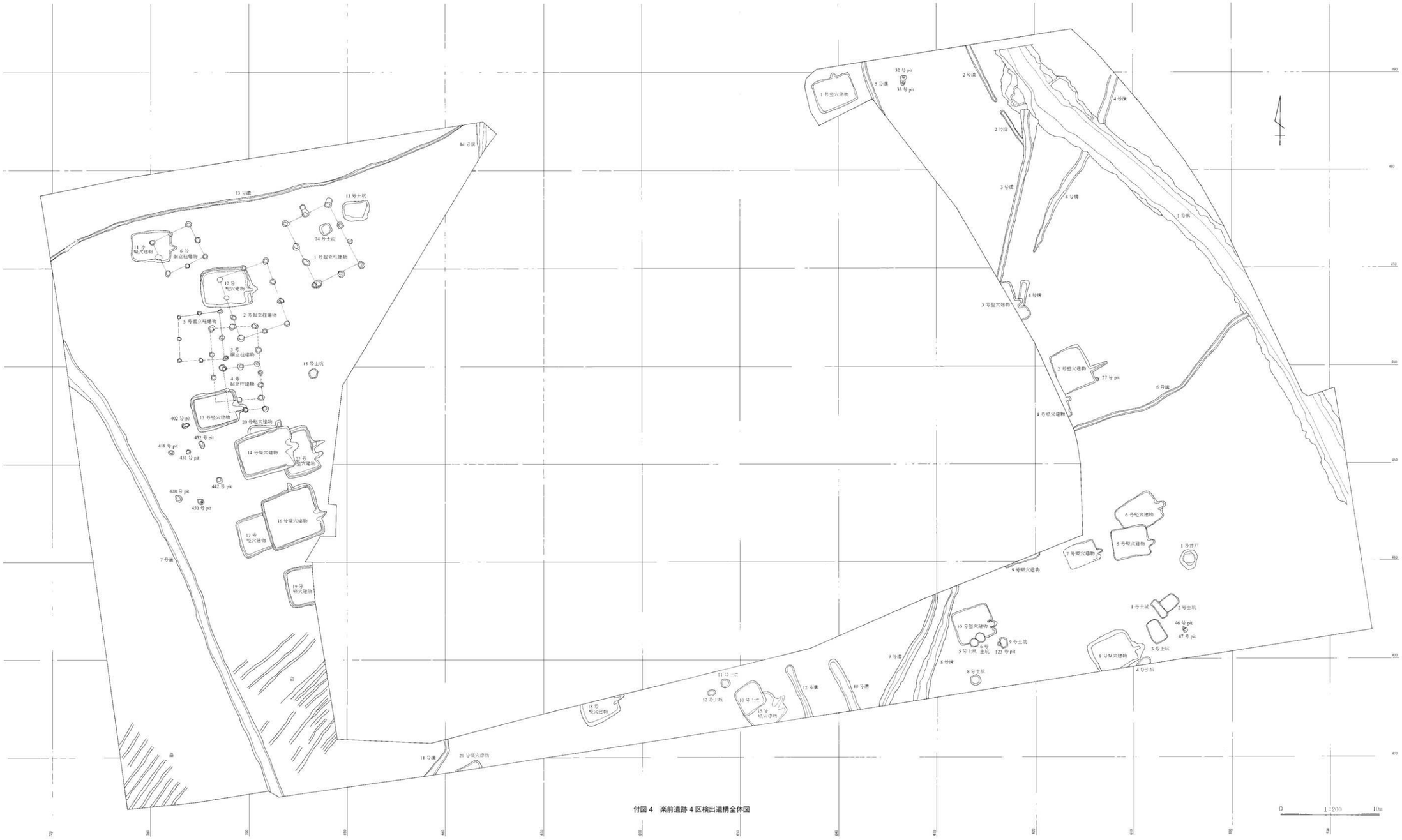
印刷／上武印刷株式会社

付図１　楽前遺跡２区１面検出遺構全体図

付図２　薬前遺跡２区２面検出遺構全体図



付図３　楽前遺跡３区検出遺構全体図



付図 4　楽前遺跡 4 区検出遺構全体図